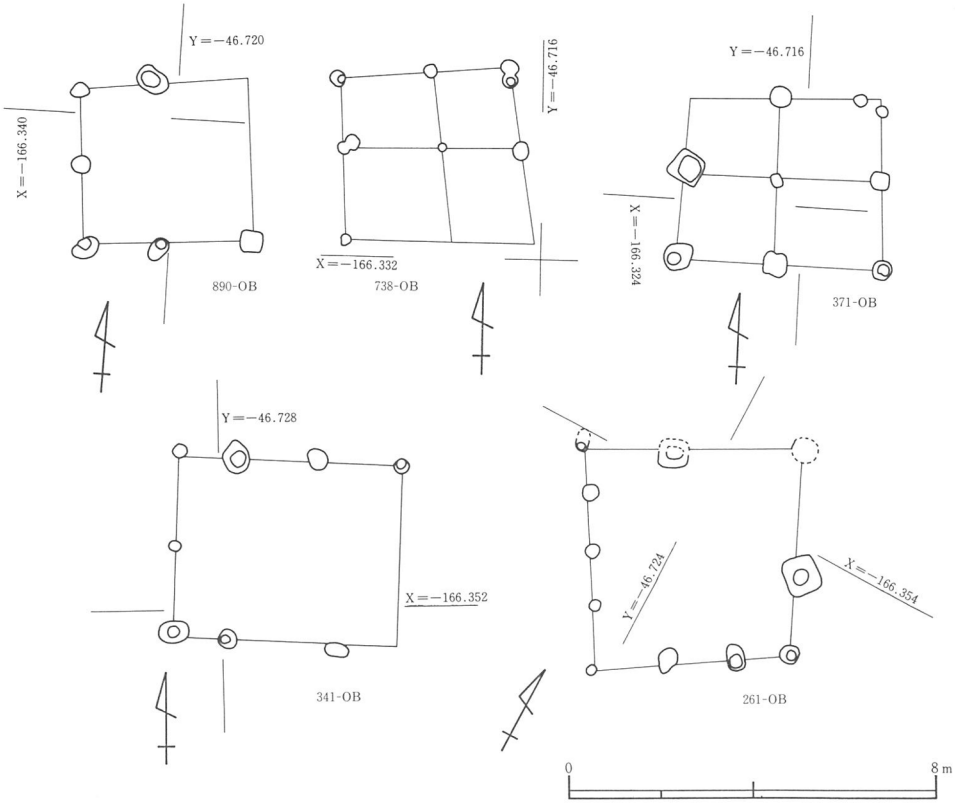


第213図　その他の掘立柱建物（1/160）

は11.2～16.4㎝である。N59はやや大型のものと思われる。

890－ＯＢ（第193・212・213図参照）

K18ＪＴに位置する、桁行２間×梁行２間以上(3.3m×3.6m)の南北棟である。建物は東辺の柱穴が検出されなかったものもある。建物の主軸方位はN－５°－Wを示している。建物の検出レベルはT.P.＋29.20～29.25m、柱穴底のレベルはT.P.＋28.82～29.15mである。柱間寸法は桁行1.6～1.7m、梁行1.6～2.0mである。

遺物は奈良時代の土師器・須恵器細片が出土した。図化したものは、N61：1009－ＯＰ掘方からの出土である。須恵器 壷の底部片と思われる。

371－ＯＢ（第193・212・213図参照）

354－ＯＢの東に隣接する建物で、K18ＫＵ周辺に位置する。２間×２間（4.50m×3.65m）の総柱建物である。面積は16.4㎡（２間×２間として東辺と南辺で長方形として計算）で、建物の主軸方位はN－１°－Wを向いている。

第７表　奈良時代堀立柱建物一覧表

建物		方向	規模	面積	建物方向	柱間寸法　備考
157－ＯＢ	総柱	不明	３間以上×２間以上 (6.10m×3.20m)	不明	N－7°30′－W	南北1.80～2.30m 東西1.30～1.90m
658－ＯＢ		南北	4間×3間または2間 (7.30m×4.57m)	33.20 m²	N－10°00′－E	桁行1.72～1.97m 梁行1.45～2.55m
556－ＯＢ		不明	２間×１間 (3.45m×2.00m)	7.90 m²	N－1°00′－E	南北1.75～1.83m 東西２m強
630－ＯＢ	総柱	南北	３間×３間 (5.4 m×4.9 m)	25.00 m²	N－11°00′－W	桁行1.75～1.90m 梁行1.45～1.80m
468－ＯＢ		南北	５間×１間以上 (7.05m×2.00m)	不明	N－28°30′－W	桁行1.15～1.90m 梁行2.00m
523－ＯＢ		不明	２間×２間 (3.85m×4.20m)	不明	N－12°00′－W	南北1.64～2.20m 東西1.80～2.40m
609－ＯＢ		不明	２間×２間 (2.80m×3.60m)	9.80 m²	N－80°30′－W	南北1.15～1.55m 東西1.60～1.90m
610－ＯＢ		不明	２間×２間 (3.70m×3.15m)	11.10 m²	N－4°30′－W	南北1.60～1.90m 東西1.30～1.75m
393－ＯＢ	総柱	東西	３間×２間 (4.05m×4.15m)	16.50 m²	N－79°00′－E	桁行1.25～1.50m 梁行1.90～2.15m
387－ＯＢ	総柱	東西	３間×２間 (4.00m×3.60m)	13.83 m²	N－83°30′－E	桁縦1.30～1.35m 梁行1.65～1.80m
389－ＯＢ	総柱	南北	３間×２間 (4.55m×3.65m)	15.82m²	N－8°30′－W	桁行1.40～1.60m 梁行1.70～1.90m
354－ＯＢ		南北	３間×２間 (6.65m×4.40m)	29.20m²	N－9°00′－W	桁行2.15～2.30m 梁行2.05～2.35m
282－ＯＢ		南北	５間×２間 (8.60m×4.35m)	37.70 m²	N－12°00′－W	桁行1.40～2.00m 梁行2.0 ～2.35m
227－ＯＢ		不明	３間×１間以上 (7.45m×2.80m)	不明	N－17°30′－W	南北2.80m 東西2.50m
255－ＯＢ		東西	３間×２間 (5.25m×3.50m)	17.64 m²	N－64°30′－E	桁行1.70～1.80m 梁行1.50～1.80m
191－ＯＢ		不明	４間×１間以上 (6.80m×2.70m)	不明	N－37°00′－W	南北1.40～2.00m 不明
325－ＯＢ		南北	３間×２間 (6.10m×4.40m)	26.75 m²	N－17°30′－W	桁行1.84～2.40m 梁行2.00～2.40m
890－ＯＢ		南北	２間×２間 (3.30m×3.60m)	不明	N－5°00′－E	桁行1.6 ～1.7 m 梁行1.6 ～2.0 m
371－ＯＢ	総柱	不明	２間×２間 (4.50m×3.65m)	16.4 m²	N－1°00′－W	南北2.25m 東西1.85～1.95m
738－ＯＢ	総柱	不明	２間×２間 (3.45m×3.65m)	不明	N－13°00′－W	南北1.5 ～2.0 m 東西1.65～2.0 m
341－ＯＢ		東西	３間×２間 (4.80m×4.00m)	18.40 m²	N－85°00′－E	桁行1.1 ～2.5 m 梁行2.0 m
261－ＯＢ		南北	４間×３間 (4.80m×4.25m)	20.40 m²	N－30°00′－W	桁行1.1 ～2.5 m 梁行2.0 m
28－OB		南北	３間×２間 (5.35m×3.50m)	18.56 m²	N－10°00′－W	桁行1.35～2.15m 梁行1.60～1.85m
171－ＯＢ		南北	４間×１間以上 (6.00m×1.90m)	不明	N－17°00′－W	桁行1.4 ～1.6 m 梁行1.9 m
190－ＯＢ		不明	２間×２間 (3.90m×3.80m)	14.66 m²	N－18°30′－W	南北1.7 ～2.0 m 東西1.7 ～2.15m

建物の検出レベルはT.P.＋28.75～29.00m、柱穴底のレベルはT.P.＋28.55～28.70mである。柱間寸法は南北2.25m、東西1.85～1.95mである。建物の平面形は西側に長く東側に短い台形を呈し、いびつな建物である。

遺物は土師器 甕、須恵器 蓋・盤・壺などが出土した。図化したものは、N60：1038－ＯＰ掘方からの出土である。

738－ＯＢ（第193・213図参照）

K18ＨＴ周辺に位置する、２間×２間（3.45m×3.65m）の総柱建物である。建物の主軸方位はN－13°－Wを示している。建物の検出レベルはT.P.＋29.05～29.18m、柱穴底のレベルはT.P.＋28.80～28.90mである。

柱間寸法は南北1.5～2.0m、東西1.65～2.00mである。土師器細片が出土している。

341－ＯＢ（第193・213図参照）

K18MR周辺に位置する桁行３間×梁行２間(4.8m×4.0m)の東西棟である。面積は18.4㎡で、建物の主軸方位はN－85°－Eを示している。

建物の検出レベルはT.P.＋29.20～29.50m、柱穴底のレベルはT.P.＋28.76～29.22mである。柱間寸法は桁行1.1～2.5m、梁行2.0mである。柱の間隔にはかなり大小が見られる。遺物は土師器 甕、須恵器 蓋・甕などが出土している。図化できる遺物はなかった。

261－ＯＢ（第193・213図参照）

K18NQ周辺に位置する。桁行4.80m、梁行4.25mの南北棟で面積20.4㎡を計る。建物の主軸方位はN－30°00′－Wを向いている。

土坑

710－ＯＯ（第214・215図参照）

393－ＯＢの東側、387－ＯＢの北側に検出された土坑で、K18ＩＲに位置する。平面は不定形で、最大長2.1m、深さ0.35mである。埋土は10ＹR4/1褐灰色細礫混じり粘質土である。検出レベルはT.P.＋29.45mであった。遺物は須恵器 杯Ｂ・杯蓋・壺が出土した。図化したものはN62が杯Ｂ・N63が杯蓋、N64が壺Ａ(直口壺)、N65が壺底部破片である。

791－ＯＯ（第214・216図参照）

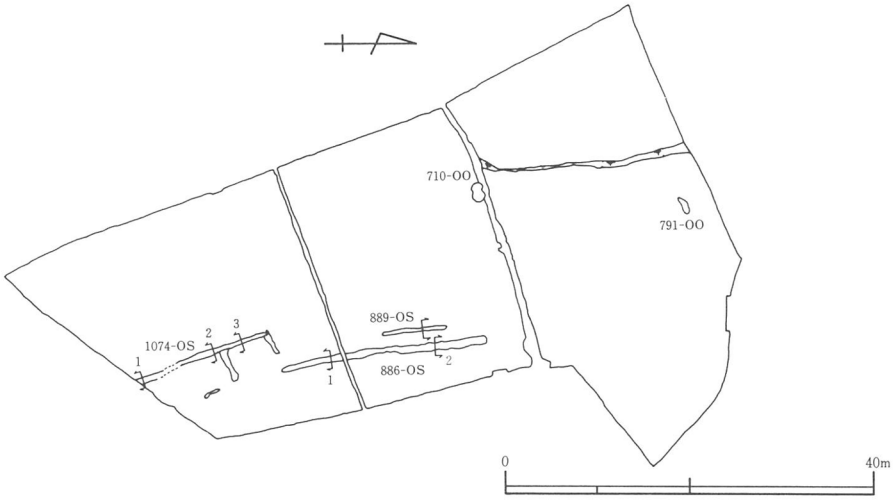
調査区の北端斜面に検出された土坑でK18ＤＳに位置する。平面は一方の端がやや尖る長楕円形、長軸長4.05m、短軸長1.4m、深さ0.22mである。埋土は7.5ＹR4/6褐色土である。検出レベルはT.P.＋29.22mであった。土坑の東側に土器が集中して出土した。土器は土坑底に貼り付いた状態でなく、浮いた状態で出土した。

遺物は、須恵器 杯B・壺などが出土している。図示したものは須恵器 杯B N66・N67、長頸壺N68の3点である。

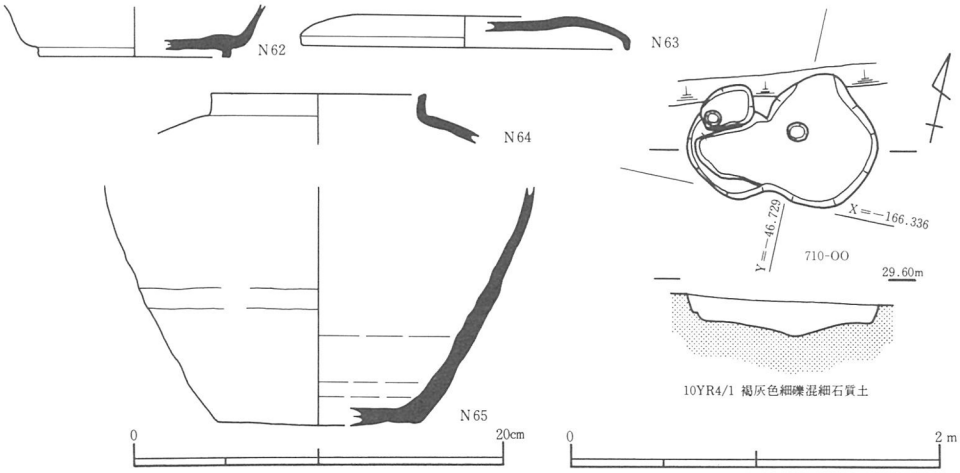
溝

1074－ＯＳ（第214・217図参照）

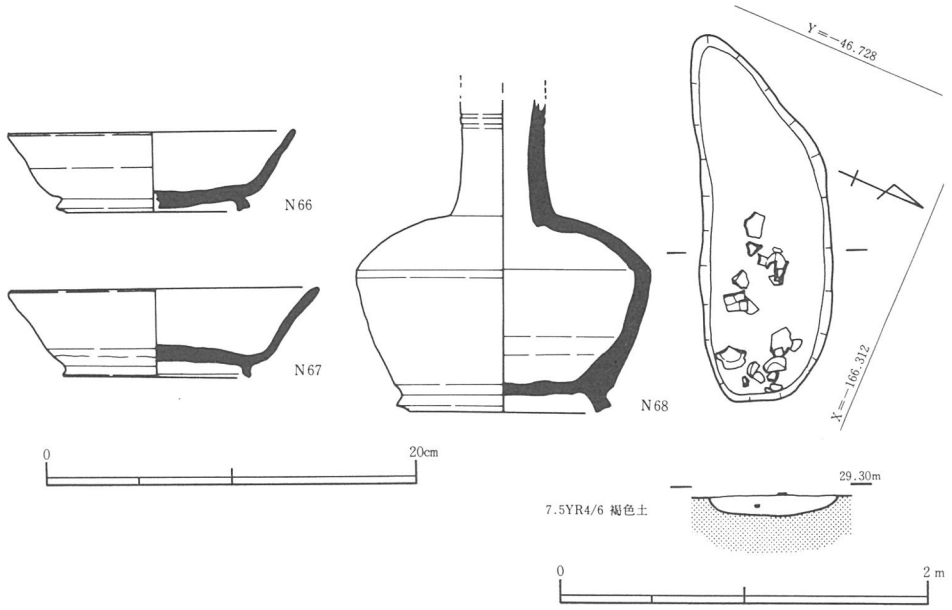
調査区の南端から北西方向に延びる溝で、K18ＳＸ～K18ＯＶにかけて南東～北西に位置する。検出長は15.1m、幅1.0～1.4m、深さ0.35～0.50mである。断面はU字形で、部分的に箱形になるところがある。溝底は南東側がT.P.＋28.80m、北西側がT.P.＋28.65



第214図　奈良時代土坑・溝配置図（1/800）



第215図　710－ＯＯ平面・断面図（1/80），出土遺物（1/4）



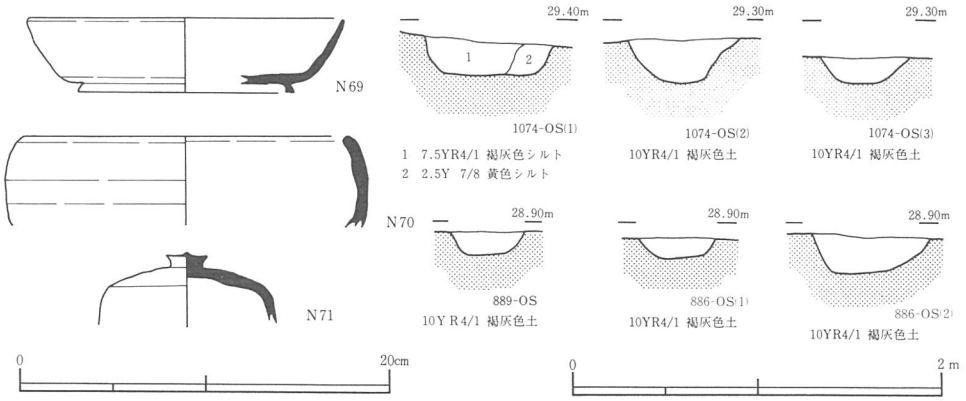
第216図　791－ＯＯ平面・断面図（1/40），出土遺物（1/4）

ｍで北西側に低く、南東から北西に流れていたようである。埋土は7.5ＹＲ4/1褐色シルトと10ＹＲ4/1褐灰色土が混じりあった土層である。

遺物は土師器、須恵器の細片が出土している。

889－ＯＳ（第214・217図参照）

387－ＯＢの東側に重なって検出された溝である。溝が廃絶した後、建物が建ったよう



第217図　1074・889・886－ＯＳ断面図（1/40），
886－ＯＳ出土遺物（1/4）

である。K18ＬＶ～K18ＪＶにかけて南西～北東に位置する。検出長は７ｍ、幅0.82ｍ、深さ0.23ｍで、断面はＵ字形である。検出レベルはT.P.＋28.80ｍ、溝底の高さはT.P.＋28.55ｍで、埋土は10ＹＲ4/1褐灰色土である。遺物は須恵器 杯Ｂが出土している。

886－ＯＳ（第214・217図参照）

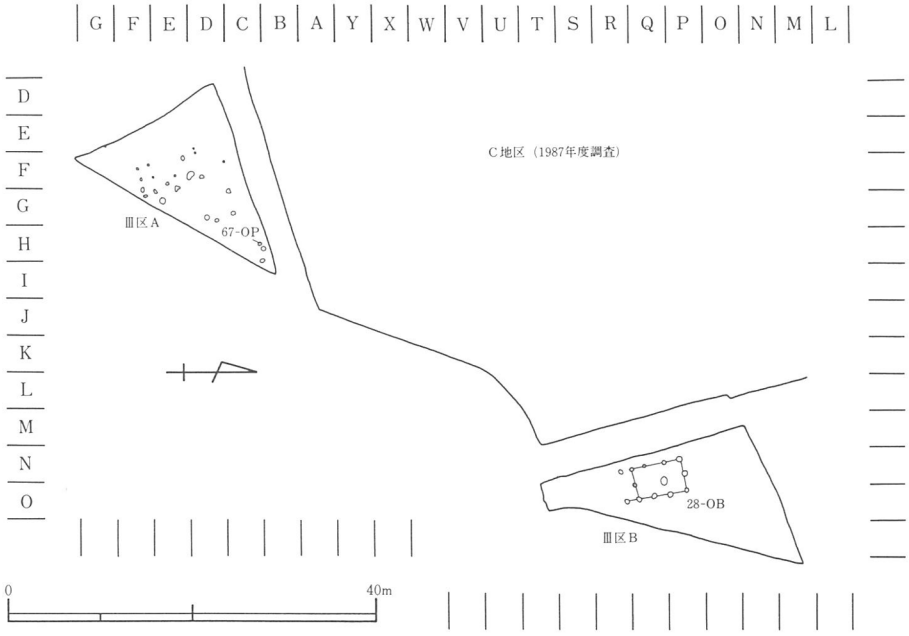
Ｂ群集落の東側に沿って走る溝である。K18ＯＵ～K18ＩＶにかけて南西～北東に位置する。検出長は22.5ｍ、幅0.85～1.3ｍ、深さ0.22～0.45ｍで、断面はＵ字形である。検出レベルはT.P.＋28.80ｍ前後である、溝底の高さはT.P.＋28.45～28.50ｍである。溝底は南西側が低く北東側が高くなる。埋土は一層で10ＹＲ4/1褐灰色土である。

遺物は須恵器 杯Ｂ・壺蓋・鉢などが出土した。図化したものはいずれも須恵器で、N69が杯Ｂ、N70が鉢、N71が壺蓋である。

なお、1074－ＯＳ・889－ＯＳ、886－ＯＳの３本の溝は、建物群に併存するものと考えられ、Ｂ群を画する溝の可能性がある。

Ａ群

Ａ群は1987年度の調査で中心部分が調査されており、今回報告するのはこの東と南に隣接する２つの地点（Ⅲ区Ａ・Ｂ）である。Ａ群ではこれまでに、掘立柱建物12棟・井戸１



第218図　Ａ群遺構配置図（1/800）

基が見つかっている。井戸は木組のもので中からは墨書土器を含む土師器、須恵器が多量に出土した。

今回の調査区では、Ⅲ区Ａから柱穴群、Ⅲ区Ｂから掘立柱建物１棟などが検出され、建物群が東と南にさらに広がることが分かった。

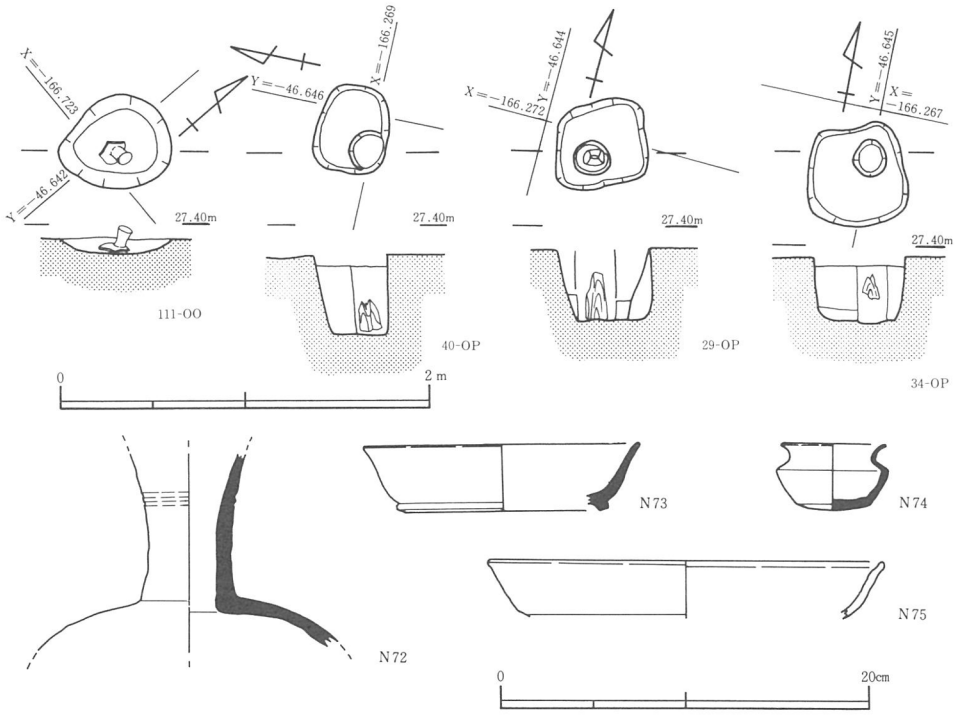
ここでは、Ⅲ区Ｂで検出された28－ＯＢについて述べることとする。

28－ＯＢ（第218・219・220図、図版61上参照）

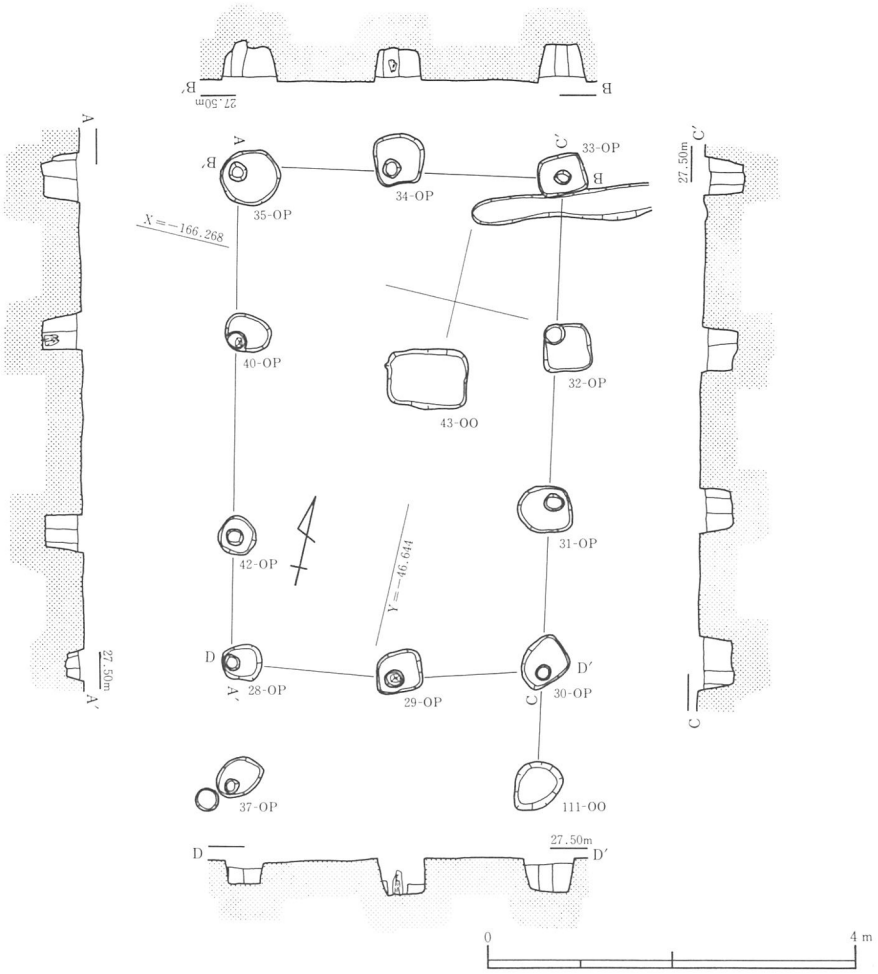
K14QWに位置する桁行３間×梁行２間（5.35m×3.50m）の南北棟である。面積は18.56㎡で、建物の主軸方位はＮ－10°－Ｗを示している。

建物の検出レベルはT.P.＋27.40m、柱穴底のレベルはT.P.＋26.90～27.15mである。柱間寸法は桁行1.35～2.15m、梁行1.60～1.85mで、柱間寸法にはかなり長短が見られた。

掘方の規模は40～55㎝の大きさで、平面は楕円形ないし隅円方形のものである。柱痕跡は全ての柱穴で確認されたが、29－ＯＰ・34－ＯＰ・40－ＯＰには柱材が残っていた。柱材はいずれも柱の芯のみが残ったもので、腐って細くなっていた。柱痕跡の観察から柱の



第219図　28－ＯＢ出土遺物（1/4）
111－ＯＯ，29・34・40－ＯＰ平面・断面図（1/20）



第220図　28－ＯＢ平面・断面図（1/80）

直径は15～20㎝と推定される。

111－ＯＯは建物東辺の延長上にくるもので、長軸の長さ45㎝、深さ10㎝の楕円形を呈する浅い土坑である。中には長頸壺N72が正位置に据えられていた。位置から見て、28－ＯＢと関連すると思われるもので、建物の地鎮に関係する遺構の可能性がある。

遺物は土師器 杯Ａ・杯Ｂ・皿・高杯・甕、黒色土器 椀、須恵器 杯Ａ・杯Ｂ・皿・高杯・鉢・壺・甕などが出土した。

図化したものは、N72：111－ＯＰ掘方、N73：42－ＯＰ掘方、N74：40－ＯＰ掘方、N75：30－ＯＰ掘方から出土した遺物である。

D群

D群で奈良時代の建物を含む遺構が見つかったのは、Ⅳ区Bの東端とこれに隣接するⅣ区Cからである。範囲は石津川の川岸の一角で狭い部分に集中していた。

遺構は掘立柱建物2棟・柱穴・溝・土坑などがある。

171－OB（第221・222図参照）

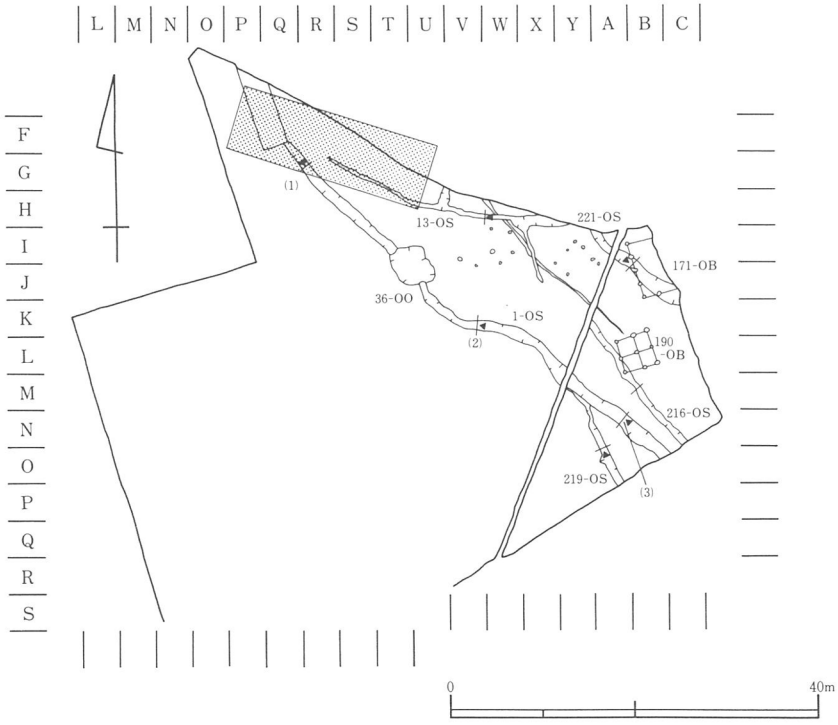
K10ⅠB周辺に位置する4間以上×1間以上(6.0m×1.9m)の南北棟である。建物の主軸方位はN－17°－Wを示している。

建物の検出レベルはT.P.＋26.05m、柱穴底のレベルはT.P.＋25.70～26.00mである。柱間寸法は桁行1.4～1.6m、梁行1.9mである。

遺物は土師器 杯Aの細片が出土している。

190－OB（第221・222図参照）

K10LR周辺に位置する桁行2間×梁行2間(3.9m×3.8m）の建物である。面積は13.52㎡で、建物の主軸方位はN－18°30′－Wを向いている。桁行と梁行の方向は不明であるが、総柱構造になるため倉と考えられる。



第221図　D群遺構配置図（1/800）

第222図　171・190－ＯＢ平面・断面図（1/80）

建物の検出レベルはT.P.＋26.00m前後である。柱穴底のレベルはT.P.＋25.60～25.90mである。柱間寸法は南北1.7～2.0m、東西1.70～2.15mである。柱の間隔にはかなり長短が見られる。平面は南辺がやや長く、北辺が短い台形を呈している。建物からは奈良時代の遺物は出土していないが、216－ＯＳとの切り合いから奈良時代とした。

１－ＯＳ（第221・223図参照）

Ⅳ区Ｂ～Ⅳ区Ｃにまたがって検出された溝である。K09ＦＰ～K09ＮＣにかけて南西～北東に位置する。検出長は53m、深さ0.40～0.56mで、断面は概ねＵ字形であるが、北側でやや箱型になるところがある。溝底は南東側から北西端にかけてほぼ同一の高さでどちら側に流れていたかは不明である。埋土は砂混じりのシルトが多い。

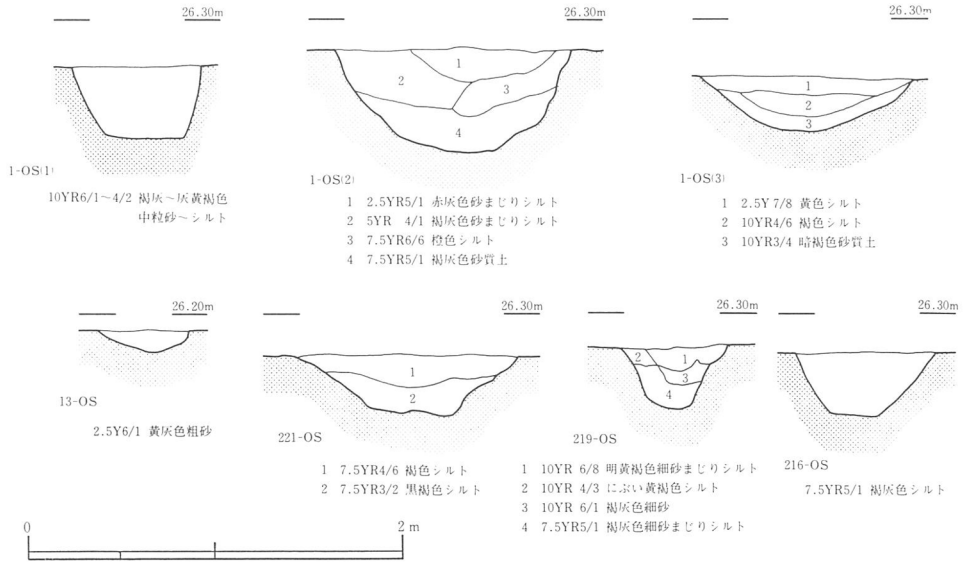
遺物は奈良時代の土師器 甕、黒色土器 椀、須恵器 杯Ａ・杯Ｂ・甕が出土している。

221－ＯＳ（第221・223図、図版64下参照）

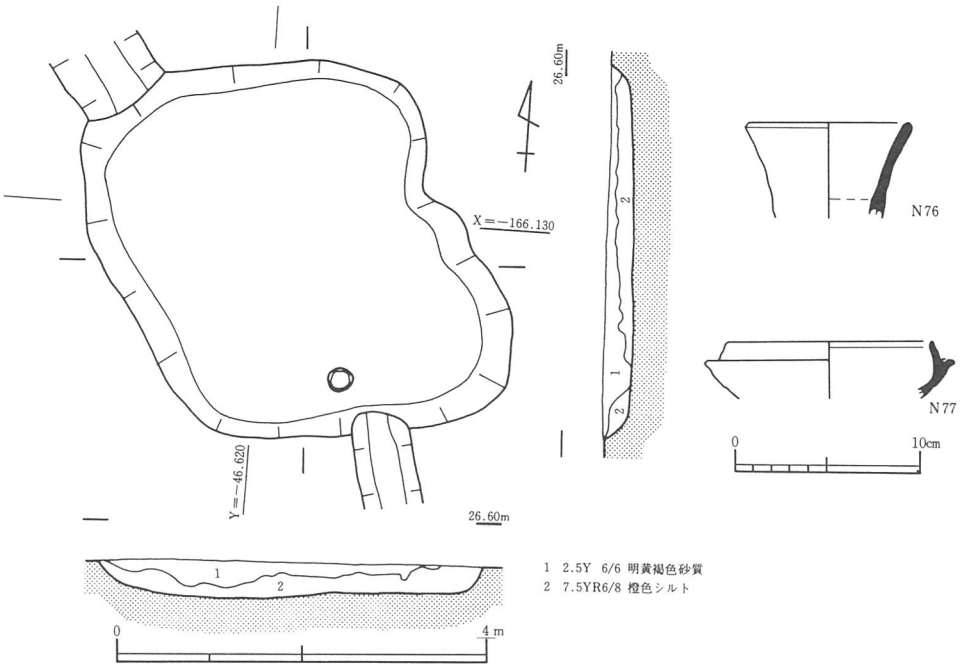
K10ＩＡ～K10ＪＣにかけて南西～北東に位置する。検出長は11m、幅1.2m、深さ0.32mで、断面はＵ字形である。溝底は南西側がやや高い、埋土は２層に分けられる。上から7.5ＹＲ4/6褐色シルト・7.5ＹＲ3/2黒褐色シルトである。埋土の状況から緩やかに流れながら堆積したと思われる。遺物は奈良時代の土師器 甕の細片が出土した。

216－ＯＳ（第221・223図参照）

K10ＮＣ～K10ＫＹにかけて南西～北東に検出された。検出長は16m、幅0.20～0.75m、



第223図　１・13・216・219・221－ＯＳ断面図（1/40）



第224図　36－ＯＯ平面・断面図（1/80），出土遺物（1/4）

深さ0.36mで、断面は箱形である。埋土は7.5ＹＲ5/1褐灰色シルトである。

219－ＯＳ（第221・223図参照）

Ｋ10ＤＡ～Ｋ09ＭＹにかけて検出された。検出長さ10m、幅0.75～0.80m、深さ0.35mである。断面はＵ字形で、埋土は砂混じりのシルトである。

13－ＯＳ（第221・223図参照）

Ｋ09ＦＲ～Ｋ09ＨＹにかけて南西～北東に位置する。検出長は27m、幅0.5m前後、深さ0.15mで、断面はＵ字形である。溝底は南西方向に下っており先端で溝が深くなって調査区外に延びている。遺物は土師器 甕、須恵器 杯Ａが出土した。

36－ＯＯ（第221・224図参照）

Ⅳ区Ｂの北寄りに検出された土坑である。Ｋ09ＩＴ周辺に位置する。平面は方形だがやや北西から南東に歪んでいる。１辺は4.1m前後、深さ0.3mである。底はほぼ水平で、埋土は2.5Ｙ6/6明黄褐色砂質土と7.5ＹＲ6/8橙色シルトである。土坑は溝１－ＯＳを切って掘られたもので性格は不明である。

遺物は土師器 杯Ａ・杯Ｂ・皿・高杯・甕、須恵器 杯Ａ・杯Ｂ・皿・高杯・鉢・壺・甕などがある。

図化したものは、N76が須恵器 壺口縁部、N77が杯である。N76は奈良時代の須恵器と考えられること、1－ＯＳを切っていることから36－ＯＯを奈良時代とした。

柱穴（第225図参照）

奈良時代の柱穴についてはこの項目でまとめて述べることとする。前述のように奈良時代の遺構は4地区に集中して出土したが、それぞれの地区で奈良時代の柱穴は検出された。しかし、この時期の遺物が出土する柱穴は少なく出土遺物も第225図に示した程度である。

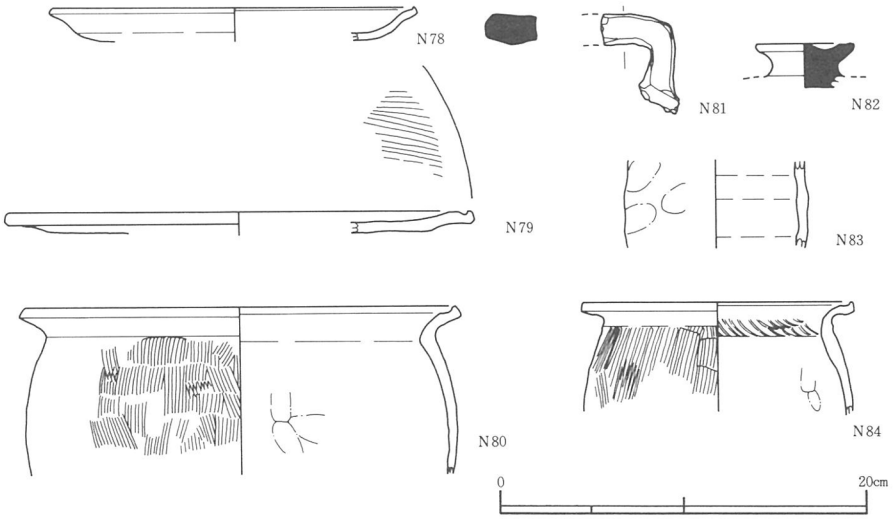
柱穴の概要については古墳時代の柱穴に詳しいので、出土遺物を中心に以下説明する。図示した遺物の出土場所は以下の通りである。N78：II区386－ＯＰ掘方、N79・N82：II区747－ＯＰ掘方、N80・N84：386－ＯＰ掘方、N81：II区1098－ＯＰ掘方、N83：II区344－ＯＰ掘方からの出土で、土師器は5個体、須恵器は2個体を図化した。

土師器は杯・高杯・製塩土器・甕などがある。杯ＡN78は口径19.5㎝、器高1.8㎝である。高杯N79は口径25.4㎝内面に暗文を施す。製塩土器N83は体部の破片である。外面に指頭圧痕を残す。胎土は砂粒を含むもので、色調は5ＹR8/3淡橙色である。甕N80・N84は口径14.8・23.8㎝である。

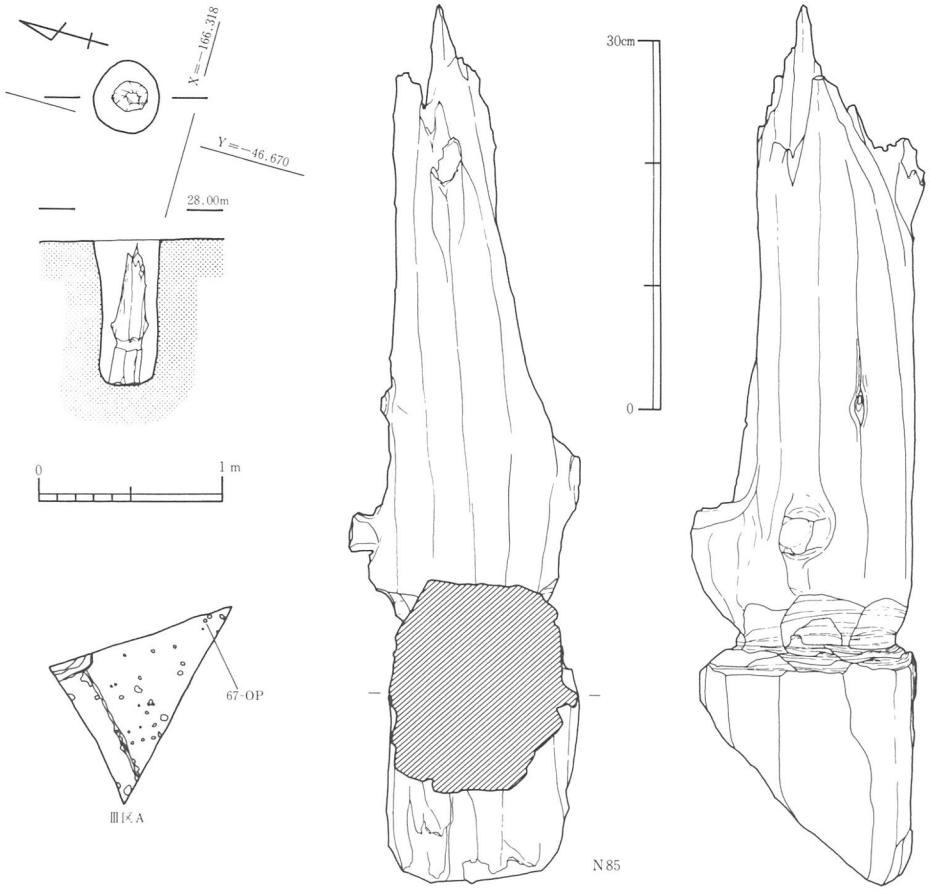
須恵器はN81の平瓶の把手、N82の蓋のつまみがある。

67－ＯＰ（第226図、図版62上参照）

柱材が検出された柱穴は今回の調査では354－ＯＢの370－ＯＰ、638－ＯＢの825－ＯＰ、28－ＯＢの29－ＯＰ・34－ＯＰ・40－ＯＰとこの柱穴の6ヵ所である。



第225図　奈良時代柱穴出土遺物（1/4）



第226図　67－ＯＰ平面・断面図（1/40），柱材（1/6）

67－ＯＰはⅢ区Ａの東端寄りで見つかったものでＫ19ＣＨに位置する。直径40㎝、深さ80㎝であった。柱穴の検出レベルはＴ.Ｐ.＋27.85ｍ、柱穴底のレベルはＴ.Ｐ.＋27.10ｍである。埋土は10Ｇ4/1青灰色粘質土である。

67－ＯＰは調査区の制約から建物に復元することはできなかった。しかし、奈良時代の遺構が検出されたことから、Ａ群の広がりがⅢ区Ａにも広がることが判った。

柱材Ｎ85は長さ72㎝、幅18㎝である。柱材の下端部分で、柱穴に据えられていた。表面は腐って細くなっているが、柱材の表面が角ばっていることから面取りを施していたと思われる。柱の下部は斜めに切断したもので、切断面には手斧痕跡が観察された。また、下端より20㎝前後のところで深さ３㎝程の手斧による抉り込みがみられた。

包含層出土土器

奈良時代の出土遺物は土師器 杯A・杯B・皿・蓋・高杯・鉢・甑・甕・製塩土器、須恵器 杯A・杯B・鉄器模倣椀・杯蓋・皿・盤・高杯・鉢・鉄鉢・壺・壺蓋・平瓶・硯・不明品などの他、塼仏、塼瓦が出土した[註1]。遺物は大半が包含層からのものでII区に集中して出土した。I区については須恵器 杯A・杯B・壺、土師器、その他が包含層から出土している。しかし、少量で細片が多く図化できるものはなかった。

II区　包含層

土師器

杯A（第227図、図版114参照）

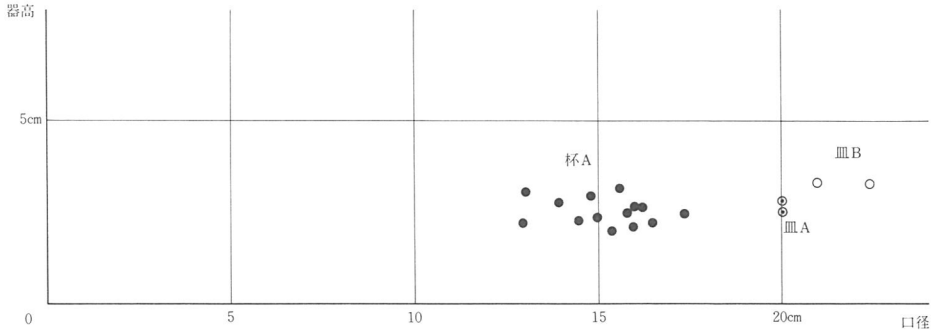
土師器の中で最も多く出土した器種である。15点（N86～N103）を図示した。口径は13.0～18.6㎝、器高は2.1～3.0㎝である。包含層出土のため、調整などの細かい観察ができるものは少ない。口縁端部は、沈線状になるか、端部をつまむもの（A）、端部を丸く納めるもの（B）の2つのグループがある。

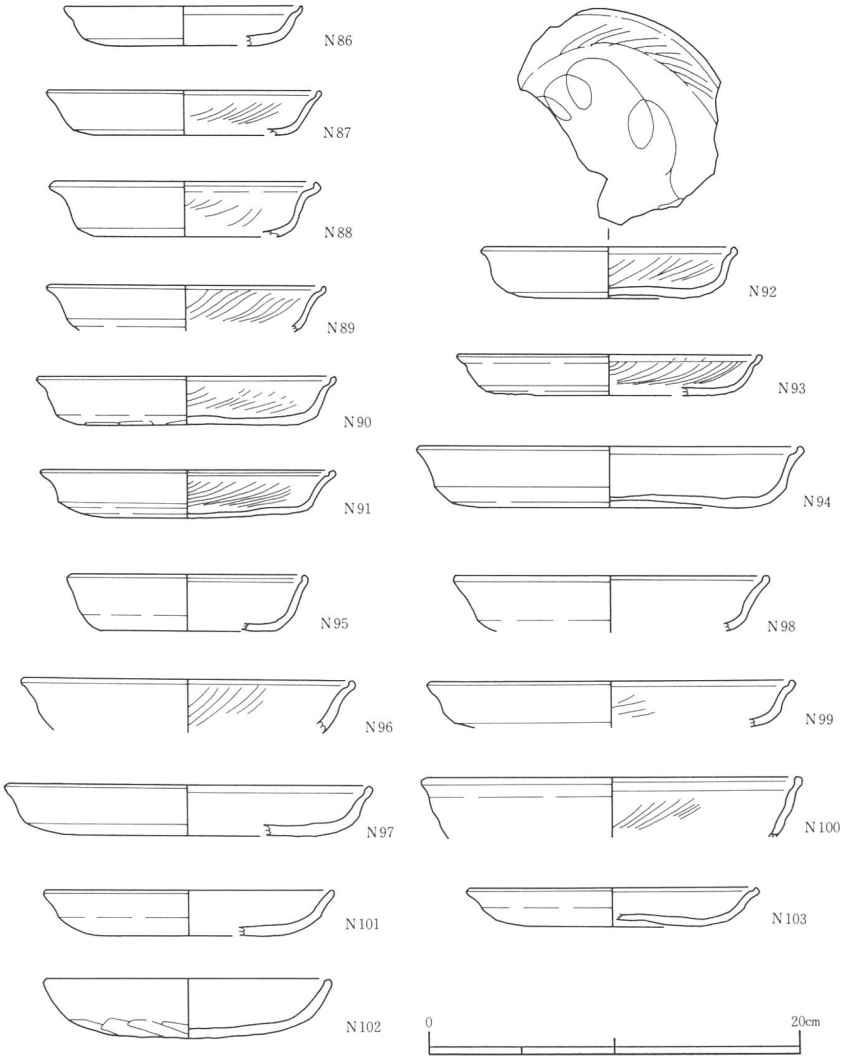
Aは内面から外面体部にかけてヨコナデを施す。さらに、外面底部にはヘラケズリを施しており、丁寧にケズルものでは体部下位にまで及んでいる。このヘラケズリは底部から体部の変換点周辺は回転ヘラケズリが大半であるが、底部は不定方向にケズリを施している。内面には底部に連結輪状暗文、体部に1段の放射状暗文を施している。色調は赤橙色で胎土は精良である。平城宮の調整技法の分類に従えばb0手法である[註2]。

Bは内外面をヨコナデするもので、外面底部は未調整のもの（N101・N103）、一方向にケズルものがある。体部はやや開き気味に立ち上がるもので、器高はAに比べ低い。

時期は、暗文の施文方法などから平城宮IIIに併行するものと考えられる。

第8表　II区包含層奈良時代土師器（杯、皿）法量表





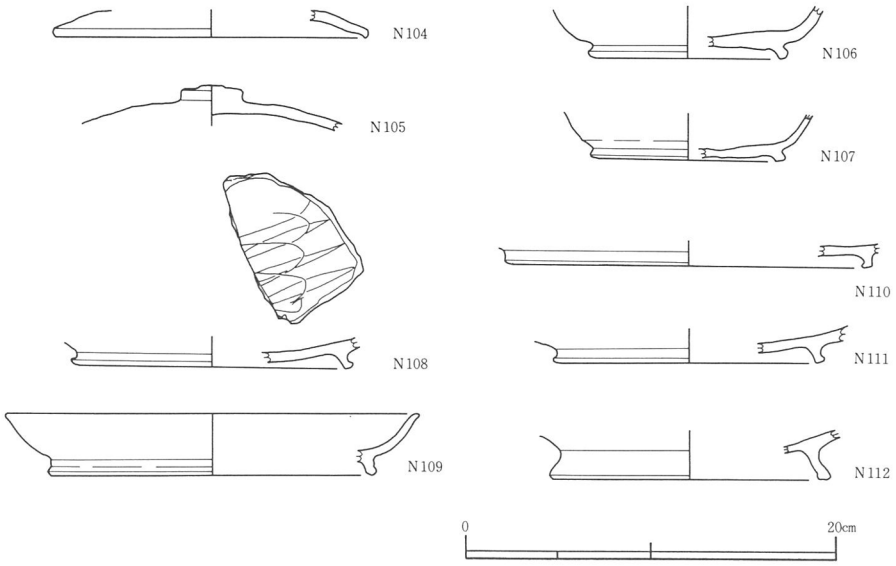
第227図　奈良時代Ⅱ区包含層出土遺物１（1/4）

法量は第８表のように、口径14～16㎝、器高２～３㎝のところに集中している。これは平城宮Ⅲの杯Ａと異なり、皿と杯の中間に入る法量である。

今回はこの領域のものを総て杯として報告し、明らかに皿の領域に入るものと分けた。

杯Ｂ（第228図、図版115参照）

高台の付く杯である。２点Ｎ106・Ｎ107を実測した。底部片のみで、全体の形状の判るものはなかった。高台径は10.6～10.8㎝である。高台は「ハ」の字に開くが、低いものである。



第228図　奈良時代Ⅱ区包含層出土遺物２（1/4）

皿（第227・228図、図版115・114参照）

高台の付かない皿ＡＮ94・Ｎ97・Ｎ99と、高台の付く皿ＢＮ108～Ｎ112がある。

皿Ａは口径20.0～21.0㎝、器高2.5～3.3㎝である。

皿Ｂは計測できるもので、口径17.8㎝、高台径14.8～20.0㎝である。全形が判るものはＮ109の１点である。Ｎ109には内面部に暗文が観察できた。Ｎ112は高台が高く「ハ」の字に開くものである。

杯蓋（第228図、図版115参照）

Ｎ104・Ｎ105の２点を実測した。Ｎ105はつまみ周辺の破片である。Ｎ104は口径17.2㎝である。いずれも摩滅した破片である。

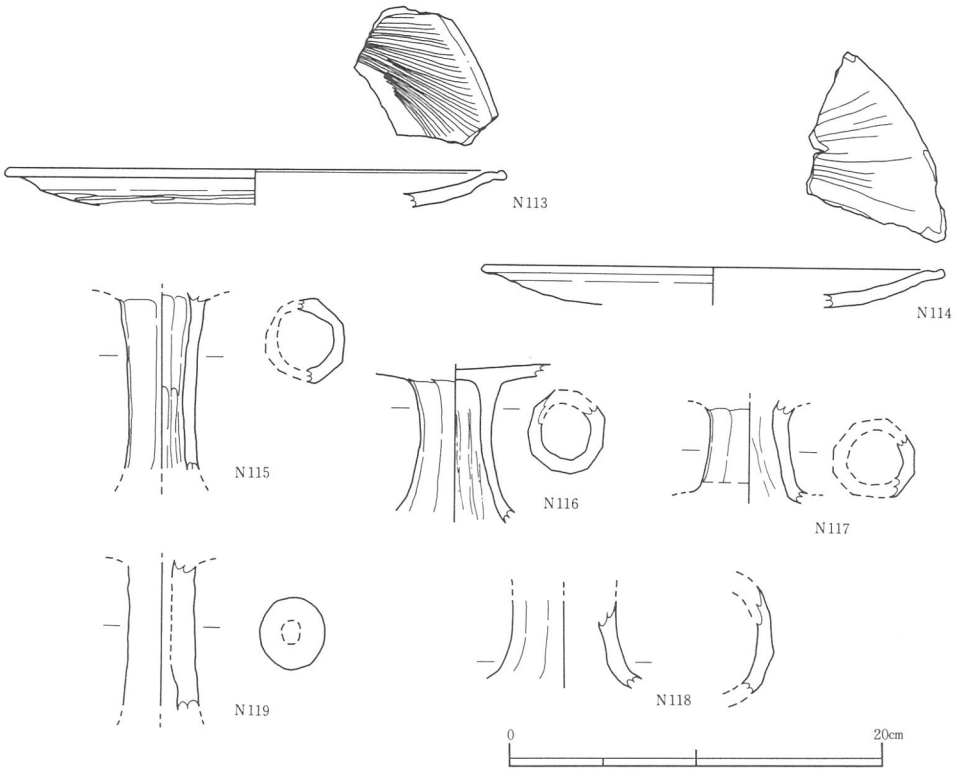
高杯（第229図、図版115参照）

Ｎ113～Ｎ119の７点を実測した。細片が多く全体の形状の判るものはなかった。杯部の口径は25.2～27.2㎝である。Ｎ113・Ｎ114は杯部の破片である。口縁端部は内面に沈線を持ち、体部に放射状暗文を密に施す。外面は粗く磨いている。

脚は長くなるものから、短いものまでがある。Ｎ115～Ｎ118は脚に面取りを施している。Ｎ119は面取りを施していない。高杯の脚内面は縦方向にナデる。

鉢（第230図、図版115参照）

Ｎ120～Ｎ125の６点を実測した。口縁部から底部まで判る個体はなかった。口径18.8～



第229図　奈良時代Ⅱ区包含層出土遺物３（1/4）

24.8㎝である。N120・N121はやや薄手のもので浅い器形になる。

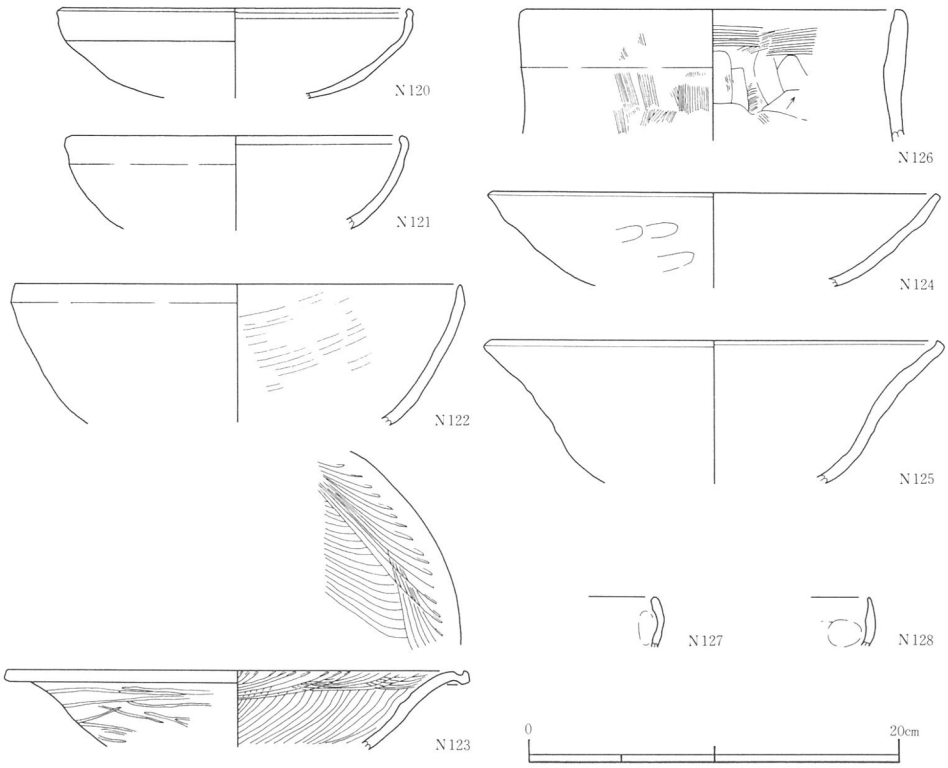
N122は口縁部先端が尖るもので、内面はハケメ調整を施す。N123は内面に２段の放射状暗文を施すもので、外面は粗いミガキをかけている。N124・N125は口縁端部に面を持つものでヨコナデ調整を施している。

甑（第230図、図版115参照）

N126の１点が出土している。口径20.9㎝で、口縁部の破片である。内面は口縁直下を横方向のハケメ、外面は粗い縦方向のハケメを施す。

製塩土器（第230図参照）

製塩土器は本報告の範囲では、Ⅱ区包含層のものと、Ⅱ区344－ＯＰ内から出土したものの３点のみである。包含層のものは、N127・N128の２点が出土した。いずれも口縁部のみの細片で全体の器形は不明である。7.5Ｙ R8/8黄橙色で焼成は甘く、薄手のものである。内面に指頭痕跡を残す。



第230図　奈良時代II区包含層出土遺物４（1/4）

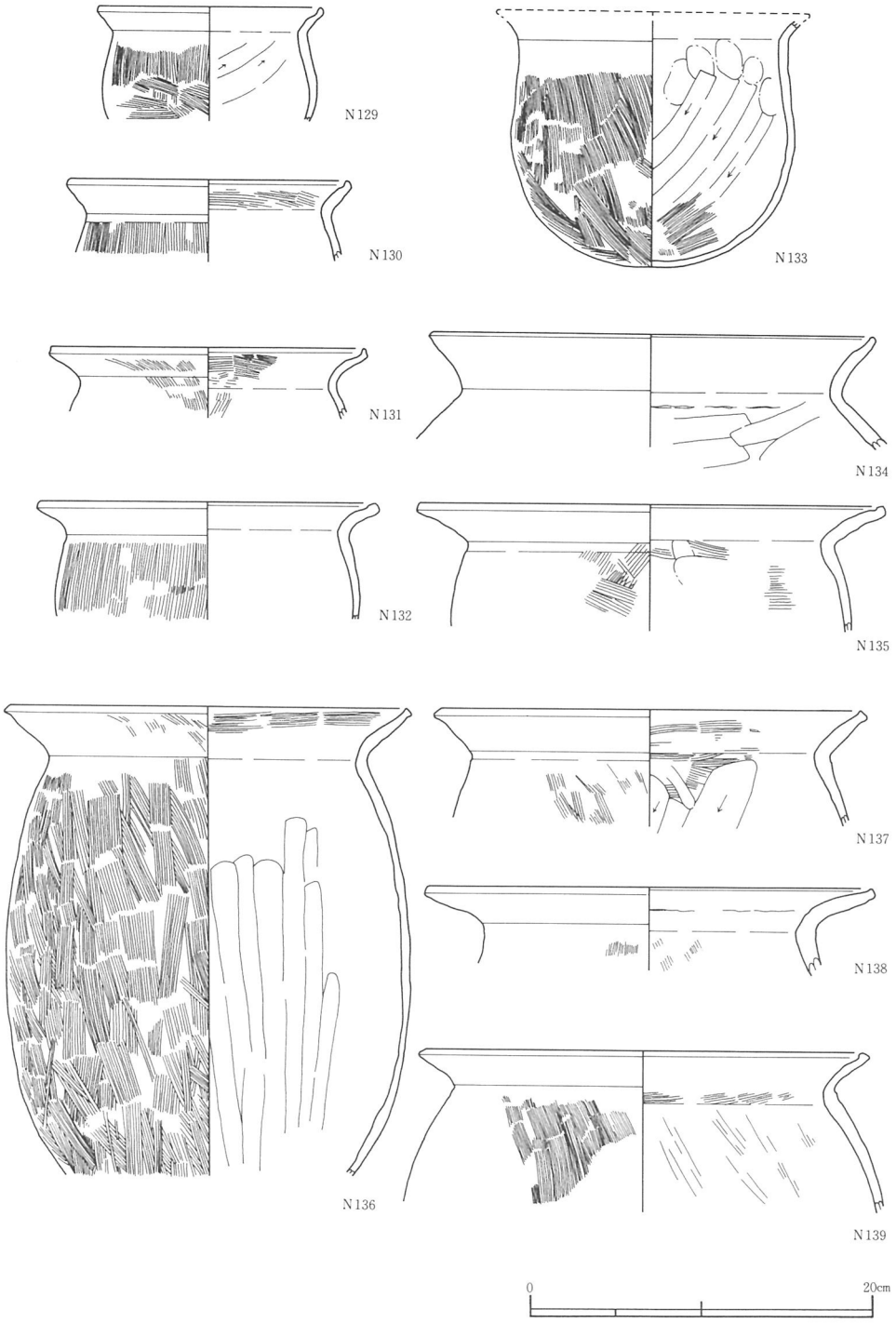
甕（第231図、図版116参照）

II区で出土した遺物の中で、奈良時代の土師器 甕と判るものは少なく、このうち11点を実測した。やはり細片が多く、全体の器形の知れるものはなかった。

甕の調整は外面を縦方向のハケメ、内面は縦方向のヘラケズリを施す。さらに、内面は口縁部周辺を横方向にナデるものが多い。口縁部の上方につまむものや外面に面を持つものなどがある。口径から20㎝未満の小型のもの（A）と25㎝前後の大型のもの（B）がある。

A（小型）は、N129～N133の５個体である。N133が口縁端部を除いて全体の形が判る他は、口縁部から体部にかけての破片である。口径から11～13㎝前後のものと、16～20㎝前後の２種類が見られた。

B（大型）はN134～N139の６個体がある。口径は24～27㎝である。長胴になるものが大半と思われるが、N136以外は全体のプロポーションは明確ではない。特に、N135～N138は長胴になる可能性が強い。



第231図　奈良時代Ⅱ区包含層出土遺物５（1/4）

須恵器

杯A（第232図、図版117参照）

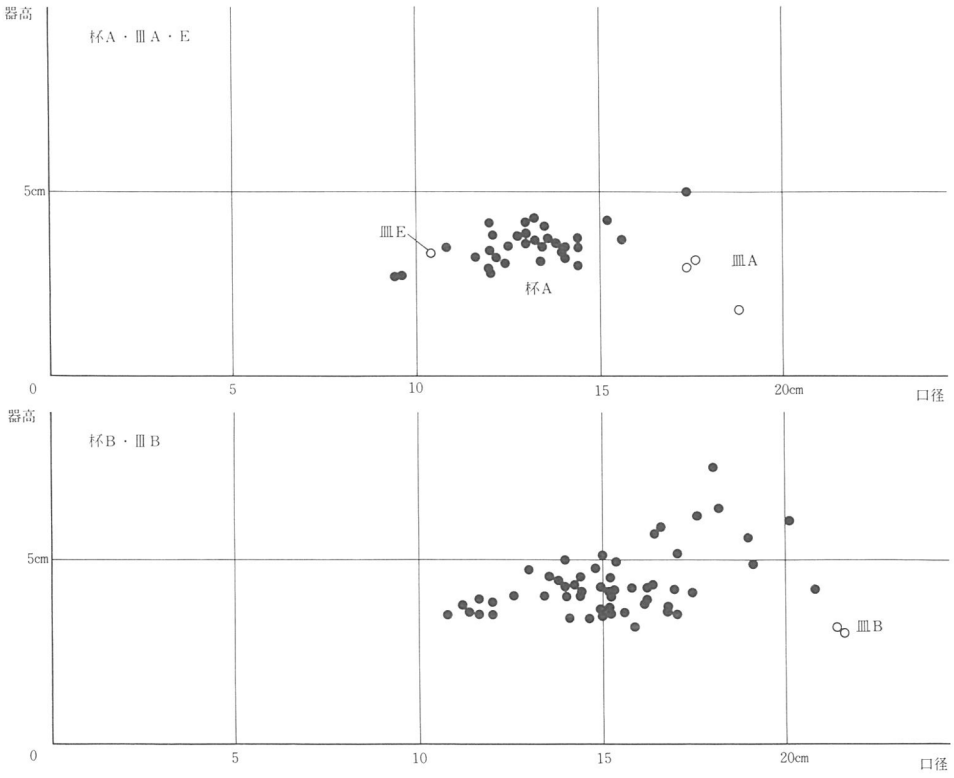
須恵器は杯A・杯B・鉄器模倣碗および蓋・皿A・皿B・皿E・盤・杯蓋・壷蓋・壷・鉢・擂鉢・鉄鉢・硯などが出土した。土師器に比べ器種が豊富であるばかりでなく出土量も多く、奈良時代の土器の主体を占めていたと考えられる。

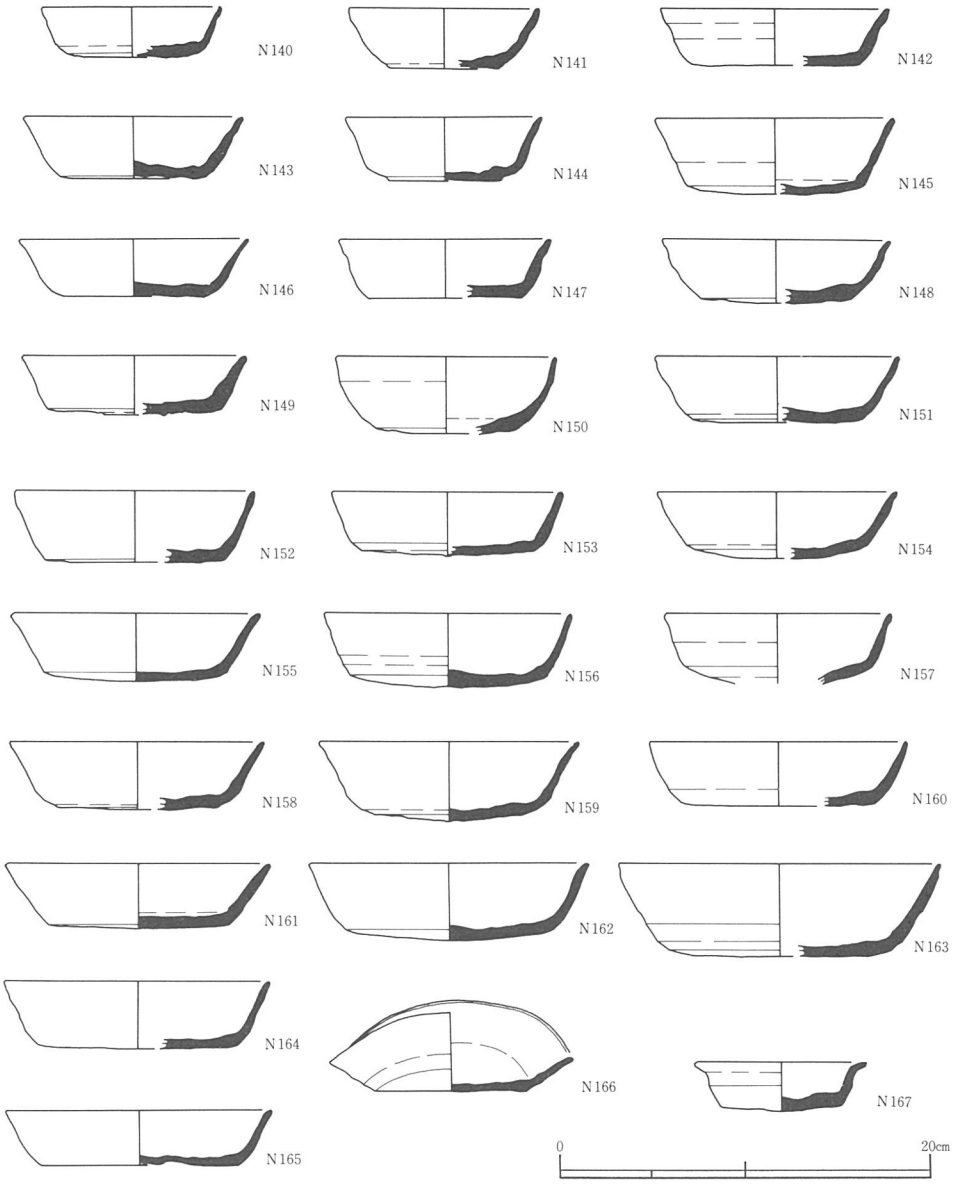
杯AはN140～N166の27個体を実測した。口径9.6～17.4㎝、器高2.7～5.0㎝である。N163のように鉢に近い個体からN165のように皿に近いものまで出土している。

法量は第9表から口径11～14㎝、器高3～4㎝に集中するもので、口径が15㎝を越える大型品や10㎝前後の小型品はわずかな量しか出土していないことが判る。

全体の器形は口縁部を丸く納め、体部が直線的に立ち上がるものが多い。しかし内湾しながら立ち上がるもの（N150）や、皿に近い器形など個々の個体の器形には差異が見られるようである。

第9表　II区包含層奈良時代須恵器（杯）法量表





第232図　奈良時代Ⅱ区包含層出土遺物６（1/4）

全体に内面および外面体部はヨコナデを、底部および高台際は回転ヘラケズリを施すものが大半である。丁寧なものはN157・N160のように体部の1/3まで回転ヘラケズリが及んでいる。底部未調整のもの（N141・N153・N160）は極わずかである。また、大型品ほど回転ヘラケズリが丁寧に行なわれる傾向が見られる。自然釉が観察できるものは少ない

が外面で体部の上半に観察できるものがいくつかある。焼成は暗紫色の硬質になるものから灰白色のやや軟質になるものまでがあるが総じて軟質で灰白色のものが多い。

N166は歪んだもので内外面はヨコナデ調整し、底部は未調整である。内外面に自然釉を観察できる。

杯B（第233・234図、図版118参照）

杯BはN168～N203まで36個体を実測した。口径は11.6～20.8㎝、器高は3.2～7.5㎝である。今回出土した奈良時代の遺物の中でもっとも多く出土した器種である。大きいものはN163のように深手で鉢に近いものも見られる。

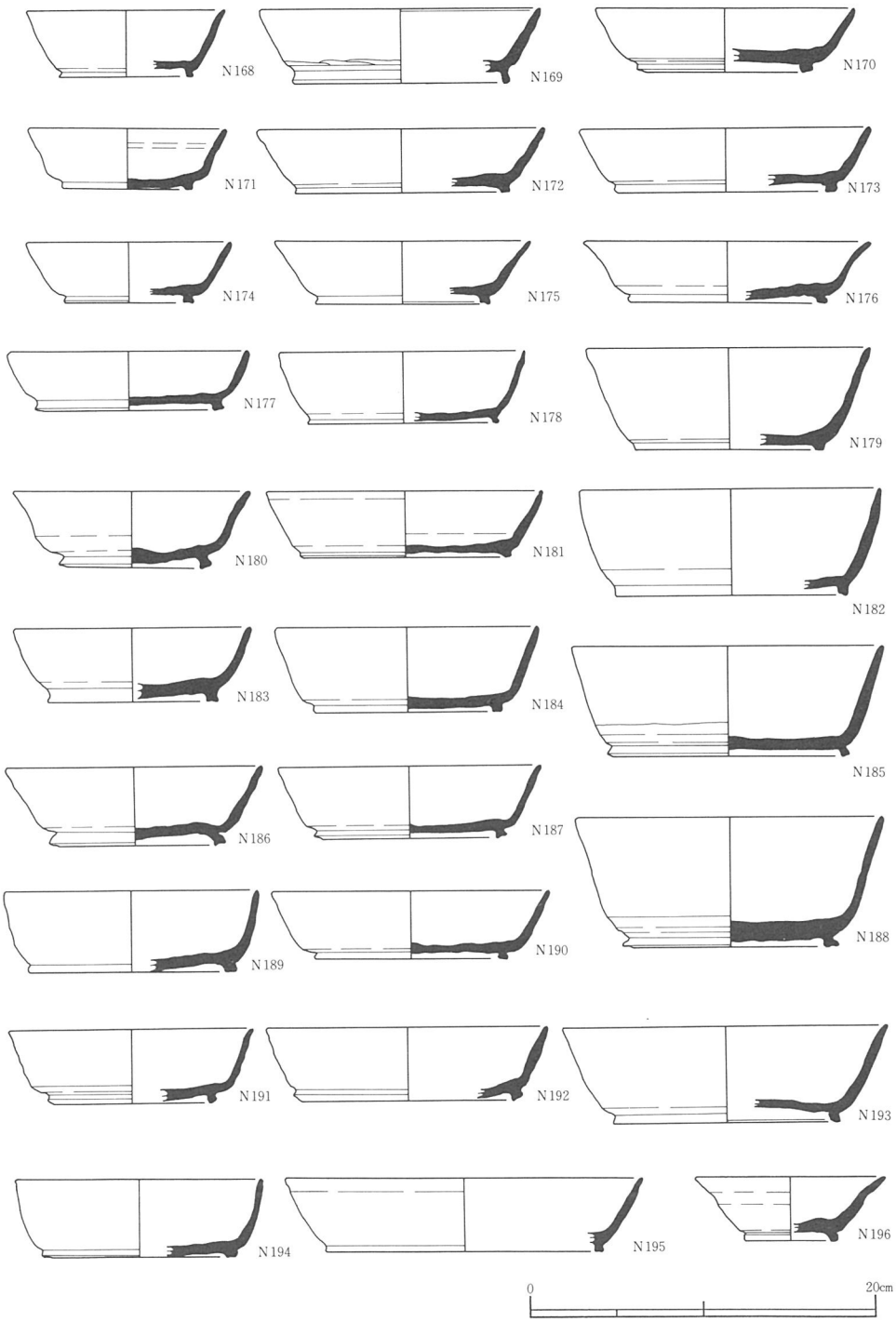
法量は第9表のように法量から11～13㎝のものと、14～17㎝のもの、そして17～20㎝で器高5㎝以上の深手のものと3種類に集中するようである。しかし各々の法量の差は明瞭ではない。口径14～17㎝のものがもっとも多く、他のものを圧倒している。大型のものは深手で法量にばらつきが見られる。11～13㎝、14～17㎝のものは全体に体部は直線的に立ち上がるものが多い。外に大きく開くものは、N176・N196などを少数である。高台は体部際に付くものが大半である。高台は台形のもの、「ハ」の字に開くものなどがあり、高さは個体によってまちまちである。

調整は内面および外面体部をヨコナデ、外面体部下半はヨコナデするものと回転ヘラケズリ調整するものがある。回転ヘラケズリは図化した遺物の中では11個体で観察できた。高台際のみに施すものと、外面底部(高台内面)にも行うものがある。全体に深手で口径の大きいものほどケズリを施す個体が多い傾向が見られる。明瞭なミガキはN169で高台際にわずかに施す以外は観察されなかった。概ね奈良時代の範囲でとらえられるものであるがN196はやや時代の降るものと考えられる。N196は口径11.2㎝、器高3.7㎝、高台径5.6㎝の小型品である。（N196以外は陶邑V型式2段階と大半が併行する一群と考えられる。）

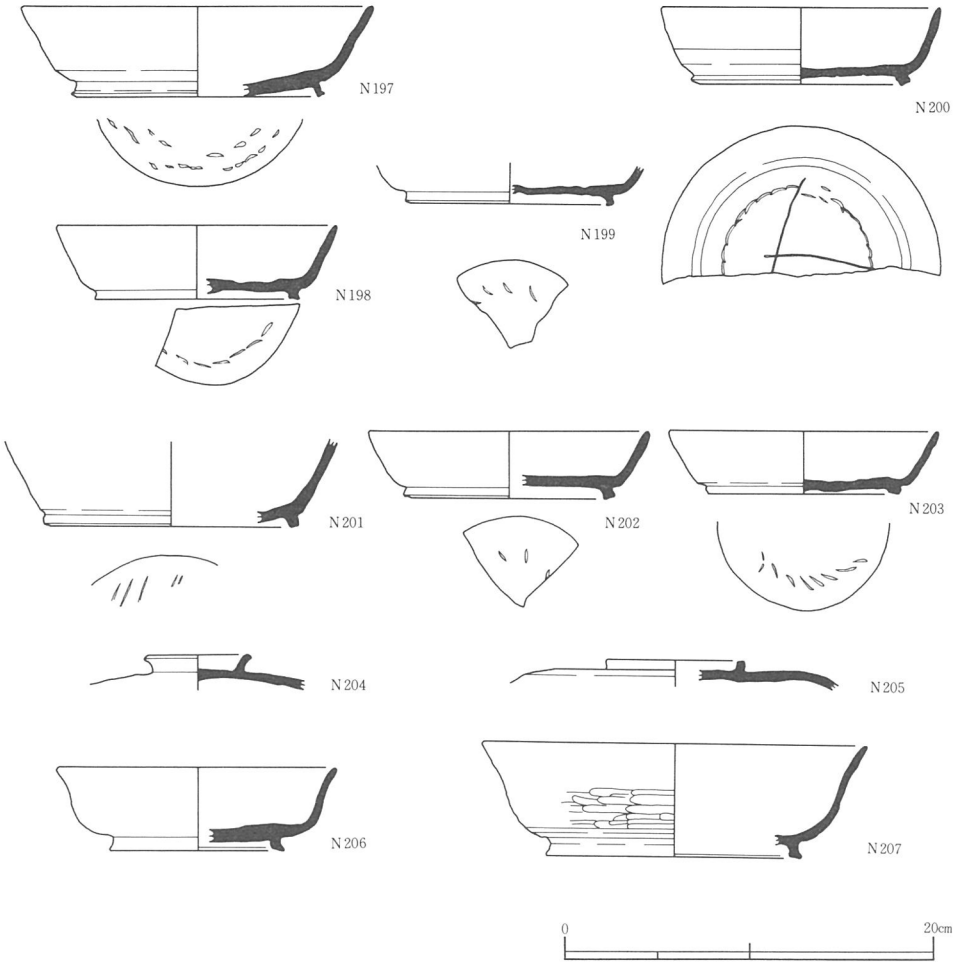
外面底部にはいわゆる爪型圧痕がいくつかの個体で観察できた。図化したものはN197～N203の7個体である。圧痕のつき方には輪状で圧痕が内側に向いて付くもの（N199・N201～N203)、輪の方向に付くもの（N197・N200)などがある。この他、N200ではヘラ記号が観察された。

自然釉を観察できる個体は図化したもののうち9個体であった。内外面に観察できるものもあるが、厚くかかるものはなく、半透明の光沢を持つ程度の薄いものが多い。

杯Bの焼成は暗紫色の硬質のものから灰白色の軟質のものまでがあるが総じて軟質の焼きのものが多い。



第233図　奈良時代Ⅱ区包含層出土遺物７（1/4）



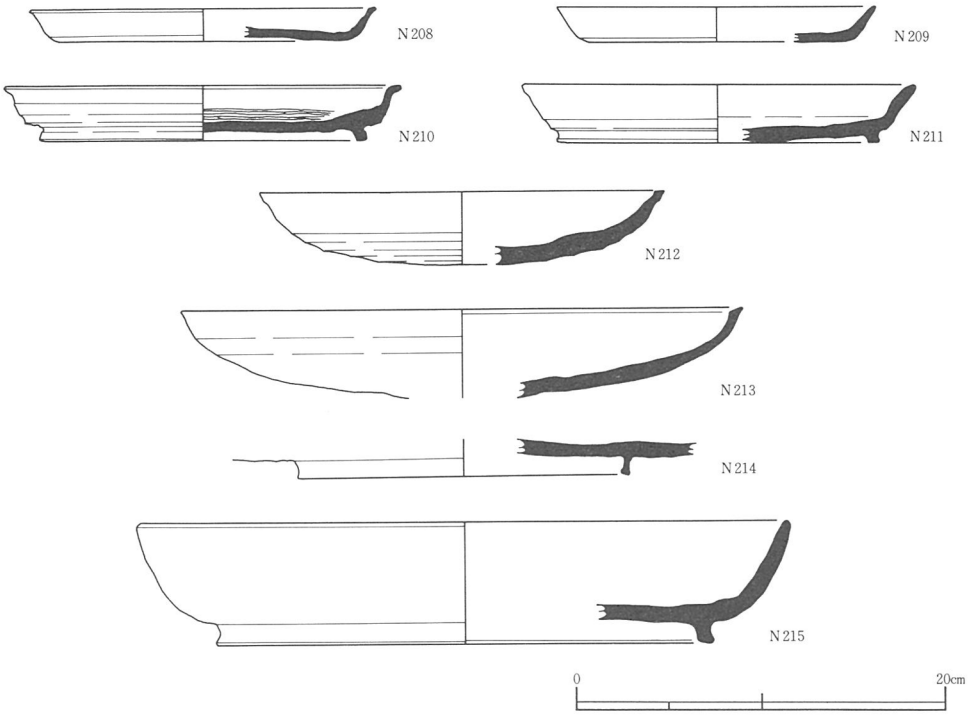
第234図　奈良時代Ⅱ区包含層出土遺物８（1/4）

鉄器模倣碗、蓋（第234図、図版120参照）

鉄器模倣碗はN206・N207の２点を実測した。碗N207は口径20.9㎝、器高6.1㎝である。高台はやや開き、腰はカーブしながら立ち上がるものである。外面体部にはミガキをかけ高台際には回転ヘラケズリを施しており、全体に丁寧なつくりである。外面はやや暗色で内面は灰白色である。N206は口径15.2㎝、器高4.5㎝である。蓋は、輪状のつまみを持つN204・N205の２点を実測した。口径を復元できるものはなかった。

皿（第235図、図版120参照）

皿には、高台を持つ皿Ａと、持たない皿Ｂがある。皿ＡはN208・N209の２点を図化した。口径17.4・18.8㎝、器高1.7・2.9㎝である。内外面をヨコナデし、底部の外周に回転



第235図　奈良時代Ⅱ区包含層出土遺物９（1/4）

ヘラケズリを施すものである。N208は口縁部上端に面を持つ。

皿BはN210・N211の２点を図化した。口径21.4・21.6㎝、器高3.0～3.1㎝である。N208は口縁部が外方に開くもので、「ハ」の字に開く高台を持つ。内面体部および外面の体部中位より下はミガキを施している。色調は灰白色で焼成は良好である。N211の高台周辺は回転ヘラケズリ調整を施すがミガキは観察されなかった。

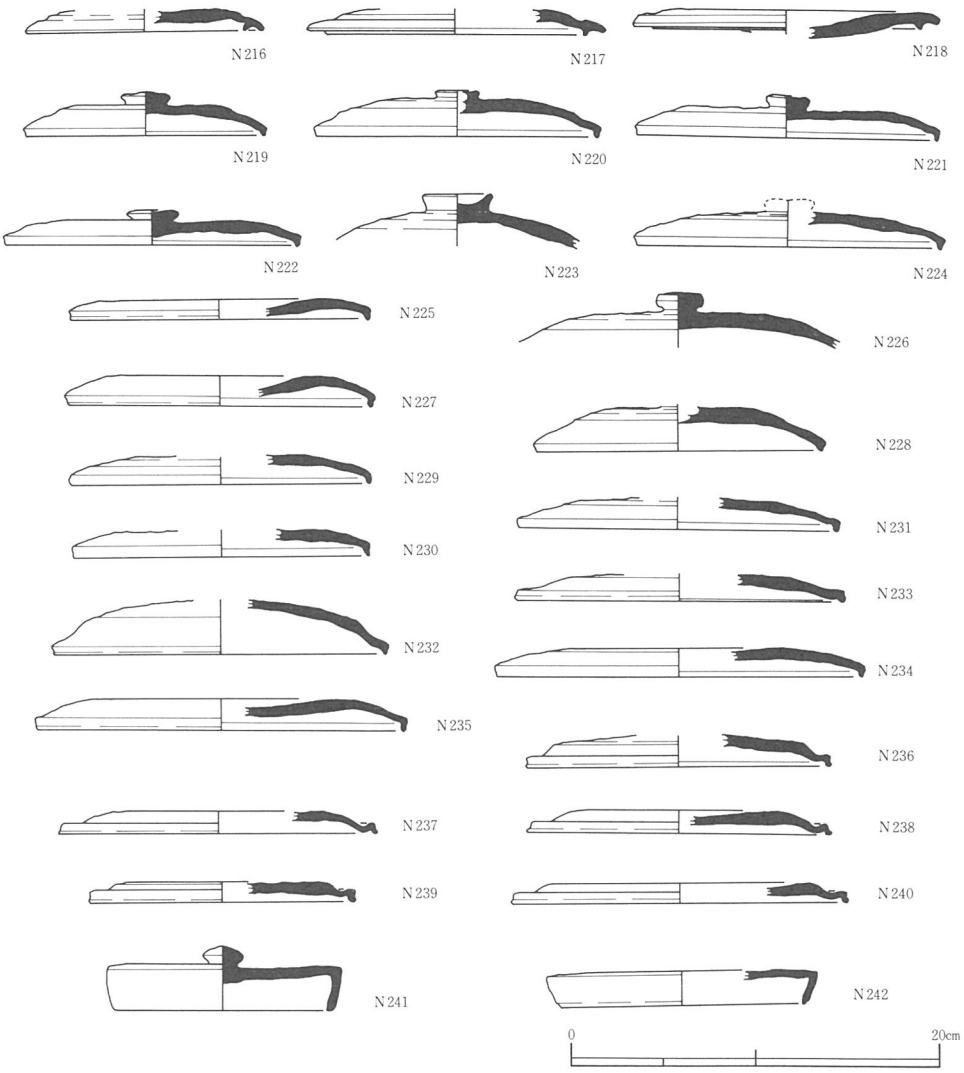
皿E（第232図、図版117参照）

皿EはN167の１点が出土した。口径9.4㎝、器高2.7㎝である。口縁部を強く外につまみ、「く」の字状に外反させるものである。体部1/2より下半から底部にかけてはヘラケズリを施す。

盤（第235図、図版120参照）

盤はN212～N215の４個体を実測した。高台を持つものと持たないものがある。N212・N213とは口縁部にやや内側を向いて面を持つものである。口径は22.0～30.4㎝、器高4.0～4.8㎝である。外面底部は回転ヘラケズリを施している。

N214・N215は高台の付くものである。N215で口径は35.4㎝、器高6.6㎝、高台径27.0㎝



第236図　奈良時代Ⅱ区包含層出土遺物10（1/4）

である。N214は内外面に細かいミガキを施し器面を平滑にしている。

杯蓋・蓋類（第236図、図版119参照）

杯蓋はN216～N238の25個体を実測した。口縁端部にかえりを持つもの（A）と持たないもの（B）がある。さらに、かえりを持たないものの中には、口縁部手前で「く」の字状に屈曲するもの（C）がある。Cもおそらくつまみの付く蓋と考えられる。

AはN216～N218の３個体である。口径は13.0～26.7㎝、器高1.2～1.3㎝である。外面頂

部にはつまみが付くと思われる。N218は中央が歪み内側に落ち込んでいる。

BはN219～N235の17個体を図化した。口径は12.6～20.0㎝である。つまみは扁平なものがほとんどであるが、N235は焼成時の焼け歪みのために中央が窪んだものである。釉は内面にかかるものが多いが外面だけに観察できるものもある。

CはN236～N240の5個体を図化した。口径は14.4～18.4㎝である。つまみから口縁部まで観察できる個体はなく、どのようなつまみになるかは不明である。

N241とN242は壷の蓋である。口径12.0～13.2㎝、器高はN241で3.5㎝である。つまみは宝殊形である。

壷（第237図、図版121参照）

壷はN243～N248の6個体を実測した。いずれも長頸壷（壷L）になるものである。これらの壷は高さ20㎝までの小型のもので、今回の調査では大型のものは出土していない。N243は高台の付くもので、肩部から体部にかけて回転ヘラケズリ調整している。外面底部には爪形圧痕が観察された。N245は高台の付くもので体部下半にケズリを施す。底部は回転糸切り痕跡を残す。N248は体部下半に細かい回転ヘラケズリを施すもので、湾曲しながら立ち上がる体部を持つ。N248は高い高台で「ハ」の字に開いている。

平瓶（第237図参照）

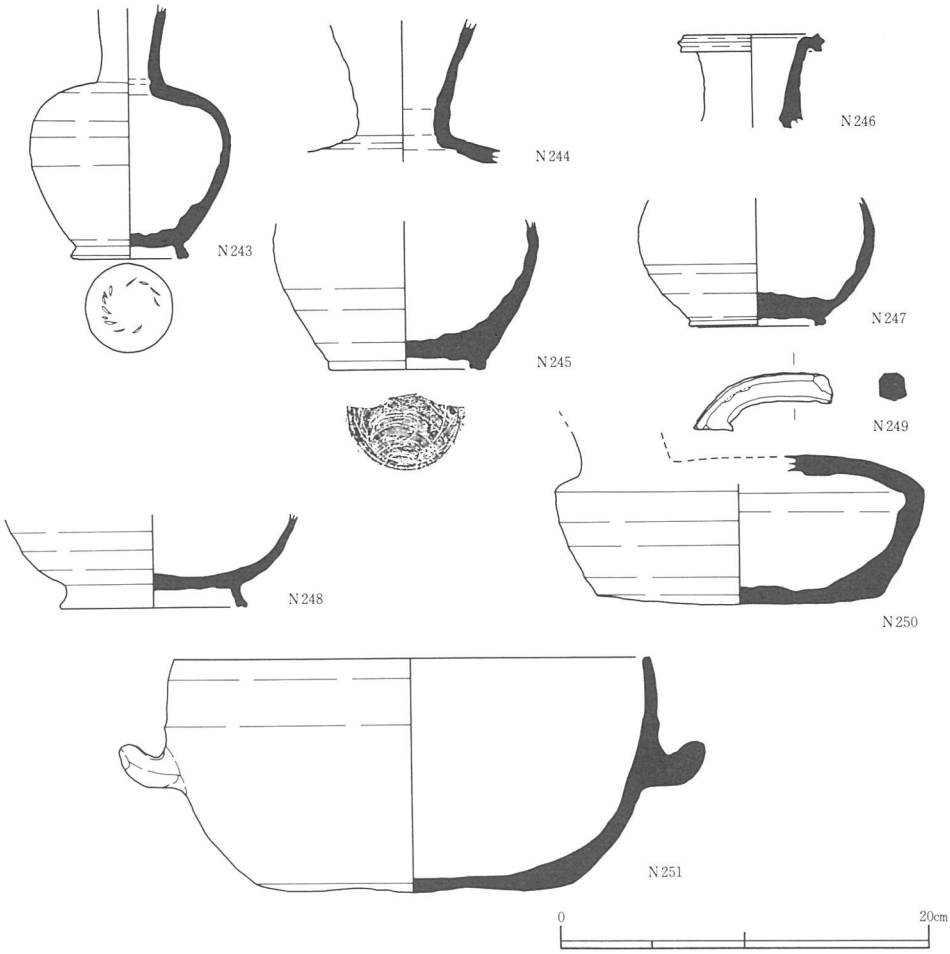
N249・N250は平瓶である。N250は平瓶の底部片、N249は把手部分である。N250は体部中程より下には回転ヘラケズリを施し、底部は周辺をヘラケズリ調整するが、他は未調整である。この他図化していないがやや古い時期の平瓶も出土した。

鉢（第237・238図、図版121参照）

鉢はN251～N254の5個体を実測した。把手の付くN251や、高台の付くN253などさまざまなものがある。N251は口径25.8㎝、器高12.6㎝で内外面はヨコナデで仕上げる。底部は器面が磨滅し調整は不明である。把手は内面から差し込んだものと思われる。N252は口径15.2㎝で器壁はやや厚手のもので口縁部を外方向につまむ。N253は大型の鉢になるもので体部下半から高台にかけて回転ヘラケズリを施している。N254は口径26.2㎝、器高5.0㎝のものでやはり体部下半を回転ヘラケズリ調整している。N255は口縁部片である。口径22.2㎝である。

擂鉢（第238図、図版121参照）

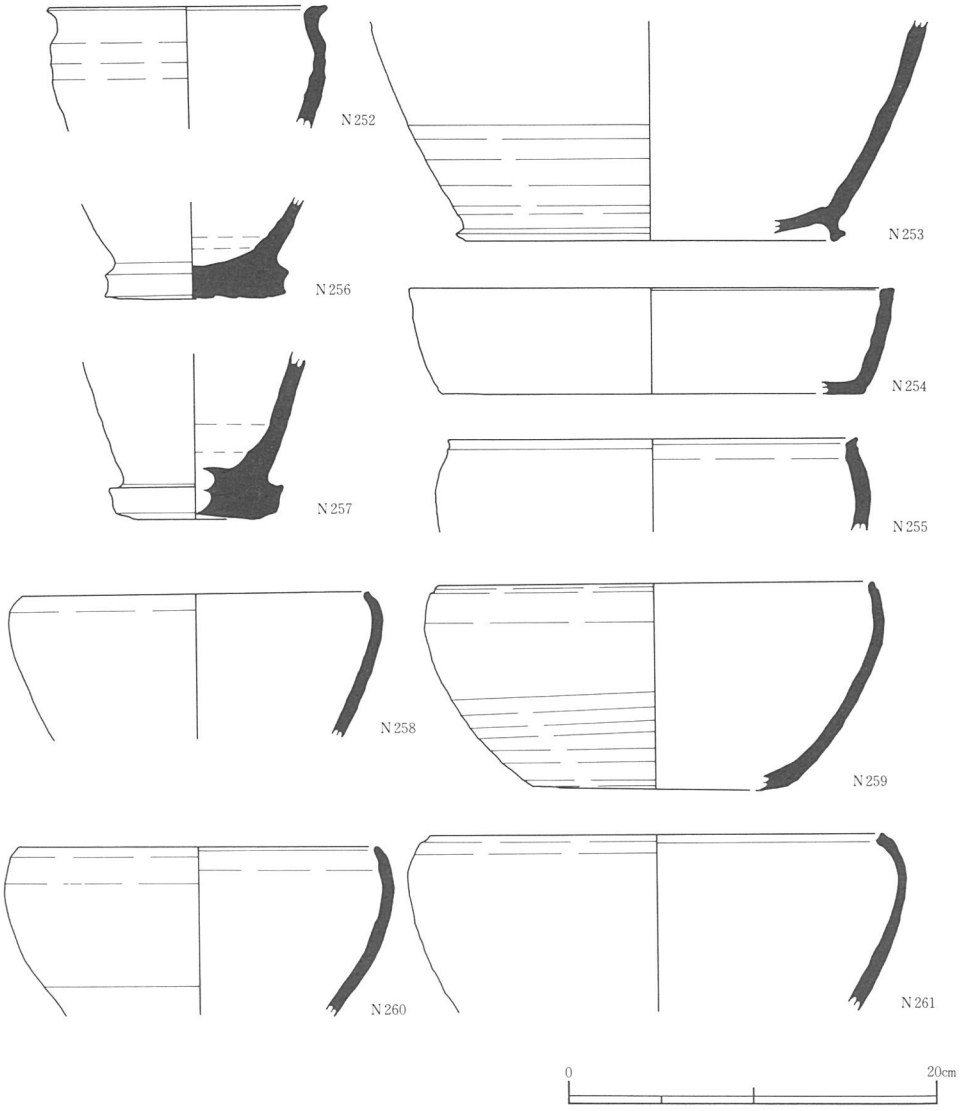
N256・N257の2個体は擂鉢である。底部径8.2～9.8㎝である。いずれも底部の細片である。底部に穿孔は観察できない。



第237図　奈良時代Ⅱ区包含層出土遺物11（1/4）

鉄鉢（第238図、図版121参照）

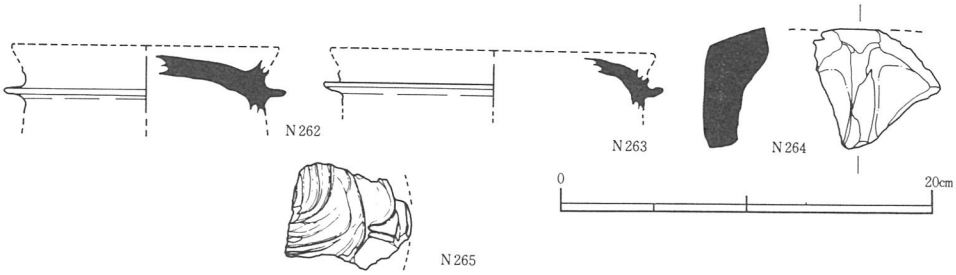
鉄鉢はN258～N261の４個体を実測した。口径は18.2～24.6㎝、器高はN259が11.15㎝である。器壁は５～６㎜と大型品の割には薄手である。その他、体部の破片で図化しなかったものも数個体見られたが、外面はミガキをかけるものが多いようである。しかし図化できた個体にはN11以外にミガキをかけるものはなかった。口縁部は内湾しながら立ち上がるもので、内外面はヨコナデ調整で仕上げている。体部下半を観察できるものはN259のみであるが、体部は1/3より下をやや細かい間隔で回転ヘラケズリ調整するもので、ミガキは全く見られない。底部は平底で未調整である。この他、底部の観察できるものは、Ⅰ区B543－ＯＸ出土のN11がある。これは底部が尖るタイプである。



第238図　奈良時代Ⅱ区包含層出土遺物12（1/4）

硯（第239図参照）

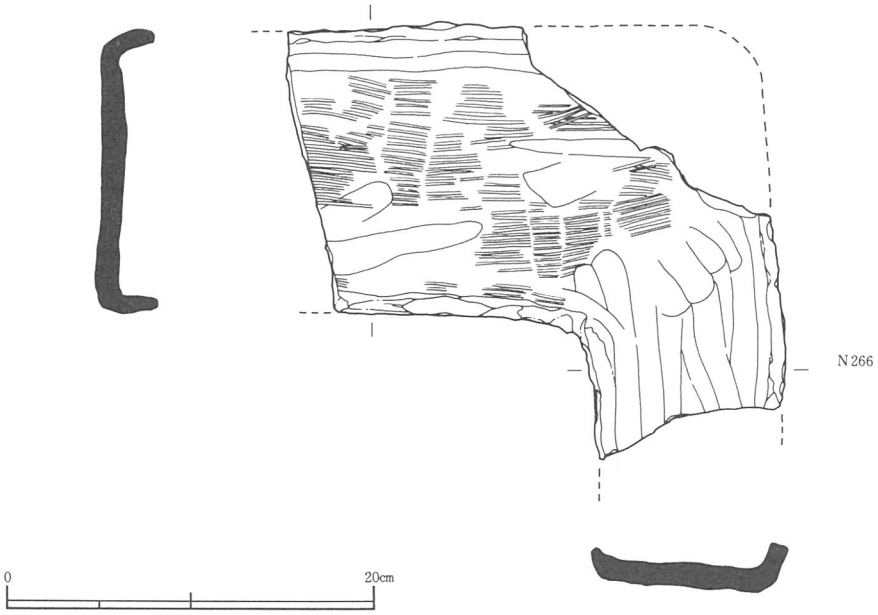
硯はN262～N264の3個体を実測した。N262・N263は円面硯である。N264は2面硯の破片である。奈良時代の硯は全てⅡ区から出土したものであるが、何れも細片で全体の形は復元できない。N262・N263は「うみ」部分の細片である。外周の最大直径は15.8～18.8㎝、胎土にはやや砂粒を含み、焼成は良好である。大庭寺遺跡では1987年度調査区の分を含めると、この時期の硯が計5点出土した。円面硯4点、風字硯1点である。



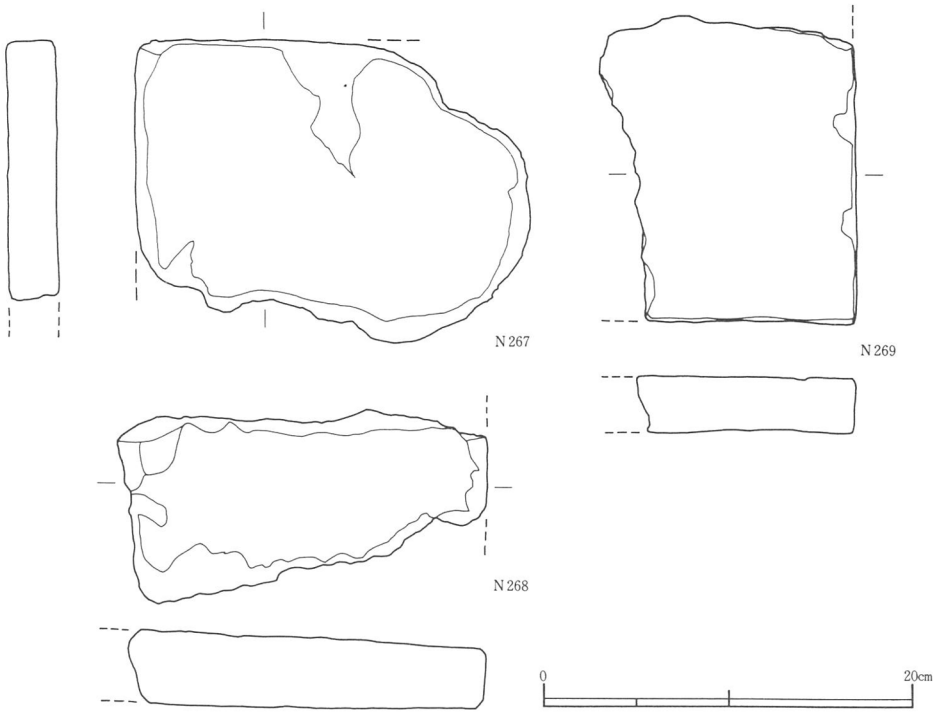
第239図　奈良時代Ⅱ区包含層出土遺物13（1/4）

塼仏（第239図、図版123参照）

塼仏は左膝およびその足下の台座部分である。最大長5.0㎝、最大幅7.0㎝の破片である。膝部分には衣のひだが表現され、膝を曲げた状態であることが判る。台座部分には蓮弁がモチーフされている。裏側は本体から剝離しており文様などは観察できなかった。焼成は青灰色で須恵質のものである。泉州で塼仏を出土した遺跡は、海会寺・禅寂寺（坂本寺）・大園遺跡[註3]が知られ、いずれも奈良時代のもので焼成は土師質である。しかし、須恵質の塼仏は播磨国を中心として中世にいくつかの類例が見られる以外は、他の時代には類例がない[註4]。このため当遺跡のものは時期が降る可能性もある。



第240図　奈良時代Ⅱ区包含層出土遺物14（1/4）



第241図　奈良時代Ⅱ区包含層出土遺物15（1/4）

不明製品（第240図、図版123参照）

用途は不明のものがあるが、須恵質のものである。最大長は24.2㎝、幅は最大で24.2㎝、厚さは1.3㎝前後である。破片は直角に曲がるもので、コーナー部分になるものと思われる。両側面に上方に折り曲げた縁を持つ。

上面はタタキ（平行タタキ）を施した後、部分的にナデている。背面はナデ調整を施している。

瓦塼（第241図、図版123参照）

瓦塼はⅠ区・Ⅱ区の柱穴や、包含層から21片が検出された。完形に復元できるものはなかった。個体数は細片が多いため不明であるが、破片に残っているコーナーは３ヶ所を数えることができた。図示したN267～N269はコーナーを残すものである。この他は393－ＯＰなどの柱穴からも検出されている。

泉州では瓦塼は海会寺、菱木下遺跡[註5]などでまとまった量の出土が知られている。海会寺のものは６形式に分けられ、接合部に凹凸や、コーナーに曲がりが見られものが大半を占

め厚さも５㎝前後で厚いものが多い。菱木下遺跡は13～14世紀の集落で当遺跡より時期はやや降るもので、別の場所から、後世に集落内に持ち運んだものである。この遺跡のものは、厚さは2.5～５㎝弱のものまでバラエティーに富むが、３㎝大のものが多い傾向が見られた。大庭寺遺跡のものは長さ・幅を計測できる資料はないが、厚さは3.0～3.4㎝（計測個対数８個）である。当遺跡の瓦塼についても、出土量が少量であることから、菱木下遺跡のように付近から転用する目的で運んだと考えられる。

Ⅲ区包含層

Ⅲ区の包含層遺物は、Ⅲ区Ａで比較的まとまって出土した。狭い範囲の中であるが、大きな成果を得ることができた。

土師器（第242図、図版122参照）

皿Ｂ・高杯・甕がある。高杯Ｎ270は脚部の破片で面取りを施し、内面は縦方向にナデル。皿ＢＮ271は口径26.0㎝、器高3.7㎝、高台径20.5㎝で内外面をヨコナデ調整している。器面が磨滅し暗文は観察できなかった。甕Ｎ272は口径24.4㎝で外面に７本/1㎝単位のハケメを施す。

須恵器（第242図、図版122参照）

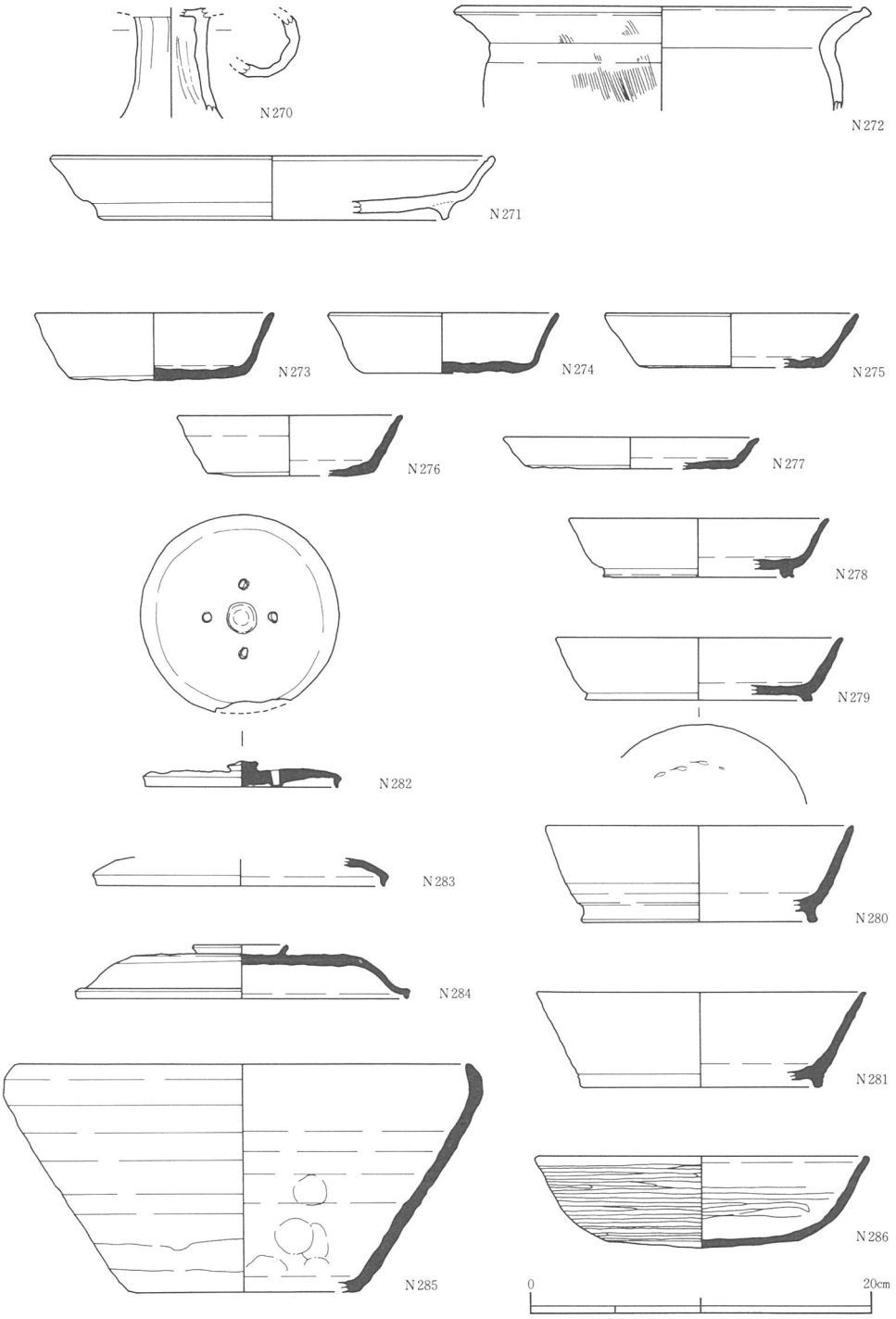
杯Ａ・杯Ｂ・皿・蓋・鉄器模倣碗蓋・鉄鉢・鉢がある。杯ＡはＮ273～Ｎ276の４個体を実測した。口径13.2～14.8㎝、器高3.2～3.8㎝である。皿ＡはＮ277は口径15.0㎝、器高1.8㎝のものである。

杯ＢはＮ278～Ｎ281の４個体を図化した。口径15.2㎝、器高3.4～5.6㎝で、高台際に回転ヘラケズリを施すものが多い。Ｎ279には爪形圧痕が観察された。

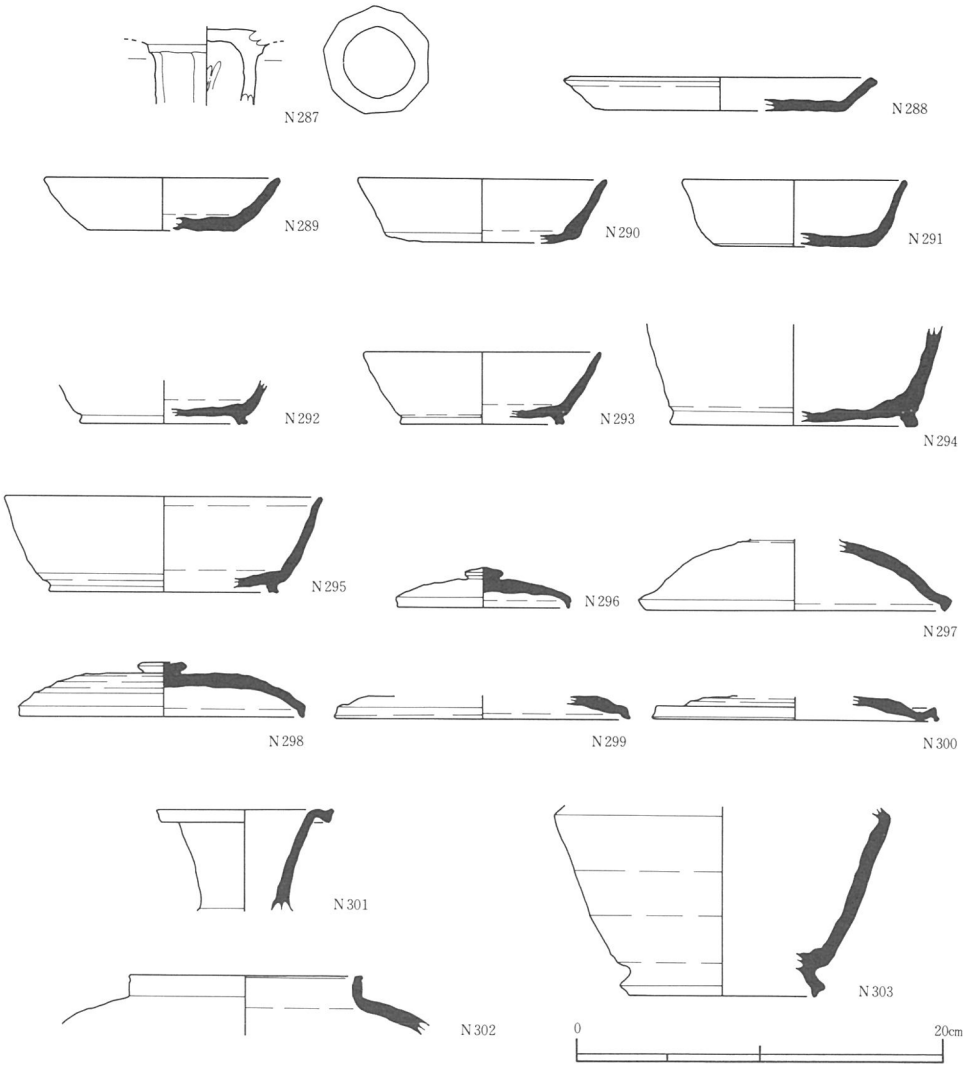
杯蓋Ｎ282は口径11.25㎝、器高1.5㎝で、天井部に厚い自然釉がかかる。つまみ周辺には４つの穿孔がある。穿孔は外面から内面方向に開けるもので、直径0.5㎝前後である。Ｎ283は口径17.4㎝の杯蓋である。Ｎ284は鉄器模倣椀の蓋で口径19.3㎝、器高3.1㎝である。

鉄鉢Ｎ285は口径26.3㎝、器高13.3㎝である。体部は外方向に直線的に立ち上がり、口縁部で丸く内湾させる。底部は平たいもので、外面口縁部直下まで回転ヘラケズリを施している。

鉢Ｎ286は口径19.6㎝、器高5.4㎝の平底のものである。内面はやや粗く、外面は丁寧にミガキをかけている。



第242図　奈良時代Ⅲ区包含層出土遺物（1/4）



第243図　奈良時代Ⅳ区包含層出土遺物（1/4）

Ⅳ区包含層

掘立柱建物D群が立地しているが、細片が多く量は比較的少ない。ただし、Ⅳ区全体に遺物が散布するもので、特に集中して出土する場所はなかった。また磨滅によるためか土師器の量は少なかった。

土師器（第123図参照）

図化したものは土師器 高杯N287がある。脚部の破片で、9面の面取りを施している。他には、包含層中の遺物は細片が多く、図化できるものはなかった。

須恵器（第243図、図版123参照）

須恵器は杯Ａ・杯Ｂ・皿・蓋・壷が出土した。杯ＡＮ289～Ｎ291は口径12.8～13.4㎝、器高2.9～3.6㎝で内外面はヨコナデ調整を施し、外面底部は未調整でヘラ切り痕跡を残すもの（Ｎ289）、ヘラケズリ調整を施すもの（Ｎ290・Ｎ291）がある。

皿ＡＮ288は口径17.0㎝、器高1.7㎝である。内外面はヨコナデ調整を施し、口縁端部には斜め上方に面を持つ。外面底部はヘラケズリ調整を施す。

杯ＢはＮ292～Ｎ295の４個体を実測した。完全なものは少ないが多く出土した器種である。口径12.9～19.2㎝、器高3.9～5.2㎝である。

蓋はＮ296～Ｎ300の５個体を実測した。口径12.9～19.2㎝、器高2.2～2.9㎝である。完全な器形の知れるものはＮ296・Ｎ298の２個体である。Ｎ297は器高の高いもので、焼き締まっている。Ｎ300は口縁部が「く」の字に曲がるものでやや時代の下るものである。

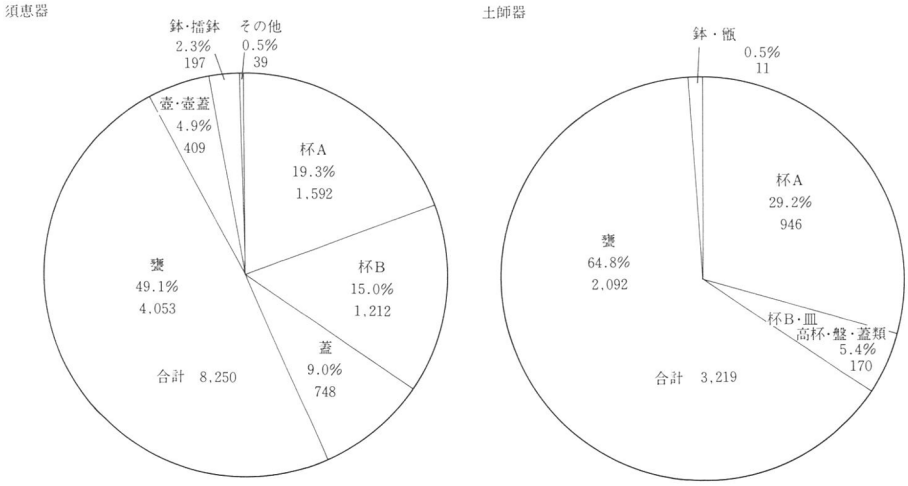
壷はＮ301～Ｎ303の３個体を図化した。Ｎ301は長頸壷の口縁部の破片である。Ｎ301は口径9.6㎝。Ｎ302は直口壷の口縁部片で口径12.6㎝である。Ｎ303は長頸壷の底部～体部の破片である。

小結

出土遺物の時期は土師器は平城宮の編年を、須恵器は陶邑の中村編年[註6]を参考にして考えたい。

土師器は杯に施された暗文から平城宮Ⅲと考えられる。しかし高杯には脚の長短が見ら

第10表　Ⅱ区包含層奈良時代出土遺物構成表



れ、鉢も2段放射状暗文が見られることから平城宮IIからの幅が考えられる。従って、平城宮IIIを中心にしながらやや古いものを含んでいると考えられる。

須恵器は陶邑Ⅳ期にあたる時期である。杯は口径の大小が見られ、体部が外方に開く個体があまり見られないことから第Ⅳ型式2～3段階頃と考えられる。他の遺物もこの時期で大半が考えてよいものが多い。しかし、蓋には第III型式5段階～第Ⅳ型式4段階のものがあり、平瓶には図化できなかったが古いものが見られた。鉄鉢にも尖った底のものと平底のものがあり、やはり時期に幅が見られる。これらの事から、奈良時代の遺物は平城宮III・陶邑第Ⅳ型式2～3段階の時期を中心としながら前後の時期のものも含んでおりほぼ奈良時代全般（一部平安時代初頭）に渡っていると考えられる。

第10表はII区の須恵器と土師器の比率である。他の地区では土師器の残りがよくないためII区の集計から大庭寺遺跡の遺物構成を考えてみることにする。全体の破片数では須恵器8250に対して、土師器3225で、須恵器の比率が高い。1987年度調査でも同様の傾向が見られ、木組井戸でも実測個体29点の内須恵器17点対土師器12点で須恵器がやはり多いことがわかる。

和泉のこの時期の集落では翁橋遺跡・深井遺跡などの大鳥郡やそれに近い和泉郡の一画を除いて、須恵器が多いことが指摘されている[註7]。特に大庭寺遺跡では陶色の窯址に隣接するという立地上、この傾向が現われて当然と考えられる。

註釈及び参考文献

註1　器種の分類・名称については『平城宮発掘調査報告書VIII』奈良国立文化財研究所1976を参考にした。

註2　『平城宮発掘調査報告VI』　奈良国立文化財研究所　1975

註3　『海会寺』　泉南市教育委員会　1987

註4　義則敏彦「播磨の中世の塼仏」『今里幾次古稀記念論文集』　1990
今里幾次古稀記念論文集刊行会

註5　『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　（財）大阪文化財センター　1984

註6　「陶邑III」　大阪府文化財調査報告書　第30輯　（財）大阪文化財センター　1980

註7　広瀬和雄「中世の胎動」　「岩波講座　日本の考古学6」岩波書店　1986

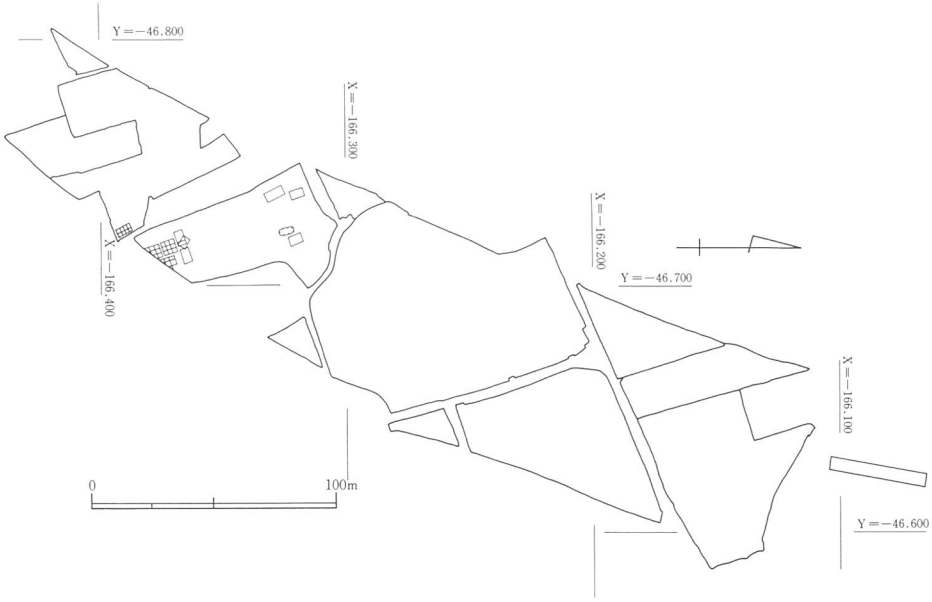
第５節　平安時代

大庭寺遺跡で平安時代の遺構が検出されるのは、丘陵斜面のごく限られた範囲である。平安時代の遺構は掘立柱建物10棟、土坑１基からなるが、建物群の範囲はII区およびＩ区の東端に分布している。Ｉ区の建物は（395－ＯＢ）II区に隣接した場所にあり一連のものと考えられる。建物群は、同じ丘陵斜面でも東側は削平して、やや平坦にした場所に建物を建てるが、西側になると、逆に盛り土造成をして、上に建物を建てる傾向が見られた。

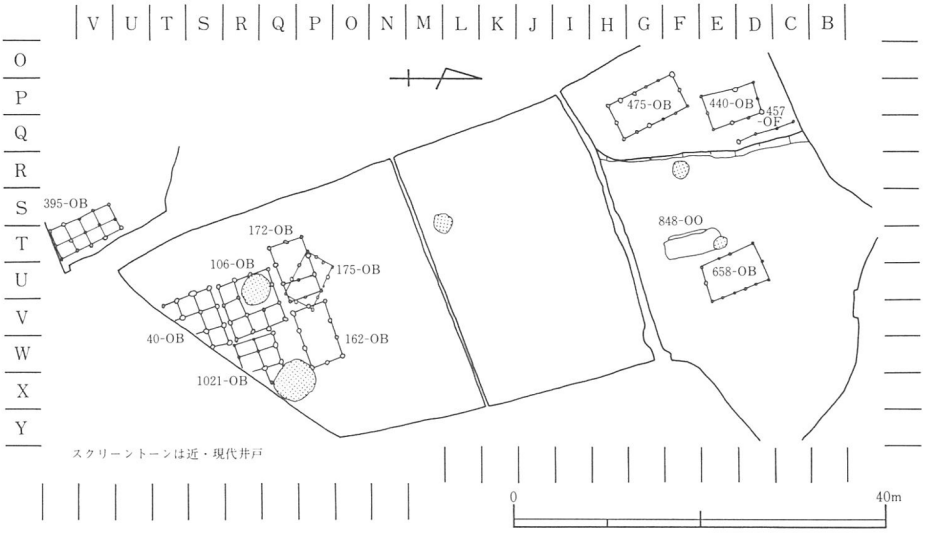
さらに、建物群は同じ丘陵斜面のなかでも、北側の群（掘立柱建物３棟）と南側の群（掘立柱建物７棟）に大きく分かれる。そして、南側の建物群東側には平安時代の包含層が厚く堆積していたが、この堆積土（568－ＯＸ）の中より黒色土器・土師器などが多量に出土している。遺物はこの堆積土からのものが大半で、全体の出土量は多くない。

658－ＯＢ（第245・248図参照）

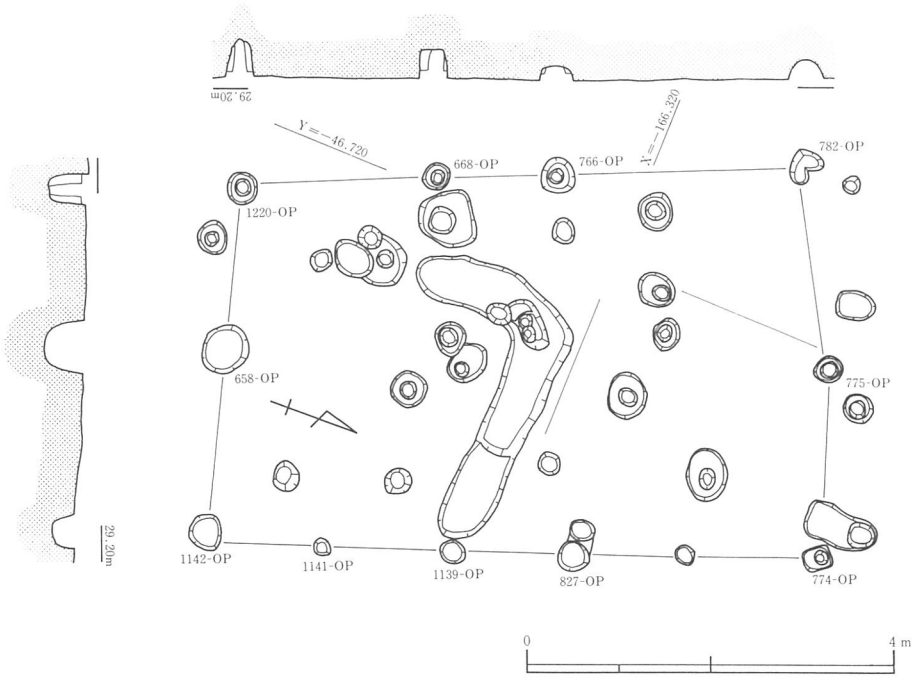
K18ＥＴ地区周辺に位置する。桁行５間×梁行２間（6.10m×3.90m）の南北棟である。面積は25.88㎡で、建物の主軸方位はＮ－22°30′－Ｗを示している。柱の並びは悪く南梁行側は4.3m、北側が3.9mと平面が歪な台形を呈している。柱間寸法も梁行は南北1.20～2.60m、東西1.75～2.20mとばらつきが大きいようである。



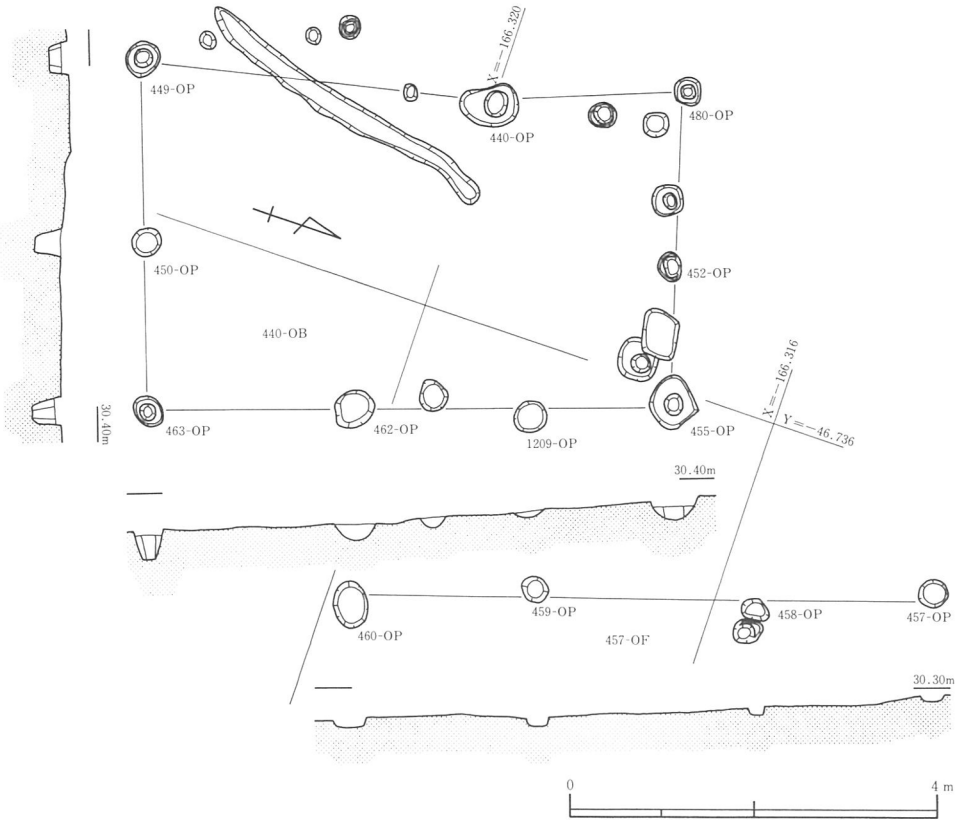
第244図　平安時代全体図（1/3000）



第245図　平安時代遺構配置図（1/800）



第246図　658－ＯＢ平面・断面図（1/80）



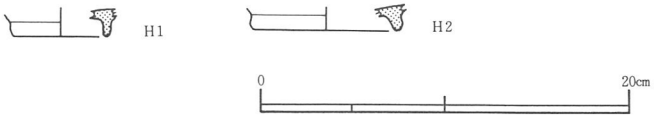
第247図　440－ＯＢ，457－ＯＦ平面・断面図（1/80）

柱穴は円形で直径30～60㎝である。検出レベルはT.P.＋28.90～29.15m、柱穴底はT.P.＋28.60～28.95mで検出された。柱穴は南に浅く、北にやや深く検出される傾向がある。これは建物が北に傾斜する場所に建てられたためと思われる。

遺物は黒色土器 椀の細片が出土している。図示したものは、Ｈ２：646－ＯＰ柱痕跡からの出土である。黒色土器 椀の底部片である。

440－ＯＢ（第245・247・248図参照）

調査区北端で475－ＯＢに近接して出土した建物である。K18ＥＰ地区周辺に位置する。桁行３間×梁行２間（5.95m×3.45m）の南北棟で、面積は21.4㎡を計る。建物の主軸方



第248図　440・663－ＯＢ出土遺物（1/4）

位はＮ－18°30′－Ｗを示している。

柱間寸法は桁行1.55～2.25ｍ、梁行1.55～2.00ｍとばらつきが見られる。掘方は大きさも直径20～60㎝と規模に大小が見られる。検出レベルはＴ.Ｐ.＋30.00～30.15ｍ、柱穴底はＴ.Ｐ.＋29.70～29.95ｍで検出された。遺物は土師器 杯・皿、黒色土器 椀、須恵器 椀・甕等である。

図示した遺物はＨ１：455－ＯＰ掘方出土である。高台径5.1㎝、残存高1.5㎝である。黒色土器 椀の底部片である。

457－ＯＦ（第245・247図参照）

440－ＯＢに沿って検出されたもので、Ｋ18ＤＱ周辺に位置する。457－ＯＦは柱穴４つが並ぶもので、掘方は直径30～60㎝を計る。検出レベルはＴ.Ｐ.＋30.00～30.25ｍ、柱底はＴ.Ｐ.＋29.90～30.15ｍで検出された。遺物は黒色土器 椀１点が出土している。方向と440－ＯＢとの関係から平安時代とした。東側が近世の開田によって削られているため、不明であるが建物であった可能性があるため報告した。

475－ＯＢ（第245・249図、図版67上参照）

Ｋ18ＧＰ地区周辺に位置する。桁行５間×梁行２間（7.85ｍ×4.00ｍ）の南北棟である。面積31.40㎡で、建物の主軸はＮ－26°30′－Ｗを示している。建物の北東側には試掘トレンチ№98が位置する。

柱間寸法は桁行1.50～1.65ｍ、梁行1.90～2.08ｍで、柱間には誤差が少ない。

並びから床束と判るものはないが、建物内には幾つかの柱が見られ、床束になる可能性がある。

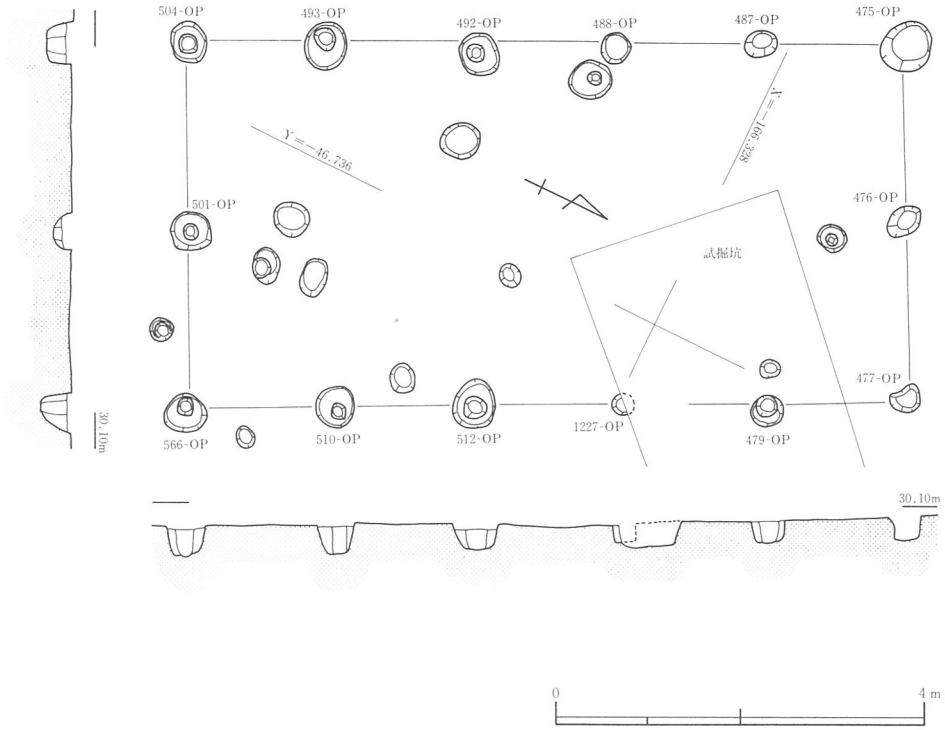
掘方は円形を呈し直径30～50㎝、概ね柱より一回り大きい程度ものが多いようである。柱痕跡は８基確認できた。柱痕跡の観察から柱の直径は15～20㎝と考えられる。柱の並びは揃っている方で、左右に振れるものは見られない。

遺構の検出レベルはＴ.Ｐ.＋29.84～30.00ｍ、柱底はＴ.Ｐ.＋29.50～29.70ｍで検出され、北に高く南に低くなる。柱底レベルは北が高く、南が低い。建物は北から南に傾斜する場所に建てられていたと思われる。

遺物は、黒色土器 椀、須恵器 椀が出土しているが、図化できるものはなかった。

172－ＯＢ（第245・250・251図、図版66下・69・127参照）

Ｋ18ＱＴ地区周辺に位置する。桁行３間×梁行２間（6.10ｍ×3.75ｍ）の東西棟である。床束は197－ＯＰの１基のみが検出された。面積は23.25㎡である。建物の主軸方位はＮ－



第249図　475－ＯＢ平面・断面図（1/80）

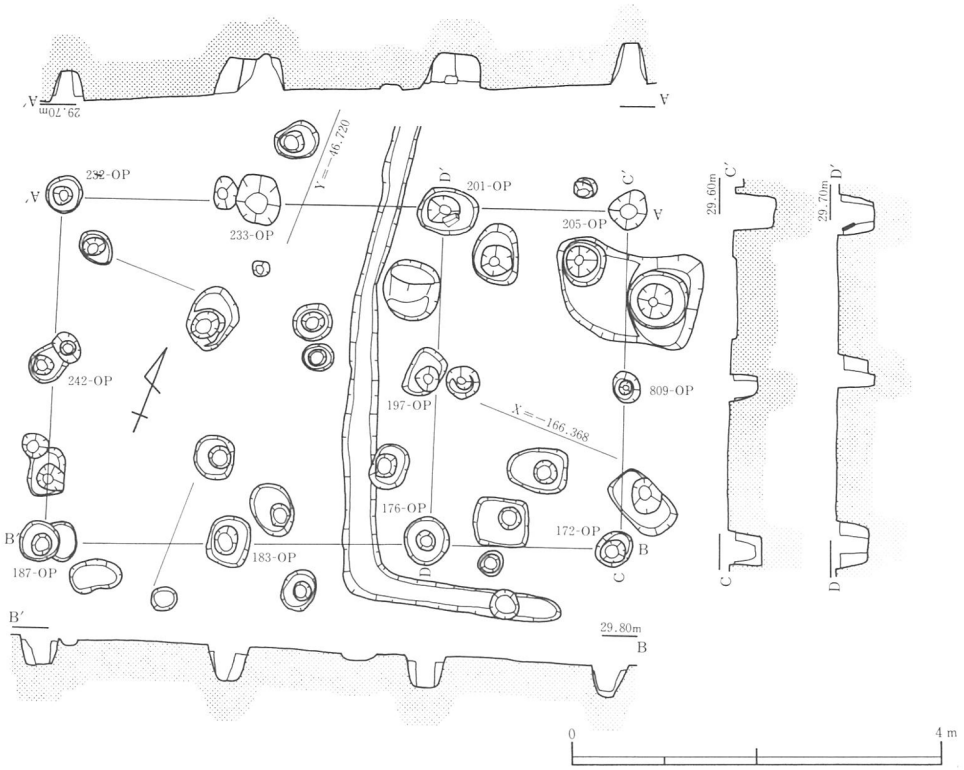
78°45′－Ｅ（東西辺で計測）である。

175－ＯＢと172－ＯＢは重なって検出された。しかし、柱穴は234－ＯＰと172－ＯＢの233－ＯＰと接するのみで、両者の切り合いが不明なため、前後関係は不明である。

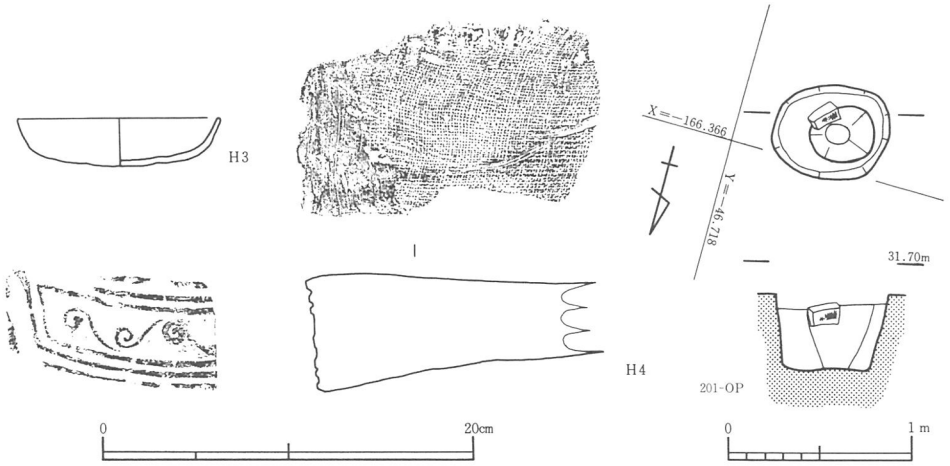
柱の並びは良いほうで柱間寸法は桁行2.00～2.15m、梁行1.75～1.9mである。

検出レベルはT.P.＋29.40～29.75m、柱穴底はT.P.＋29.00～29.35mで検出された。柱底は西から東に傾斜する。建物は西から東に傾斜する場所に建てられていたと思われる。柱穴は円形のものが多く、直径30～60㎝を測る。全体に桁行より梁行の柱穴の方が小振りである。柱穴の埋土は2.5Y6/2灰黄色細砂土である。柱痕跡は10YR5/3にぶい黄褐色細砂質土である。

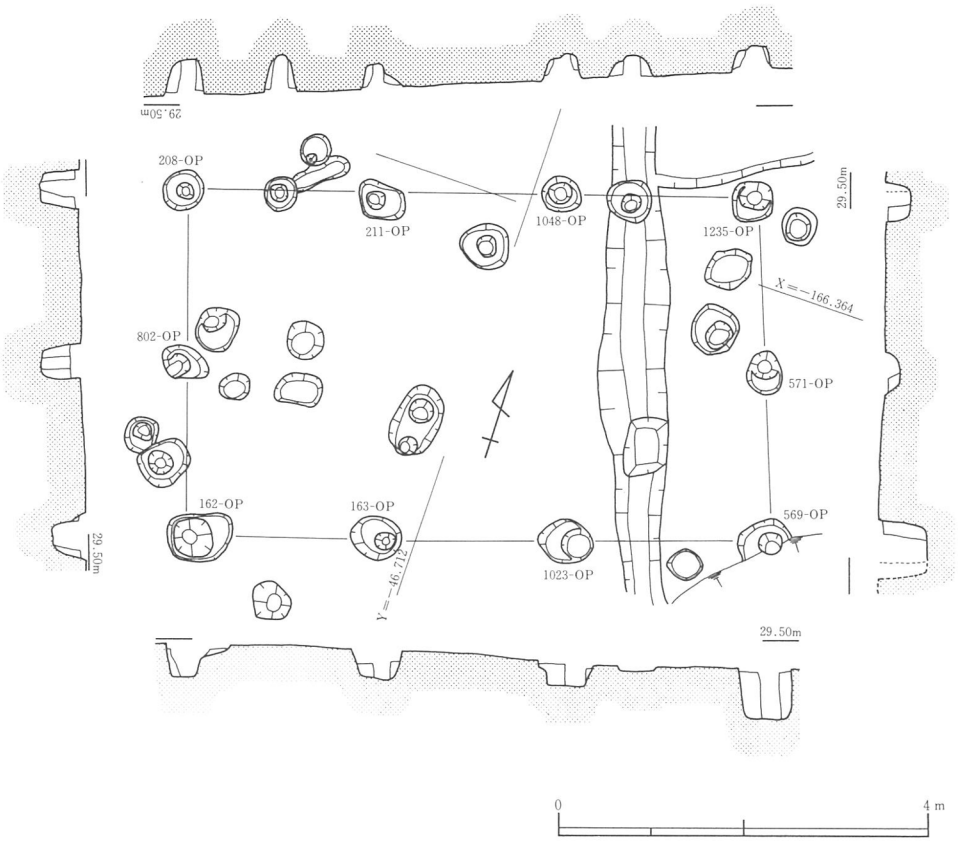
201－ＯＰには軒平瓦の瓦頭片Ｈ４を据えていた。（第251図201－ＯＰ及び遺物127図版参照）。瓦は柱痕跡に沿わせて据えられたもので、掘方から出土した。瓦頭面は蓮弁文様のもので、凸面は布目痕跡を残し、瓦頭面周辺のみをヘラケズリする。蓮弁文様は退化したもので技法から平安時代中頃のものと考えられる。



第250図　172－ＯＢ平面・断面図（1/80）



第251図　201－ＯＰ平面・断面図（1/40），172－ＯＢ出土遺物（1/4）



第252図　162－ＯＢ平面・断面図（1/80）

その他187－ＯＰ・183－ＯＰでも拳大の礫を柱穴底に据えていた。

遺物は土師器 杯・皿などが出土している。

図示した遺物は、軒平瓦の他、土師器 杯Ｈ３がある。土師器 杯は口径11.02㎝、器高2.6㎝である。

162－ＯＢ（第245・252図参照）

Ｋ18ＱＶ地区周辺に位置する。桁行３間×梁行２間（6.35×3.75m）の建物である。面積は23.31㎡で、建物の主軸方位はＮ－71°30′－Ｅ（東西辺で計測）である。

柱の並びは良く、柱間寸法も南北1.8～1.9m、東西2.00～2.17mと誤差が少ない。検出レベルはT.P.＋29.10～29.47m、柱穴底のレベルはT.P.＋28.65～29.10mで検出された。柱穴底は西に高く東に低くなる。床束は建物の並びと関係なく使用されたものもあると考えられるが、柱穴の重複が多く復元できなかった。

柱穴は円形ないし楕円形のものが多い。規模は直径30～70㎝を測り、主として50㎝大のものが多い。全体に桁行より梁行の柱穴の方が小振りである。根石を入れた柱穴はなかった。遺物は土師器 杯、黒色土器 椀などが出土している。

106－ＯＢ（第245・253・254図参照）

Ｋ18ＵＶ周辺に位置する。建物北西隅が近現代の井戸のために破壊されているが建物全体の規模は復元できた。３間×３間（5.85m×6.10m）の総柱建物で、面積は36.12㎡を測る。建物の主軸方位はＮ－21°－Ｗである。柱の並びは、側柱は直線に並ぶが、床束は歪みが著しい。平面は正方形に近く東西棟か南北棟か判別ができない。

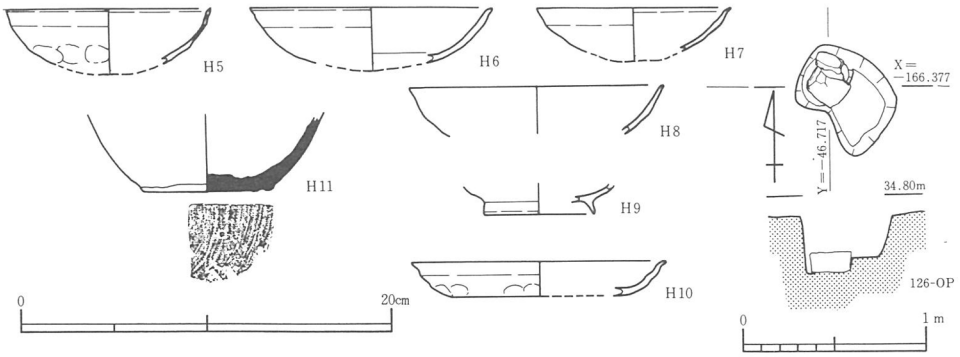
柱間は南北1.75～2.05m、東西1.90～2.05mで規模に大小が見られる。柱穴は円形ないし楕円形、直径30～50㎝の大きさである。

遺構の検出レベルはT.P.＋29.45～29.75m、柱底はT.P.＋29.10～29.30mで検出された。床束もあまり浅いものはない。126－ＯＰには上面を水平にした根石（長さ１辺25㎝の割石）が据えられていた。

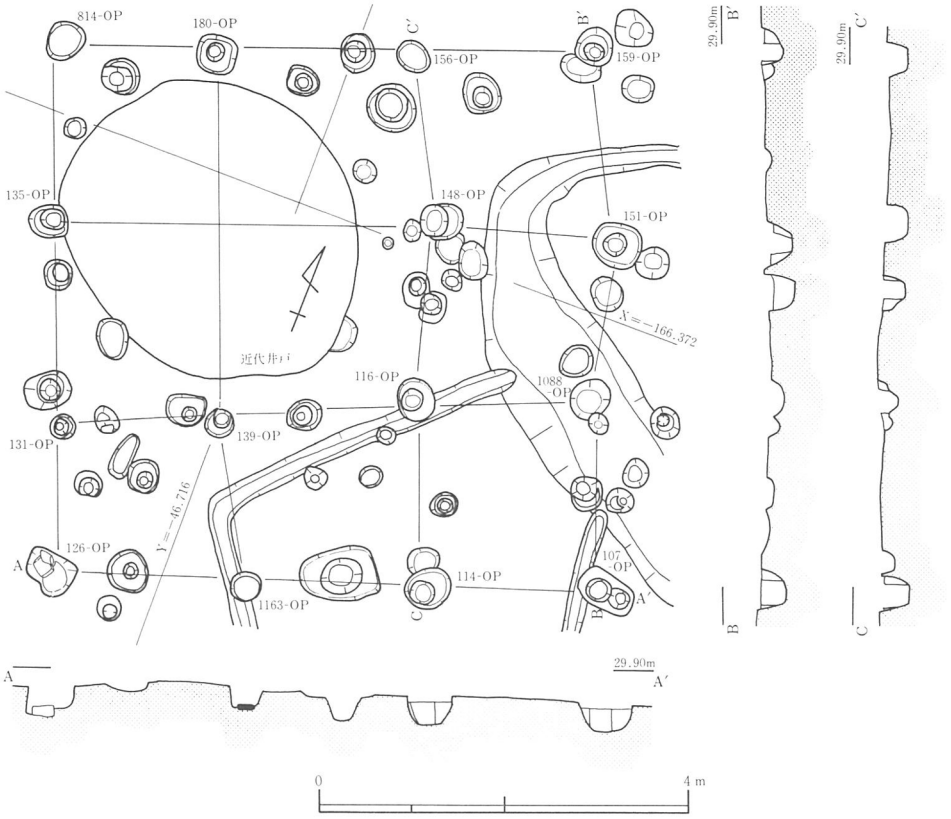
遺物は土師器 皿、黒色土器 椀、須恵器 壺などがある。

図示した遺物はＨ５～Ｈ７・H10：151－ＯＰ掘方、Ｈ８：107－ＯＰ掘方、Ｈ９：106－ＯＰ掘方、H11：159－ＯＰ掘方からの出土である。Ｈ５～Ｈ８は土師器 杯、H10は土師器 皿、Ｈ９は黒色土器 椀、H11は須恵器 椀である。土師器 杯は口径10.6～13.8㎝のもので口縁端部をややつまむ。外面体部から底部は指頭痕跡が残り未調整である。皿は口径14.2㎝でやはり口縁端部をつまみ、外面は指頭痕跡が残る。須恵器 椀は底部糸切り底のものである。

40－ＯＢ（第245・255・256図、図版66上・68下参照）



第253図　126－ＯＰ平面・断面図（1/20），106－ＯＢ出土遺物（1/4）



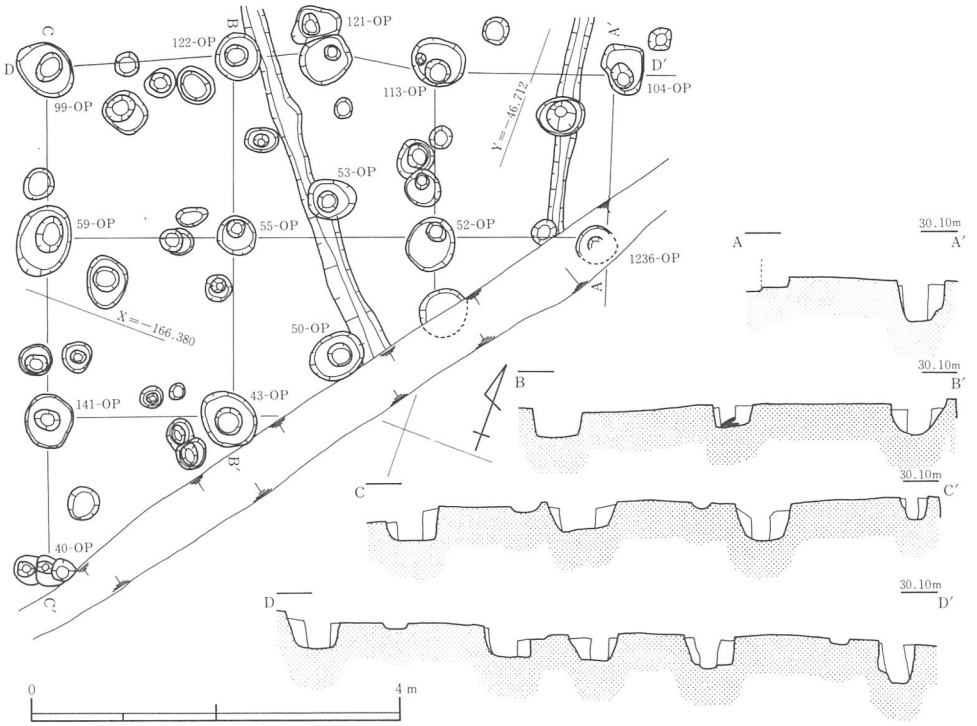
第254図　106－ＯＢ平面・断面図（1/80）

Ｋ18ＴＵ地区周辺に位置する。３間以上×３間以上（6.25m×5.45m以上）の総柱建物である。建物の主軸方位はＮ－20°－Ｗ（東西辺を計測）を示している。

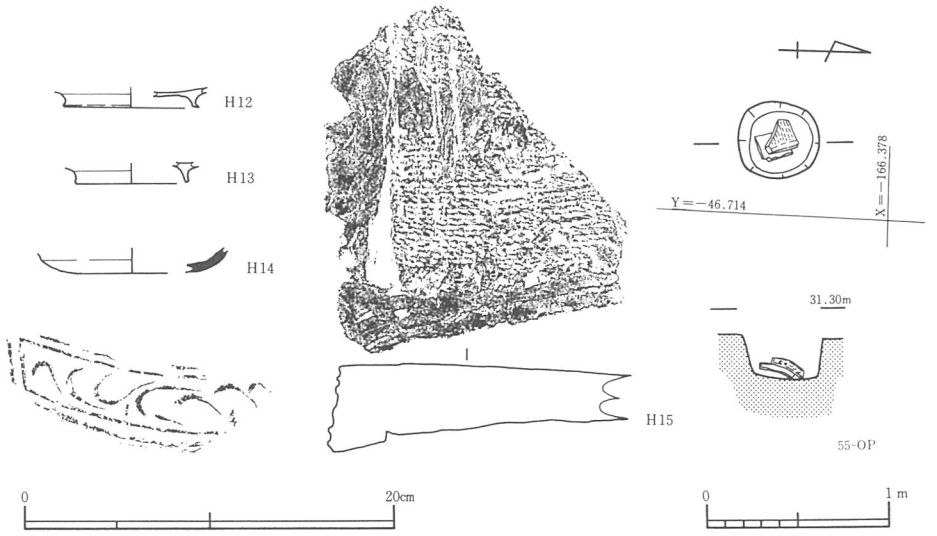
建物の検出レベルはT.P.＋29.60～29.90m、柱穴底のレベルはT.P.＋29.10～29.70mである。柱の並びは良いほうで、柱間は南北1.6～2.0m、東西2.0～2.2mで、141－ＯＰ・40－ＯＰ間を除いてほぼ等間隔である。

柱穴掘方の規模は直径40～60㎝で、円形ないし楕円形を呈している。遺構の検出レベルはT.P.＋29.60～29.90m、柱穴底はT.P.＋29.10～29.70mの高さで検出された。側柱と床束の規模・深さには格差は見られない。また柱穴底は一方に傾斜していないため、平坦な場所に建てられたものと考えられる。

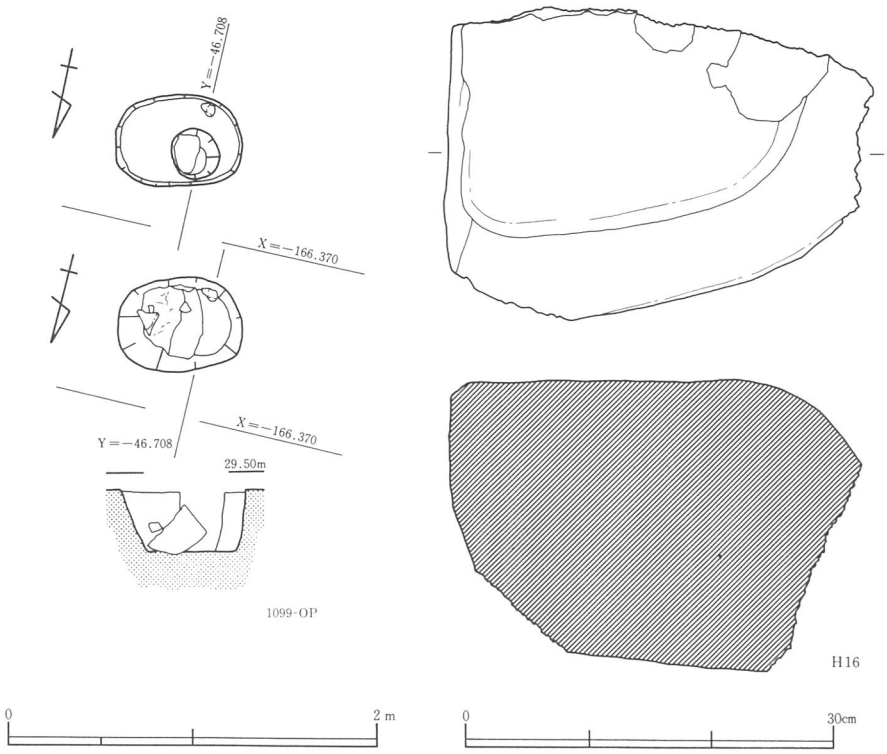
55－ＯＰには軒平瓦（H15）と平瓦、122－ＯＰには人頭大の礫を根固め石として据えていた。軒平瓦は蓮弁文様のもので凸面に縄目痕跡を残す。凹面は顎を持ち、布目を残す。凸面は瓦当面の際にヘラケズリをかけるものである。この軒平瓦は蓮弁の文様の退化した



第255図　40－ＯＢ平面・断面図（1/80）



第256図　55－ＯＰ平面・断面図（1/40），40－ＯＢ出土遺物（1/4）



第257図　1099－ＯＰ平面・断面図（1/40），1021－ＯＢ出土遺物（1/6）

形態・調整技法から時期は11世紀中頃前後以降と考えられる。[註1]

遺物は土師器 皿、黒色土器 椀、須恵器 甕が出土している。図示したものは、H12：104－ＯＰ掘方、H13・H14：122－ＯＰ掘方からの出土である。

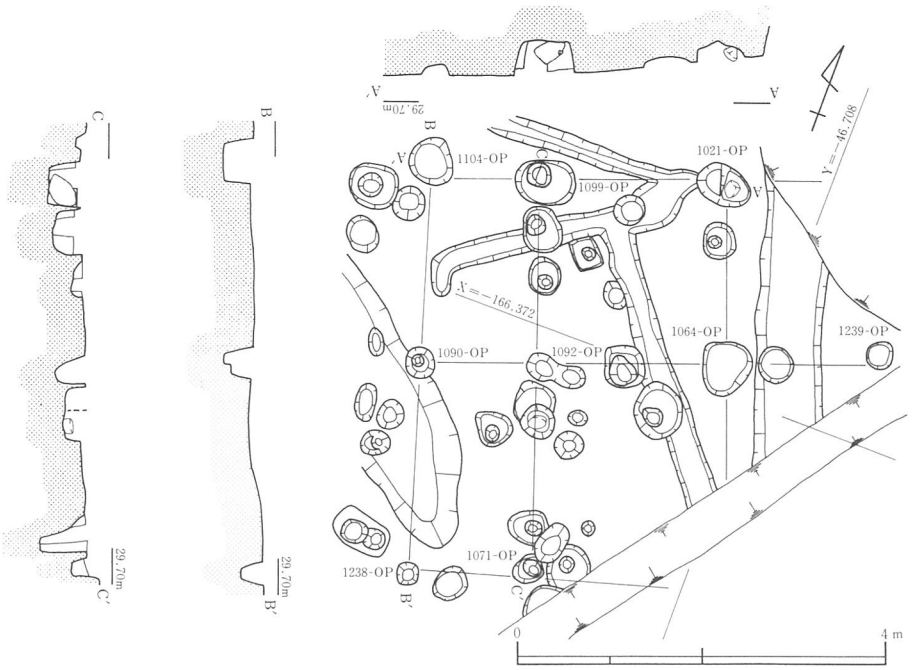
黒色土器H12・H13はいずれも内黒のもので、高台径6.0～7.4㎝である。H14は奈良時代の須恵器 杯Ａの底部片である。

1021－ＯＢ（第245・258・259図、図版68上・127参照）

K18ＲＶ地区周辺に位置する。２間以上×３間以上（4.25m×3.30m）の総柱建物で主軸方位はＮ－15°30′－Ｗである。

柱間隔は1104－ＯＰ・1090－ＯＰ・1071－ＯＰの並びは1099－ＯＰ・1092－ＯＰ・1071－ＯＰとの柱間が少し狭いため廂の可能性がある。柱間寸法は南北2.00～2.25m、東西1.20～2.10mである。

遺構の検出レベルはT.P.＋29.25～29.50m、柱穴底はT.P.＋29.00～29.30mの深さであった。柱穴は円形ないし楕円形のものが多く、直径40～80㎝である。建物周辺は柱穴の



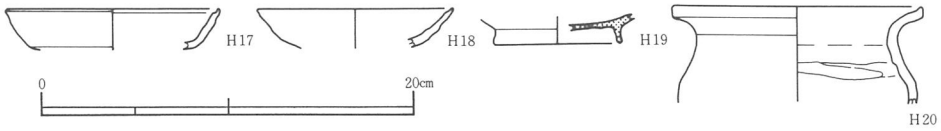
第258図　1021－ＯＢ平面・断面図（1/80）

重複が激しい。

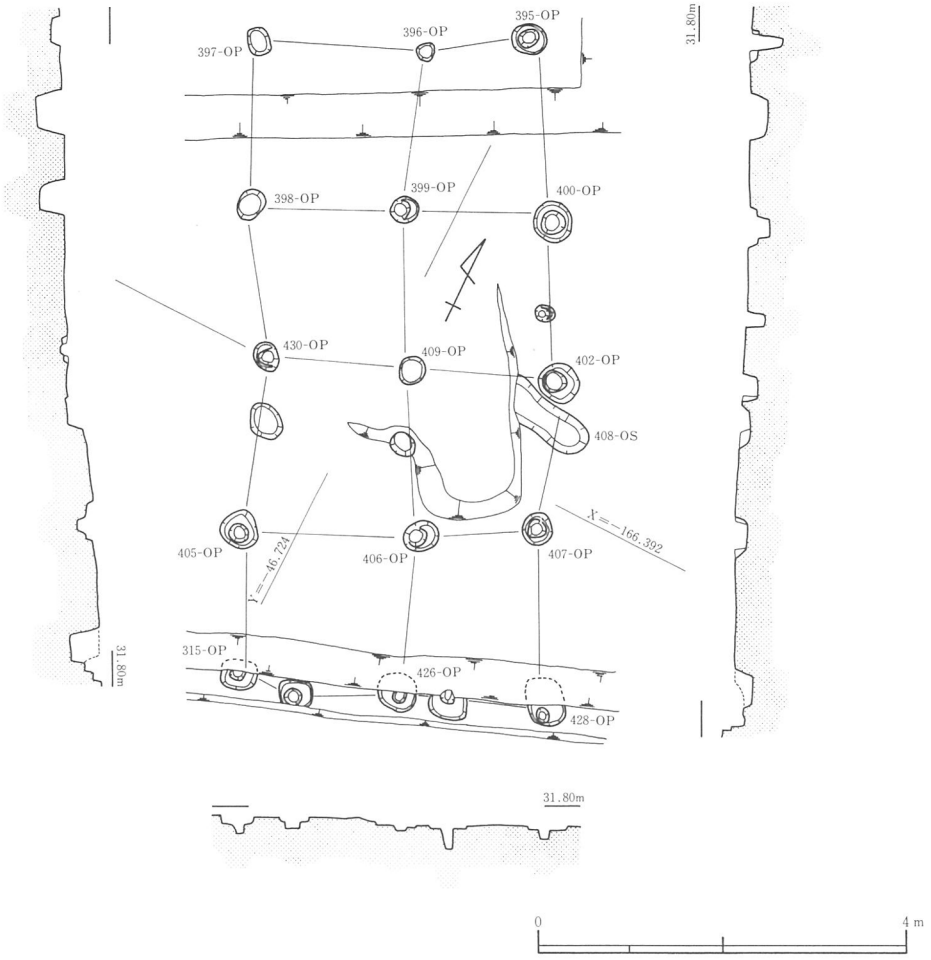
今回は最も並びの良いものを選んで報告しておく。

1099－ＯＰの中には長軸長35.4㎝の御影石H16が出土した。石は据えた状態ではなく斜めになって検出されたため、柱掘方に無雑作に投げ込まれたものと思われる。この石は表面を磨き平滑に調整し、本来は寺院などの建物の礎石として利用されていたものを半割し転用したものとみられる。この他、1071－ＯＰにも人頭大の礫を入れた根石が観察できた。

遺物は土師器 椀・皿・甕、黒色土器 椀などが出土している。図化したものは、H17：1021－ＯＰ掘方、H18：1099－ＯＰ掘方、H19：1071－ＯＰ掘方、H20：1064－ＯＰ掘方からの出土である。H17・H18は土師器の杯である。口径10.8～11.6㎝、器高1.8㎝のもので内外面をヨコナデ調整するが、底部は未調整である。H19は黒色土器 椀の底部片で高台径7.2㎝である。H20は土師器 甕で口径13.8㎝の小型のものである。



第259図　1021－ＯＢ出土遺物（1/4）



第260図　395－ＯＢ平面・断面図（1/80）

395－ＯＢ（第245・260図参照）

Ⅰ区Ａに位置する建物で、Ｋ18ＷＳ周辺に位置する。桁行４間以上×梁行２間以上(7.0ｍ×3.0ｍ）の総柱建物である。建物の主軸方位はＮ－26°－Ｗである。

建物の検出レベルはＴ.Ｐ.＋31.25～31.75ｍ、柱穴底のレベルはＴ.Ｐ.＋31.00～31.55ｍである。柱穴底のレベルは北東側に低くなるようである。柱の並びはややずれるものが見られる。柱間寸法は南北1.55～2.00ｍ、東西1.15～1.90ｍである。柱穴の掘方の直径は30～40㎝前後で平面は円形ないし楕円形のものが多い。柱痕跡は８個確認されたが、柱痕跡の観察から、柱は直径20㎝前後と考えられる。この建物の建つ地盤は南側は地山を削平し、北側は10ＹＲ3/2黒褐色の土砂が堆積した上に建てられていた。

遺物は土師器 甕、黒色土器 椀、須恵器 壷・甕が出土している。図化できるものはなかったが、出土遺物から平安時代と考えた。

175－ＯＢ（第245図参照）

Ｋ18ＱＴ周辺に位置する。桁行４間×梁行３間(6.10m×5.85m)の南北棟である。面積は15.5㎡を測り、建物の主軸方位はＮ－21°－Ｗである。175－ＯＢは172－ＯＢに重なって出土した建物である。柱間寸法は桁行1.1～1.7m、梁行1.0～1.9mで寸法に大小が見られる。柱穴は円形ないし楕円形で、直径30～50㎝の大きさである。遺構の検出レベルはＴ.Ｐ.＋29.40～29.55m、柱穴底はＴ.Ｐ.＋29.07～29.35mで検出された。床束もあまり浅いものはない。

遺物は黒色土器 椀が出土しているが、図化できるものはなかった。

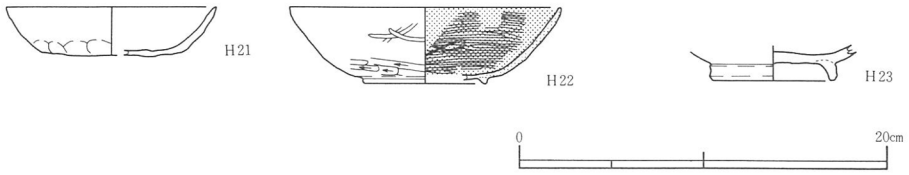
柱穴（第261図参照）

平安時代の柱穴は建物群の分布と同じく、Ⅱ区の南端と北端に集中していると考えられる。柱穴は古墳時代、奈良時代に比べ一回り小さいものが多く、平面も円形ないし楕円形のものが大多数である。柱は柱痕跡の観察から20㎝前後と考えられる。建物に復元できなかった柱穴から出土した遺物で、図示できたものは３個体である。

Ｈ21：77－ＯＰ掘方、Ｈ22：1097－ＯＰ掘方、Ｈ23：64－ＯＰからの出土である。

第11表　平安時代掘立柱建物一覧表

建物		棟方向	規模	面積	主軸方向	柱間寸法
440 －ＯＢ		南北	３間×２間 (5.95m×3.45m)	21.4 ㎡	Ｎ－18°30′－Ｗ	桁行1.55～2.25m 梁行1.55～2.00m
475 －ＯＢ		南北	５間×２間 (7.85m×4.00m)	31.40 ㎡	Ｎ－26°30′－Ｗ	桁行1.50～1.65m 梁行1.90～2.08m
658 －ＯＢ		南北	５間×２間 (6.10m×3.90m)	25.88 ㎡	Ｎ－22°30′－Ｗ	桁行1.20～2.60m 梁行1.75～2.20m
172 －ＯＢ		東西	３間×２間 (6.10m×3.75m)	23.25 ㎡	Ｎ－78°45′－Ｅ	桁行2.0 ～2.15m 梁行1.75～1.9 m
162 －ＯＢ		東西	３間×２間 (6.35m×3.75m)	23.31 ㎡	Ｎ－71°30′－Ｅ	桁行1.80～1.90m 梁行2.00～2.17m
106 －ＯＢ	総柱	不明	３間×３間 (5.85m×6.10m)	36.12 ㎡	Ｎ－21°00′－Ｗ	南北1.75～2.05m 東西1.90～2.05m
40 －ＯＢ	総柱	不明	３間以上×３間 (6.25m×5.45m以上)	不明	Ｎ－20°00′－Ｗ	南北1.60～2.00m 東西2.00～2.20m
1021－ＯＢ	総柱 廂	不明	２間以上×３間以上 (4.25m×5.45m)	不明	Ｎ－15°30′－Ｗ	南北2.00～2.25m 東西1.20～2.10m
395－ＯＢ	総柱	不明	４間以上×２間以上 (7.00m×3.00m)	不明	Ｎ－26°00′－Ｗ	南北1.55～2.00m 東西1.15～1.90m
175 －ＯＢ		南北	４間×２間 (6.10m×3.05m)	18.60 ㎡	Ｎ－21°00′－Ｗ	桁行1.10～1.70m 梁行1.00～1.90m

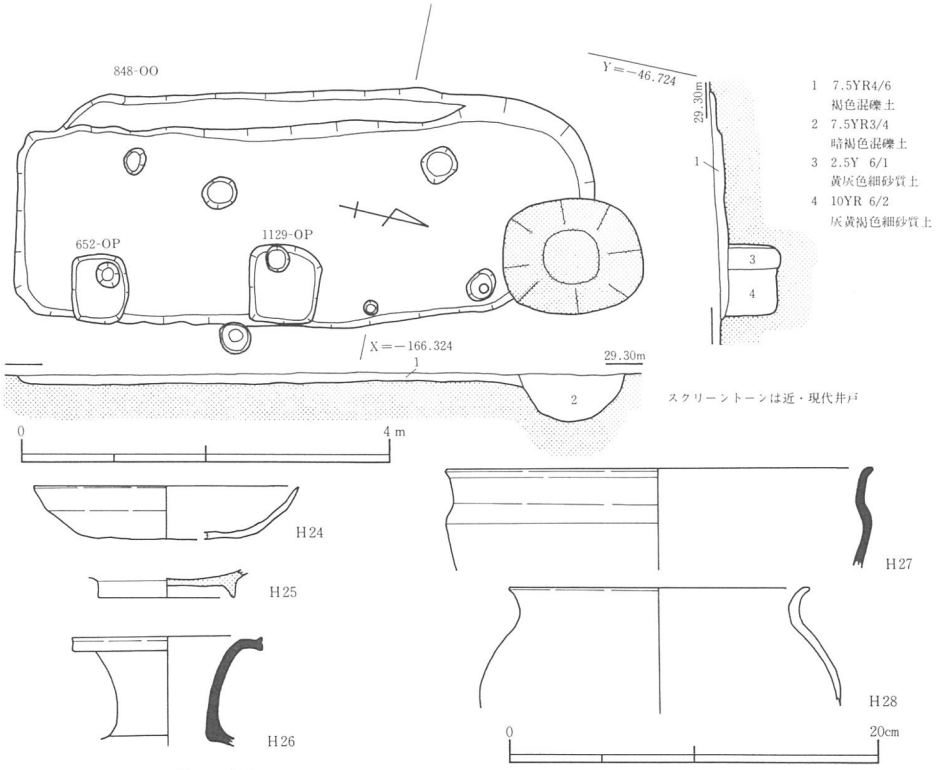


第261図　平安時代Ⅱ区柱穴出土遺物（1/4）

土坑

848－ＯＯ（第245・262図参照）

掘立柱建物以外の遺構は調査区北寄りで土坑１基を検出した。K18ＦＴ周辺に位置するもので、長さ6.28m、幅2.6m、深さ0.12～0.15mの隅円の長方形を呈する土坑である。西側は二段に掘られている。長辺はＮ－20°－Ｗを示し、同時期の掘立柱建物と同一の主軸方位をとる。埋土は7.5ＹＲ4/6褐色混礫土である。検出レベルはＴ.Ｐ.＋27.15m前後、土坑底のレベルはＴ.Ｐ.＋27.00m前後である。土坑の北端は近現代の井戸によって壊されている。土坑底からは630－ＯＢの柱穴652－ＯＰ・1129－ＯＰが検出された。図示した遺物は土師器 杯H24・甕H28、黒色土器 椀H25・須恵器 壺H26・鉢H27である。



第262図　848－ＯＯ平面・断面図（1/80），出土遺物（1/4）

包含層出土遺物

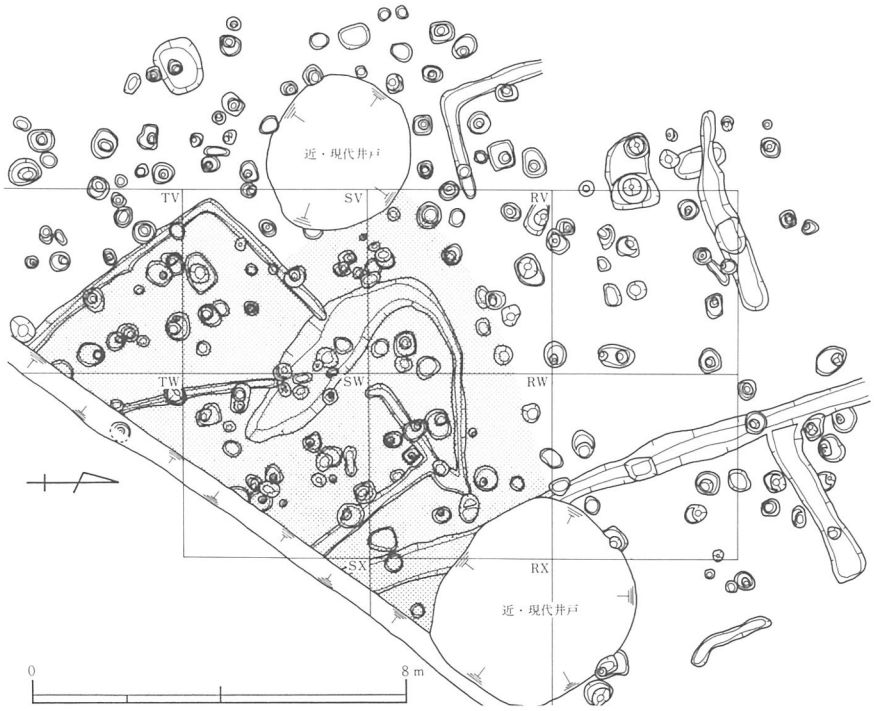
平安時代の遺物は、遺構の分布と同じく丘陵斜面（II区）に集中しており、包含層からのものが大半である。特に調査区南端の堆積層にまとまった量の遺物が出土した。

ここではまず、南端の堆積層（568－ＯＸ）について、その他包含層の遺物と項目を分けて報告することとする。また、Ⅳ区においては平安時代の遺物が若干出土しており項目を設けた。

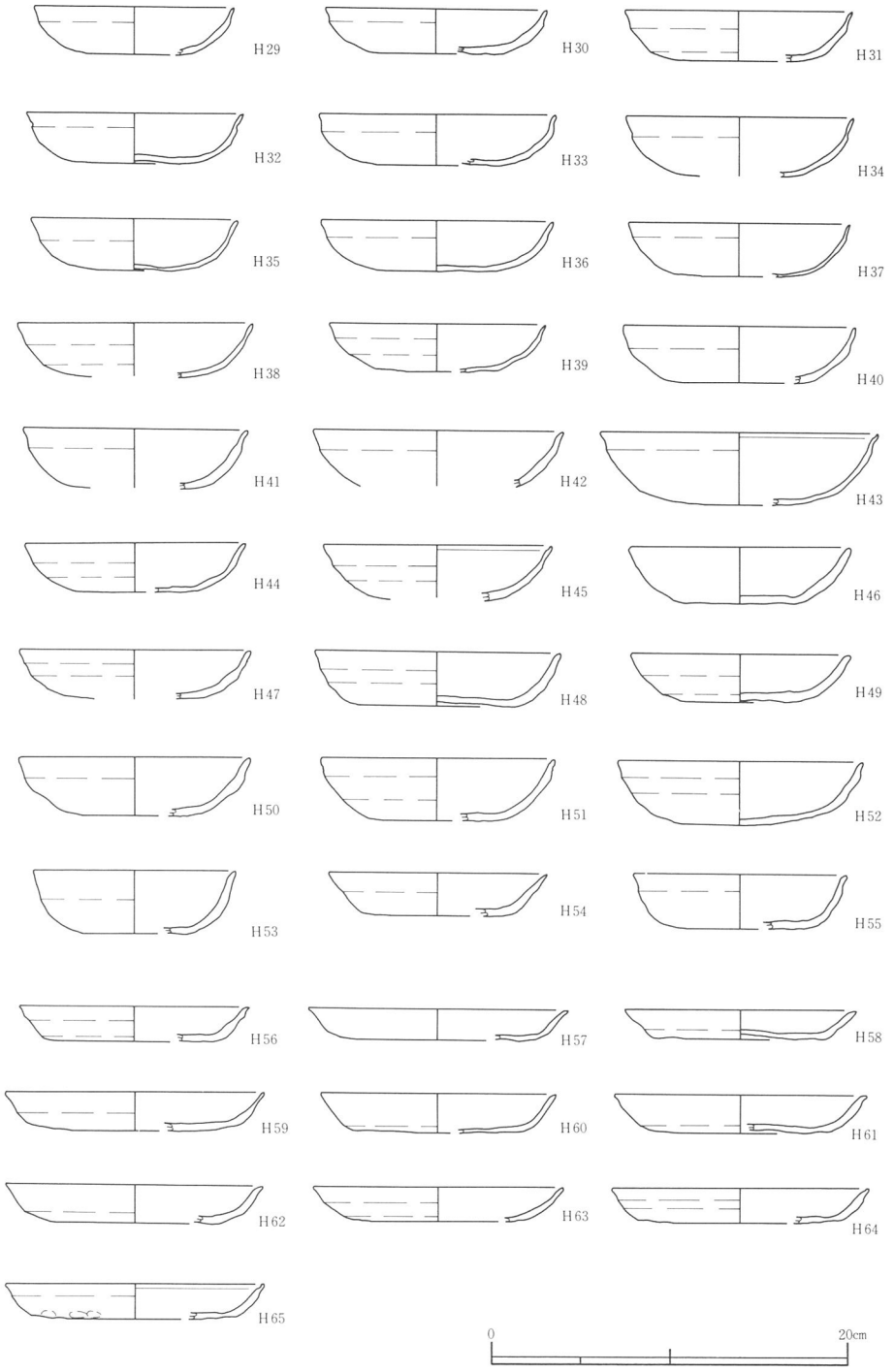
568－ＯＸ（第263・264・265図、124・125図版、第12表参照）

Ｋ18ＳＶ周辺に広がる５ＹＲ3/4暗赤褐色土の堆積層である。掘立柱建物群周辺に堆積した土砂で、南側の掘立柱建物群の包含層に伴う遺物と考えられる。堆積土は、上面を後世の水田造成で削平されたため、さらに広がっていたと思われるが、遺構図のスクリーントーンの部分が遺存していた。

検出部分は面積約50㎡に渡って広がり、最大15㎝の厚さで堆積する。建物の40－ＯＢ・



第263図　568－ＯＸ堆積範囲（1/160）



第264図　568－ＯＸ出土遺物１（1/4）

1021－ＯＢ・106－ＯＢの範囲まで検出されるもので、南側は調査範囲外のために広がりは不明である。東側は近現代の井戸のため破壊を受けているが、井戸より東に広がらないためＫ18ＲＸ周辺までと考えられる。堆積土には炭・焼土を多く含んでいた。

ここから検出された遺物は、土師器 皿・甕、黒色土器 椀、須恵器 椀・瓶子・甕、瀬戸産の灰釉陶器 椀・皿・壺などがある。

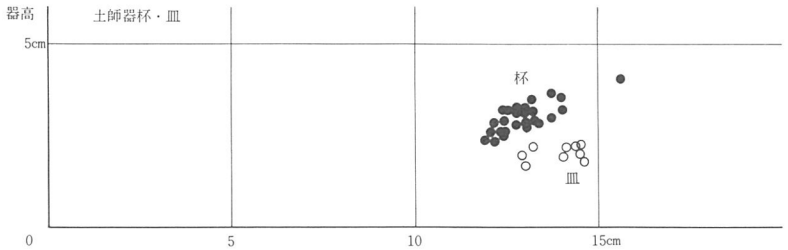
この遺物群は水田耕作土・床土を除去した直下の取り上げ遺物を全て載せたものである。このため、遺構内の一括遺物と異なり時期の混りがある可能性がある。しかし、建物の継続年代との相関関係から別に掲載した。

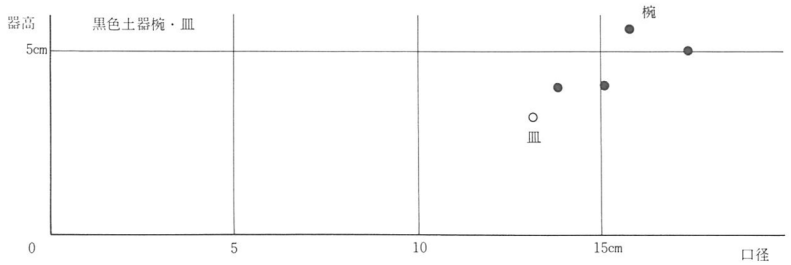
土師器は杯・皿が中心である。Ｈ29～Ｈ65の37個体を実測した。

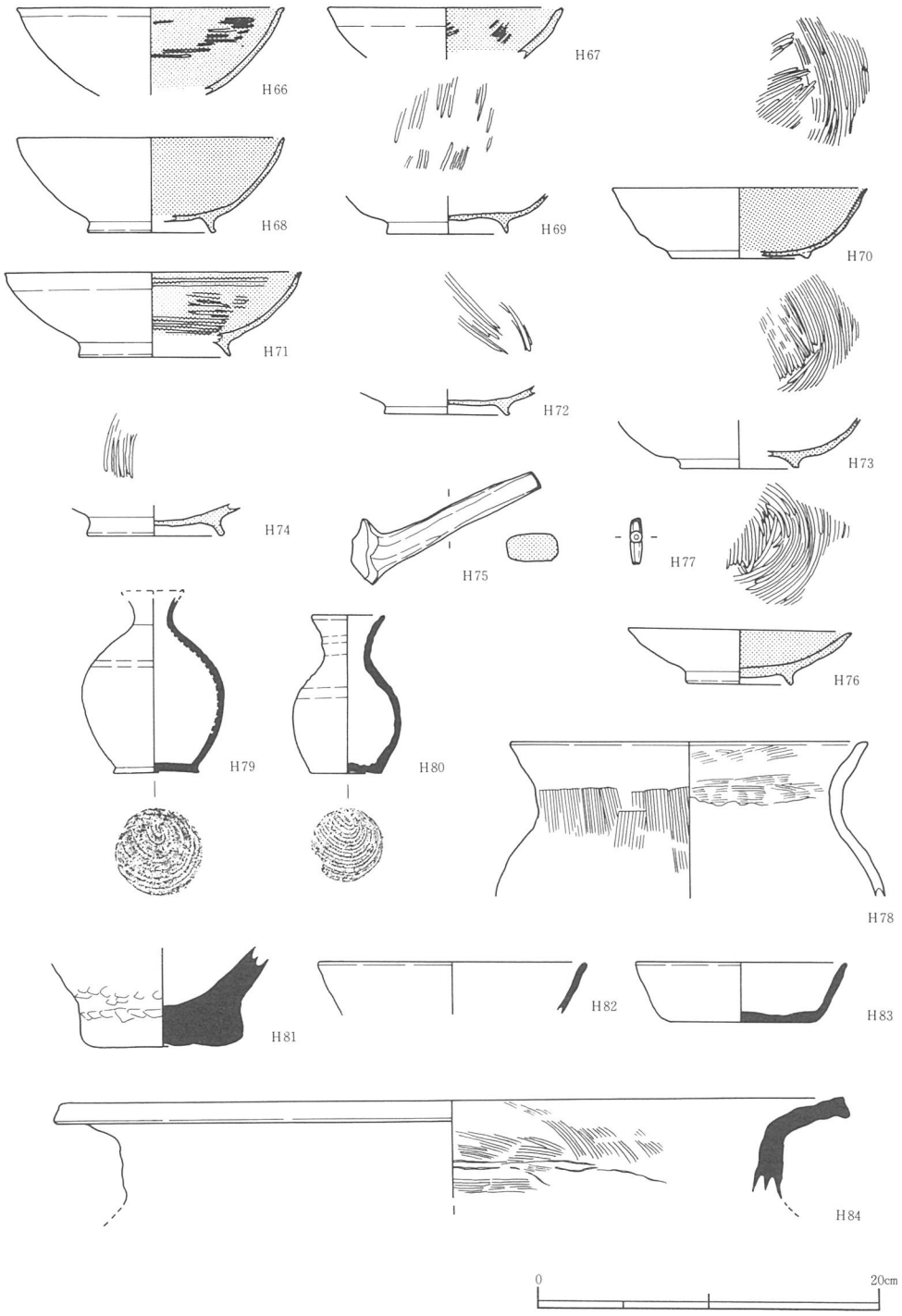
杯はＨ29～Ｈ55の27個体である。杯は全体に内面をヨコナデ、外面は体部をヨコナデし底部未調整のものである。細かく観察するとさらに次の４つのタイプに分類できる。[註2]

器壁が薄く、口縁部を強くヨコナデするもの（Ａ）、器壁が薄いが、口縁部はやや軽くヨコナデするもの（Ｂ）、やや器壁が厚いもの（Ｃ）、底部と体部の境が明瞭で体部が直線的に立ち上がるもの（Ｄ）がある。

第12表　568－ＯＸ土師器・黒色土器法量表







第265図　568－ＯＸ出土遺物２（1/4）

AはH29～H34である。口径11.2～13.3㎝、器高2.6～3.3㎝である。

BはH35～H40・H43である。口径11.6～15.6㎝、器高2.7～4.0㎝である。

CはH41・H42・H44～H52である。口径12.3～14.0㎝、器高2.6～3.6㎝である。

DはH53～H55である。口径11.4～12.2㎝、器高2.4～3.5㎝である。

皿はH56～H65である。口径12.9～14.6㎝、器高1.6～3.0㎝である。

第13表は今回出土した土師器の杯・皿の口径と器高をグラフにしたものである。

杯は口径12～14㎝、器高2.3～3.5㎝に集中する傾向が見られ、まとまった法量を持っていることが判った。また皿も口径13～14.5㎝、器高２～３㎝に集中し明らかに杯とは別物であることが判る。杯・皿とも法量からは１器種と考えられる。

土錘H77は長さ2.6㎝、幅0.6㎝、重さ1.5ｇである。甕H78は口径21.0㎝である。

黒色土器は、椀H66～H74・皿H76・把手H75がある。椀は口径13.8～17.4㎝、器高4.1～5.6㎝、高台径7.1～10.6㎝である。内黒（Ａ類）のもので内面は細かくミガキを施している。外面はヨコナデを施すが観察できない。口縁端部はやや強くヨコナデし、高台は「ハ」の字に開くものが多い。

破片が多く全体の器形を復元できるものは少ないが、おおむね口径が大きく器高の低い器形になると思われる。

皿H76は口径13.1㎝である。やはり内面に密にミガキをかけるもので内黒タイプのものである。器壁は椀に比べやや厚手のものでロ縁端部は尖っている。

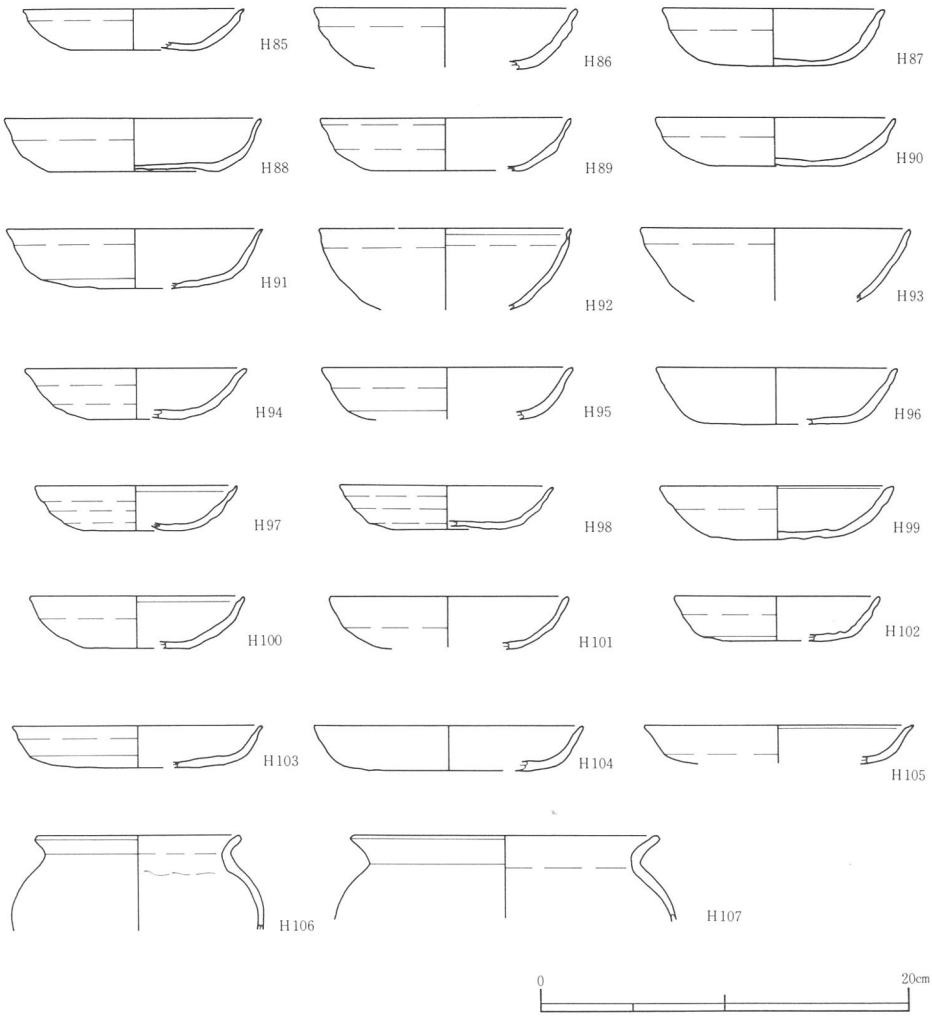
H75は埚の把手である。

須恵器は瓶子H79・H80、甕84がある。瓶子は底部回転糸切りのもので、H80は口径4.3㎝、器高9.3㎝である。どちらも内外面に水挽きによる凹凸が観察される。甕は口径46.0㎝で、頸部中程で「く」の字に強く曲がるものである。

この他、時期は奈良時代のもので須恵器 擂鉢H81、杯ＡH82・H83などがある。擂鉢は底径9.6㎝、杯Ａは口径16.4・12.6㎝である。

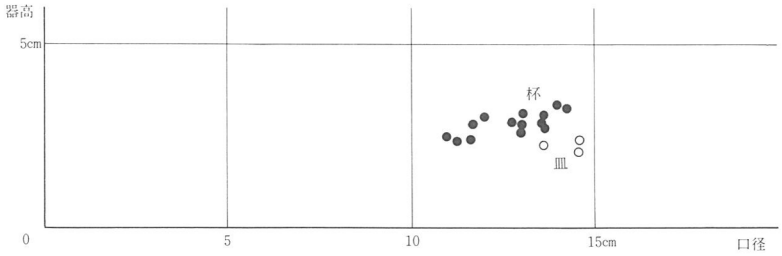
その他のII区包含層土器

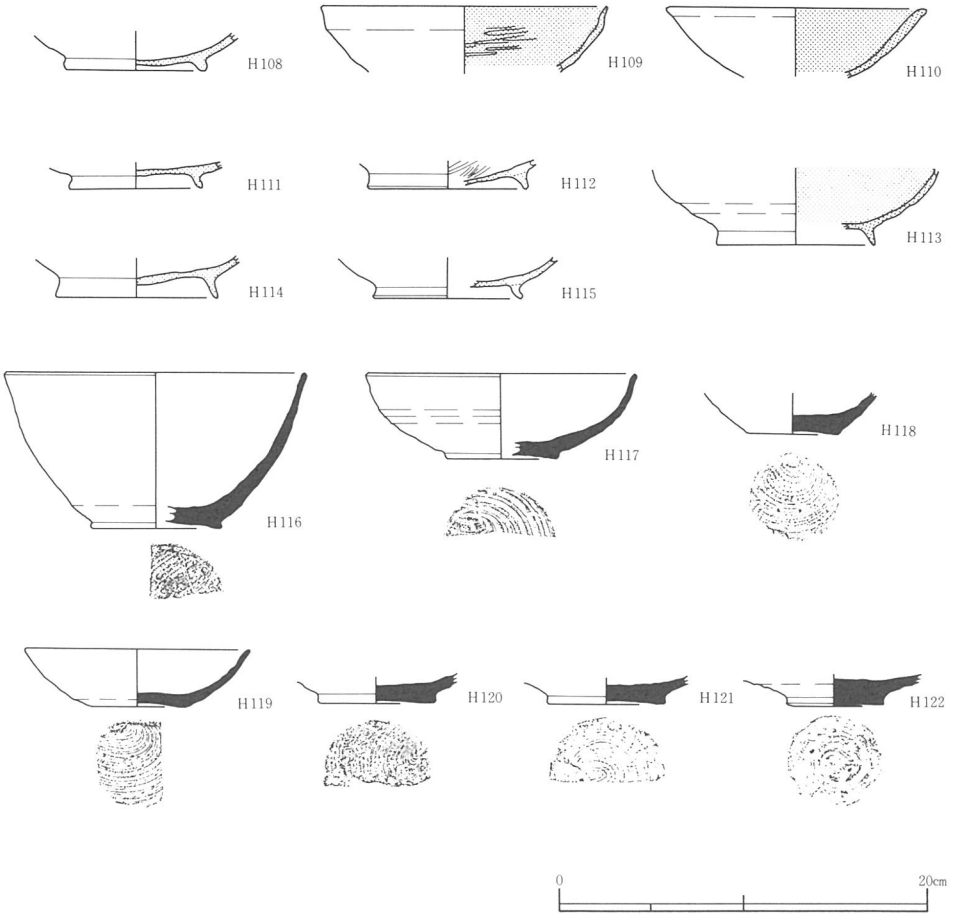
その他の土器も568－ＯＸとほぼ同じ器種と時期幅のものが出土している。遺物には土師器 杯・椀、黒色土器 椀・皿・把手、須恵器 椀・硯、軒瓦を含む瓦、その他が出土した。遺物の大半は568－ＯＸを除くと、調査区北寄りの掘立柱建物の集中する地区のものである。



第266図　平安時代Ⅱ区包含層出土遺物１（1/4）

第13表　Ⅱ区包含層平安時代土師器法量表





第267図　平安時代Ⅱ区包含層出土遺物２（1/4）

土師器（第266図、図版125参照）

土師器は杯・皿・甕が出土した。杯はH85～H91・H94～H102の16個体である。AはH85～H88の３個体で口径11～14㎝、器高2.3～3.5㎝である。BはH89～H91・H94の４個体で口径12.2～14.5㎝、器高2.7～4.4㎝である。CはH95～H102の８個体で口径11.0～13.6㎝、器高2.5～3.1㎝である。DはH102の１個体で口径11.2㎝、器高2.4㎝である。皿はH103～H105で口径13.6～14.6㎝、器高は2.1～2.4㎝である。

568－ＯＸ同様杯・皿には集中が見られ法量からはこれらのものは１器種と考えられる。

甕はH107・H108の２個体を図化した。口径11.2㎝、16.8㎝である。口縁部は短く球形になるもので、端部は丸く納める。内外面はヨコナデ調整しタタキ痕跡などは観察できなかった。

黒色土器（第266・267図、図版125参照）

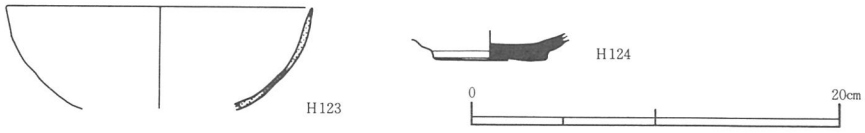
黒色土器は椀H92・H93、H108～H115が出土している。いずれも内黒のもので、内面にミガキを施し、外面はヨコナデ仕上げである。口径14.4～16.0㎝、高台径7.6～8.0㎝で器高の復元できるものはなかった。全体のプロポーションは高台が広く、やや器高の低いものである。口縁部、高台周辺はヨコナデ調整するものである。高台は「ハ」の字に開くものが多く、器壁は３～４㎜程度と総じて薄い。

須恵器（第267図、図版125参照）

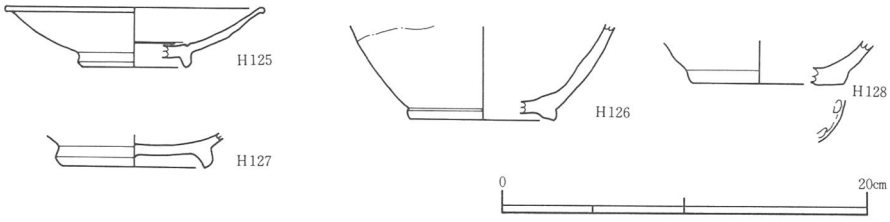
須恵器は椀が出土した。図化したものは、H116～H122およびH133の８個体である。口径14.8～16.2㎝、器高4.6～8.4㎝である。全体の器形が判るものはH116のみで、H116～H122は底部糸切り底のものである。破片が多いため詳細は不明であるが、器形は奈良時代の杯Ａに近いもの、器高の高いものなど形が一定していないようである。高台はいわゆるベタ高台で高いものは見られない。H133は（第276図、126図版参照）高台付の椀である。高台径5.8㎝、外面底部に「犬」の字がヘラ書きされている。

Ⅲ・Ⅳ区包含層（第268図参照）

Ⅲ、Ⅳ区でも黒色土器、底部糸切り底の須恵器 椀などが出土している。その数は限られており、図化できたものはH123・H124の２点である。H123はⅢ区Ｂ出土である。黒色土器の椀で口径16.8㎝である。H124はⅣ区出土である。須恵器 椀の底部片で糸切り底になるものである。



第268図　平安時代Ⅲ・Ⅳ区包含層出土遺物（1/4）



第269図　平安時代包含層出土遺物　陶磁器（1/4）

その他の包含層

ここでは、Ⅰ～Ⅳ区のこの時代の包含層出土遺物でまとめて報告した方が様相などがよく判るものをとりあげて記述した。

陶磁器（第269図、図版124参照）

陶磁器は越州窯 青磁・瀬戸産の灰釉など全部で５点が（包含層とⅡ区64－ＯＰ）出土している。

瀬戸の灰釉は皿H125・H127、及び壷H126がある。青磁H128は中国産の越州窯で青磁碗である。H125・H128はⅡ区、H126・H127はⅣ区のそれぞれ出土である。灰釉皿H125・H127は輪高台になるもので、高台径5.9～8.3㎝である。瀬戸産のもので10世紀代のものと考えられる。H125は内面底部と体部の境に圏線をもつものである。

H128は越州窯 青磁である。椀の底部片の細片で、厚く浅緑色の釉を施すものである。胎土は精良であるが、焼成は他の磁器に比べるとやや甘い。高台周辺はケズリをかけているが、焼き台のトチン痕跡が残る不徹底なものである。越州窯青磁は大阪府内では郡家今城遺跡(高槻市)・郡家川西遺跡（同左）・神並遺跡（東大阪市）・長原遺跡（大阪市）・瓜破遺跡（同左）[註3]など５遺跡で出土が知られている。

その他の遺物（第270図、図版126参照）

1987年度の調査も含めると、この時代も奈良時代同様に少ないが硯の出土が見られた。H129～H132の４点が出土している。H129・H132は二面硯、H130は風字硯、H131は不明である。二面硯H129は先端部片である。「うみ」部分から摺面周囲の縁にかけて残っている。H132も二面硯の先端部分と考えられる。裏面には足の痕跡が残っている。

風字硯H130は硯の左下端部分の破片である。裏面には三角形の足が付き、中程に「大」の字が上下逆向きにヘラ描きされている。H129・H131・H132はⅣ区、H130はⅡ区出土である。

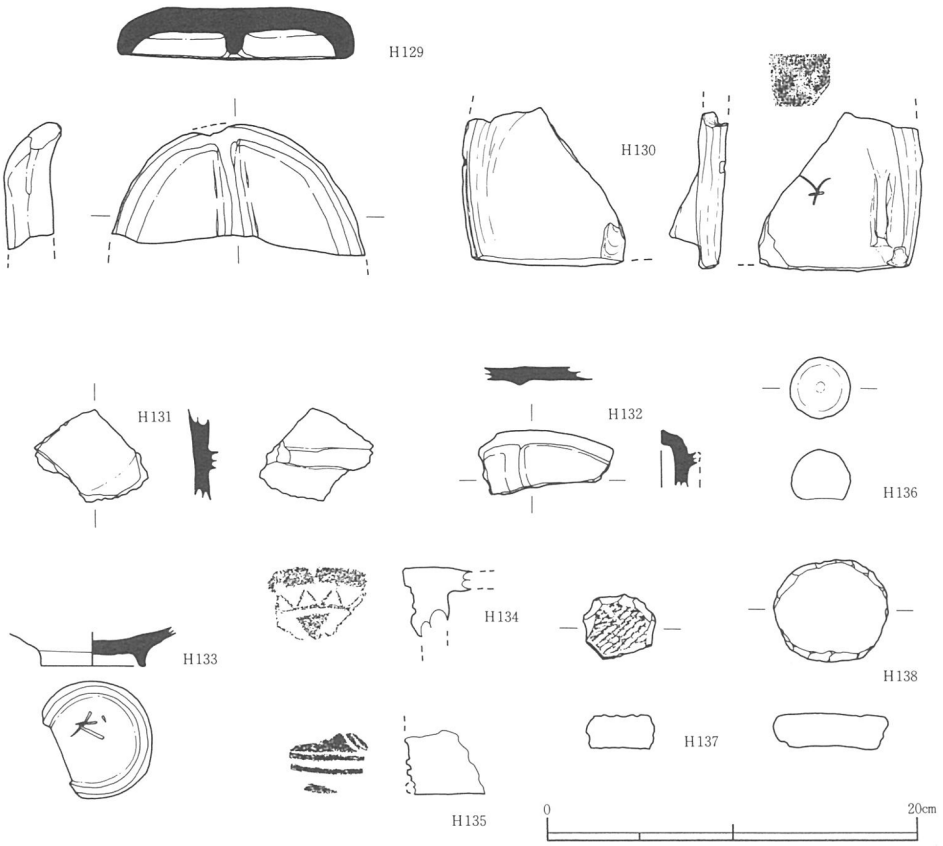
軒丸瓦H134、軒平瓦H135はいずれも細片で文様の全体は不明である。ただし、H134は1887年度調査の出土例にかなりの類例がみられたものである。

面子H137・H138などが出土した。面子の可能性のあるものは何個か見られるが、確実なものを図示した。H136は土師質のもので何かのつまみか把手になると思われる。

H133は須恵器 椀で277頁で報告した。

瓦（第271図、図版127参照）

近現代以外と考えられる瓦はⅡ区包含層に集中して出土した。破片数は122点である。[註4]

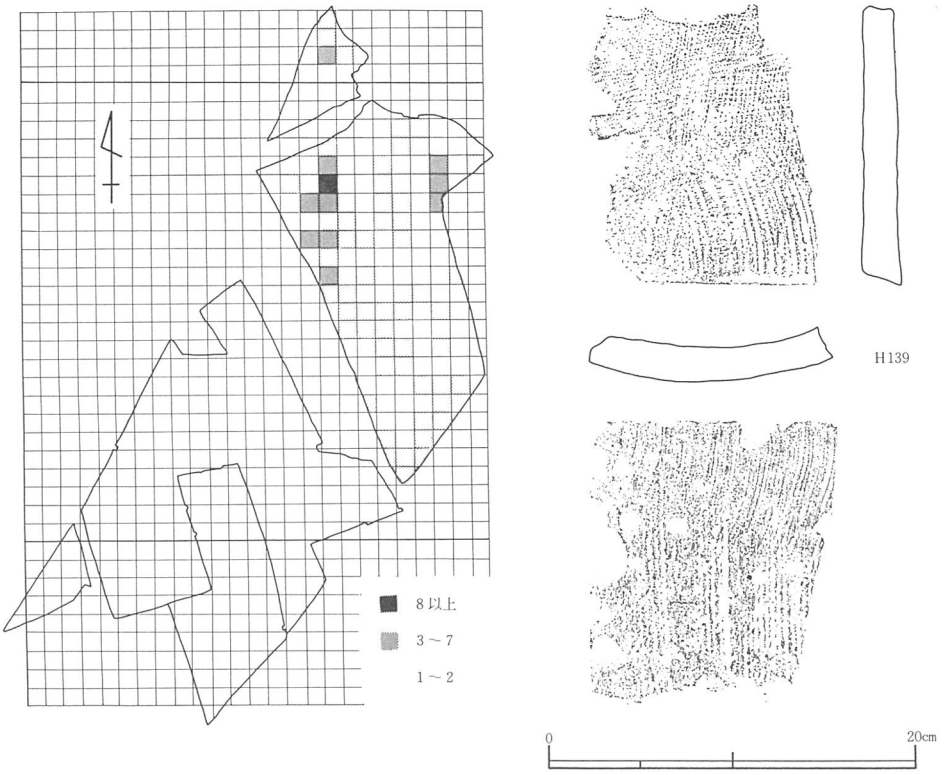


第270図　平安時代包含層出土遺物　その他の遺物（1/4）

この他には、1987年度調査のＢ区で144－ＯＢの根石などに使用されているのがまとまった出土である。第271図にII区の瓦分布状況図を載せた。概ねII区全般にわたって出土していることが判る。

軒瓦は軒丸瓦１点、軒平瓦３点が出土している。平瓦は86点、丸瓦は36点が出土している。丸瓦にはやや小振りなものがある。瓦は破片のみで全体が判るものはなかった。平瓦を観察すると、Ａ：凸面は縄目(2.5本／１㎝)、凹面が布目（５本／１㎝）のもの、Ｂ：（図版127、H140）Ａと同じもので、凸面に離れ砂を使用するもの、Ｃ:(H141)凸面の縄目が消え、離れ砂が付くもの、Ｄ:(H140)凸面、凹面は平滑にナデ調整するものが見られる。

Ａは67点、Ｂは13点・Ｃは５点・Ｄは１点である。Ａには須恵質・生焼けのものがある。図示したH139はＡタイプである。Ｂには瓦質のものが１点登場する。Ｃ・Ｄになると瓦



第271図　包含層瓦分布状況，出土遺物（1/4）

質のものが多くなる。

軒平瓦の年代はＨ４が９～10世紀、Ｈ15が11世紀中頃である。これらの瓦はＡの調整技法と同じであることから、Ａが９～11世紀前半に位置付けられることが判る。従って、数量的に最も多いＡの年代が大庭寺遺跡で瓦が使われた１つの画期と考えられる。そして、軒瓦の文様が丸瓦１種、平瓦２種と限られていることから、いろいろな場所から運ばれたものではなく、特定の時期の建物の瓦が多く散在していることが考えられる。

また、これらの瓦は柱の根石に転用されたり、土砂に混じって廃棄された瓦が出土したもので、調査区全体に散布する。しかし、瓦の出土量を全部合わせても建物の屋根を葺くにはかなり少量である。このためこれらの瓦を葺いた建物は調査区内にあるものではなく付近に存在したと考えるのが妥当である。

Ｂ・Ｃ・Ｄについては今回の報告分では遺構からは出土しておらず、数量も少ない。時期はＡより降るもので、Ｃ・Ｄは中世に降ってよい資料である。

小結

遺構・568－ＯＸや、その他の包含層などから出土した平安時代の遺物は土師器・黒色土器・須恵器・陶磁器・瓦からなり、中でも土師器・黒色土器が大半を占めている。そして、陶磁器が少量含まれ、越州窯青磁が出土したことは注目される。

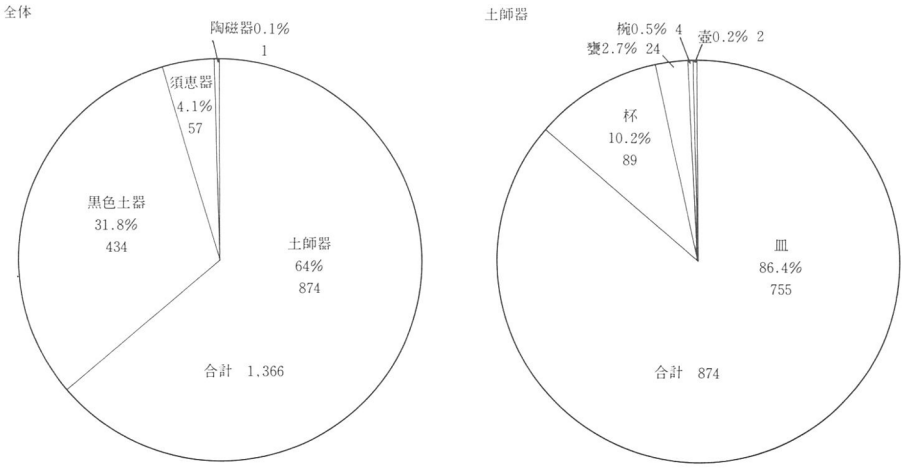
遺物の時期は土師器・黒色土器が出土していることや、瓦器が見られないことから瓦を除いて10世紀代と考えられる。

しかし、55－ＯＰから出土した軒平瓦Ｈ15は11世紀中頃以降で捉えるのが最も妥当である。柱穴の底に据えられたこの瓦は明らかに40－ＯＢの建築前のもので、建物の時期はこれ以後と考えられる。また一方で、平安時代中頃、９～11世紀代の和泉地方では瓦の良好な資料が少なく検討しなければならない問題もあるが、今回はこれらのことから遺物群全体の年代幅を10～11世紀前半までと考えておきたい。

須恵器は、椀・瓶子・甕などが少量出土している。椀はすべて底部が糸切り底になるものである。形は深いものや杯に近いものなどばらつきが見られる。このような底部糸切り底の須恵器 椀は播磨では11世紀頃から焼成されるが、播磨産の同時期のものと比べるとやや雑なつくりである。椀の時期については、この地域で検討する余地があろう。

陶邑で糸切りの椀が登場するのはＶ型式２段階で、陶邑操業の最終末である[註5]。この時期の須恵器は椀の他には、瓶子・甕など極わずかな器種が焼成されているにすぎない。大庭寺遺跡の出土傾向からも陶邑の須恵器生産がこの時期になると減少し、付近の集落にすら

第14表　Ⅱ区包含層平安時代出土遺物構成表



ほとんど影響を及ぼさなくなっていることが指摘できる。

第14表から全体の遺物の構成は土師器・黒色土器が圧倒的であることが判る。土師器は杯・皿が多く、黒色土器は椀が多い。しかもこれらの器種は第13表のように各器種とも法量が近似した範囲に納まっていることが判る。器種も杯・皿・椀など単純なものになっており奈良時代のようなバラエティーは見られない。

なお、土師器は杯・皿が大半を占めるが、第14表では皿が圧倒的である。この数字は杯・皿の区別ができないものの大半を皿にしたための誤差が生じたものである。

註釈及び参考文献

註1　瓦については、上原勇作・駒井正明・近藤康司の各氏から教示を受けた。

註2　鋤柄俊夫　「畿内における古代末から中世の土器－模倣形土器生産の展開－」
「中近世土器の基礎研究Ⅳ」日本中世土器研究会　1988

註3　「第26回　埋蔵文化財研究集会　古代の対外交渉
－古墳時代～平安時代前半の舶載品をめぐって－」埋蔵文化財研究会　1989

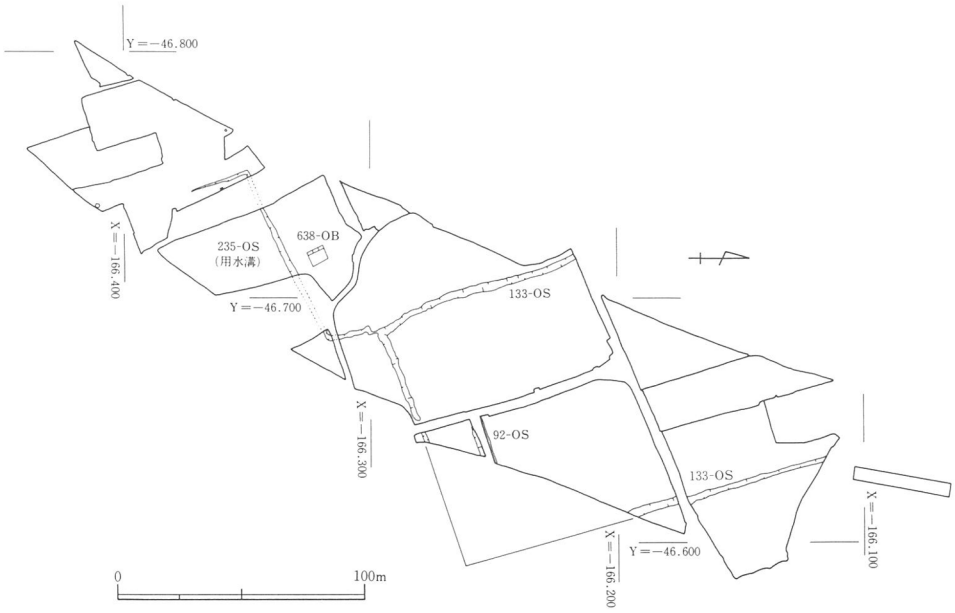
註4　註1に同じ

註5　「陶邑Ⅲ」大阪府文化財調査報告書　第30輯　大阪文化財センター　1980

第６節　平安末～鎌倉時代

1987年度調査地区で検出された、133－ＯＳに囲まれた集落の北部隣接地（Ⅳ区）と南部隣接地（Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅲ区Ａ）、そして、133－ＯＳ南面（Ⅲ区Ｂ）の一部について調査を行なった。遺構はⅠ区～Ⅳ区にかけて広がっており、この時期になって、133－ＯＳ・235－ＯＳが大規模に開削され、建物群が点在する景観が登場したと考えられる。また調査の結果、1987年度調査地区が平安末～鎌倉時代の中心部分であることが再確認された。今回報告する調査区では遺構は多くないが、前回の調査を補足し生活空間を復元するための貴重な資料が得られた。

南部隣接地では、133－ＯＳに配水するために設けられた235－ＯＳとこの周辺に点在する遺構を検出し、北部隣接地では133－ＯＳが調査区を縦走して、範囲が広がることが確認された。Ⅲ区Ａでは133－ＯＳ南面の続きが部分的に検出された。検出された遺構には掘立柱建物１棟・井戸１基・土坑・溝・柱穴などがある。ここでは235－ＯＳ周辺の遺構（Ⅰ区・Ⅱ区）について先ず述べ、次に133－ＯＳ周辺を報告する。



第272図　平安末～鎌倉時代全体図（1/3000）

235－ＯＳ（第273・274図、図版71・72参照）

235－ＯＳは丘陵斜面（第Ｉ区・第II区）から沖積地にかけて流下し更にＣ地区（1987年度調査）の133－ＯＳ南西コーナーに取り付いている溝である。溝底の比高差はT.P.＋27.10～31.60mで、133－ＯＳと235－ＯＳの最大落差は4.5m、検出した溝の総延長は62mである。

この溝は、Ｉ区Ａの斜面では南から北を向いて流れ（K18ＳＯ～K18MM、Ｎ－20°－Ｅ）、調査区北東寄りのところで東にほぼ直角に曲がっている。II区ではK18ＬＱ～K18HWにかけて見つかった。東方向（Ｎ－20°－W）に流下している。さらに、III区Ａでは、溝のコーナーだけがK19ＥＤ～K19ＤＥ地区に検出され、続きは133－ＯＳの堀の南西隅に接続している。後世の削平が激しいためか場所によって溝の規模・形状はかなり異なる。

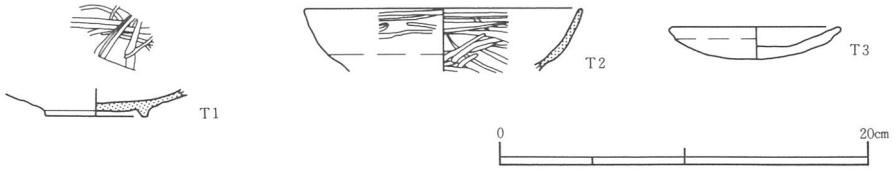
幅は0.3～2.5m以上、深さ0.1～0.5m前後である。235－ＯＳの断面は、Ｕ字形を呈する。埋土は一部で砂を含む箇所が観察された。III区Ａでは235－ＯＳは幅30㎝、深さ18㎝の規模である。ここでは溝の中に側板を入れた痕跡を検出した。（第274図　断面Ｃの土層７）木樋（開渠）が用いられていた可能性が考えられる。

133－ＯＳとこの溝のつながりから考えると、丘陵上の湧水点あるいは溜池から133－ＯＳに引水する用水溝と考えられる。さらに、用水溝を管理するために木樋を通したり、周辺に建物（638－ＯＢ）や井戸（286－ＯW）を設けるなど、かなりの労力が払われていたことが窺えるなど、この溝の重要性が指摘できる。

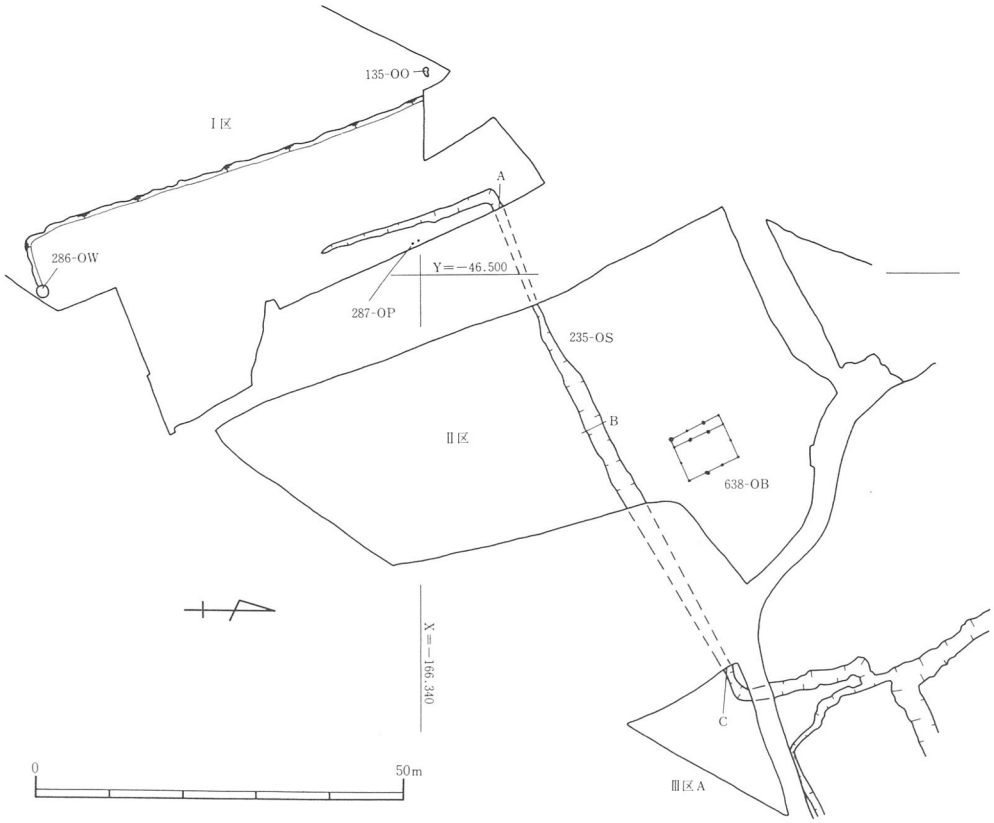
出土遺物は多くなく、Ｉ区Ａで瓦器 椀・羽釜、II区で瓦器 椀などが出土している。時期は12世紀後半～13世紀中頃と考えられ、廃絶は133－ＯＳの埋められた13世紀中頃と同時期と考えられる。図化した遺物は瓦器 椀Ｔ１・Ｔ２である。Ｔ２は口径15.2㎝である。

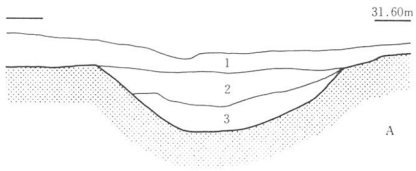
638－ＯＢ（第274・275・276図参照）

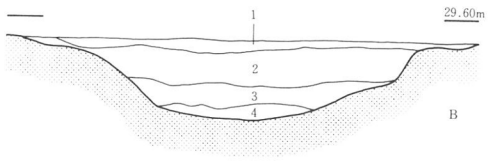
丘陵斜面西端に見つかった建物で、K18ＥＴ周辺に位置する。630－ＯＢ（奈良時代）、658－ＯＢ（平安時代）と切り合うもので、規模は桁行３間×梁行２間で西側に廂が付く（7.36m×4.92m・廂を含むと7.36m×6.2m）構造になる。面積は71.7㎡である。建物

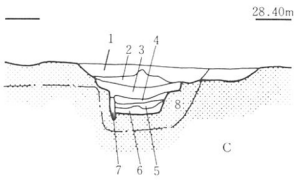


第273図　235－ＯＳ、287－ＯＰ出土遺物（1/4）









Ⓐ
1　2.5Y　4/1　黄灰色土
2　10YR　3/2　黒褐色礫混土
3　10YR　5/1　灰褐色混礫土

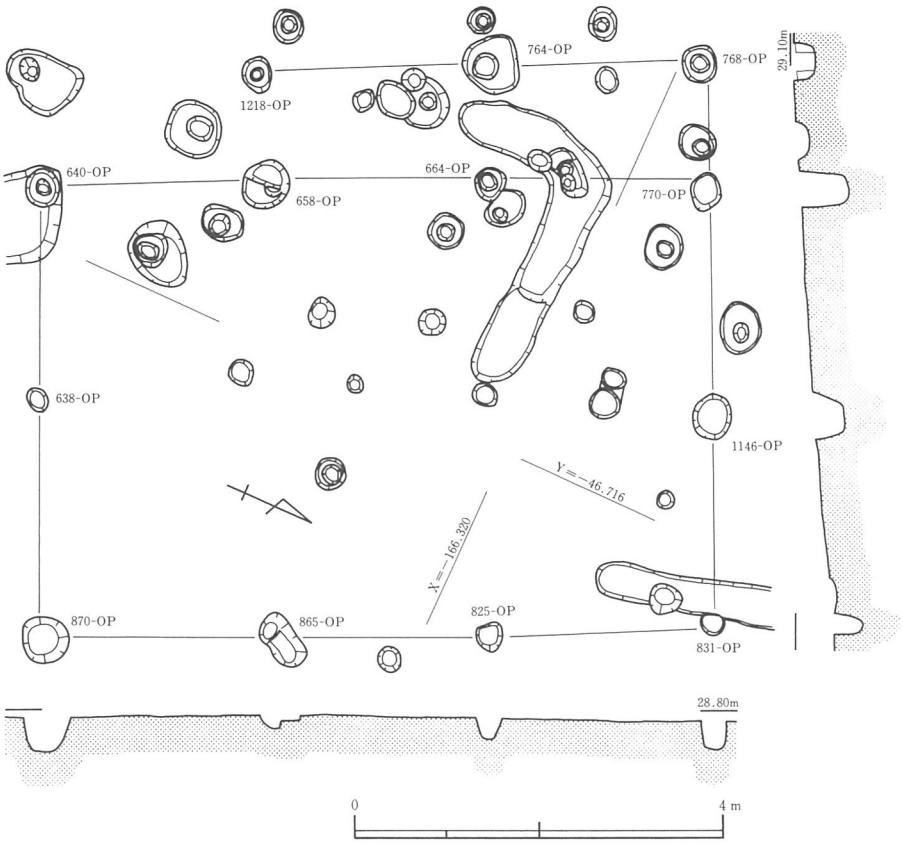
Ⓑ
1　10YR　6/1　褐灰粗砂混シルト
2　2.5Y　6/1　黄灰粗砂混シルト
3　10YR　6/1　褐灰粗砂を多く含んだシルト
4　10YR　6/2　灰黄褐色粗砂

Ⓒ
1　5Y　4/1　灰色礫まじりシルト
2　7.5GY5/1　緑灰色シルト
3　5Y　5/1　灰色シルト
4　5Y　7/1　灰白色細砂まじりシルト
5　5Y　4/1　灰色礫まじりシルト
6　7.5GY5/1　緑灰色シルト
7　5Y　4/1　灰色砂まじりシルト
8　10BG　5/1　青灰色シルト(地山)

Aは東壁、B・Cは西壁である。

0　2m

第274図　235－ＯＳ平面（1/500）・断面（1/40）図

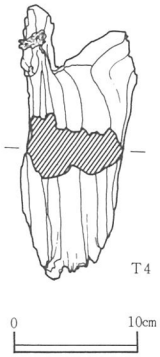


第275図　638－ＯＢ平面・断面図（1/80）

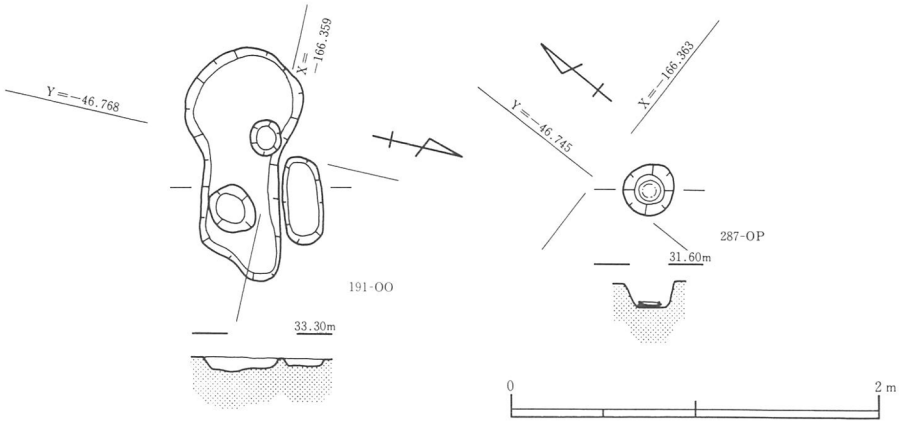
の主軸方位はＮ－25°－Ｗを示し、柱穴の検出レベルはＴ.Ｐ.＋28.70～29.05m、柱穴底のレベルはＴ.Ｐ.＋28.35～28.50mである。検出面は西から東に傾斜する地形である。

柱間寸法は桁行2.2～2.6m、梁行2.3m～2.5mで柱間の間隔はそろっている。

柱穴は直径20～50㎝で円形ないし楕円形が多い。825－ＯＢで柱材Ｔ４が残っていた。南西隅の640－ＯＰは1130－ＯＰ(630－ＯＢの柱穴)の上で柱芯は確認できたが掘方は明確にできなかった。廂の南西隅にあたる柱は641－ＯＰ(630－ＯＢの柱)周辺にあったと思われるが確認できなかった。遺物は瓦器片の他、825－ＯＰから柱材が出土している。



第276図　638－ＯＢ
出土遺物（1/6）



第277図　191－ＯＯ，287－ＯＰ平面・断面図（1/40）

287－ＯＰ（第273・274・277図、図版128参照）

Ｉ区東端に検出されたもので、K18ＰＮに位置する。円形の柱穴で直径20㎝、検出面のレベルはT.P.＋31.50m、柱底のレベルはT.P.＋31.38mであった。柱底には土師器 皿Ｔ３が据えられていた。柱穴の埋土は５ＹR3/6赤褐色土であった。

土師器　皿Ｔ３は内面および外面体部をナデ調整するもので、口径9.4㎝、器高1.5㎝の法量を計る。

135－ＯＯ（第274・277図参照）

Ｉ区北端に検出されたもので、K18ＯＨに位置する。長楕円形の土坑と考えられる。長軸長1.28m、短軸長0.64m、検出面のレベルT.P.＋33.15m、深さ0.1mであった。土坑内から出土した遺物は土師器 皿の細片がある。土壙墓である可能性もある。

286－ＯＷ（第274・278・279図、第15表参照）

丘陵頂上部（Ｉ区）の南端で検出された素掘りの井戸である。K23ＣＰに位置する。平面プランはやや南北に長い楕円形で長軸の長さ1.56m、検出面の最も高い場所でT.P.＋33.0m、井戸底のレベルはT.P.＋31.4m、検出面からの深さは1.6mである。

大庭寺遺跡で検出された平安末～鎌倉時代の井戸はこれまでに６基がある。底に曲物を入れたもの４基、素掘りのもの２基の合計６基である。他のこの時期前後の井戸は全て区画溝の内側か周囲に分布している。今回検出された遺構のみが丘陵上に位置するものである。そして235－ＯＳの延長上に設けられていることから、この地点に当時の水脈があったものと考えられる。

中からは瓦器 椀・皿、土師器 皿などが出土している。遺物は井戸埋土の上面から底ま

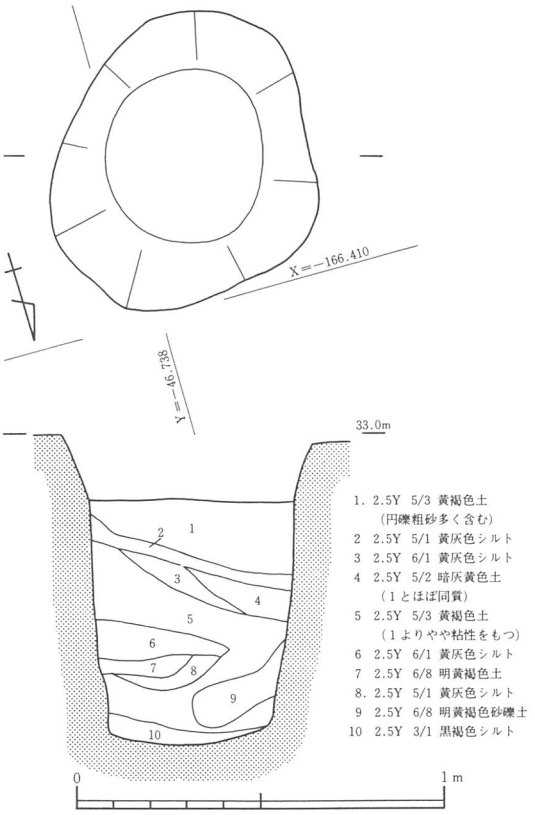
で無造作に含まれていた。しかし、完形品が多いこと、多量に出土していることなどから、堆積土に偶然含まれた遺物ではなく、意図的な要素が強い。井戸を埋め戻す際の祭祀儀礼に使用された可能性が考えられる。

遺物は瓦器が圧倒的に多く、椀11個体・皿６個体が出土した。土師器は皿３個体分が出土した。陶磁器は出土していない。今回の調査ではこの時期のまとまった資料は286－ＯＷを除いては包含層のものが大半である。

土師器 皿はＴ５～Ｔ７の３点を図化した。口径8.8～9.3㎝、器高1.7～1.9㎝である。内面から外面体部にかけてヨコナデを施し、外面底部は未調整である。

瓦器 皿はＴ８～Ｔ12の５点を図示した。口径9.0～9.8㎝、器高2.0～2.2㎝である。内面底部から体部にかけて密にミガキをかけるものや、内面に粗いミガキを施すだけのものなどがある。暗文は輪状の暗文が観察される個体が多い。

瓦器 椀はＴ13～Ｔ23の11点に図示した。口径13.3～15.9㎝、器高4.5～5.2㎝である。内面底部から体部にかけて密にミガキをかけるものや、内面に粗いミガキを施すだけのものなどがある。器面が磨滅し暗文を観察できる個体は少ないが、高台は断面台形のもの、やや開くもの、三角形のものなどがある。口縁部はヨコナデを施す。

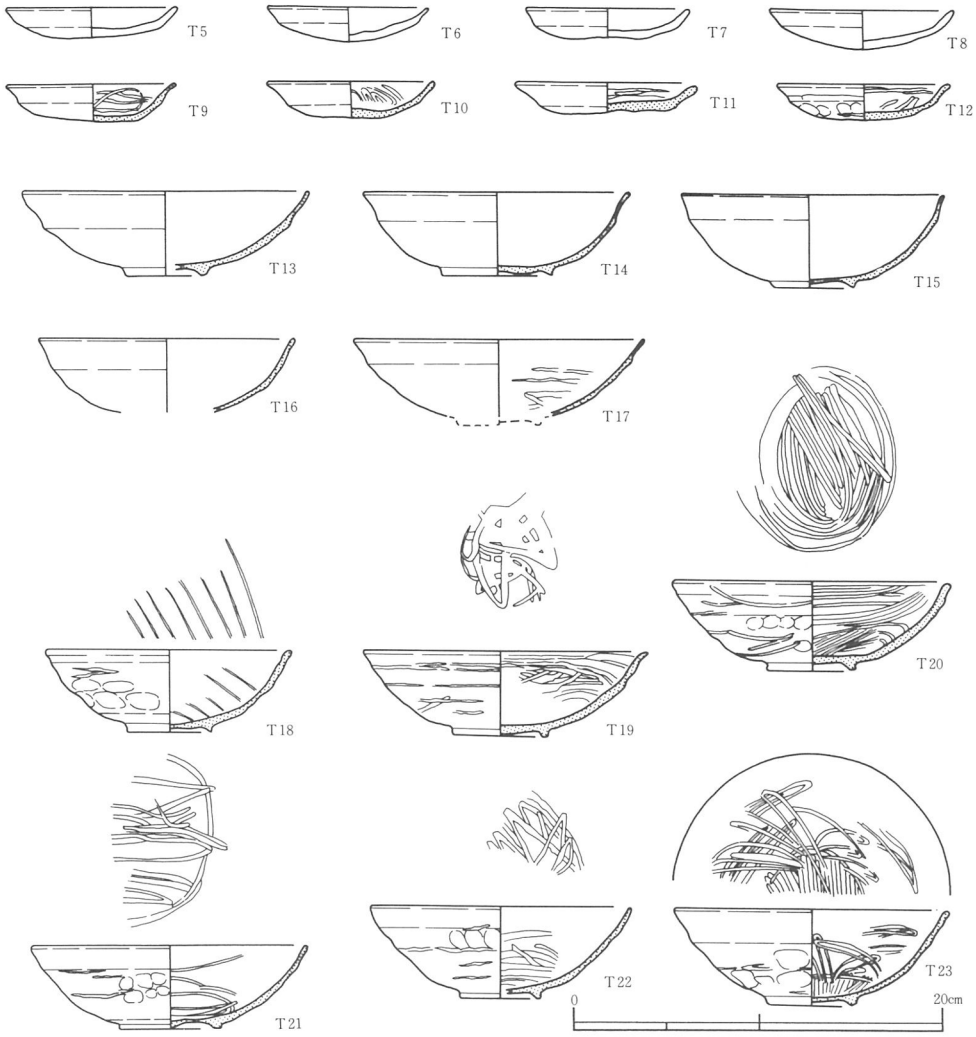


第278図　286－ＯＷ平面・断面図（1/40）

第15表は出土遺物の法量表である。瓦器 椀は口径15㎝、器高５㎝前後のところに集中している。Ｔ18のみがやや離れている。

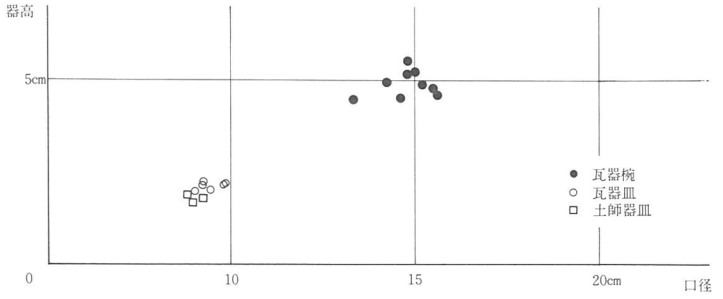
時期はＴ18を除くと暗文・法量などからII形式の中で捉えられるものと思われる。[註1]

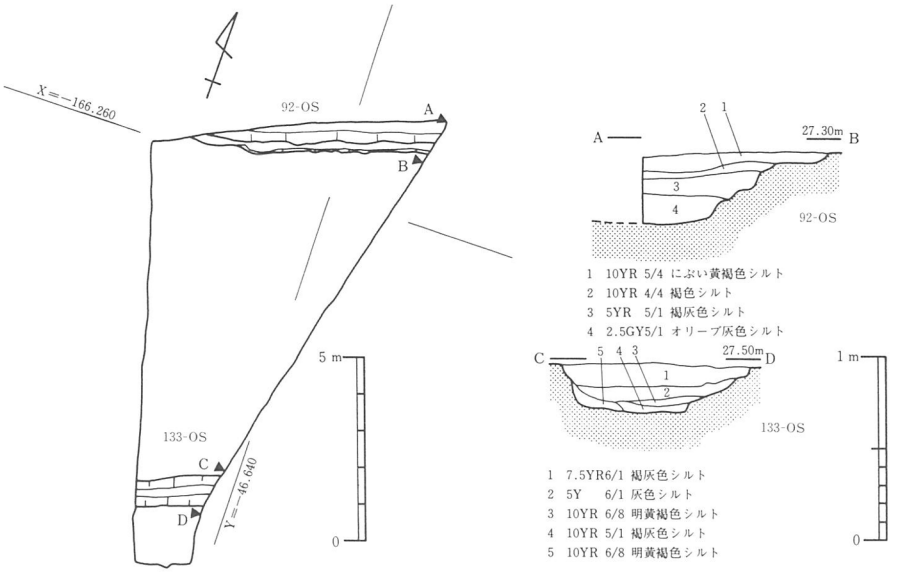
636－ＯＢや286－ＯＷの遺構は235－ＯＳ用水溝の周辺に点在するものでこの溝を管理・運営するための施設に伴うものと考えられる。



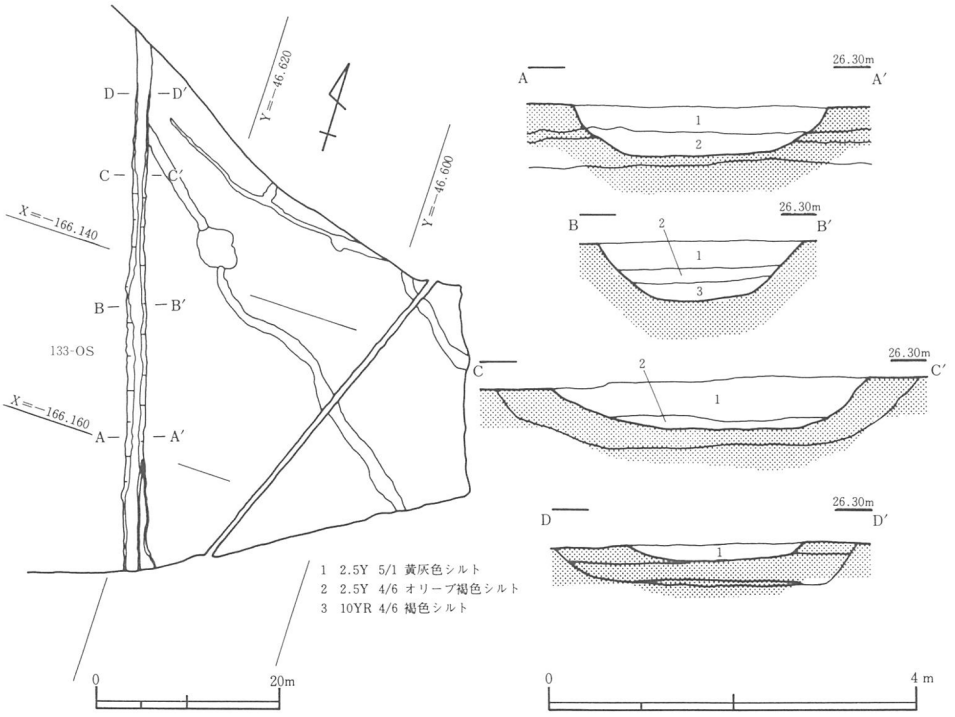
第279図　286－ＯＷ出土遺物（1/4）

第15表　286－ＯＷ瓦器・土師器法量表





第280図　Ⅲ区92・133－ＯＳ平面（1/400）・断面（1/40）図



第281図　Ⅳ区133－ＯＳ平面（1/800）・断面（1/80）図

133－ＯＳ（第280・281図、図版73・74参照）

1987年度の調査で見つかった遺構の東部分と北部分が、それぞれⅢ区Ａ・Ⅳ区Ｂで出土した。今回の検出箇所は部分的なもので前回の調査を補足するものであった。

Ⅲ区Ａ部分は133－ＯＳの南辺にあたる。検出されたのは、長さ４ｍと限られた部分である。K14ＴＮ～K14ＴＤにかけて見つかった。この地点では、幅1.6m、深さ0.3mで、断面はＵ字形を呈する。検出レベルはT.P.＋27.40mである。遺物の出土はなかった。この溝部分の下層には竪穴住居址94－ＯＤが検出された。埋土は４層に分かれ、最下層は褐灰色でやや暗い色調を呈し、有機質である。埋土はシルトである。

Ⅳ区Ｂ部分は133－ＯＳの北東部分にあたる。検出されたのは、長さ58mで、調査区を縦断し、K09ＲＵ～ＥＱにかけて見つかった。幅2.0～3.5m、深さ15～40㎝で、断面はＵ字形を呈する。溝底は南から北にやや浅く検出された。検出レベルはT.P.＋26.10mで、Ⅲ区と比べると１ｍ前後低くなっている。遺物の出土はなかった。

埋土は１～２層でシルト層が溝の大半を埋めていた。溝の深さが浅いのは、実際には後世の水田開発によって削平を受けたためと考えられる。

92－ＯＳ（第280図、第128図版参照）

この133－ＯＳの他、調査区北側に92－ＯＳがある。溝は南半分が検出されたもので、K14ＯＮ～K14ＮＱにかけて見つかった。断面はＵ字形になると思われる。1987年度調査Ａ区ではこの溝の北端（付図３参照）が検出された。幅は復元すると5.0mになる。溝のつながりがどうなるかは不明である。瓦器 椀２個体が出土した。遺物から133－ＯＳと同時期と考えられる。

包含層出土遺物

平安末から鎌倉時代の遺物は今回の調査では、全般に余り多くない。遺物の出土状況からも、この時代の中心はやはり1987年度調査の区画溝の中である。

遺物には土師器 皿・羽釜・把手、瓦器 椀・皿・擂鉢、須恵器 椀・捏鉢、陶磁器、火打ち金などがある。

遺物はⅢ区に多く、Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅳ区はやや少ない傾向がある。本項では、Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区・陶磁器の順に包含層遺物について報告する。

Ⅰ区包含層出土遺物（第282図参照）

３点を図化した。Ｔ24は土師器 皿、Ｔ25は瓦器 椀、Ｔ26は土師器 羽釜である。土師器 皿は、口径9.8㎝、器高1.85㎝で、体部下位にヨコナデによる段を持つもので底部は未

調整である。瓦器 椀は、口径16.2㎝、器高4.0㎝で、内面底部に格子状暗文を施す。やや器高の低い個体であるが歪みが大きいものである。

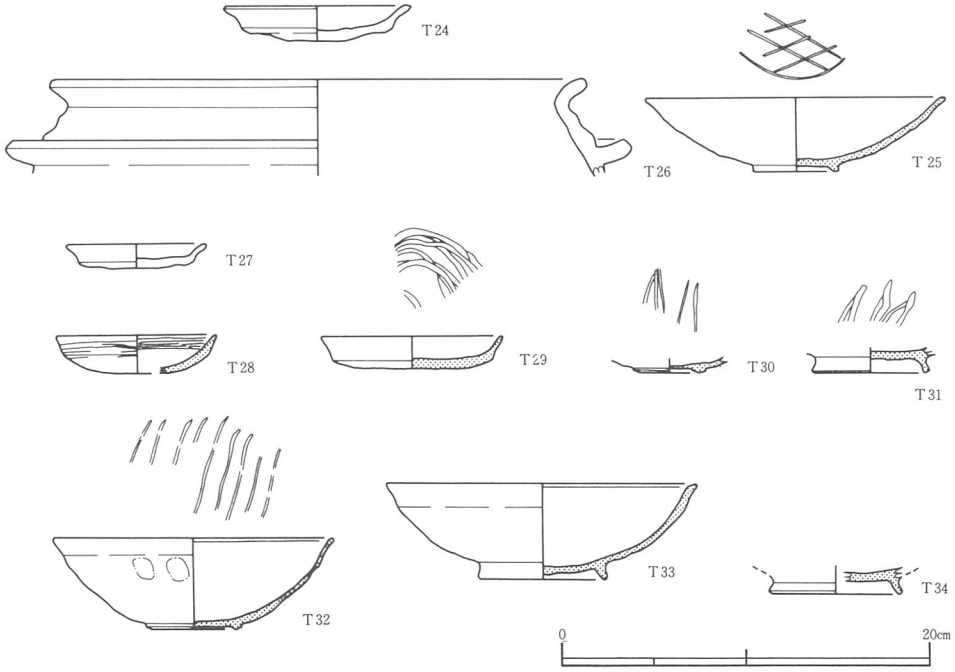
羽釜は、口径29.3㎝である。口縁部が外方に向け「く」の字に曲がるものである。

II区包含層出土遺物（第282・283図、図版128・129、第16表参照）

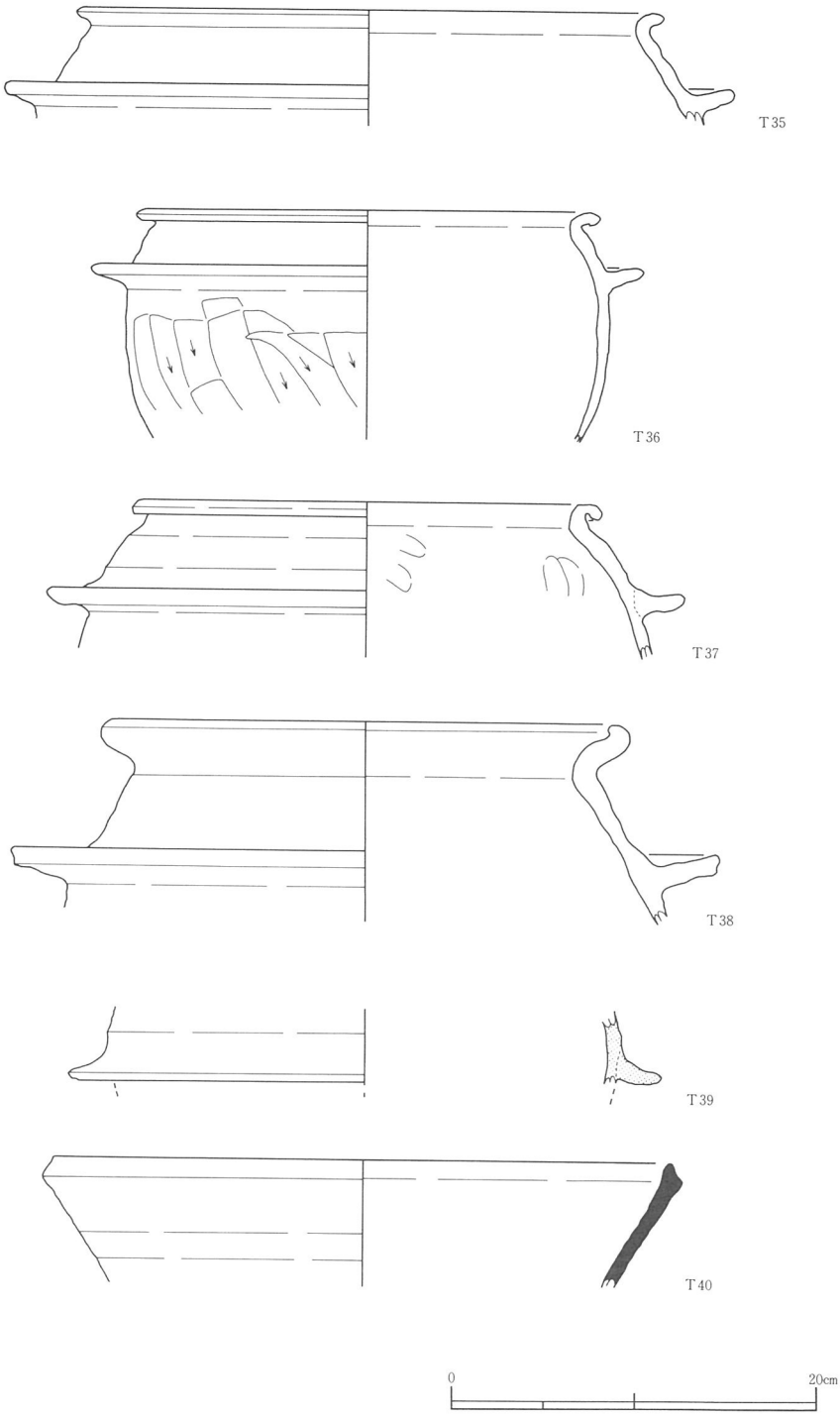
II区では土師器 皿・羽釜、須恵器 皿・椀、瓦器 羽釜、須恵器 片口鉢などが出土している。

土師器 皿T27は口径7.6㎝、器高1.35㎝である。瓦器 皿T28・T29は口径8.6・9.8㎝、器高2.1・1.8㎝である。椀はT30～T34の5個体を図化した。高台はやや崩れた低い台形のものから「ハ」の字に開くものまである。破片が多いため内面の調整が観察できるものは少ないが、T30・T31で櫛状、T32で平行暗文を施している他は、内外面のミガキを観察できるものが数点ある程度である。口径15.2～16.8㎝、器高4.9～5.2㎝である。

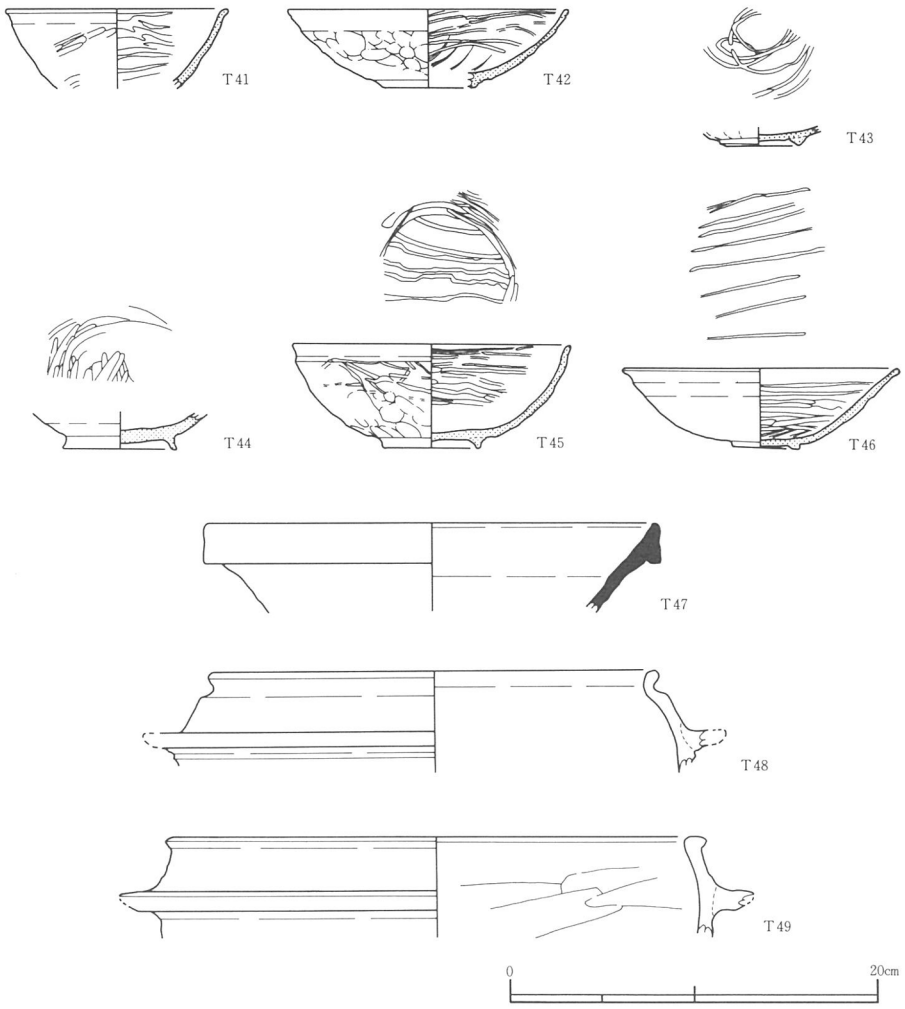
羽釜は口径25.4～32.0㎝である。T38は口縁部を「く」の字に曲げた後、さらに上方に屈曲させている。T36・T37はカーブしながら内側に曲がる口縁部を先端で外方に玉縁に近くなるまで折り曲げたものである。T36は外面体部を縦方向にヘラケズリ調整している。T35では口縁部先端でこの屈曲が、「く」の字状になる程度である。



第282図　平安末～鎌倉時代Ⅰ・II区包含層出土遺物1（1/4）



第283図　平安末～鎌倉時代Ⅰ・Ⅱ区包含層出土遺物２（1/4）



第284図　平安末～鎌倉時代Ⅲ区包含層出土遺物（1/4）

T39は瓦質のもので鍔周辺の破片である。

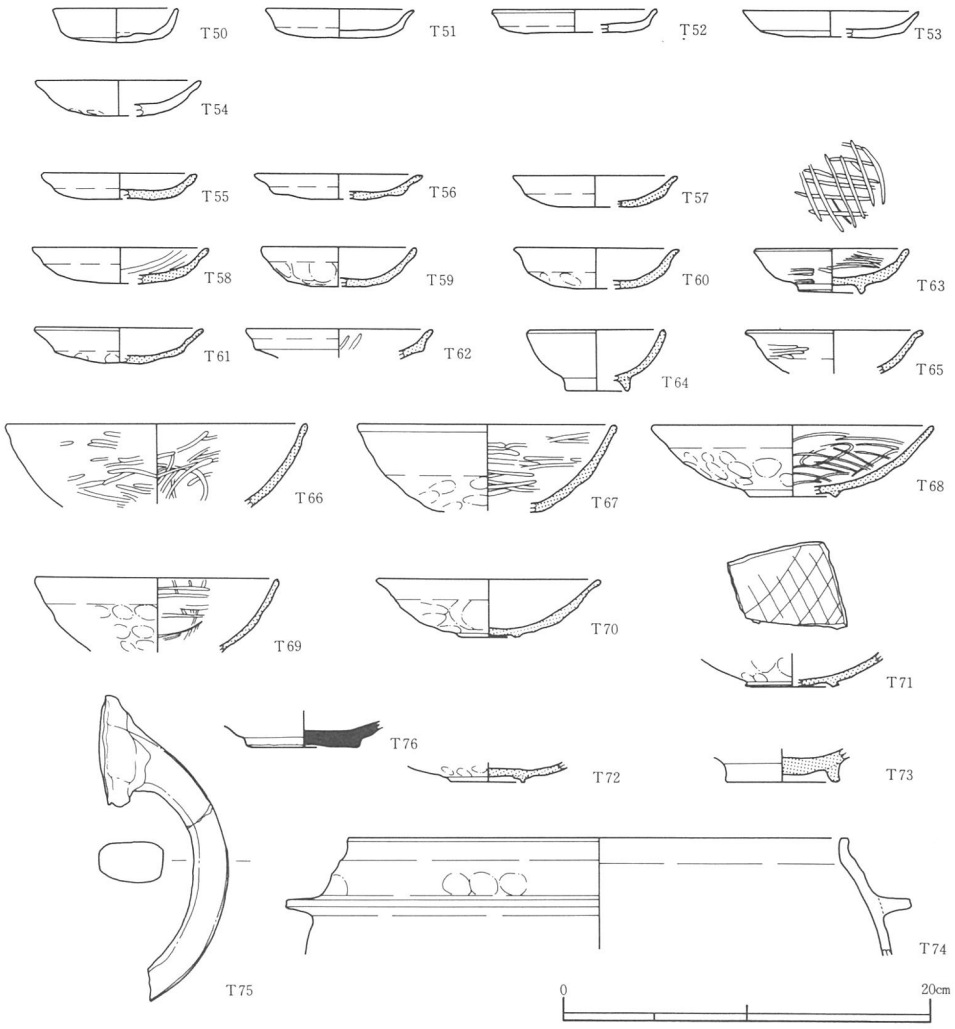
須恵器 片口鉢はT40の1個体を図化した。口径35.8㎝で口縁は断面三角形を呈する。

Ⅲ区包含層出土遺物（第284図、図版129参照）

比較的多く遺物が出土した地区である。しかし、包含層から出土した土器が大半であり、調査面積も狭いことから図化できる遺物は限られていた。

図化したものは、土師器 羽釜、瓦器 椀、須恵器 片口鉢の9点である。

瓦器は椀T41～T46の6点を図化した。口径12.1～15.2㎝、器高4.2～5.5㎝である。破片が多く図化できるものはわずかであった。内面はミガキを底部から体部にかけてやや粗

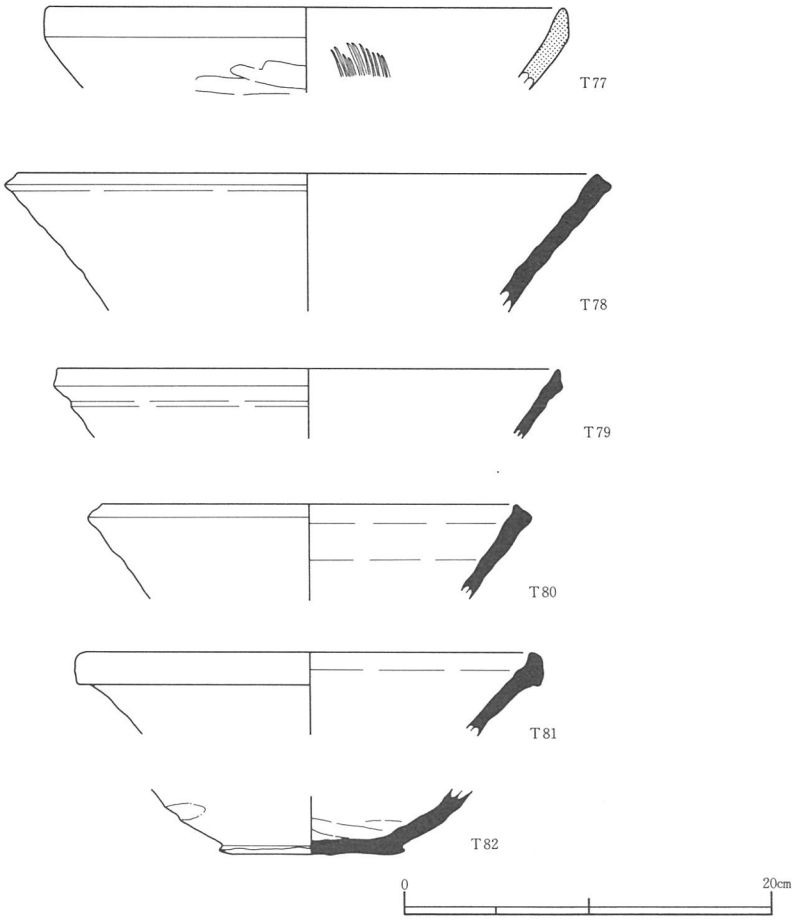


第285図　平安末～鎌倉時代Ⅳ区包含層出土遺物１（1/4）

く施している。外面についてもミガキを口縁部から体部の一部にかけて粗く施している。暗文は平行ないし輪状のものが観察できる。高台は三角形のものから低い台形のものまで様々である。口縁部は丸く納めるものが大半である。

須恵器　片口鉢Ｔ47は口径24.4㎝である。口縁断面は肥厚し、縁帯が下方に垂下するもので、時期は13世紀の後半頃と考えられる。

土師器　羽釜Ｔ48・Ｔ49は口径24.5～29.3㎝である。どちらも口縁部先端が小さな玉縁になるものである。しかし、Ⅱ区包含層の個体のように鍔から口縁部にかけて長く立ち上がるものはなく短い個体が多い。



第286図　平安末～鎌倉時代Ⅳ区包含層出土遺物２（1/4）

Ⅳ区包含層出土遺物（第285・286・287・288図、図版129・130・131参照）

Ⅳ区では調査面積のわりには図化できる遺物は多くなかった。図化した遺物には土師器 皿・羽釜・把手、瓦器 皿・椀・片口鉢、須恵器 片口鉢、そして火打金などがある。

土師器 皿はＴ50～Ｔ54の５個体を図化した。口径6.9～9.6㎝、器高1.3～1.9㎝である。Ｔ50は体部と底部の境が明瞭で体部が直線的に立ち上がるものである。Ｔ51～Ｔ53は体部の下部にヨコナデによる段を残すものである。Ｔ54は体部が外方に向けて広がるもので口縁部周辺をヨコナデするが、調整の境に段などは付かない。底部は全て未調整で、糸切りになるものはない。羽釜Ｔ74は口径27.1㎝で、内側にカーブしながら続く体部から上方に向けて立ち上がる口縁部を持つ。Ｔ75は把手である。残存長16.6㎝であることから大型のものに取り付くものと考えられる。

瓦器 皿はT55～T63の9個体を実測した。口径8.3～10.0㎝、器高1.3～2.1㎝である。T58は内面にミガキをかけている。この他の個体は、内外面はヨコナデを施しているがミガキは観察できない。ヨコナデの強いT56・T57は体部に段を持つ。底部は未調整で指頭痕跡が観察できる。T62は口径10.0㎝で、口縁部に縁帯を持ち、内面にはミガキが観察できた。鳴上遺跡などで少量出土している器種である。

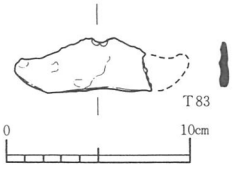
瓦器 椀はT64～T65の小椀になるものと、T66～T73の椀がある。小椀は口径7.6～11.9㎝、器高2.4～3.3㎝で、椀は口径12.2～16.4㎝、器高3.1～4.7㎝である。T63は、内面底部に格子状暗文、内面体部と外面にはミガキが観察できた。T64は内外面にミガキは見られない。T65では外面にミガキを観察できた。

椀は内面に粗いミガキ、外面は口縁部周辺を中心として間隔の広い雑なミガキを入れるものが多い。暗文はT71で格子状暗文が観察できた。外面口縁部にはヨコナデを施すが、その他は高台周辺以外は未調整で指頭痕跡が明瞭に残るものである。高台は図化したものには、輪状のもの（T70～T72）、やや外方に開くT73などがあるが、総じて台形ないし輪状のものが多い。T77は瓦質の擂鉢である。口径28.3㎝で内面に7本単位のハケメを入れる。須恵器 鉢T78～T81は口径24.0～31.4㎝である。口縁部がT78のように方形のものから、T81のように肥厚するものまでがある。しかし、口縁部が垂下するものは見られない。T81は底部片で、底部は未調整である。T76は椀である。

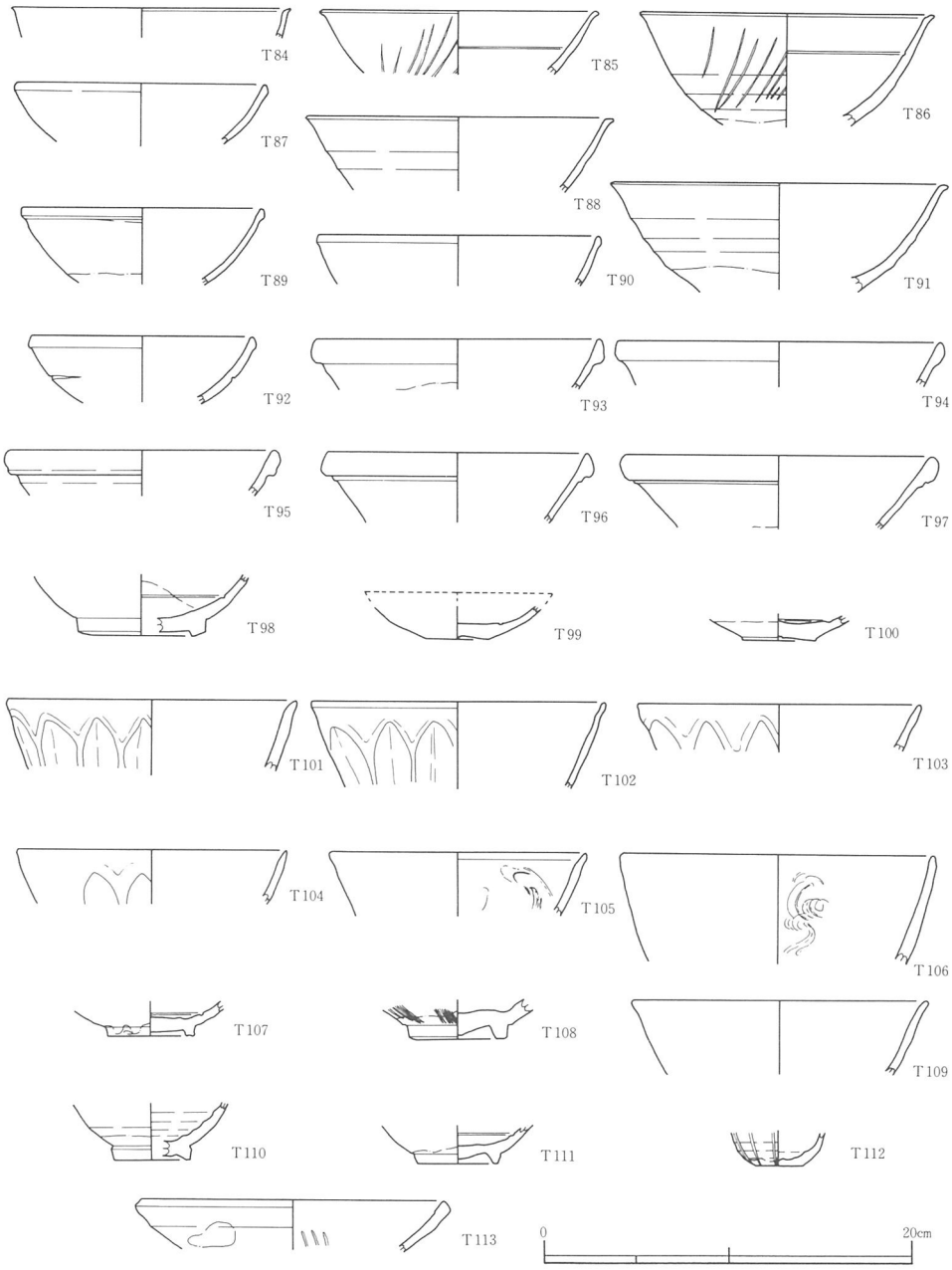
火打金（図版131の火打金は兵庫県教育委員会、加古千恵子氏より提供を受けた。）

火打石を叩いて着火する道具で、直接石にあたる金属部分と、把手になる木質部分からなる。今回出土したのはこの内の金属部分の破片である。残存長7.35㎝、最大幅2.9㎝、厚さ0.5㎝、重さ20.5ｇで、破片は右端を欠いている。形状は両側がやや上方に反り、上辺が山形になる。上端中央は凹んでいるが、元は紐通し穴になっていたもので上端を欠損したものと考えられる。下辺の中央は直接火打石に接して打撃する部分で、やや凹んでいるのは使用痕跡と考えられる。断面は下部が厚くなっており使用時の打撃に耐えられるように工夫されている。

火打金は奈良時代からその使用例が知られ全国で177点の出土が確認されている[註2]。中世の遺跡では兵庫県の中尾城跡・福田片岡遺跡、奈良県の金峰経塚、和歌山県の那智経塚などの例が知られているが、大阪府下では初の出土例である。



第287図　平安末～鎌倉時代包含層出土遺物　火打金（1/4）



第288図　平安末～鎌倉時代包含層出土遺物　陶磁器（1/4）

山田分類に従えば、このタイプはＡ－Ｃ類に比定されるもので、中世に盛行するタイプとされ、携帯用として火打袋に入れ、火打石とともに持ち歩かれていたと考えられる。

陶磁器（第288図、図版131参照）

この時期の陶磁器には、中国産の白磁（24片）・青磁（19片）・青白磁（１片）、瀬戸産の擂鉢（１片）があり、合計45片が出土した。全体の形が復元できるものはなかった。

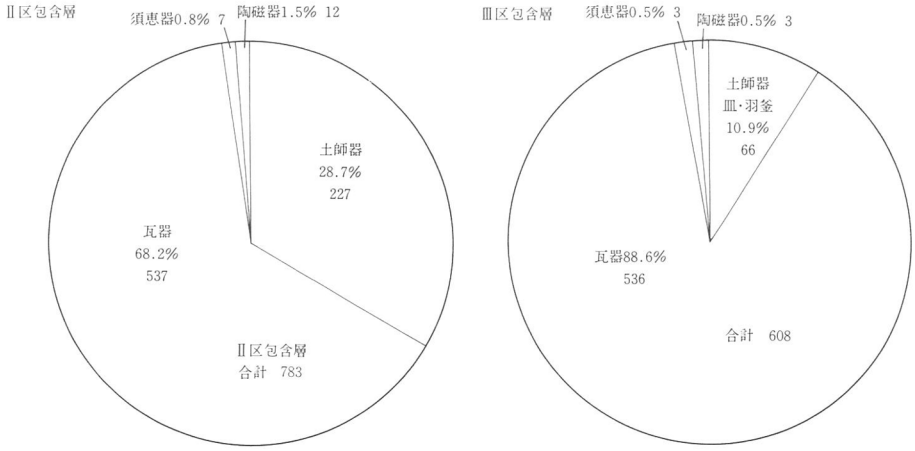
白磁は 椀15点、皿２点を図化した。椀は口径12.2～18.5㎝である。椀は口縁部が外反するⅤ類[註3]（Ｔ84～Ｔ86・Ｔ88・Ｔ91）と小さな玉縁状の口縁を持つⅡ類（Ｔ87・Ｔ89・Ｔ90）及び玉縁が完成するⅣ類（Ｔ92～Ｔ97）などがある。皿は底部片で碁筒底になるものである。青磁は11点を図化し、椀11点である。椀の口径は14.1～17.2㎝である。

椀は外面に蓮弁文を施すもの（Ｔ101～Ｔ104）、櫛描きによる平行線を施すもの（Ｔ108）、内面に花弁を施すもの（Ｔ105・Ｔ106）などがある。Ｔ108は同安窯系のもので、それ以外は龍泉窯系のものと考えられる。蓮弁はやや退化した鎬を持つものから鎬を表現しないものまである。青白磁の合子Ｔ112は低部片で体部に花弁の退化した区画線を施している。

卸皿Ｔ113は瀬戸産のもので内面に３条の櫛目が観察される。口縁部片で口径17.9㎝を計る。

白磁と青磁の比率は24対18である。白磁と青磁の数量が比率が拮抗するのは12世紀代～13世紀前半とされるが、他の瓦器などの遺物の時期とほぼ一致していると考えてよい。

第16表　Ⅱ・Ⅲ区包含層平安末～鎌倉時代出土遺物構成表



小結

平安末～鎌倉時代の遺物は調査面積に比べて少量であった。286－ＯＷ以外にはまとまった遺物の出土はなく、大半が包含層からの出土である。

瓦器はII形式後半のものからIII形式の１～２段階のものが出土し、羽釜は土師質のものが大半で瓦質のものは包含層に数点見られるのみである。

須恵器 片口鉢は東播系のものが出土した。時期は12世紀中～13世紀代のもので他の遺物群と同時期である。磁器も12世紀～13世紀前半にかけて出土する一般的なものである。瀬戸産の擂鉢も、この時期に各遺跡で僅かに見られるものである。

これらのことから、遺物の時期は12世紀中～13世紀代前半が中心の時期と考えられ、前回調査した133－ＯＳ内部の遺構群と同時期と考えられる。従って遺物からも先に検出された遺構群と今回の遺構群は密接に関連したものと言えよう。

第17表は各地区の遺物構成表である。各地区ともやはり瓦器が多く土師器がそれに次いでいる。全体の比率は土師器20.8％、瓦器77.5％、須恵器0.1％、陶磁器1.2％である。遺物の構成には特殊なものは見られずこの時期の一般的な遺跡と同じ様相を示していた。陶磁器は前回の調査の比率は不明であるが今回の調査では1.2％である。付近の遺跡では菱木下遺跡で0.49％である[註4]。比率としては両者共農村部での様相を示していると言えよう[註5]。

註釈及び参考文献

註１　尾上実「南河内の瓦器椀」「藤沢一夫　古稀記念文化論叢」　1983

註２　「火打金について」山田清朝『中尾城跡』兵庫県教育委員会　1989

註３　横田賢次郎・森田　勉「太宰府出土の中国陶磁について」
『九州歴史資料館論集』４　1978

註４　「府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ｉ」(財)大阪文化財センター

註５　「上枚遺跡発掘調査報告書」高槻市教育委員会　1980

第７節　その他の時期（近世・時期不明の遺構）

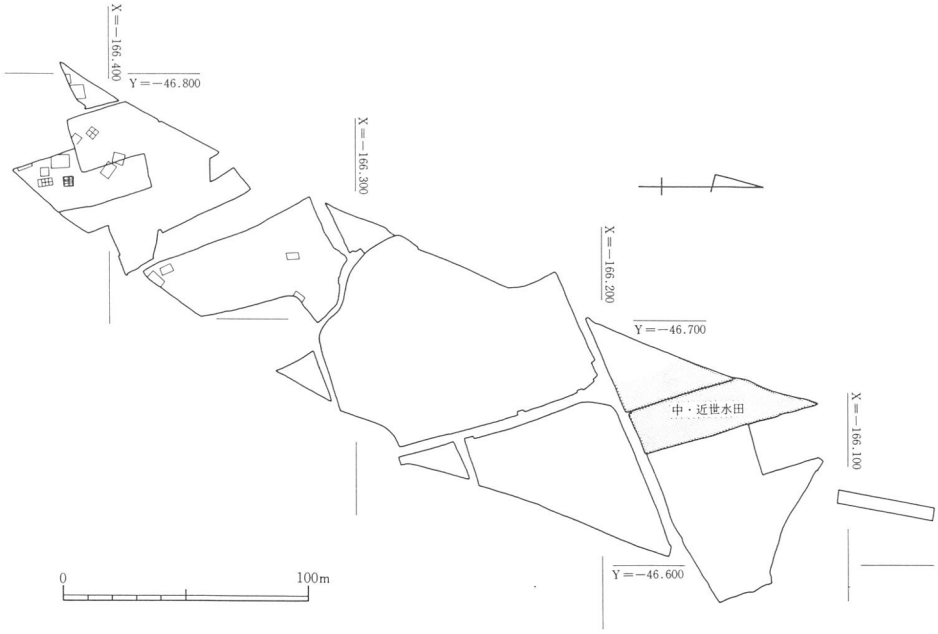
ここでは、近世以降の時期と、時期不明遺構について報告する。特に、丘陵頂上部の建物は柱穴に遺物が検出されることがまれで、時期を決定できない建物が多く見られた。これらの建物は第Ⅴ章 まとめにおいて何時代になるか可能性を指摘しておいたので、併せて見てもらいたい。

中・近世（第290図参照）

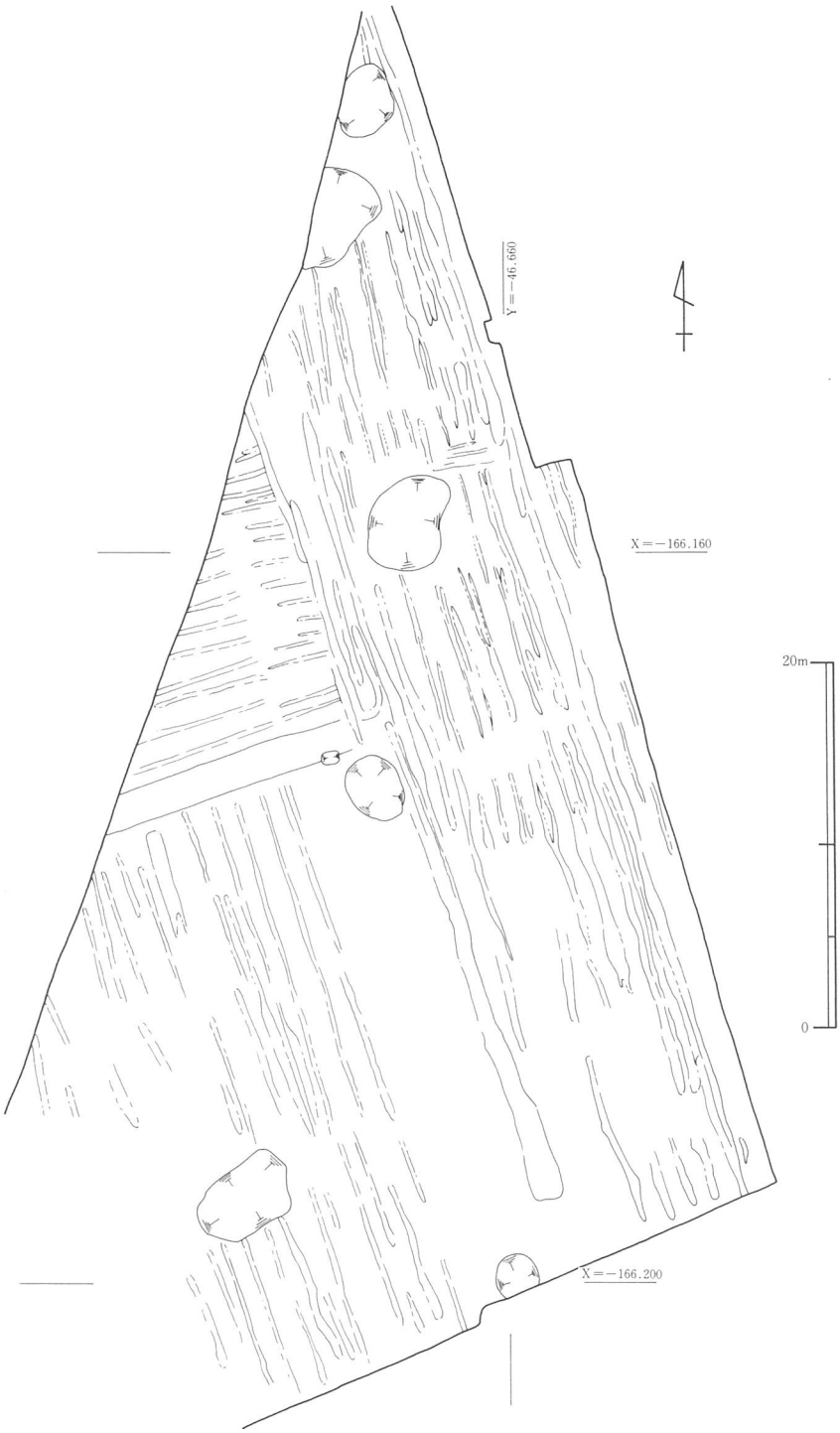
大庭寺遺跡では、これまでに中・近世の水田面が、沖積地で検出されている。そして、これに伴う近世水田の暗渠（1987年度調査）も見つかっている。。

第290図に報告したものは、中世から近世にかけての水田の耕作痕跡である。Ⅳ区Ｄでは第３ｂ層上面で検出し、溝状の部分には水成の第３ａ層が深さ数㎝程度推積していた。これらの溝状の痕跡は鋤などにより、田起こしや畔立ての軌跡で耕作土より深く及んだものが残ったと考えられる。この面より直上層は中世の遺物しか検出できないが、耕作痕跡は中世以降、継続して刻まれたものが残っていると考えられる。

また、北西寄りの１画の溝の方向が東西を向き、耕作の方向が異なっているが、ここには筆境があったものと思われる。この筆境に幅２ｍの空白地が見られるが（第１節土層断



第289図　時期不明・その他遺構全体図（1/3000）



第290図　Ⅵ区中・近世水田（1/400）

面参照)、10㎝程度の隆起がみられ水田の畔痕跡と考えられる。東側の筆境には残念ながら畔は検出できなかった。

掘立柱建物

時期不明の掘立柱建物は15棟が出土している。Ⅰ区に11棟、Ⅱ区に４棟がある。ここではⅠ区・Ⅱ区の順にこれらの建物について報告する。

Ⅰ区

６－ＯＢ（第291図参照）

丘陵上の西端に見つかった建物で、K18ＤＡ周辺に位置する。東西２間以上(4.5m以上)の規模をもつ。建物の主軸はＮ－81°－Ｅ（北辺で計測）を向いている。全体規模は調査区南に広がるため不明である。

柱穴の検出レベルはT.P.＋33.35～33.40m、柱穴底のレベルはT.P.＋33.00～33.30mである。柱穴の深さは10～20㎝と浅いものが多い。

柱間寸法は南北1.88～2.20m、東西2.0～3.8mである。この建物は、方向や柱間寸法、柱穴規模から奈良時代の可能性がある。

遺物は時期不明のものが少量出土している。

13－ＯＢ（第291図参照）

丘陵上の西端に見つかった建物で、６－ＯＢの東側に隣接して建てられている。K18ＣＢ周辺に位置し、２間以上×２間(4.5m以上×5.8m)を計る。全体規模は調査区南に広がるため不明である。

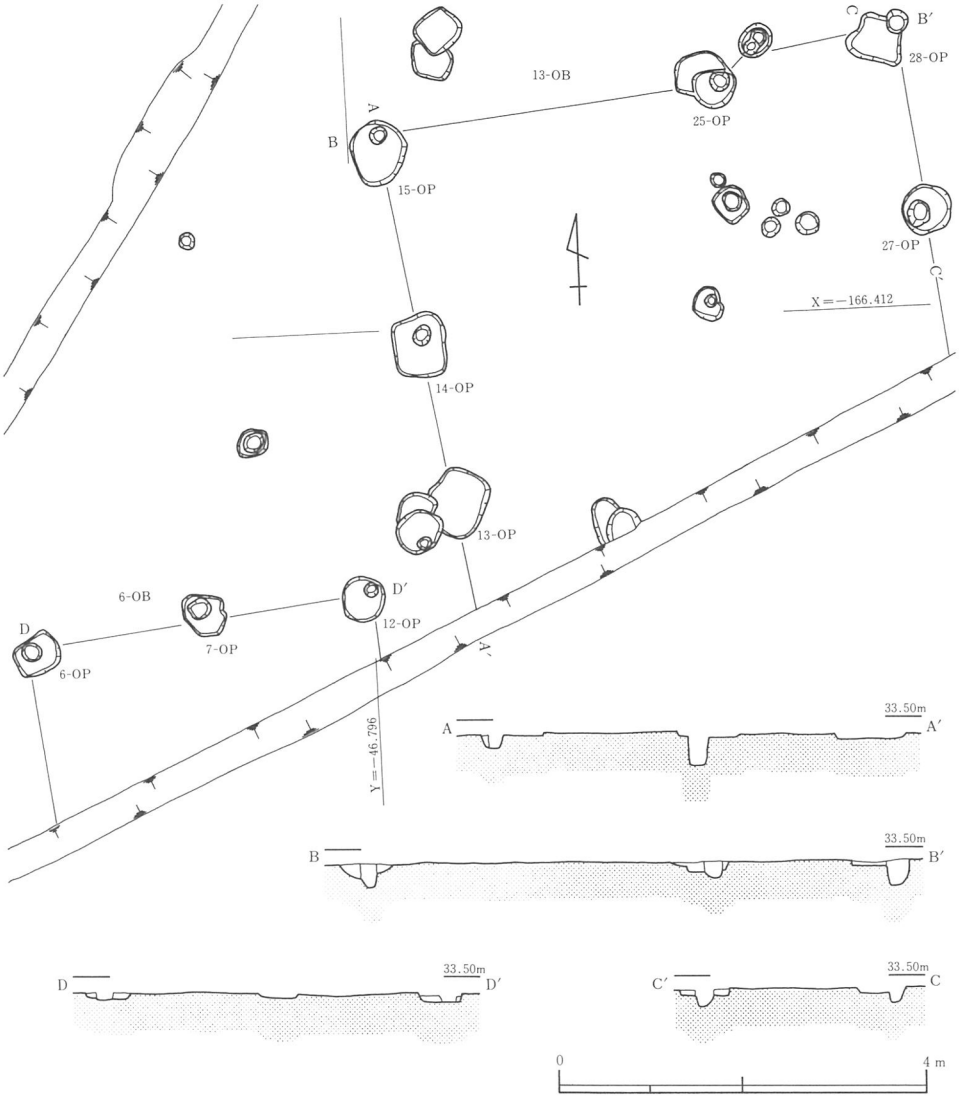
建物の主軸はＮ－81°－Ｅ（北辺で計測）を示している。柱穴の検出レベルはT.P.＋33.35～33.40m、柱穴底のレベルはT.P.＋33.00～33.30mである。柱間寸法は南北1.88～2.20m、東西2.0～3.8mである。この建物が磁北を向いていること、柱間が２m以上あることから奈良時代の可能性がある。

遺物は時期不明のものが少量出土している。

50－ＯＢ（第292図参照）

K23ＣＧ周辺に位置する。建物の規模は南北２間×東西２間以上（3.45m×不明）の総柱建物で、建物の主軸方位はＮ－35°－Ｅ（55－ＯＰ・56－ＯＰ・59－ＯＰの辺を南北とした。）である。柱間寸法は南北方向が1.65～1.80m、東西方向は1.35～2.05mである。

建物の検出レベルはT.P.＋33.50m前後である。柱底のレベルはT.P.＋33.30～33.40mで、検出面から10～20㎝の深さが残っていた。

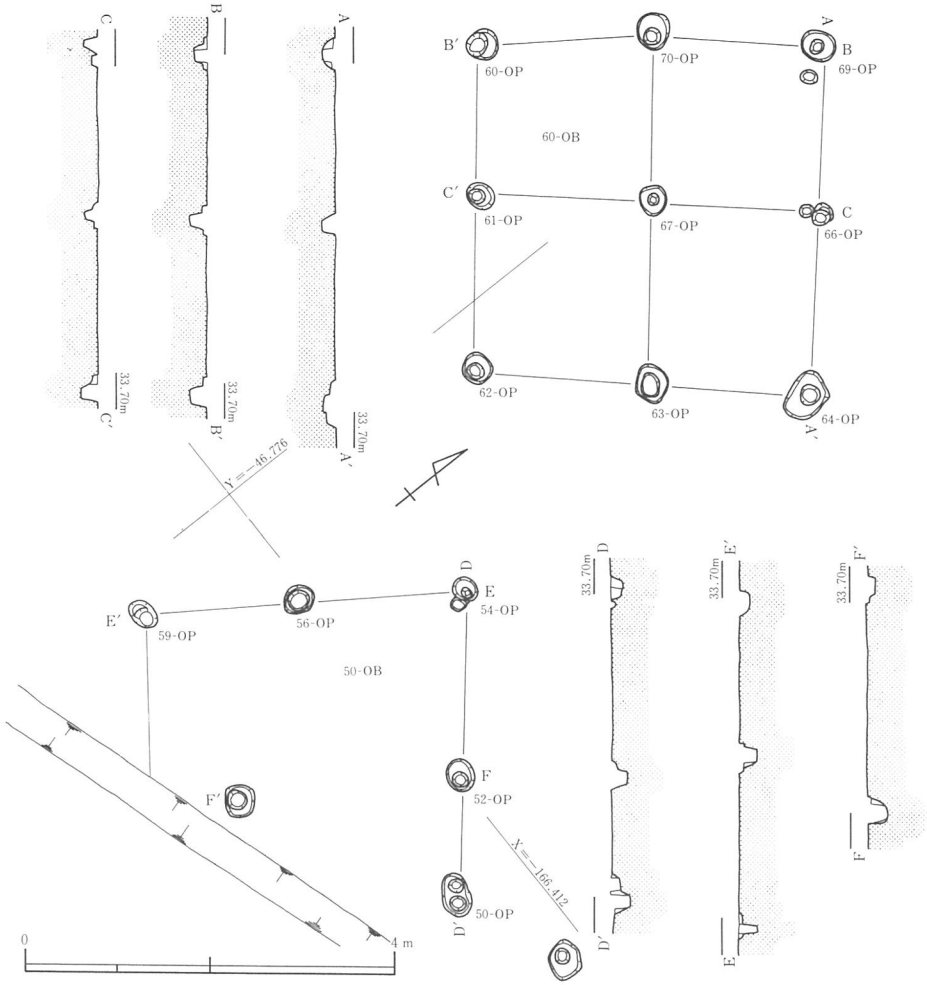


第291図　6・13－ＯＢ平面・断面図（1/80）

柱穴の直径は30㎝程度で円形のものが多い。平面は後世の削平の影響でかなり変形したと考えられる。

なお、この建物は北辺と樋が４辺うち２辺のみが検出されたもので方向、構造的には、60－ＯＢに酷似すると思われるが、調査区外に建物が延びるために詳細は不明である。遺物は出土していない。

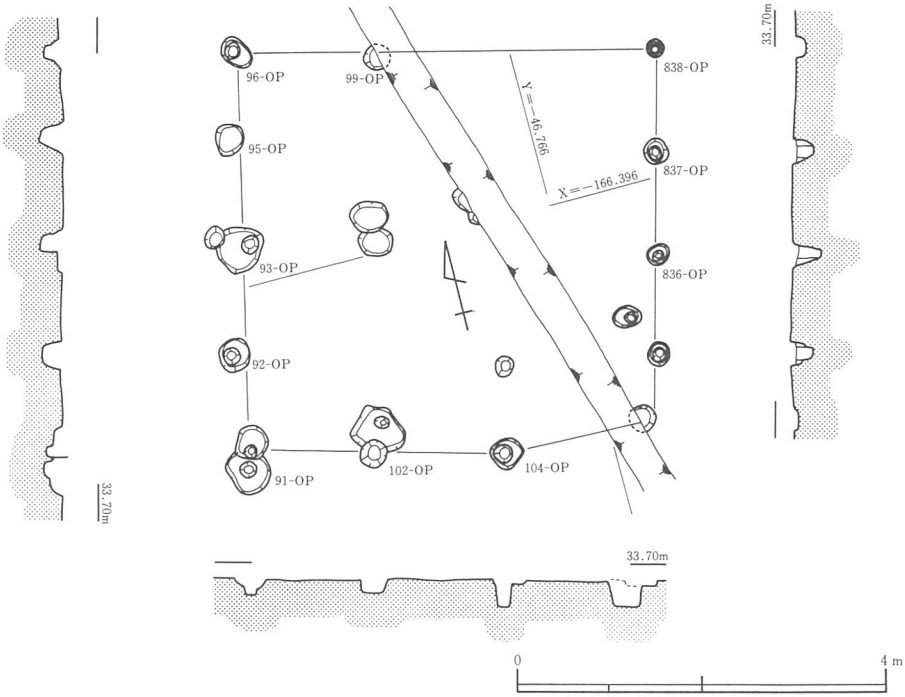
50－ＯＢと60－ＯＢは柱間寸法、構造などから古墳時代の可能性がある。



第292図　50・60－ＯＢ平面・断面図（1/80）

60－ＯＢ（第292図参照）

Ｋ23ＢＧに位置する。建物の規模は南北２間×東西２間(3.8m×3.8m)の総柱建物で、面積は13.68㎡である。建物方位はＮ－38°－Ｅである。柱間寸法は南北方向が1.85～1.95m、東西方向は1.65～2.00mである。桁行・梁行は柱間がほぼ等しいので不明である。建物の検出レベルはT.P.＋33.50mである。柱底のレベルはT.P.＋33.30～33.35mで、検出面からは15～20㎝の深さが残っていた。柱穴の直径は30㎝前後程度で円形のものが多い。平面は後世の削平のためにかなり変形したと思われる。遺物は出土していない。



第293図　91－ＯＢ平面・断面図（1/80）

91－ＯＢ（第293図参照）

Ｉ区ＡとＩ区Ｂにかかる建物で、Ｋ18ＸＩ周辺に位置する。建物規模は桁行４間×梁行３間(4.3m×4.55m)の南北棟で、面積は19.35㎡である。

建物の主軸方位はＮ－15°－Ｅを示している。この建物は平面がほぼ正方形に近いが、南東隅の柱はやや北に偏り、いびつになる。建物の検出レベルはT.P.＋33.30～33.50m、柱穴底のレベルはT.P.＋33.05～33.45mである。

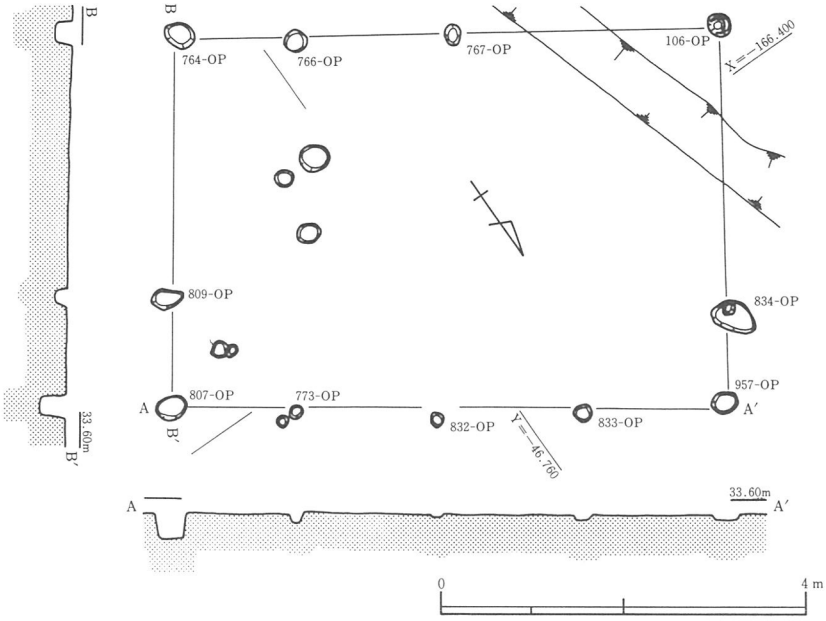
柱間寸法は桁行0.90～1.15m、梁行1.35～1.70mである。桁行と梁行との間隔は大きく異なり、柱間寸法にはばらつきが見られた。

掘方の直径は30～40㎝のものでやや小型のものが多い。掘方は柱痕跡の直径より一回り大きい程度である。

遺物は土師器・須恵器の細片が出土している。しかし、時期の判るものはなかった。

764－ＯＢ（第294図参照）

Ｋ18ＹＪに位置する。桁行４間×梁行３間または４間（5.95m×4.1m）の建物である。



第294図　764－ＯＢ平面・断面図（1/80）

面積は約24.4㎡で、主軸の方位はＮ－55°－Ｗである。建物の検出レベルはＴ.Ｐ.＋33.45ｍで、柱穴底のレベルはＴ.Ｐ.＋33.15～33.35ｍである。柱穴は相対的に小さく丸い。柱間寸法は桁行1.27～1.71ｍ、梁行1.05ｍ（北西の妻の一部）・1.2ｍ（南東の妻の一部）である。

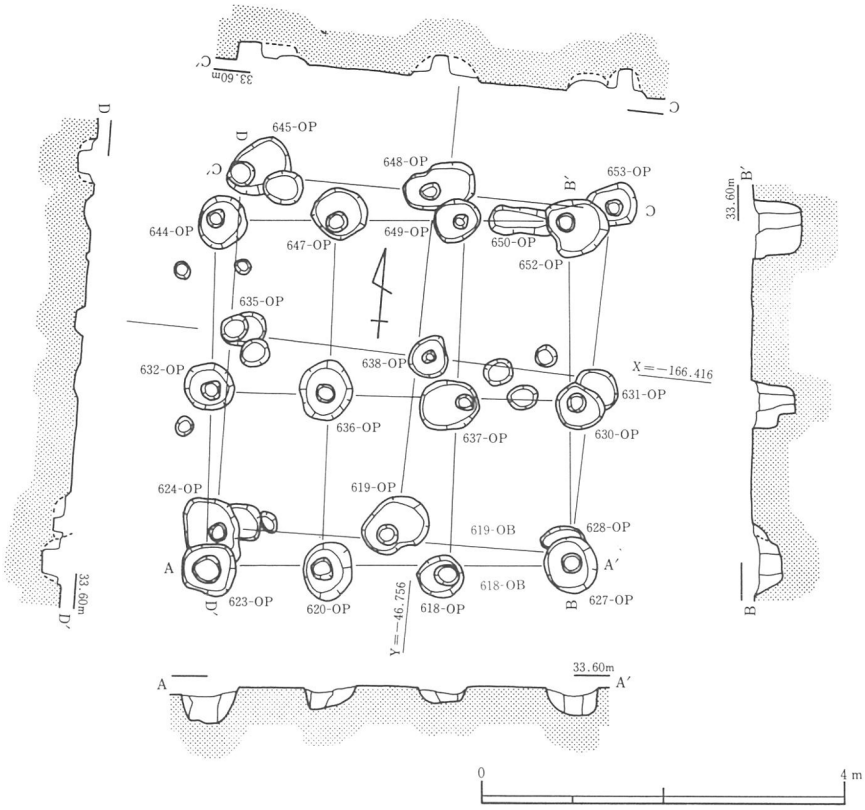
遺物は土師器、須恵器の細片が僅かに出土したのみである。６世紀代の須恵器の蓋らしい破片もあるが、それ以上の時期決定は困難である。

618－ＯＢ（第295図参照）

Ｋ23ＤＫに位置する。619－ＯＢを切り、また北東隅で650－ＯＰを切っている。桁行３間×梁行２間（3.90ｍ×3.77ｍ）の総柱建物である。面積は約14.7㎡で、主軸の方位はＮ－84°－Ｅである。建物の検出レベルはＴ.Ｐ.＋33.45ｍで、柱穴底のレベルは側柱がＴ.Ｐ.＋32.90～33.30ｍで、床束（636－ＯＰ・637－ＯＰ）はＴ.Ｐ.＋33.40ｍ前後である。柱間寸法は桁行1.15～1.36ｍ、梁行1.74～1.97ｍである。柱の直径は15㎝程度のものと20～30㎝の太いものがある。

遺物は須恵器・土師器で、前者には古墳時代の小破片もあるが、図化できるものはない。

また北東隅の652－ＯＰより古い650－ＯＰから奈良時代の土器が出土しており、この建物の年代は、奈良時代に上限を置くことができる。



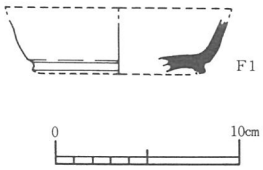
第295図　618・619－ＯＢ平面・断面図（1/80）

619－ＯＢ（第295図参照）

Ｋ23ＤＫに位置し、618－ＯＢより古い建物である。桁行２間×梁行２間（東西約3.95ｍ×南北約3.85ｍ）の総柱建物である。面積は約15.2㎡で、主軸の方位はほぼ真東西のＮ－89°－Ｅである。建物の検出レベルはＴ.Ｐ.＋33.45ｍで、柱穴底のレベルはＴ.Ｐ.＋33.15～33.40ｍである。柱間寸法は桁行1.85～2.05ｍ、梁行1.70～2.23ｍで、側柱の直径は18～25㎝の太さで、床束の直径は14㎝程度である。

遺物には須恵器（初期須恵器を含む）・土師器の細片があるが、時期を決定できる資料ではない。

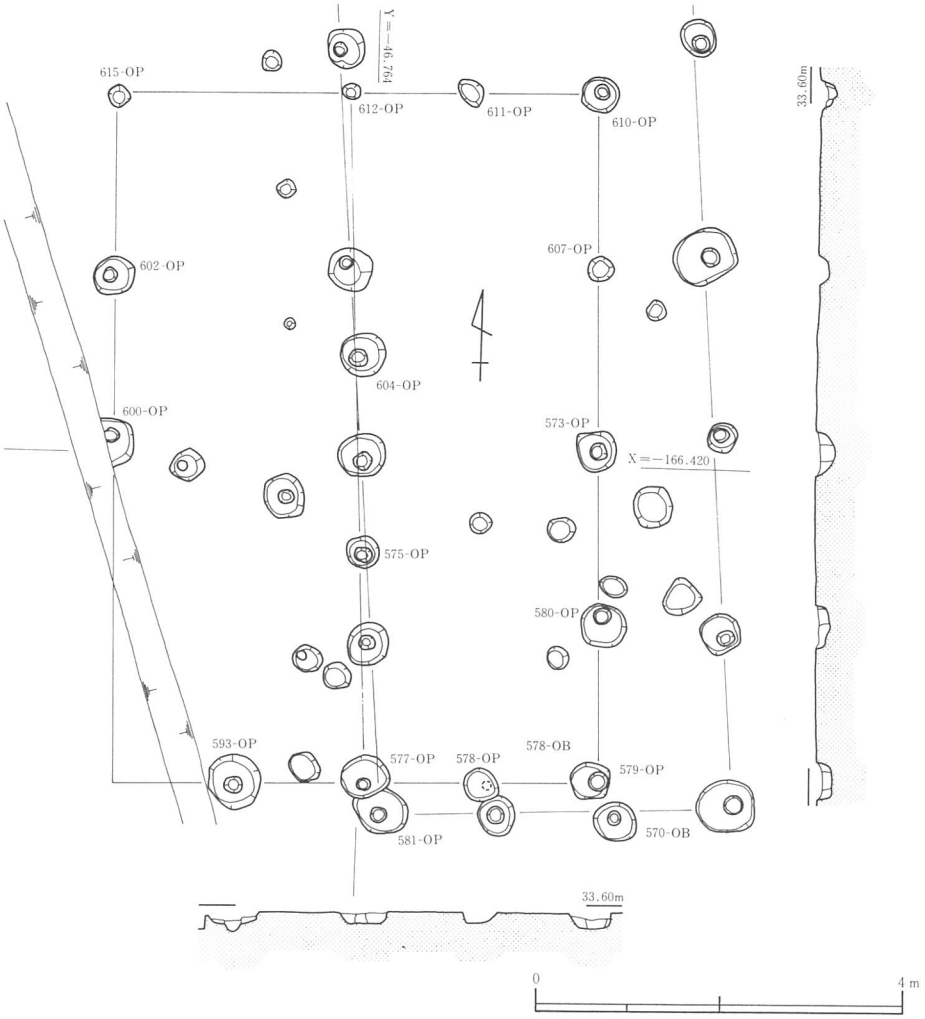
618－ＯＢと同一地点で、規模も変わらないことから、その前身の建物と考えられる。



第296図　650－ＯＰ出土遺物（1/4）

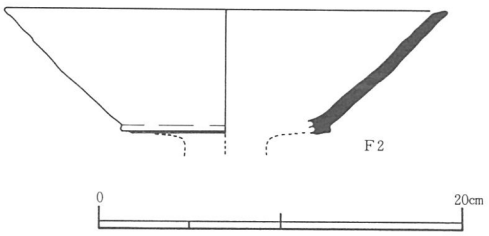
578－ＯＢ（第297・298図参照）

Ｋ23ＥＩに位置する。桁行４間×梁行４間（7.50ｍ×

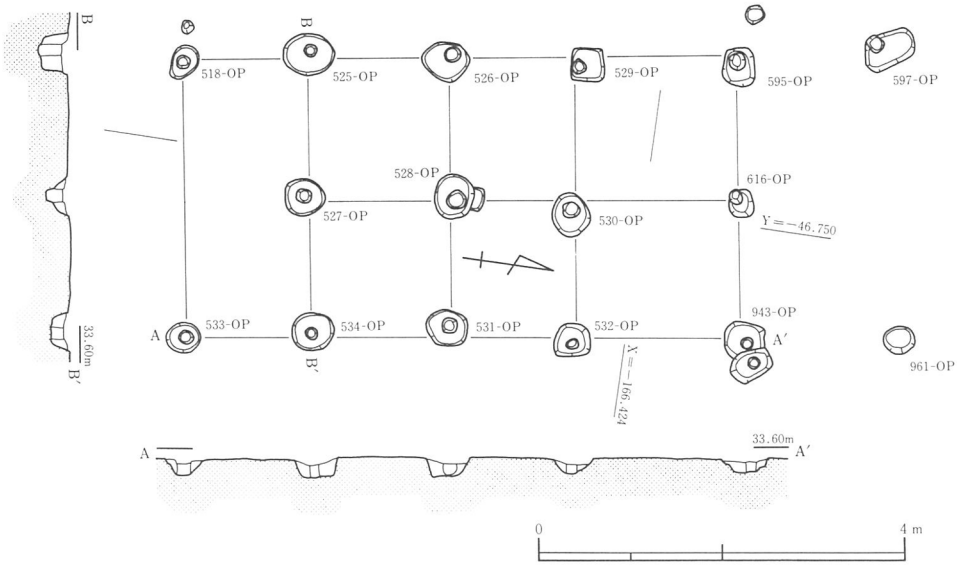


第297図　578－ＯＢ平面・断面図（1/80）

5.25m）の建物である。南妻柱列の577－ＯＰが570－ＯＢの581－ＯＰを切っている。棟通りに位置する576－ＯＰ・574－ＯＰ・605－ＯＰと、575－ＯＰ・604－ＯＰのうち、規則的な位置になる前三者の柱穴は570－ＯＰの西側柱列で、後二者の柱穴は577－ＯＰの



第298図　578－ＯＰ出土遺物（1/4）



第299図　525－ＯＢ平面・断面図（1/80）

床束と考えていることは先述したとおりである（本章第３節、570－ＯＢ参照）。

その場合、この建物を倉庫と考えるには床束の数が少なく、重量物に耐える構造としては不自然であろう。むしろ床張りの住居としたほうが良いかもしれない。

面積は約39.4㎡で、本遺跡では大きい建物といえる。主軸方位はほぼ真南北のＮ－２°－Ｗである。建物の検出レベルはＴ.Ｐ.＋33.50ｍで、柱穴底のレベルはＴ.Ｐ.＋33.30～33.40ｍである。柱間寸法は桁行1.73～1.99ｍ、梁行1.25～1.44ｍで、棟通りは南から2.50・2.14・2.90ｍである。柱の直径は14～20㎝である。

遺物は極く僅かな土師器のほか、６世紀代の須恵器や図示した初期須恵器の高杯などがあるが、切り合い関係から見た建物の年代としては、Ⅱ型式４段階前後の須恵器が出土した570－ＯＢより新しいことが判明している。

525－ＯＢ（第299図参照）

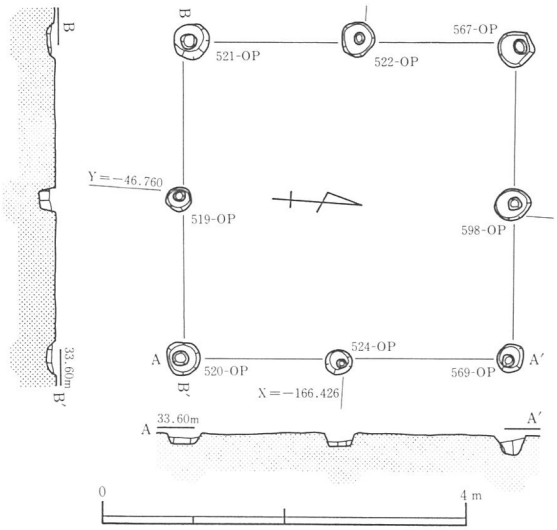
Ｋ23ＦＫに位置する。桁行４間×梁行２間（6.07ｍ×3.04ｍ）の総柱建物である。桁行はさらに一間北へ延びる可能性もある。面積は約18.5㎡で、主軸方位はＮ－８°－Ｗである。建物の検出レベルはＴ.Ｐ.＋33.5ｍ前後で、柱穴底のレベルはＴ.Ｐ.＋33.15～33.3ｍである。柱間寸法は桁行1.33～1.92ｍ、梁行1.46～1.61ｍで、柱の直径は11～15㎝である。

遺物は須恵器（初期須恵器を含む）・土師器の細片であるが、建物の年代を決定できるほどの資料はない。

519－ＯＢ（第300図参照）

Ｋ23ＧＪに位置する。桁行２間×梁行２間（3.60m×3.44m）の正方形に近い建物である。

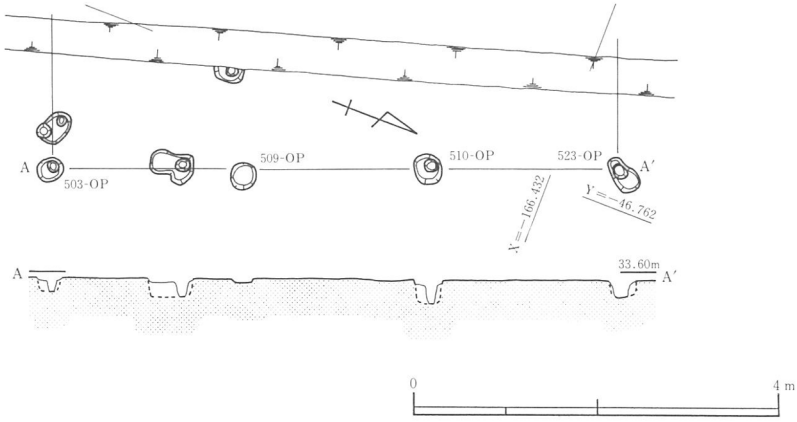
床束は検出していないが、存在していたか否かは不明である。面積は約12.4㎡で、主軸の方位はＮ－３°－Ｗである。建物の検出レベルはＴ.Ｐ.＋33.50mで、柱穴底のレベルはＴ.Ｐ.＋33.30～33.45mである。柱間寸法は桁行1.75～1.86m、梁行1.70～1.76mで、柱の太さは10～15㎝程度である。遺物は土師器の細片が一片出土したのみである。



第300図　519－ＯＢ平面・断面図（1/80）

503－ＯＢ（第301図参照）

Ｋ23ＨＪで南北３間分（6.15m）の柱列を検出した。523－ＯＰ・503－ＯＰを東の隅柱とする建物で、柱穴の大部分が調査地の西に存在すると推定される。東側柱列の方位はＮ－21°－Ｅである。建物の検出レベルはＴ.Ｐ.＋33.50mで、柱穴底のレベルはＴ.Ｐ.＋33.25～33.38mである。柱間寸法は1.92～2.20mで、柱の直径は13～15㎝である。遺物は土師器・須恵器がごく少量出土したのみで、建物の年代を確定できる資料はない。



第301図　503－ＯＢ平面・断面図（1/80）

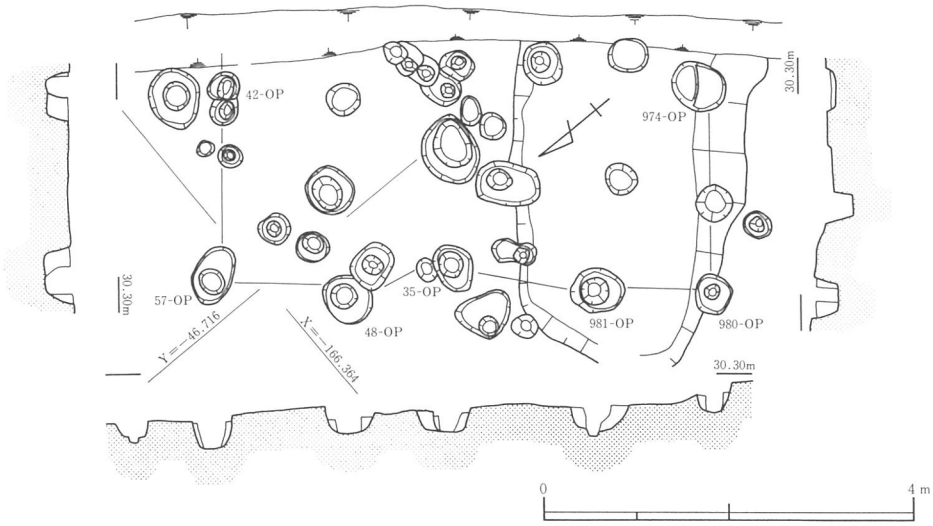
II区

34－ＯＢ（第302図参照）

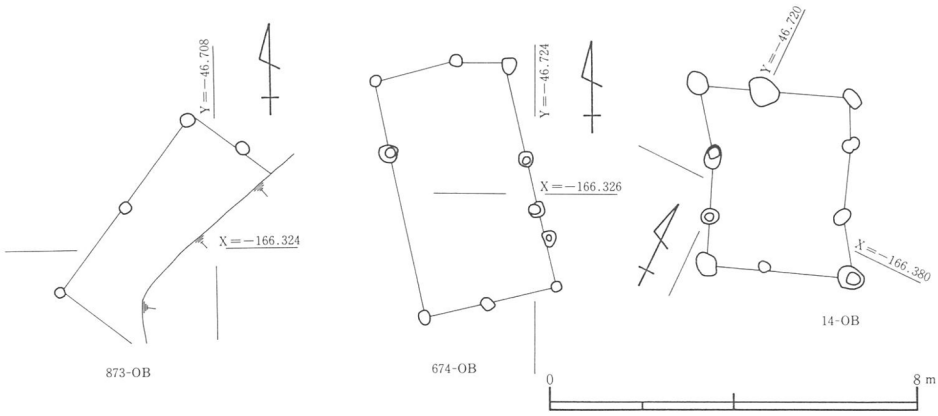
K18ＵＵ周辺に位置し、４間×１間以上(5.4m×2.1m）である。建物の主軸はＮ－40°－Ｅ（東辺で計測）を示している。検出レベルはT.P.＋29.78～30.20m、柱穴底はT.P.＋29.40～30.00mである。柱間寸法は南北1.15～1.55m、東西2.1～2.2mである。

873－ＯＢ（第303図参照）

K18ＧＷ周辺に位置し、２間×１間以上(4.7m×1.3m)の建物である。建物の主軸はＮ



第302図　34－ＯＢ平面・断面図（1/80）



第303図　時期不明建物（1/160）

－37°－E（東西辺を計測）を示している。検出レベルはT.P.＋28.50～28.70m、柱穴底はT.P.＋28.25～28.50mである。柱間寸法は南北1.3m、東西2.30～2.35mである。

674－ＯＢ（第303図参照）

K18ＦＳ周辺に位置する。桁行３間×梁行２間(5.2m×2.9m)の南北棟である。面積は13.21㎡で、主軸方位はN－12°－Wである。検出レベルはT.P.＋29.40m前後で、柱穴底はT.P.＋29.20～29.30mである。柱間寸法は桁行1.6～1.7m、梁行1.4～1.8mである。

14－ＯＢ（第303図参照）

K18ＴＴ周辺に位置する。桁行３間×梁行２間(3.9m×3.12m)の南北棟である。面積は9.88㎡で、方位はN－26°－Wである。検出レベルはT.P.＋29.7～30.0m、柱穴底はT.P.＋29.55～29.70mである。柱間寸法は桁行1.0～1.5m、梁行1.20～1.95mである。

時期不明遺物（第304図参照）

Ｆ３は第Ⅴ区の近世の河川跡から出土した縄文土器である。胴部が膨らむ深鉢形土器で、口頸部を欠失する。頸部から胴部屈曲にかけて垂下条線と縦方向の波状の平行線を施す。胴部下半には垂下条線が施され、波状線は見えない。平行線は４本を一単位としている。胎土は生駒西麓といわれる河内産のものである。時期は縄文時代後期前半と思われる。

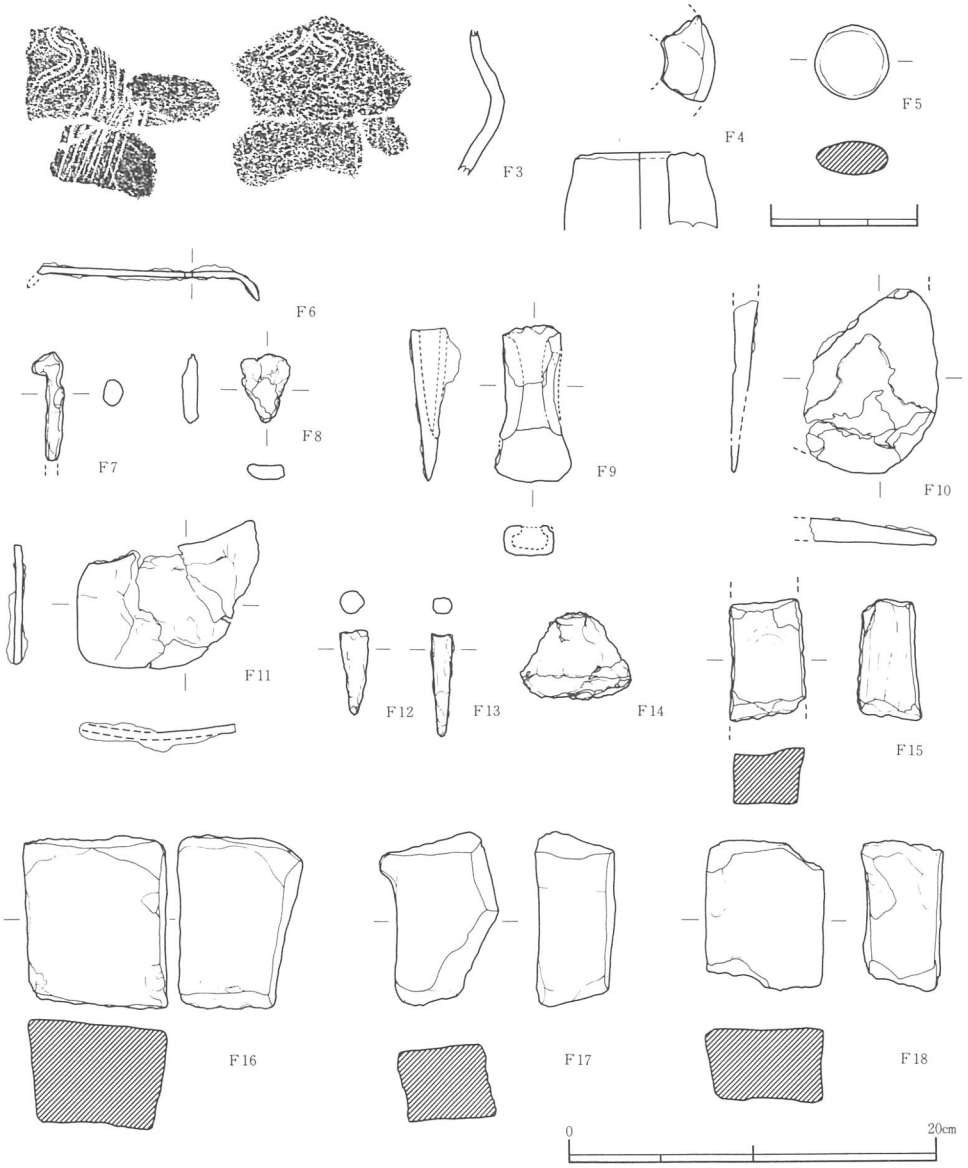
Ｆ４はフイゴの羽口である。先端部分は黒く硝子化している。先端部での内径は3.2㎝、外形は７㎝である。断面の色調は先端から離れるにつれ黒色から橙色に変わる。胎土にはφ３㎜以下の砂粒が目立つ。出土地点はⅡ区K18ＨＱである。

Ｆ５は水晶製の玉である。全体に半透明で、直径は1.5㎝、厚さは0.7㎝で碁石のような形をしている。重量は2.1ｇである。出土地点はⅡ区K18ＰＹの包含層である。

Ｆ６～Ｆ14は鉄製品である。Ｆ６はカスガイ釘である。残存長は12.1㎝、幅1.6㎝、厚さ0.4㎝、重量は31ｇである。Ｆ７は釘の一部である。重量は15.7ｇである。Ｆ９は鉄斧である。最大長8.4㎝、幅2.6㎝、厚さ1.4㎝、重量70.2ｇである。袋部の折り曲げは両側の鉄が接していない。また、袋部には木質が残っている。Ｆ８・Ｆ10～12は用途不明の鉄片である。Ｆ８は重量7.9ｇである。Ｆ10の重量は109ｇで、断面は一端が細くなる。Ｆ11の重量は99.3ｇ、厚さは0.45㎝でほぼ均一であるが、中央部で湾曲する。Ｆ12は中空と考えられるが、その深さは不明である。重量は9.3ｇである。Ｆ13は釘の先端部分と考えられる。断面は不整な長方形である。重量は9.2ｇである。Ｆ14は分銅である。高さ4.75㎝、最大幅6.05㎝、重量は278.7ｇである。全体の形は円錐形である。

Ｆ15～Ｆ18は砥石である。Ｆ15は４面を使用しており、両端部が欠損している。材質は

砂岩、重量は126.7ｇである。Ｆ16は４面を使用している。材質は砂岩で重量は937.8ｇである。Ｆ17は４面を使用している。使用面の端に突出部が見られる面は使用の結果と観察できる。材質は砂岩で、重量は364.9ｇである。Ｆ18は４面を使用している。大きな２面の内１面は使用が目立ち中央部が窪んでいる。この石は火を受けたようで一部に炭化物が付着し、浅い朱色になっている部分がある。材質は砂岩で、重量は373.7ｇである。



第304図　時期不明包含層出土遺物（1/4，2/3）

第８節　出土遺物の平面分布

この節では、各時代の調査区内での遺物の分布状況について報告する。分布状況を示すにあたっては以下の手順で作業を行い数量化した。

まず現場作業で、調査規定に基づいて４ｍ区画ごとに遺物の取り上げを行った。次に、整理作業の段階で接合と平行して、遺物の破片数を数えた。破片数を数えるにあたっては、時期・器種などの不明遺物についても数量を数えたが、報告の中では省いた。

尚、単純に破片数を数えたため、甕などの大型遺物は個体数以上に数えられる傾向が生じている。加えて、接合と平行して数量を数える作業を進めたために、後に器種が当初と異なるものも見られた。破片数が大型遺物に偏る問題は、時間的な問題から、今回はその誤差の修正は行っていない。接合後に器種名の変更が生じたものについてはできるかぎり修正を行ったが、尚不十分な点が多いと考えられる。

全体の遺物出土概要

今回の調査区は1987年度調査の南側と北側に大きく分かれたⅠ～Ⅴである。全体の遺物出土量はコンテナ280箱であった。1987年度調査区のデータと比較しながら見ていただければ幸いである。

遺物は既に調査の成果でも報告したとおり、多種多様な遺物が各調査区から多量に出土している。分布状況は古墳時代・奈良時代・平安時代・平安時代末～鎌倉時代に分けて報告する。この他個別の器種として、韓式系土器・中世陶磁器の分布を示した。

出土遺物の破片数は古墳時代27778片、奈良時代15070片、平安時代2123片、平安時代末から鎌倉時代3733片である。時代の判る遺物の総合計は48704片である。時期の判別ができない遺物の破片数はこの２～３倍で、大半の遺物破片が時期も判別できないものである。量的には古墳時代・奈良時代に多く、平安時代以降のものは減少する傾向が見られた。

地区ごとの遺物の量は時代を無視し単純計算すると、Ⅰ区2583片、Ⅱ区33069片、Ⅲ区4308片、Ⅳ区8742片、Ⅴ区１片となる。Ⅰ・Ⅱ区に遺構が多く検出された事もあって遺物が集中する傾向がある。Ⅱ区包含層に多くの遺物が検出されるが、Ⅰ区の遺構面が削平されⅡ区に土砂が堆積した影響もあったためと思われる。

韓式系土器（第305図参照）

Ⅰ型式１段階～Ⅰ型式２段階までの遺物の破片から、その時期の遺物として判り易いことから韓式系土器の分布を示した。特に古墳時代Ⅰ期とⅡ期の遺物分布の相違を探る目的

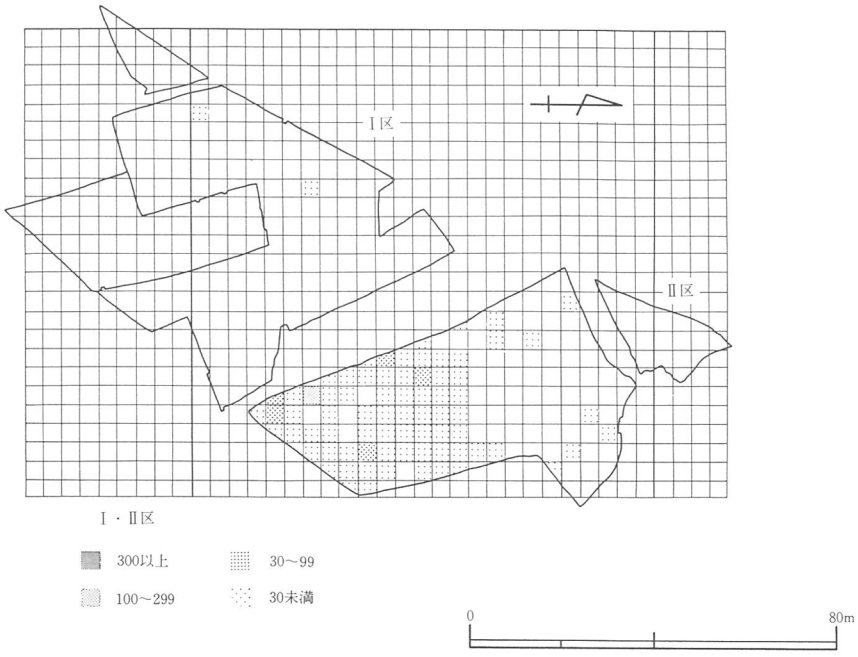
で行った。Ⅲ区～Ⅴ区は古墳時代の面まで調査を行っていないので省いた。Ⅰ区は包含層が薄いため極少量の出土である。しかし、分布図には表われないが遺構から多く出土しており本来は多く存在したと思われる。Ⅱ区では484－ＯＳより南側に集中する傾向が見られ、特に８－ＯＳ周辺に多い。Ⅱ区でこの時期の遺構が検出される範囲と重なっており古墳時代Ⅰ期の遺構の範囲を反映する結果が出たと考えられる。

古墳時代（第306図参照）

Ⅰ区・Ⅱ区から多く検出された。特にⅡ区に最も多くの遺物が出土した。Ⅲ区・Ⅳ区は古墳時代の面まで大半の部分が調査を行っていないために、古墳時代の遺物は少ない。韓式系土器の分布と異なる点はⅡ区の北端にも土器が集中することである。Ⅰ期よりもⅡ期のほうが利用された範囲が広いと考えられる。

奈良時代（第307図参照）

Ⅰ区は僅かな出土量で568－ＯＸなどいくつかの遺構を除いてはほとんど出土していない。逆に、Ⅱ区では多量の遺物が出土した。Ⅰ区・Ⅱ区の遺物出土状況は古墳時代と酷似している。Ⅱ区に遺物が集中することは古墳時代と同じく、丘陵上からの土砂が削平されて溜まった影響も加わっている。しかし、Ｂ群の掘立柱建物が並ぶ周辺に集中して出土し



第305図　韓式系土器分布状況（1/1600）

た。集落の建物が建つ周辺に多いことは集落に関連する遺物も多量に含まれていると考えられる。（奈良時代は瓦・瓦塼を含まない。）

この他、Ⅲ区からもまとまった量が出土している。A群の建物群の遺物と考えられる。D群周辺からは遺物はほとんど検出されなかった。

平安時代（第308図参照）

Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区の出土量は少量で、Ⅱ区にやや集中して出土する。Ⅱ区の遺物分布は南端と北端に集中する傾向がある。特に、南端は568－ＯＸ周辺に遺物の集中が激しい。Ⅰ区の遺物は広い範囲に分布するが細片ばかりである。Ⅲ・Ⅳ区でも平安時代の遺物の分布は希薄で細片が多い。

平安末～鎌倉時代（第309図参照）

平安時代～鎌倉時代に遺物が集中するのは1987年度調査区内にあることが再確認された。今回の調査区内ではⅠ区からⅣ区にかけて薄く広く分布している。あえて、多く出土した場所を拾えばⅢ区Ａ・Ｂがあげられる。その他全体的な傾向として言えることは、235－ＯＳや133－ＯＳの周辺（想定線は第310図参照）に遺物が集中していることがあげられる。この時期の土地利用と関わりがあると思われる。

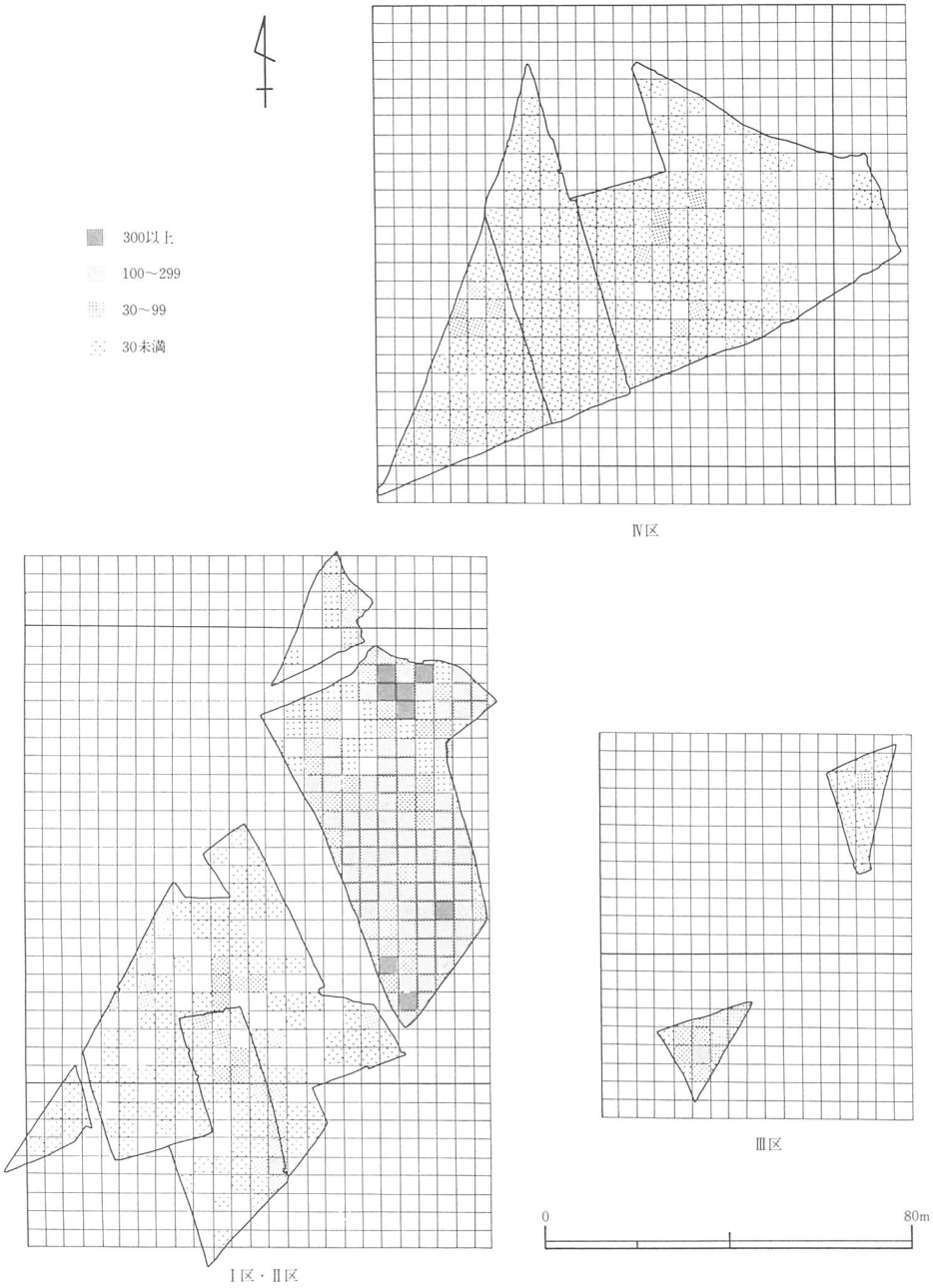
平安末～鎌倉時代の陶磁器（第310図参照）

この時期の陶磁器はⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区からそれぞれ出土した。量が多いのはⅡ区とⅣ区で比較的まとまっている。今回の調査では、陶磁器の出土点数は45片で中世遺物全体の中に占める割合は1.2％である。これは安満遺跡・宮田遺跡・上牧遺跡などの他の中世の一般集落と変わらない比率である[註1]。

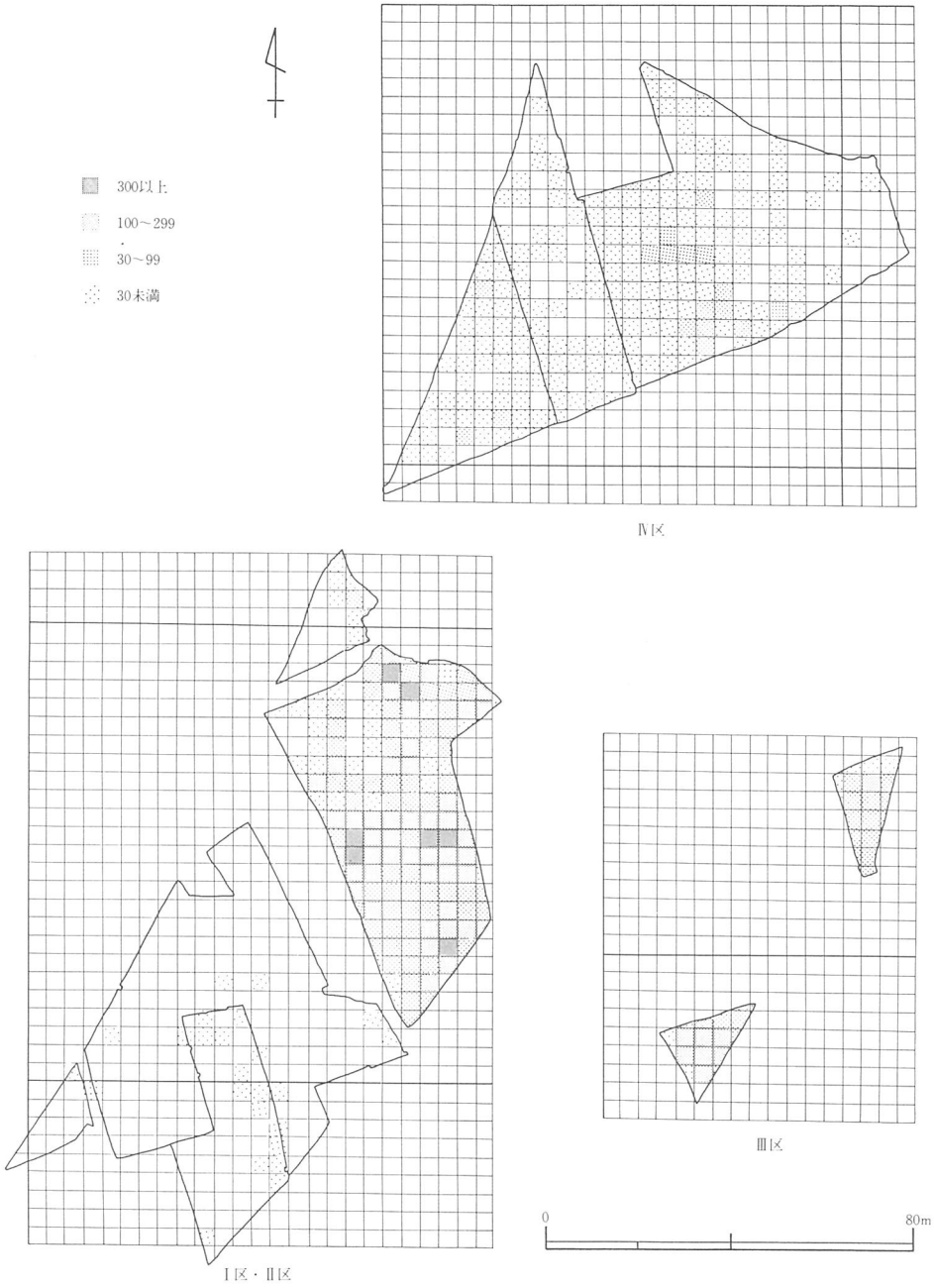
また、今回の調査での分布の濃淡を調べると、235－ＯＳ周辺や133－ＯＳ周辺に集中しており、他の中世遺物と同じ分布を示していることが判かった。さらにⅣ区では図に示したように、１町方角の想定枠内に大部分が納まっていることが注目される。そして235－ＯＳ周辺では白磁と青磁の比率が近いのに対して、133－ＯＳ周辺では白磁が圧倒的であることも指摘できる。（分布図には、瀬戸の卸皿を含まない。）

参考文献

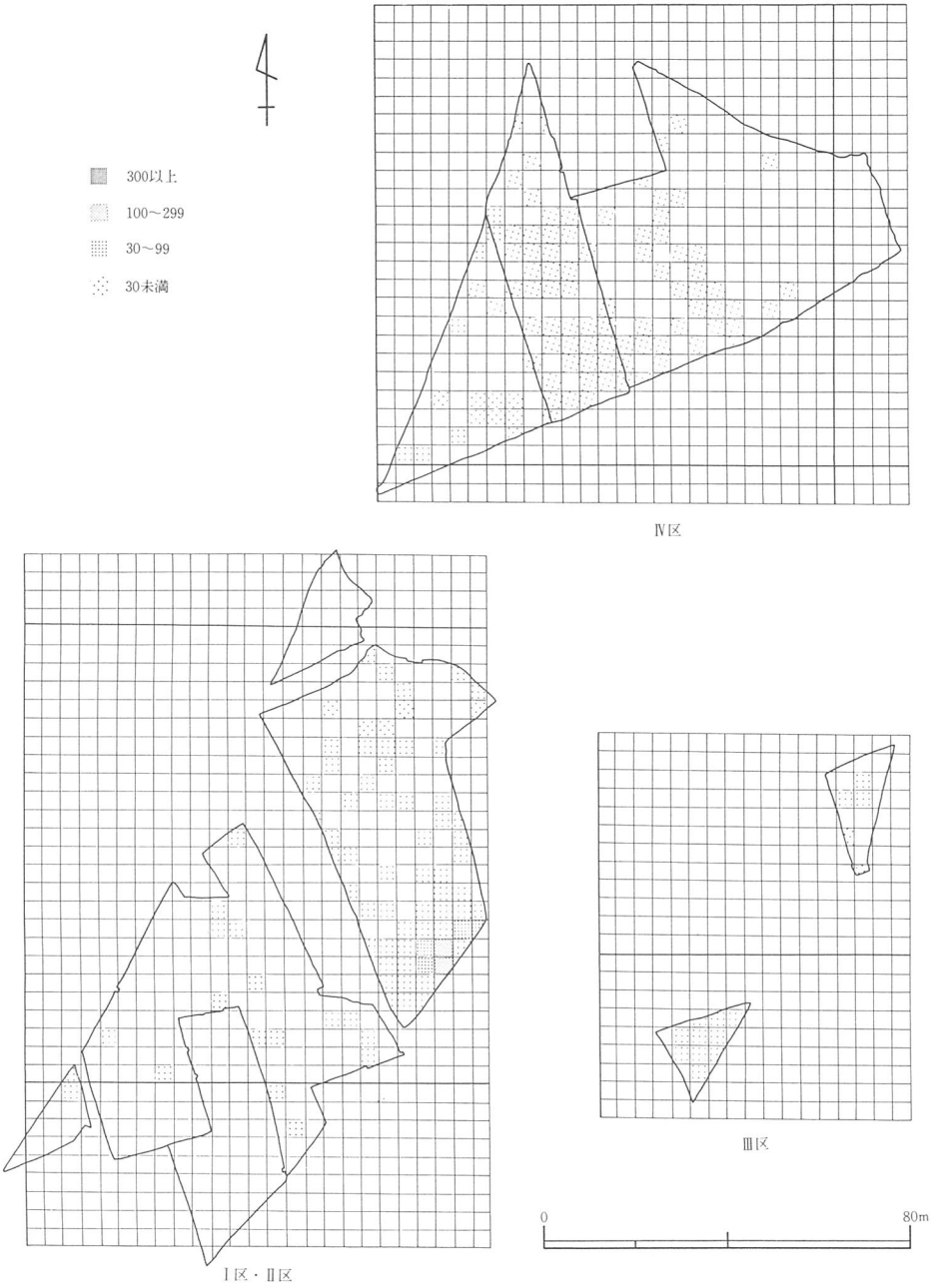
註１　「上牧遺跡発掘調査報告書」　高槻市教育委員会　1980



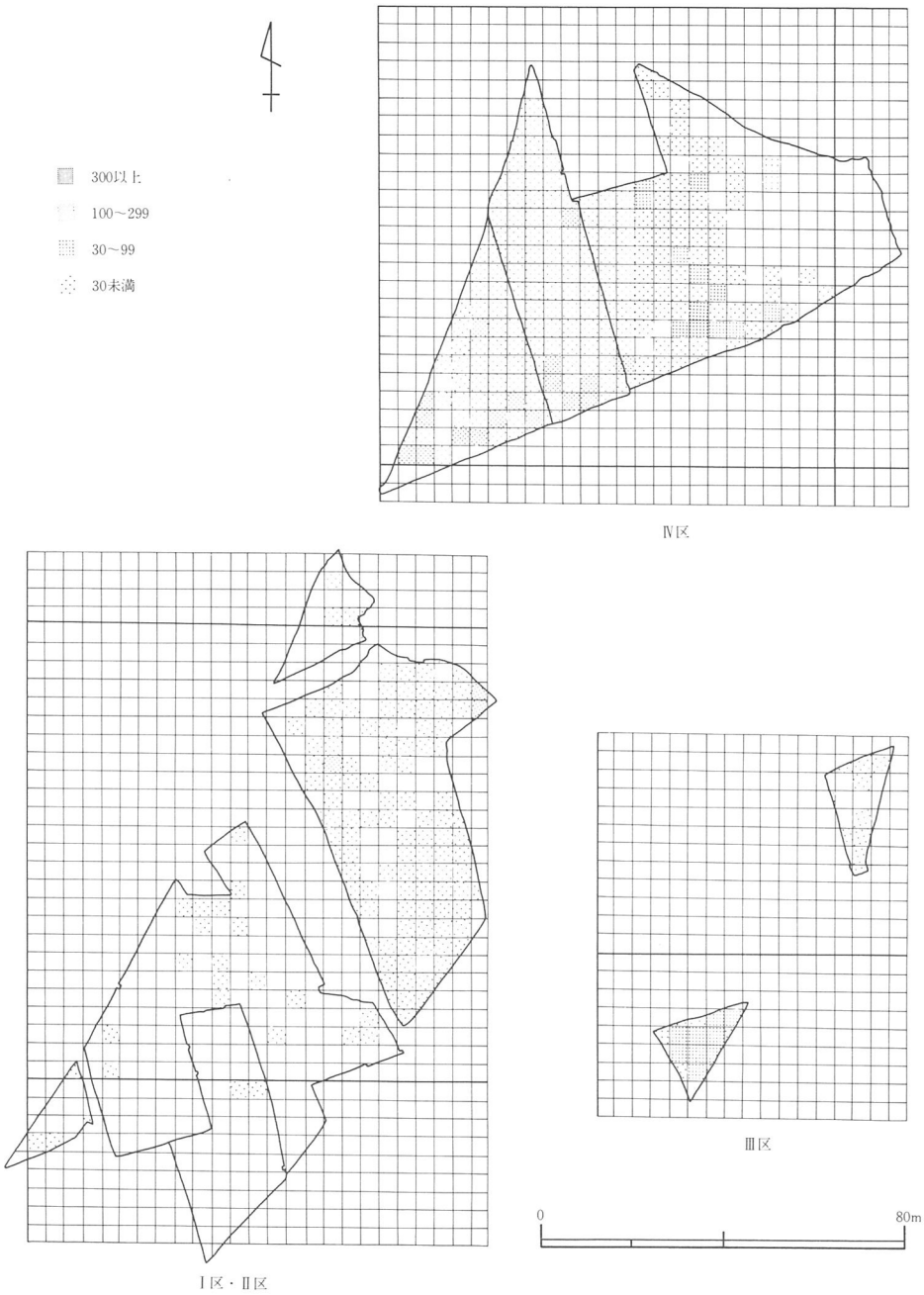
第306図　古墳時代出土遺物分布状況（1/1600）



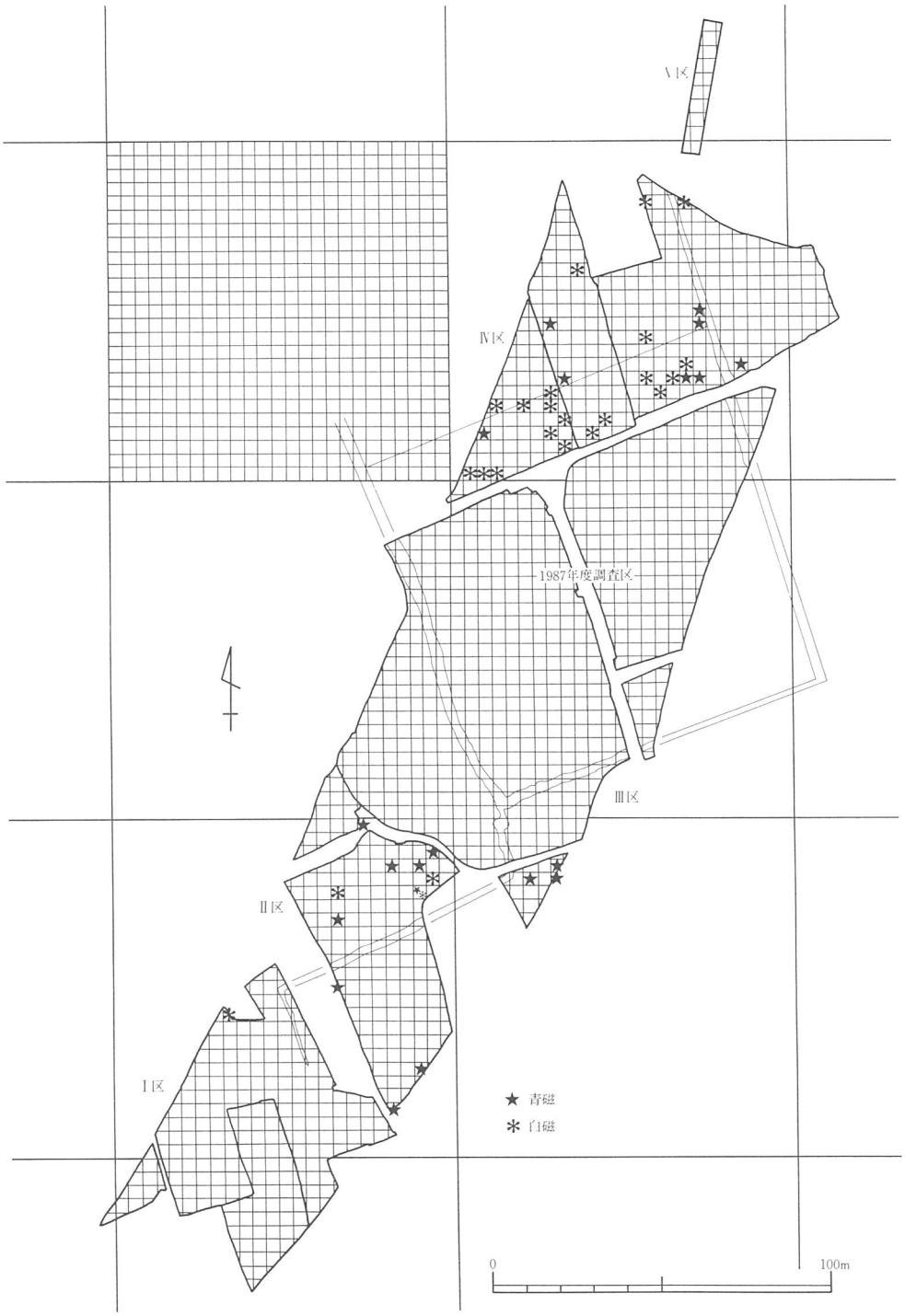
第307図　奈良時代出土遺物分布状況（1/1600）



第308図　平安時代出土遺物分布状況（1/1600）



第309図　平安末～鎌倉時代出土遺物分布状況（1/1600）



第310図　平安末～鎌倉時代陶磁器分布状況（1/2000）

第Ⅴ章　まとめ

第１節　古墳時代

（１）初期須恵器の評価について

栂丘陵の東側縁辺部に位置する大庭寺遺跡は対岸の伏尾丘陵に位置するＴＫ73号窯、ＴＫ85号窯、ＴＫ87号窯とは対峙する位置関係にある。両丘陵の間は広義の泉北丘陵を分断する石津川が北流し、大阪湾へと注いでいる。この大庭寺遺跡からは定型化以前の須恵器が数多く出土していることは第Ⅳ章調査の成果で記した通りである。

陶邑古窯址群と呼ばれる伏尾、栂、信太山の各丘陵に存在する窯はこれまで先学の研究によって須恵器の型式分類と編年が明らかにされている[註1]。しかし、これまで初期の須恵器生産は陶邑窯から始まり畿内政権によって一元的に供給されたとする考え方は、各地で異なる須恵器や窯跡が発見されたことによって修正されつつある。

陶邑内及び周辺地域にあっても濁り池窯[註2]、一須賀２号窯[註3]、上代窯[註4]のようにこれまでの陶邑では確認されていない一群が明らかになり別系統の生産活動を示す資料も増加している。しかし、集落については依然として一部を除いて白紙の状態に近いといえよう[註5]。今後、陶邑のなかで窯跡と集落の関係を明らかにしていくことが今後の課題であろう。

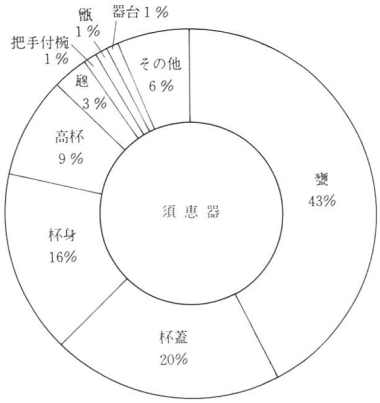
大庭寺遺跡出土の初期須恵器・韓式系土器を遺構毎に器種構成を表したのが第18表である。他遺跡での器種構成について比較して見るために第17表に陶邑深田遺跡ＳＫ006・伏尾遺跡谷部包含層の初期須恵器の各器種構成比率を例として示した[註6]（第17表の下段は包含層遺物のなかでの須恵器、韓式系土器の占める割合）。

大庭寺遺跡では各遺構のなかでは割合に多少の差があるが他の遺跡と同様に甕が多いのは同じ傾向である。陶邑深田遺跡・伏尾遺跡では甕に続き多いのが蓋杯、高杯の順であるのに対し、当遺跡では蓋杯の占める割合は低いことが特徴としてあげることができる。この事例が丘陵の相違によのものか、また系譜の相違なのかはいまのところ不明といわざるをえない。

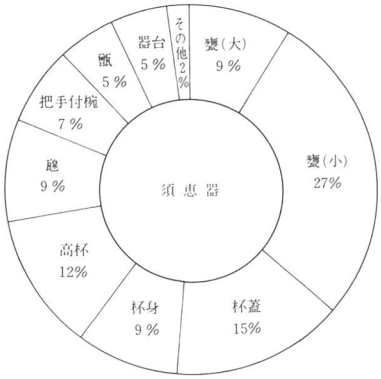
次にこれまでの大庭寺遺跡出土の初期須恵器の特徴を器種毎に要約することにする。

蓋は刺突文とカキメを組み合わせた羊島色の強いものが大半を占め、伽耶的色彩が強いことが窺える。器高が低く天井部が扁平に近いＫ576やＫ577は、陶邑のなかではＴＫ73号

第17表　周辺遺跡須恵器構成比

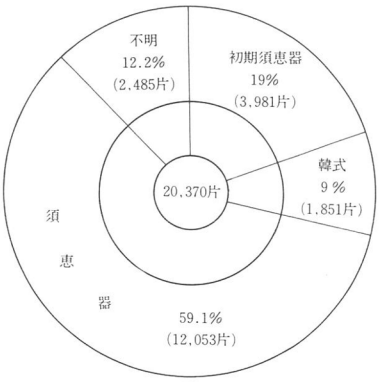


〈陶邑　深田遺跡〉



〈伏尾Ａ－１〉

第18表　大庭寺遺跡須恵器・韓式系土器構成比(1)



〈Ⅰ～Ⅳ区包含層器種構成〉

窯址出土の蓋Ａ類と共通性が認められる。

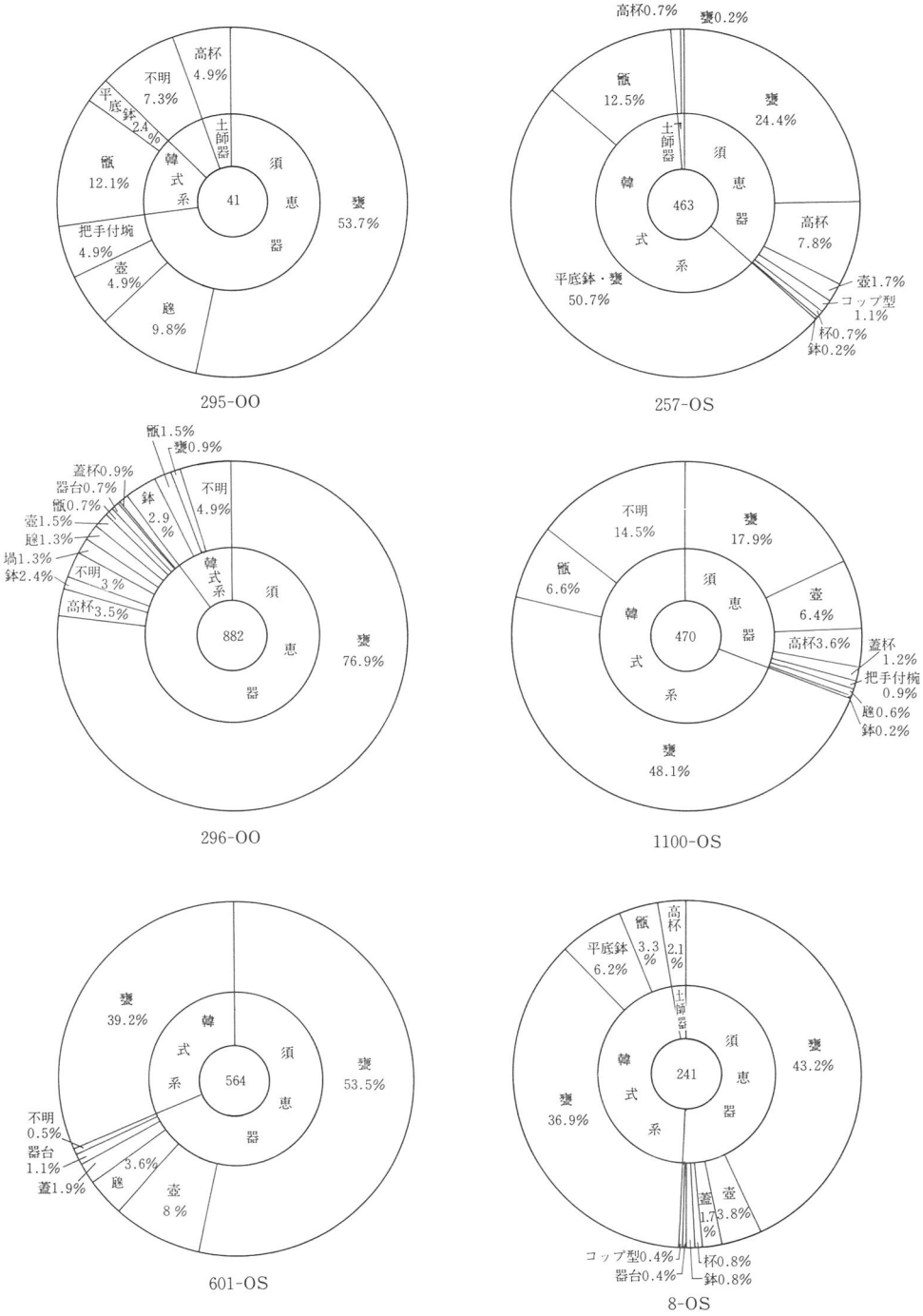
杯身はいわゆる「釜形」を呈するものが多い。古い段階のものはすべて静止ヘラケズリによる調整で、粘土板をロクロに置きマキアゲによって成形している。底面には僅かに下駄痕跡が残る。形態からいえば杯もＴＫ73号窯出土品に近いといえる。

鉢は浅い形状のものや深い形状のもの、把手のつく摺鉢等があり、同一器種にあっても個体差が大きい。まさに定型化以前を示す具体例といえる。いずれの鉢も底部静止ヘラケズリによる調整である。体部と口縁部の境に受け部がみられるＫ595・596などは底部の形状は口径は違うものの「陝川玉田古墳群」６号墳出土の鉢に類似し平底であると考えられよう。[註7]

把手付き椀は古いタイプほど直線的にたちあがり、大きな把手を持つ。295－ＯＯ出土のＫ２は陶邑内のＩ型式１段階の窯資料のなかには把手付き椀が見当たらないので比較できないがいわゆるジョッキ形で池の上墳墓群等[註8]に見られる例と共通性が認められる。当遺跡ではＩ型式１段階～３段階のものが出土している。

高杯は有蓋のものは296－ＯＯ出土のＫ12だけで他はすべて無蓋である。この傾向は小阪遺跡と同様で、時期差からくるものか、伏尾遺跡とは対照的である。ただ小阪遺跡の高杯は実見したところでは杯部に凸帯をもつものが多く見られ、その点は異な

第19表　大庭寺遺跡須恵器・韓式土器構成比（２）



第311図　窯跡及び周辺遺跡Ⅰ型式１～２段階（1/25000）

る。大庭寺遺跡例はむしろ石津川下流に展開された四ツ池遺跡[註9]出土の高杯に近い。

高杯のなかで2点特異なものが含まれる。無蓋高杯K605は時期によって脚部に変化が見られるようであるが金海府院洞遺跡や東来福泉洞25・26号墳等[註10]に類例を求めることができよう。金海府院洞遺跡の例をとれば高杯B379タイプの脚がつくものとみられる。蓋を天地逆にしたような無蓋高杯は東来福泉洞8・9号墳に類例を求めることができよう。有蓋高杯K12は東来福泉洞35・36号墳例に類例を求めることができる。

瓶のうち樽形は細身でTK73号窯址出土のものに近いことが指摘できる。他の瓶は大きさに相違があり、TK73号窯等では見られない大型のものがある。

器台は伏尾丘陵にみられるTK73・85・87号窯の器台と装飾文様において大きく異なる。伏尾丘陵ではこれまでの調査で鋸歯文・櫛歯文・組紐文・斜格子文・竹管文などの装飾文様を持つ器台は1点も検出されておらず、大きな違いをみせている。これは明らかに伏尾丘陵と栂丘陵で系譜が異なる窯が存在していることを示唆しているものと考えられる。脚部は透かしを上下に交互に配する新羅系統のものと、上下に直列に配する伽耶系統のものがある。比率からいえば後者が多いようである。

甕は大型、中型、小型がある。大型はすべて無施文、中型、小型は頸部に凸帯を持ち施文されたものが多い。体部のタタキは「第Ⅳ節Ⅱ区包含層出土遺物」に示した通りで多種多彩である。ただ体部を沈線が巡る例（552)はこれまで陶邑の窯資料では発見されていない。近隣の例では栂丘陵の先端に位置する西浦橋遺跡[註11]と小阪遺跡[註12]に例がある。この西浦橋例は縄蓆文が体部に認められる。更に甕のなかには瓦質土器の系譜を引くと考えられる長胴甕も認められる。この長胴甕は胎土に砂粒を多く含むのが一般的である。

壷は土師器の模倣形態と見られる二重口縁壷、直口壷、短頸壷、小型壷がある。しかし、当遺跡では土師器の模倣形態を示す須恵器は隣接する小阪遺跡に比べると圧倒的に少ないと思われる。これは時期的な差はあるものの小阪遺跡の須恵器は土師器工人の須恵器生産への参加であるのに対し、大庭寺遺跡の須恵器は技術を有する渡来者かあるいは専属の工人による生産であると理解できるのではないか。

直口壷はこれまでの陶邑で確認されているのは頸部に波状文を施文するのが一般的であるが頸部に凸帯を持つ例（B315）がある。このタイプにちかいものが「霊岩萬樹里古墳群」[註13]の遺物の中に見受けられ、百済の南の方すなわち全羅南道地域にその系譜を求めることができるのではなかろうか。

何れにしても大庭寺遺跡出土の須恵器は洛東江流域を中心とした地域の影響を強く受け

第20表　周辺遺跡器種構成表（2）

器種		須恵器												韓式系土器					
遺跡名		甕	壺	蓋	杯	高坏	器台	瓶	把手付き椀	鉢	鍋	甑	その他	甕	壺	鉢	甑	鍋	その他
集落遺跡	堺環濠都市	○					○									○	○		
	大仙仲町	○																	
	東上野芝	○	○	○	○	○	○			○									
	土　師	○		○					○										
	四ツ池	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○			○	○		
	水源地	○	○	○	○				○										
	小　阪	○	○	○	○	○	○		○	○	○			○		○	○		
	伏　尾	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○							
	太平寺	○	○	○		○	○		○							○			
	万崎池	○	○	○	○				○										
	西浦橋	○				○													
	大　園	○	○	○	○	○			○										
	豊　中	○		○	○		○		○										
	七ノ坪																○		
窯址	百舌鳥梅町窯			○	○				○										
	高蔵　73号窯	○	○	○	○	○	○			○		○							
	83	○		○		○													
	85	○	○	○	○	○	○					○							
	87	○	○	○	○	○	○						○						
	94	○	○	○		○						○							
	216	○	○	○	○	○	○					○							
	301	○	○	○	○														
	305	○	○	○	○	○	○		○	○		○							
	306	○	○	○	○	○													
	栂　22	○		○	○	○	○												
	225	○																	
	大野池3	○	○	○	○	○	○												
	22	○	○	○	○	○			○	○									
	46	○		○	○	○	○		○	○									
	52	○	○	○					○										
	信太山2	○	○	○	○		○		○	○		○							
	濁り池窯	○	○	○	○	○	○		○	○			○						
	上代窯	○	○	○	○		○												

ていることが考えられる。その反面、陶邑が伽耶系統の要素を持つことは従来から指摘されていることからすれば当然のことかもしれないがＴＫ73号窯址を始めとする陶邑の窯資料とも類似性を指摘することもできる。半島からの舶載品ではなく、融合あるいは変容されたものとして捉えることができるのではないか。

信太山丘陵に存在した一種独特のＯＮ326（濁り池窯）の遺物群[註14]を実見したかぎりにおいても百済的要素が強い三足土器等が実在するものの百済では普遍化している縄蓆文が１点も出土していない点等を考えると大庭寺遺跡と同様に融合あるいは変容された形で陶邑に導入されたのかもしれない。陶邑の初期からそうであるのか更に古い一群が存在するかはいまのところ不明であるといわざるを得ない。ただ各丘陵毎に系譜のことなる窯が時期を同じくして操業した可能性は高いといえよう。今後の陶邑をふくむ周辺地域の調査結果を待ちたい。

（２）古墳時代の集落について

大庭寺遺跡では一昨年の調査で石津川の河道を最大幅60ｍにわたって検出したことは前にも記した。石津川の水運を利用して生産地から消費地へ須恵器を輸送したとの考えは先学によって指摘されているところである。

まず始めに陶邑周辺におけるＩ型式１～２段階前後の須恵器が出土する窯址と集落遺跡の分布を第311図に示した。太線は「倭名抄」に散見できる当時の郷名を字名から想定復原したものである。この地一帯に分布する窯址群は基本的には丘陵の入口から奥への動向があり、なかでも大村、上神、和田、信太、坂本の各郷には古い時期の窯跡が最低１ヶ所は存在することがよみとれる。郷の成立を考えるうえで興味深い事象である。土師郷に最古の窯がないのは想像をたくましくすれば造墓と関係があるからであろうか。石津川流域における弥生時代以降の最大の画期は初期須恵器が出現する時期、すなわち５世紀代で特にこの時期に出現する遺跡が多く集落、古墳の築造、窯業（須恵器生産）からみても顕著である。

大庭寺遺跡は陶邑深田遺跡とは水系を同じくし、生産物の集荷、選別、出荷地としての可能性があることは前稿「大庭寺遺跡」1989第Ⅴ章で述べたとおりである。

これまでの調査で河道、倉庫群がみつかっていることから流路の変遷と集落はどのような相関関係にあったのか若干ふれてみたい。５時期の河道を検出したことは第３節３項で述べたが集落はどうであったか。

第１期は遺物の分布状況から川幅が約60mあったと推定されるがこの時期は遺構の遺存状況が悪く丘陵上では溝、土坑といった本来深かった遺構が残されている。斜面部では溝が多く竪穴住居址が１棟検出されたのみである。集落の本体は削平されたと考えられる。後世の包含層からも１型式３～４段階の須恵器が見当たらず、集落としては断絶があるのかもしれない。これに対しこの時期の陶邑深田遺跡は遺物から見た場合最も多く時期であることから両者にはなんらかの関連が考えられる。

２期は河道がやや北を流れる時期であるがこの時期は顕著な遺構としては大型の竪穴住居址が１棟、掘立柱建物が１棟あるだけである。

３～４期は河道が約15m程度で丘陵の縁辺部を流れるがこの時期が河中の須恵器の遺物量が多く、丘陵の建物群の最も多い時期にあたりひとつのピークといえる。丘陵を斜めに横切るII区の溝群や不良品の須恵器が廃棄されたのもこの時期にあたる。

５期の河道は極端に幅が狭くなる。それに呼応するかのように倉庫群も前期より少なくなる傾向がある。

５期以降は河道は方向を変え、この地は後背湿地となるようで以後、河がこの地域を流れることはなく、未掘部分があるため断定はできないが建物群が再び出現するのは奈良時代になってからである。1990年度は濃登ノ池を含め丘陵上の未掘部分を調査するので調査結果を待って総合的に検討したいと考えている。

注釈及び参考文献

註１　田辺昭三『陶邑古窯址群』１平安学園考古学クラブ　1966
　　中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑III』大阪府文化財調査報告第30輯大阪府教育委員会　1979
註２　田中英男氏の好意によって実現することができた
註３　堀江門也・中村浩「一須賀古窯跡出土遺物について」註１に同じ
註４　灰掛薫「上代遺跡」『府中遺跡群発掘調査概要』和泉市教育委員会　1984
註５　最近大阪文化財センターで小阪遺跡、当協会で伏尾遺跡といった集落が調査され、また野々井遺跡の報告書が刊行され集落の一部が判明してきた。
註６　中村浩『陶邑・深田』大阪府文化財調査抄報第２輯　大阪文化財センター　1973
　　陶邑・深田遺跡、伏尾遺跡の器種構成表は当協会技師岡戸哲紀が作成したのを引用した。
註７　趙栄済『狭川玉田古墳群Ⅰ』慶尚大学校博物館調査報告第３輯　慶尚南道慶尚大学校博物館　1988
註８　『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告第５集甘木市教育委員会　1979
註９　樋口吉文『四ツ池遺跡－堺市文化財調査報告書』16堺市教育委員会　1984
　　「近畿地方（３）四ツ池遺跡の須恵器と陶質土器」『陶質土器の国際交流』大谷女子大学資料館　1989
註10　古蹟調査報告第５冊『金海府院洞遺跡』東亜大学校博物館　1981
　　昌原大学博物館学術調査報告書第１冊『昌原道渓洞古墳群Ⅰ』昌原大学博物館　1987
　　申敬澈「新羅土器의発生에対하여」『韓日古代文化　諸問題』（財）韓日文化交流基金　1986
註11　府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』（財）大阪文化財センター　1984
註12　小阪遺跡
註13　徐聲勲、成洛俊「霊岩萬樹里古墳群」『光州博物館学術叢書』第３輯　国立光州博物館・百済文化開発研究院　1984
註14　田中英夫氏の御教示による

第２節　集落の変遷

大庭寺遺跡ではこれまでの調査で、竪穴住居址４棟、掘立柱建物79棟が検出された。これらの建物が弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代・平安末～鎌倉時代の各時代に及んでいることは既に報告したとおりである。ここで、これらの建物群を中心に構成される集落について時代ごとに簡単にまとめておきたい。

１．遺物の概要（第21～23表参照）

遺物については第Ⅳ章で個々の説明と須恵器・土師器などの構成比率・各地区の分布状況そして時期などについて触れたが、さらに出土遺物全体の構成がどのようになっているかについて説明したい。

第21表　奈良時代包含層出土遺物構成比

		須恵器		土師器		
供膳	杯A	2569 22.7%	17.0%	996 26.4%	6.6%	
	杯B	1630 14.4%	10.8%	116 3.1%	0.8%	
	蓋類	1094 9.7%	7.3%	14 0.4%	0.09%	
	皿・盤	63 0.6%	0.4%	46 1.2%	0.3%	
	高杯	5 0.04%	0.03%	56 1.5%	0.4%	
	鉢	225 2.0%	1.5%	10 0.3%	0.07%	
	その他	6 0.05%	0.04%			
	小計	5592 49.5%	37.1%	1238 32.9%	8.2%	6830 45.3%
調理	擂鉢	11 0.1%	0.07%			
	小計	11 0.1%	0.07%			11 0.07%
煮沸	甕			2470 65.6%	16.4%	
	甑			1 0.03%	0.007 %	
	小計			2471 65.6%	16.4%	2471 16.4%
貯蔵	壺	940 8.3%	6.2%	58 1.5%	0.4%	
	壺蓋	19 0.2%	0.1%			
	甕	4741 41.9%	31.5 %			
	小計	5700 50.4%	37.8%	58 1.5%	0.4%	5758 38.2%
合計		11303 100%	75.0%	3767 100%	25.0%	15070 100%

ここでは奈良時代から平安末～鎌倉時代の３時期について触れることにする。古墳時代については第１節古墳時代を参照されたい。

奈良時代　奈良時代の遺物は、８世紀全般に渡るが、８世紀後半（平城宮Ⅲ）のものが圧倒的に多く出土した。器種構成表から供膳容器が45.3％、調理容器が0.07％、煮沸容器が16.4％、貯蔵容器が38.2％である。供膳容器が多く煮沸容器が少ない傾向があるが包含層出土で土師器の残りが悪いためである。また、遺物には鉄鉢・皿・盤などにミガキが施される丁寧なものや、天井部に穿孔のある蓋、不明須恵器・塼・硯・塼仏などやや特殊なものが含まれる。しかし、不明須恵器・塼・硯・塼仏などは量的に少ないもので、付近から持ち運ばれたり、偶然に移動した可能性も考えられる。一般的な集落に含まれる遺物群と考えて大過ないと思われる。

平安時代　平安時代の遺物は土師器、黒色土器、須恵器、陶磁器があった。遺物の時期は10世紀～11世紀代のものと考えられる。器種構成表から供膳容器が95.3％、煮沸容器が1.2％、貯蔵容器が3.5％である。供膳容器が多く煮沸容器が少ない傾向があるが、集落の全体を調査していないため、この集落に伴うすべての遺物を網羅しているとは思われない。また、陶磁器や硯が少量出土しているが官衙ではなく一般的な集落に含まれる遺物群と考えて大過ないと思われる。

平安末～鎌倉時代　土師器、瓦器、須恵器、陶磁器からなる。時期は12世紀中頃～13世紀代のものと考えられる。供膳容器が83.4％、煮沸容器が14.5％、調理容器が0.7％、貯蔵容器が1.4％である。供膳容器が多く煮沸・貯蔵容器が少ない傾向があるが、遺構の全体を計測しておらず、すべての遺物の傾向は把握できていない。

２．建物の構成について

古墳時代　古墳時代Ⅰ期は竪穴住居址の他、溝・土坑が検出され多くの遺物を伴っていた。残念ながら削平が激しく遺跡の性格を明らかにできるような遺構を見つけることはできなかった。しかし、丘陵斜面に竪穴住居址が存在すること、掻きおとされた遺物の量や器種構成からするとこの地点の周辺に集落が存在したことは確実と考えられる。

古墳時代Ⅱ期の集落は丘陵上と丘陵斜面の２つの地域に大きく分けられる。丘陵上は掘立柱建物のみからなるが、斜面には竪穴住居址と掘立柱建物が併存している。

なお、建物を分類する前に、住居と倉については次のように考えた。住居は総柱構造にならないもので柱間が広いもの。倉は総柱構造になるか、柱間が狭く、平面が正方形に近いもの。小規模な806－ＯＢは総柱ではないが、柱間が狭く、平面が正方形に近いことか

第22表　平安時代包含層出土遺物構成比

		土師器		黒色土器		須恵器		陶磁器		
供膳	杯	89 6.6%	4.2%			6 7.5%	0.3%			
	皿	1204 88.6%	56.8%					2 50%	0.1%	
	椀	36 2.7%	1.7%	681 100%	32.2%	3 3.8%	0.1 %	1 25%	0.05%	
	小計	1329 97.9%	62.7%	681 100%	32.2%	9 11.4%	0.4%	3 75%	0.1%	2022 95.3%
貯蔵	甕					1 1.3%	0.04%			
	壺	4 0.3%	0.2%			41 51.2%	1.9%	1 25%	0.05%	
	瓶子					28 35.0%	1.3%			
	小計	4 0.3%	0.2%			70 87.5%	3.3%	1 25%		75 3.5%
煮沸	甕	24 1.8%	1.1%							
	羽釜	1 0.07%	0.05%			1 1.3%	0.05%			
	小計	25 1.8%	1.1%			1 1.3%	0.05%			26 1.2%
合計		1358 100%	63.9%	681 100%	32.1%	80 100%	3.8%	4 100%	0.2%	2123 100%

第23表　平安末～鎌倉時代包含層出土遺物構成比

		土師器		瓦器		須恵器		陶磁器		
供膳	椀			2790 96.4%	75.0%			26 63%	0.72%	
	皿	237 30.5%	6.4%	43 1.5%	1.2%			9 21%	0.24%	
	不明							9 21%	0.24%	
	小計	237 30.5%	6.4%	2833 97.9%	75.8%			44 99.9%	1.2%	3114 83.4%
煮沸	羽釜	487 62.7%	13%	54 1.9%	1.4%					
	小計	487 62.7%	13%	54 1.9%	1.4%					541 14.5%
調理	鉢			6 0.2%	0.16%	16 100%	0.43%	1 1.9%		
	擂鉢・卸皿	2 0.3%	0.05%	1 0.03%	0.02%					
	小計	2 0.3%	0.05%	7 0.2%	0.2%	16 100%	0.1%	1 1.9%	00.2%	26 0.7%
貯蔵	壺	1 0.1%	0.02%							
	甕	50 6.4%	1.3%	1 0.03%	0.02%					
	小計	51 6.5%	1.3%	1 0.03%	0.02%					52 1.4%
合計		777 100%	20.8%	2895 100%	77.5%	16 100%	0.1%	45 100%	1.2%	3733 100%

ら倉とした。それぞれの建物の分類は第312～319図のとおりである。また第Ⅳ章で時期不明とした建物のなかで50－ＯＢ・60－ＯＢ・578－ＯＢ（建物配置図では削除）は古墳時代の遺構と考えた。50－ＯＢ・60－ＯＢは規模・構造から、578－ＯＢは切り合いから、古墳時代末もしくは７世紀代と考えられることからである。斜面部は全体を検出しておらず詳細は不明であるので、今回は丘陵上の建物群について分析するにとどめたい。

住居は丘陵上の北側に１棟と南側に４棟がある。桁行が３～５間で面積20㎡以上のものと３×２間で面積15㎡の小規模なもの（762－ＯＢ）に分けられる。住居には長方形の建物が多く、それぞれに異なる構造で、127－ＯＢと619－ＯＢのように平面規模が同じでありながら柱間が異なる建物も見られた。

出土遺物から659－ＯＢが第Ⅱ型式１～２段階、578－ＯＢが第Ⅱ型式４～５段階と考えられる。さらに、これと切り合う570－ＯＢはこの後に建てられたものである。127－ＯＢは115－ＯＳ、378－ＯＯより古いもので第Ⅱ型式の前期段階頃のものである。

倉は２×２間が多く、３×２間のものも１棟見られた。面積は２×２間のもので10～15㎡前後、３×２間のもので20㎡前後である。やはり個々の建物で構造に細かな差異が見られる。36－ＯＢはⅠ型式５段階～Ⅱ型式１段階、150－ＯＢ・201－ＯＢは114－ＯＳより、230－ＯＢ・255－ＯＢは375－ＯＳよりそれぞれ古い建物である。

以上の種類からなる建物が一時期にはどのように存在したか考えてみたい。住居は南側が659－ＯＢ→570－ＯＢ→578－ＯＢの順に建て替えが行われ、762－ＯＢはこれのどれかに併行する。北側の127－ＯＢは659－ＯＢと前後する時期と考えられる。

倉は北寄りの４棟が570－ＯＢと同時期かそれ以前である。他の倉も残りは６世紀代と考えられる。従って、倉の総数を３で割ると丘陵上では住居が３回以上建て替えられ、一時期を捉えると住居１～２棟に対して、倉３～４棟が併存したと考えられる。

以上のことや第４章で述べたことをまとめると、①大きく２つの地域（Ⅰ区・Ⅱ区）に分かれている。②斜面部は竪穴住居址と併存する。③集落を区画し四周を巡らすような遺構は存在しない。④個々の建物は住居で15～38㎡、倉で10～18㎡程度の規模で住居がやや大きい傾向がある。構造は各々の建物で少しずつ異なり、柱間もややばらつきがある。⑤建物の主軸方位は統一がなく、配置も意識されたものは見られない。⑥丘陵上では住居に対して倉の棟数が多いといった傾向が見られる。

掘立柱建物からなる６世紀頃の遺跡は、付近では大園遺跡[註1]・田園遺跡[註2]・辻之遺跡[註2]などが知られている。このうち大園遺跡で、一般集落とされているものと比べると、大庭寺遺跡

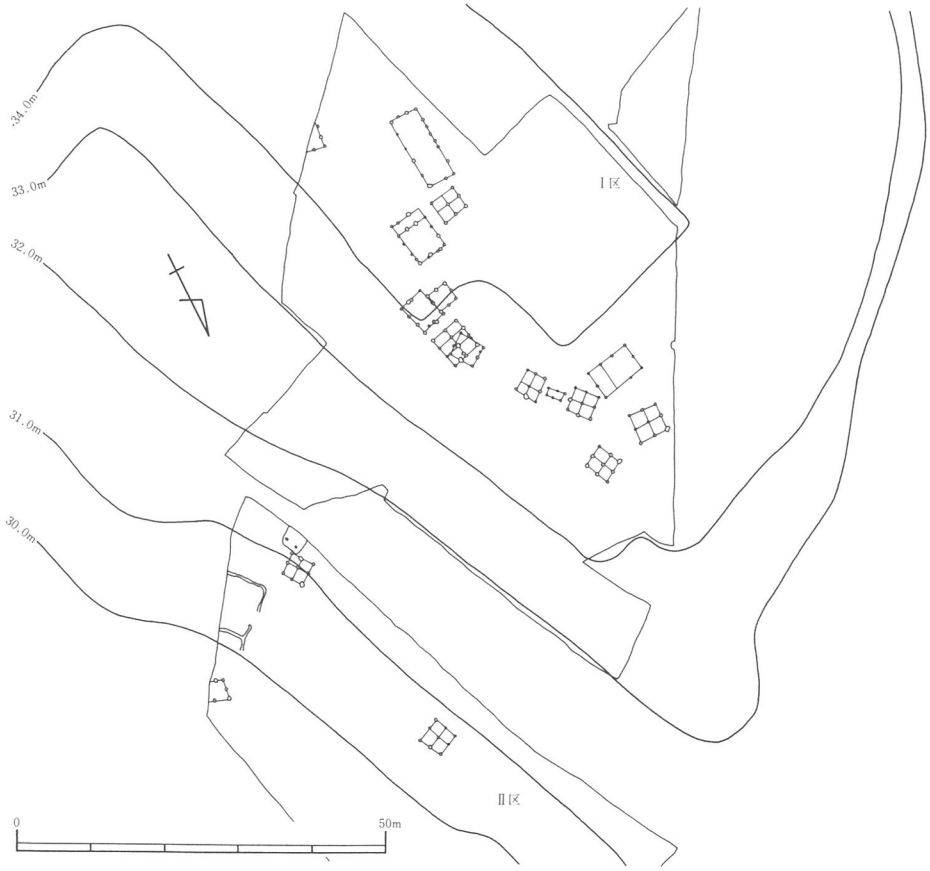
とは③・④・⑤の点で共通する。このことから、当遺跡例も６世紀代の一般集落と考えられる。大園遺跡ではいくつかの建物小群が捉えられ[註4]、時期ごとの移動が考えられているが、当遺跡では各遺構が密集することや遺構の残り具合の関係から検証できなかった。倉の数が多く⑥がやや異なる点であるが、資料的な制約から今後の課題としたい。

奈良時代（第314～316図、第25表参照）

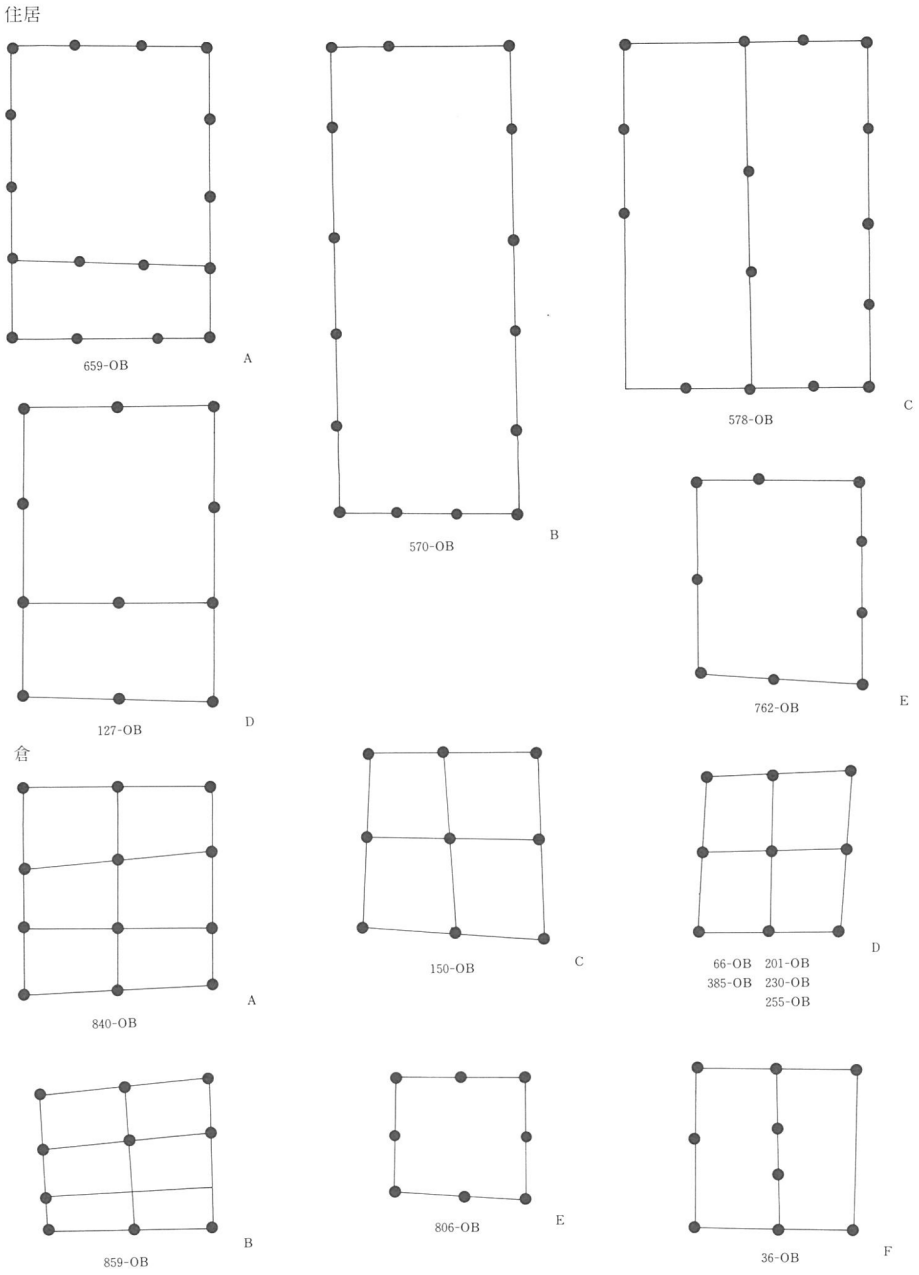
建物群はＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄの４つの群に大きく分かれる。Ａ・Ｂの２つの大きな群と、小規模なＣ・Ｄの２つがあり、それぞれ倉と住居からなる。（倉・住居の根拠は古墳時代と同様。）そして、これらの群からなる全体が１つの集落を構成すると考えられる。

それぞれの建物構造を類型化したものが第25表である。住居は８種類・倉は５種類からなる。やはり同じ住居・倉のなかでも古墳時代同様に規模にばらつきが見られた。

住居は２×５間・２×４間・２×３間・２×２間のものからなる。Ａタイプが最大で面



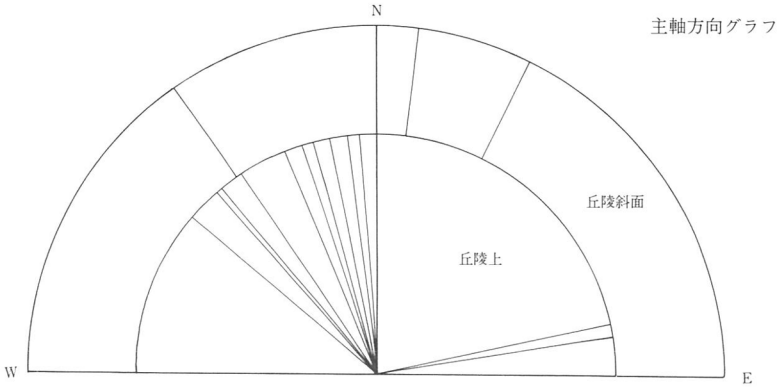
第312図　古墳時代建物配置図（1/1000）

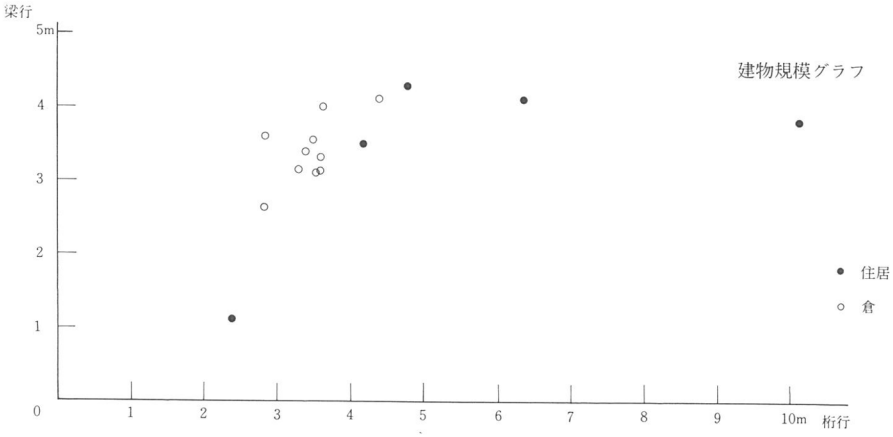


第313図　古墳時代建物分類図

積約38㎡、２棟がある。Ｂタイプは桁行がＡタイプより１間短いものである。Ｃタイプは平面形・規模はＢタイプに酷似するが桁行が３間で柱間の広いものである。ＤタイプはＣタイプに平面規模は酷似するが柱穴が小規模である。Ｅタイプは桁行・梁行とも短く・小型になるものである。Ｆタイプは最大の柱間を持つ建物で柱穴も大型である。Ｇタイプと

第24表　古墳時代掘立柱建物観察表





規模（間）＼面積（㎡）	～10未満	10～15未満	15～20未満	20～25未満	25～30未満	30～35未満	35～
2×1	1						
2×2	2	6					
2×3		1					
3×2			2		1		
3×3					1		
5×3							1

Hタイプは2×2間の小型の建物でGタイプは柱穴の大きいもの、Hタイプは柱穴の小規模なものである。この他、構造が不明で小規模な建物がある。倉は3×3間・3×2間・2×2間からなる。Aタイプは最大のもので630－OBの1棟が検出された。Bタイプは倉では最も多いタイプで4棟がある。面積は14～16㎡である。Cタイプは2×2間に束柱が付くもの、D・EタイプはDが柱穴の大きいものEが小さいものである。

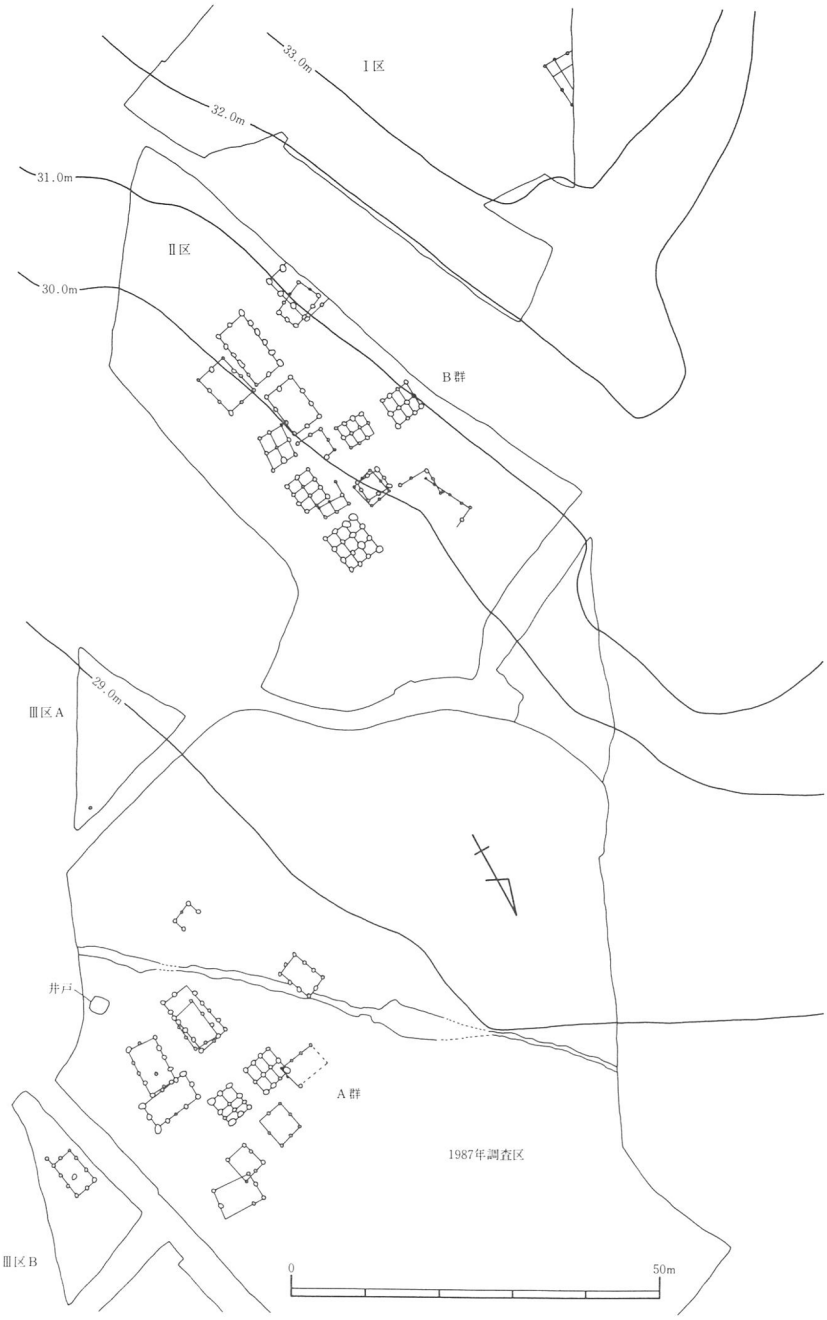
次にこの分類をもとに各群について説明したい。A群は掘立柱建物13棟からなる。倉が2棟、残りは住居と考えられる。住居の内、中心となるものは集落中央の4棟である。それぞれ1回の建て替えが行なわれているため1時期に存在した建物は最大2棟と考えられる。この背後に倉2棟が配置される。東側のものは住居と軒を接しすぎるため倉が1棟である時期もあった可能性がある。この住居と倉がA群の中心と考えられる。

この周辺に小型の住居（Eなど）がややルーズな方向に建てられている。これらの住居も一時期に建てられたのではなく数棟ずつが併存していたと考えられる。南前面には方形の枠を持つ木組がある。そしてIII区にも遺構が検出され周辺遺構は広い範囲に及ぶと考えられる。建物群の西寄りのところを溝が流れるが方向は集落とは異なる。

B群では建物の前後関係が判るものがないため、少なくとも一時期に存在したと考えられる建物から考察したい。集落中央の住居2棟（282・354）、その背後の倉4棟（630・393・389・387）が出土遺物、建物の配置・方向などから一時期に存在したことが窺える。残りの建物は軒を接したり重なったりしているが前後関係は不明である。この一群をA群と比べるとやや範囲が狭いこと、倉の数が4棟と多い事が特徴としてあげられる。B群東辺には平行して溝が流れる。建物群の境を限ったものである可能性もあるが、いずれにしても用水溝を兼ねたもので、傾斜の関係から集落と同方向になったものとも考えられる。

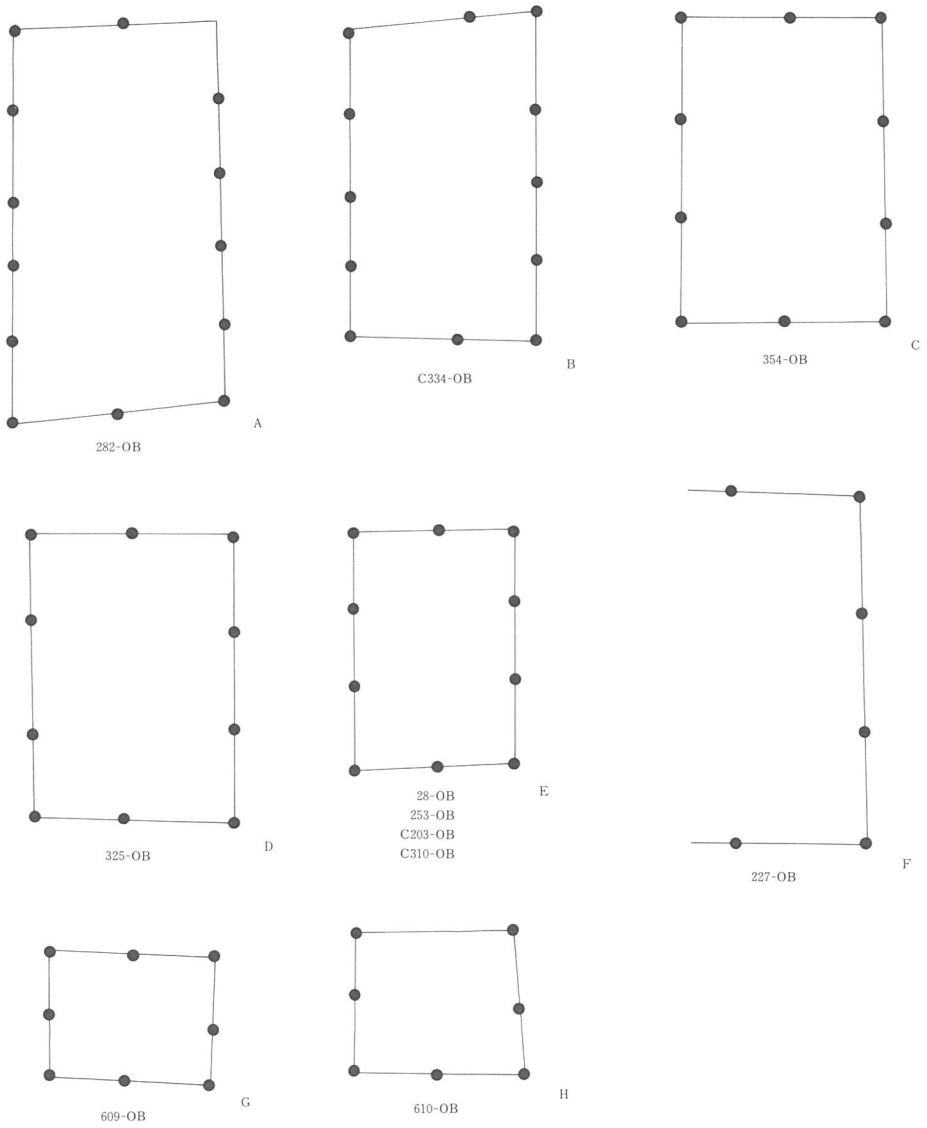
C・D群はこの建物群の周辺にあるものでC群についてはさらに丘陵上に広がる可能性がある。A群とB群の遺物は平城宮IIIに集中しており、この時期が最も集落規模が大きくなっていた可能性がある。従って、この時期にはA群は井戸と住居2棟、倉が最大で2棟、小型の住居数棟が建っていたと考えられる。B群でも出土遺物から、前述の住居2棟、倉4棟が建っていた可能性が高い。C群でも奈良時代中頃以降の遺物が多いため、この盛行期と何棟かは併存していた可能性がある。

以上のことなどから奈良時代の集落については次のことが言える。①住居・倉共に古墳時代に比べ平面積がやや大きくなり、建物方向も統一されている。②A・B群では住居2棟が南に配され、倉が北に位置している。配置の中心にくる住居はA・B・Cタイプが多



第314図　奈良時代建物配置図（1/1000）

く、倉もA・B・Cが中心である。また、A群では小規模な住居は周辺に建つものが多い。③A・B群の中心的な2棟の住居には大小があり、主屋と副屋と考えられる。④しかし、官衙のような「コ」の字配置や廂付きの大規模な建物はない。⑤遺物は硯・塼や特殊な須恵器が出土しているが少量である。⑥集落を区画する意図が明瞭な遺構がない。⑦建物群

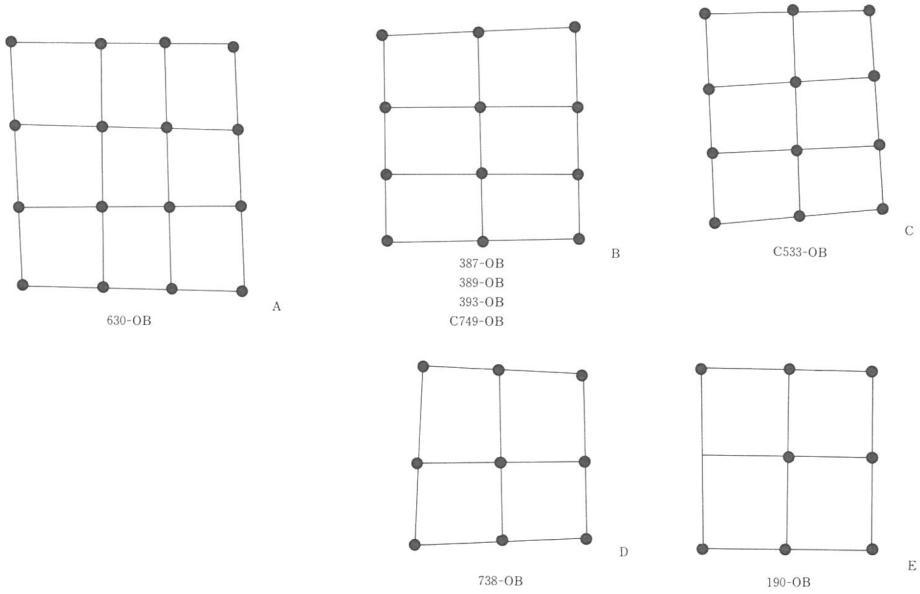


第315図　奈良時代建物分類図（住居）

は４群からなり、それぞれ数十m間隔で散在し、１・２棟から数棟程度と規模に大小が見られる。⑧Ａ群では木組井戸、Ｂ群では倉の多いことなど群によって特徴がある。

近隣集落での同時期の検出例は池田寺遺跡[註5]・万町北遺跡[註6]などがあり、どちらも一般集落と考えられている。池田寺遺跡は古墳時代から平安時代初頭まで営まれ、奈良時代は５時期に渡って建物の変遷が追える。集落の１つの建物群を観察すると屋１～数棟に対して、倉１～２棟程度の構成となっておりＡ群に近い構成である。建物の規模は大庭寺遺跡の建物等を大きく越えるものはない。さらに建物は方向を意識するが、構成はまちまちである。灌漑用の溝は建物方向とは一致しない。万町北遺跡でも同様な特徴が見られ、８～９世紀のものは屋２棟に対して倉１棟の構成となるようである。そしてこれらの調査例は大庭寺遺跡に近い構成を取っており、規模も隔絶するものではない。このことから当遺跡は一般的な集落の範疇で考えられる。

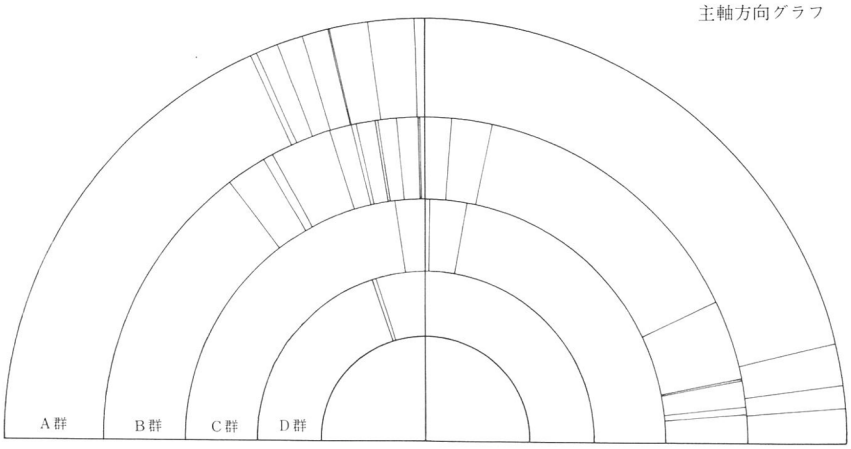
さらに今回の調査では、広い範囲で遺構が検出された結果、長さ数百mにわたって小単位の建物群が数十mの間隔を置いて点在するという成果を得ることができた。これらの群が一定の広がりを持って一つの集落を形成すると考えられるが、同じ小単位の中でも、規模の大きいもの、小規模なもの、倉を多く持つもの、井戸を持つものなど多様なものが混



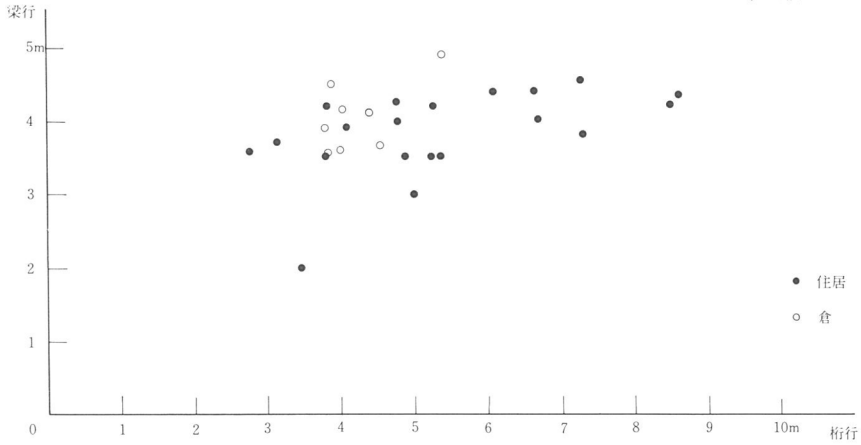
第316図　奈良時代建物分類図（倉）

第25表　奈良時代掘立柱建物観察表

主軸方向グラフ



建物規模グラフ



住居

規模(間) ＼ 面積(㎡)	～10未満	10～15未満	15～20未満	20～25未満	25～30未満	30～35未満	35～
2×2	1	1	2				
3×2		0	5	1	2		
3×3					0		
4×2					2		
4×3				1		1	1
5×2							1

倉

規模(間) ＼ 面積(㎡)	～10未満	10～15未満	15～20未満	20～25未満	25～30未満	30～35未満	35～
2×2		3					
3×2		1	3				
3×3					1		
4×2							
4×3							
5×2							

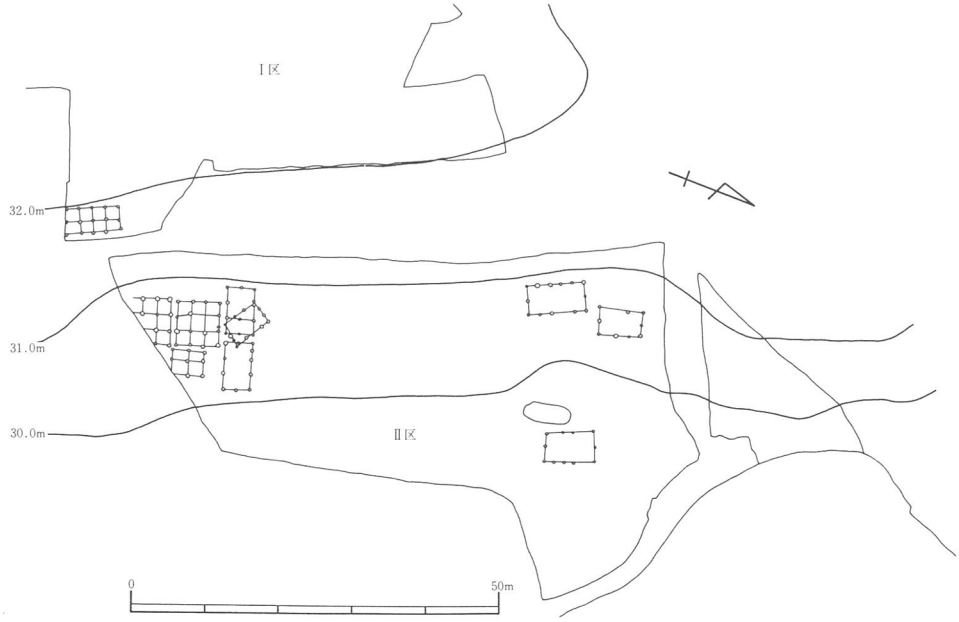
在した状態が見られた。この単位と集落の関係、付近の集落との比較は今後の課題となろう。

平安時代（第317・318図、第26表参照）

平安時代は掘立柱建物10棟からなり、すべて丘陵斜面に立地している。この斜面の中でも調査区の北側と南側に約40mの間隔を置いて建物が集中する傾向が見られた。この時期には倉はなく、建物は６種類に分類できる。

Ａタイプは総柱建物である。平面正方形に近いもので桁行方向と梁行方向は明確でない。３×３間の106－ＯＢの１棟のみが全体を検出できた。ＢタイプはＡタイプに廂の付くものとした。これも全体が知れる建物はない。Ｃタイプは平面が長方形になるものである。平面規模は古墳時代の住居Ｄタイプに近いものである。Ｄタイプ（475－ＯＢ）はやはり平面長方形になるタイプである。Ｃタイプより桁行が１間長くなる。Ｅタイプは柱並びや、柱間はややずれるものである。Ｆタイプは平面がＣタイプと同じであるが総柱にならない構造である。なおこの他に小規模な建物で柱の並びが悪い175－ＯＢなどがある。

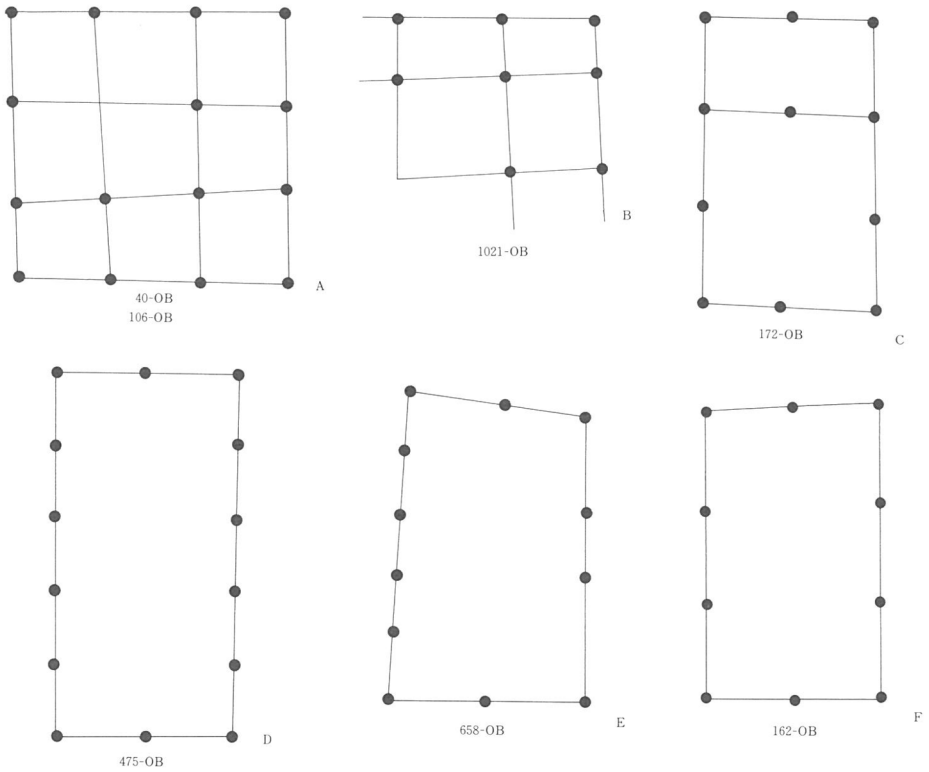
この時期の建物は奈良時代に比べると、倉が姿を消すこと、住居には平面が方形に近く総柱のものが見られること、柱間はやや短くなる傾向があることなどが異なっている。建物の方位は175－ＯＢを除いてＮ－18°～26°－Ｗを示しており、奈良時代の建物の方位に



第317図　平安時代建物配置図（1/1000）

比べやや西に傾く角度が大きいようである。現存する条里は奈良時代の方向に近いものがある。面積を計則できる建物は少ないがAタイプで36㎡、Cタイプで23㎡程度である。Aタイプは奈良時代のAタイプと同じ面積であるがこの時期は奈良時代に比べ全体にはやや住居面積も拡大傾向にある。以上から、集落をまとめると、①丘陵斜面に立地し約40mの間隔を置いて2つの群が見られる。②集落は斜面の限られた場所に立地する。③建物に倉はなく、総柱の住居が見られ、廂の付く建物もある。④平面形は方形に近いものも登場する。⑤住居は奈良時代の建物に比べやや大型化する傾向がある。

広瀬和雄氏の分類[註7]によれば、集落には小規模な建物が数棟集まって建物群を形成するA型、大小の建物2棟前後で建物群を構成するB型、そして傑出した大規模な建物に他の中小の建物が付属するC型が見られるという。当遺跡では、大規模な建物は見られず、小規模な建物ばかりで構成されているのが特徴で、集落を区画するものも見られない。しかし、南側の建物群が一部しか検出されていないことや、越州窯産の青磁などの陶磁器が出土し



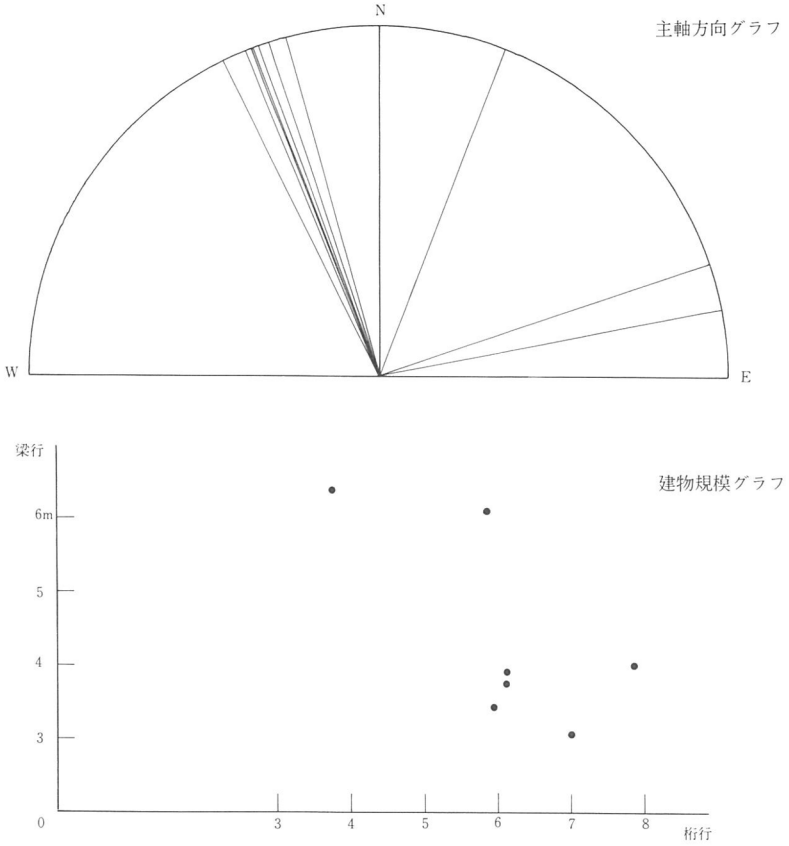
第318図　平安時代建物分類図

ていることなど今後の検討課題も残している。そこで今のところこの時期の建物群を農民層の集落と位置づけておきたい。

平安末～鎌倉時代（第319図参照）

この時期は、建物11棟・井戸・土坑・溝などからなる。遺構はⅠ区からⅣ区に渡って広く分布する。平安時代までの景観と異なり条里地割方向に溝（133－ＯＳ）が掘られ建物などの遺構群も同方向を意識して建てられている。区画が計画的に設定され大規模な開発

第26表　平安時代掘立柱建物観察表



規模(間)＼面積(㎡)	10～15未満	15～20未満	20～25未満	25～30未満	30～35未満	35～
3×2			3			
3×3						1
4×2		1				
5×2				1	1	

が行われたことが窺われる。これらの遺構の関係は以下のように考えられる。133－ＯＳを伴う集落は平安時代の集落から100年以上の断絶が見られ、12世紀後半頃に出現するものである。切り合ったり、溝に接し過ぎた建物がないといった配置から溝が開削される以前に建物が建てられた様子はないこと、遺物も溝と他の遺構との間に時期差がないことから、溝はいくつかの建物などの遺構と同時に出現したと考えられる。

この遺構群の建物の面積は大きいもので70㎡前後と、大規模なものは存在せず、柱穴の直径は30～40㎝程度のものが大半である。建物は１ないし数棟と井戸や溝などと共に構成された小さな単位で１つのまとまりとなっているが（第319図参照）、この単位は大きく５つの地区に分かれている。133－ＯＳ内に４つの地区と、235－ＯＳ沿いに点在する地区（Ａ～Ｅ）である。

Ａは５棟の建物からなり、最大の建物はＡ133－ＯＢ・169－ＯＢで前者は４×２間で南北に廂を持つ構造である。建物群としてはＡが最も建物が多く大規模で、配置から見るとこの時期の中心的な地区と考えられる。全体が検出されていないので断定はできないが、Ａ133－ＯＢが母屋と考えられる。中央から北辺にかけて建物を区画する溝が入り、建物群を東と西に分けている。

Ｂは竈屋（建物は２棟に分かれると考えられるため今回の復元は前掲報告と異なったものにしている）として報告された建物を中心とする地区で、旧河川（古墳時代の56－ＯＲ、付図５参照）の上に立地する。（この他Ｃ・Ｄも旧河川上に立地している。）

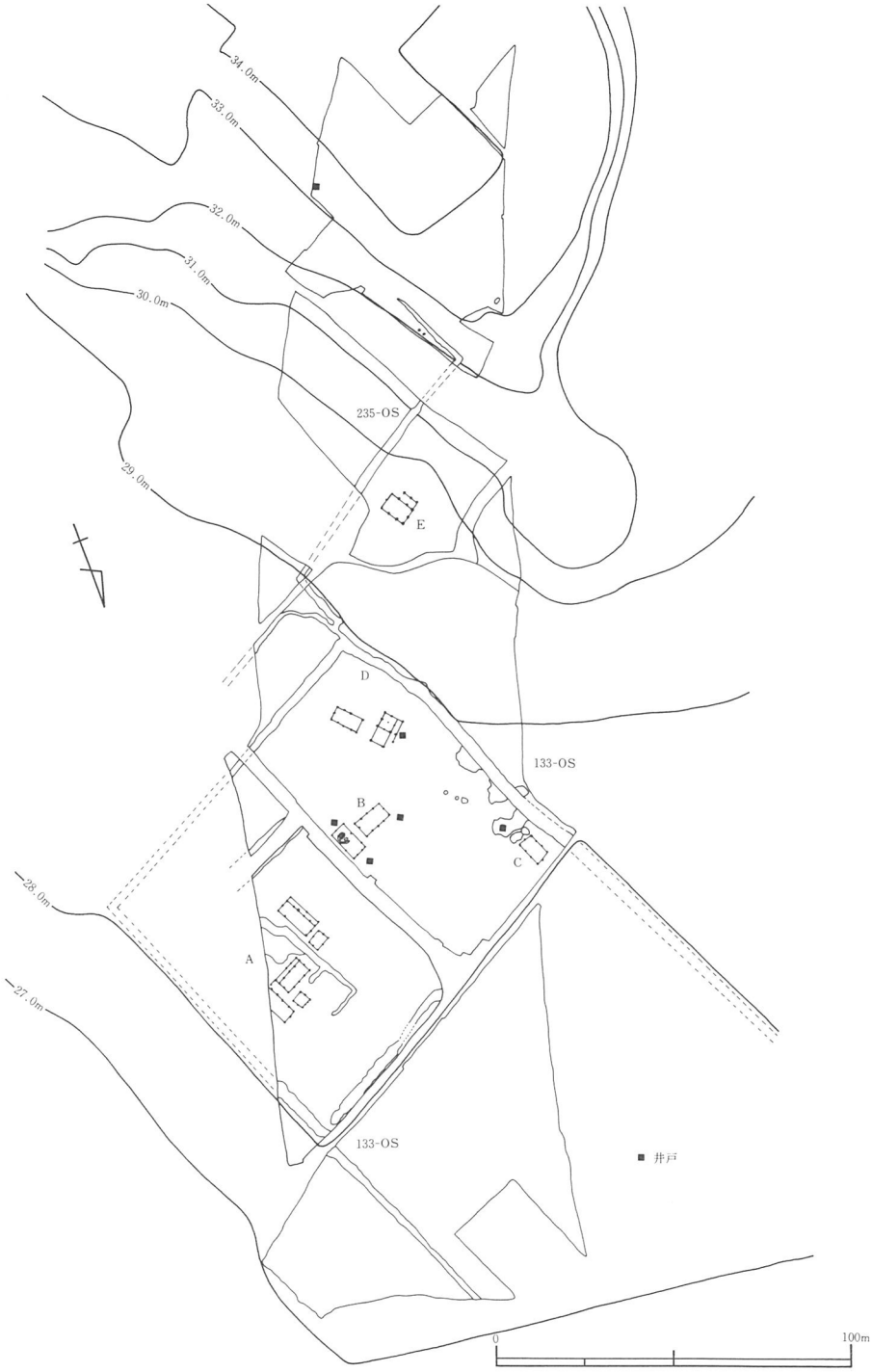
Ｂは曲物を据えたものを含む３基の井戸が分布すること、建物内に竈遺構（竈の下部構造が遺存したと思われる）が検出されていることから、全体の炊事を司った厨房的な機能を持った場所の可能性が考えられる。

Ｃは133－ＯＳの西辺に隣接する建物を中心としている。井戸や多量の羽釜を投棄した土坑、そして建物を区画する小溝などからなる。

Ｄは133－ＯＳの南西隅に近い場所に建つ２棟の建物を中心とし、井戸も１基北側に存在する。周辺はこの時代の柱穴が比較的多く出土したところで、小屋程度の建物がさらに何棟か建っていたと思われる。

また、Ｄ周辺の133－ＯＳの南辺・西辺内には比較的遺物が多く出土した。須恵器や瓦器などの他、馬の下顎部などが出土している。馬の下顎部の出土と、長方形の建物が検出されていることから厩などの雑舎が存在した可能性が考えられる。

Ｅは235－ＯＳ沿いに設けられた建物、柱穴、井戸などからなる。235－ＯＳは沖積地の



第319図　平安末～鎌倉時代建物配置図（1/2000）

133－ＯＳに引水する用水溝と考えられるが、Ｅは溝を管理するための施設群と思われる。溝の先端は削平のために削られて不明であるが、さらに286－ＯＷの方向に延びたと考えられる。残念ながら水源を検出できなかったが、調査区外に検出できる可能性がある。溜池か湧水を水源としていた可能性が高いが、この付近では現在でも井戸が多くみられ（II区に近現代井戸４基が検出された。）、そして当時でも丘陵上に286－ＯＷなどが掘られていることから、豊富に湧き水が出たと思われる。

以上の５地区の関係は、Ａが規模が大きく、母屋とそれに付属する建物群という構成になっているが、他は１～２棟程度（Ｄは存在しても小規模な建物と考えられる）と小規模なものである。Ｂは厨房的なもので井戸や竈をもっている。他の地区には竈の遺構は見られない。Ｃ・Ｄは雑舎や厩と考えられ、Ｅは用水の管理施設である。このことから各エリアは互いに機能を補完し、Ｂ～ＥがＡに隷属する関係であると考えられる。

高槻市宮田遺跡[註10]の例では２つの建物群が溝によって区画された20～30ｍの範囲に見られる。それぞれに井戸を持ち、建物に大小がある。このことからそれぞれの区画は完結した単位であると考えられる。この単位は広さからいえば、大庭寺遺跡の場合Ａ～Ｅのそれぞれの地区に当てはまると思われる。しかし当遺跡例ではそれぞれの地区は互いに機能を補完する関係にあり、むしろ133－ＯＳ周辺を含めたＡ～Ｅ全体が１つの完結した単位を理解でき、宮田遺跡の１区画に相当する。両者の“完結した単位”はそれぞれの経営規模を反影すると思われるが、宮田遺跡を当時の一般的な集落とすれば、大庭寺遺跡は大きな経営規模を有しているといえよう。

以上から、①１町規模の範囲で133－ＯＳが３方向を取り囲む。②個々の建物群が自立するのではなく機能をそれぞれ補完し合っていること、③建物群に大きな規模のものと小規模なものの格差があること（Ａが他の４地区を凌駕している）、④133－ＯＳに規制された計画的な設定である。⑤一般集落に比べ経営規模が大きい。といったことが特徴として考えられる。

また、133－ＯＳとこれに囲まれた建物などの遺構群とその空間は経営規模の大きい集落であることから、溝を開削し耕作地の開発を現実に行った人々が住んだ場所と考えられるものである。そして、計画的に前代からの集落を引き継ぐのではなく、一時にこの景観を設定し開発を行えるものは農民層ではなく荘園の開発者あるいは武士などの権力者を想定するのが妥当であろう。

このようなことから、133－ＯＳで囲まれた部分を権力を持った階層の屋敷、館と考え

たい。つまり、この館の主が溝を開削し建物を建てた本人であり、館の主はＡの母屋で起居し、少なくとも133－ＯＳ・235－ＯＳに広がる地域を保有した人物で、Ｂ～Ｅに家人・所従などの隷属民を居住させ、133－ＯＳの流下する範囲に広がる耕作地を経営したと考えられる。

但し、133－ＯＳで囲まれる部分を館とするのは、現状の遺構を考察した段階のもので、区画外の特に沖積地の東西隣接地について検証できない段階のものであることを断っておきたい。

おわりに

大庭寺遺跡の調査を通して、石津川流域における開発の一断面を明らかにすることができた。最後に沖積地について少し触れておきたい。沖積地では旧河川（56－ＯＲ）が流れていた古墳時代までは集落の中心は丘陵縁辺ないし斜面の洪水に影響されないところが選ばれ、河川の流れが安定する奈良時代頃から沖積地が居住地として選ばれるようになる。

但し、古墳時代以前は沖積地の大部分が調査されなかったため様相は不明な部分が多い。その点では、Ⅲ区あるいはＢ地区において、それぞれ弥生時代後期、古墳時代中期の竪穴住居址が検出されていることや、Ⅳ区Ｄで検出された溝群が耕作に関わるものである可能性が指摘されていることから、沖積地にも弥生時代～古墳時代にかけて、旧河川を避けて集落が経営された可能性がある。

註釈及び参考文献

註１　「大園遺跡Ⅱ」1976、「同Ⅷ」1982　大阪府教育委員会

註２　「田園遺跡発掘調査中間報告」堺市教育委員会　1983

註３　石田修・十河稔郁　「堺市辻之遺跡の調査」『考古学ジャーナル214』ニューサイエンス社　1983

註４　小笠原好彦　「畿内および周辺地域における掘立柱建物の展開」『考古学研究』100号　1979

註５　「池田寺遺跡現地説明会資料」　大阪府教育委員会、
広瀬和雄　「池田寺遺跡における８・９世紀の構成」『大阪府下近畿埋蔵文化財担当者研究会（第２回）』1980

註６　「和泉丘陵内遺跡発掘調査概報Ⅲ」　1984、「同Ⅳ」　1985、「同Ⅳ」　1986

註７　広瀬和雄「中世への胎動」『岩波講座日本考古学６』　1986
広瀬和雄「畿内の古代集落」『国立歴史民族博物館研究報告第22集－共同研究　「古代の集落」』国立歴史民族博物館　1989
広瀬和雄「中世村落の形成と展開－畿内を中心とした考古学的研究－」『物質分化』第50号　1988

註８　原口正三「古代・中世の集落」『考古学研究』92号　1977

第27表　古墳時代掘立柱建物一覧表

建物		棟方向	規　模	面積	主軸方向	柱間寸法
201－ＯＢ	総柱	不明	2間×2間 (3.55m×3.10m)	10.68㎡	N－22°30′－W	南北1.60～1.85m 東西1.40～1.70m
150－ＯＢ	総柱	不明	2間×2間 (3.65m×4.00m)	14.90㎡	N－1°30′－E	南北1.60～2.10m 東西1.75～2.15m
230－ＯＢ	総柱	不明	2間×2間 (3.60m×3.30m)	11.16㎡	N－40°30′－E	南北1.5 ～2.1 m 東西1.50～1.80m
36－ＯＢ	総柱	南北	2間×2間 (3.50m×3.55m)	12.38㎡	N－11°30′－W	南北1.60～1.85m 東西1.75～1.80m
127 －ＯＢ		東西	3間×2間 (6.35m×4.10m)	25.60㎡	N－77°30′－E	桁行2.05～2.20m 梁行2.00～2.10m
262－ＯＢ		南北	2間×1間 (2.40m×1.0 m)	2.88㎡	N－41°30′－W	南北1.20 東西1.00
253－ＯＢ	総柱	不明	2間×2間 (2.85m×3.60m)	10.26㎡	N－40°00′－W	南北1.70～1.90m 東西1.40～1.50m
859－ＯＢ	総柱		2間×3間 (3.60m×3.13m)	11.50㎡	N－34°00′－W	桁行1.70～1.90m 梁行0.85～1.20m
840－ＯＢ	総柱	南北	3間×2間 (4.40m×4.12m)	18.10㎡	N－15°00′－W	桁行1.28～1.80m 梁行1.97～2.15m
762－ＯＢ		南北	3間×2間 (4.20m×3.50m)	15.20㎡	N－18°00′－W	桁行1.35～2.10m 梁行1.50～2.00m
806－ＯＢ		東西	2間×2間 (2.85m×2.64m)	7.50㎡	N－80°00′－E	桁行1.35～1.50m 梁行1.25～1.40m
659－ＯＢ	廂	南北	3間×3間 (4.78m×4.26m)	27.0㎡	N－7°00′－W	桁行1.55～1.64m 梁行1.32～1.53m
570－ＯＢ		南北	5間×3間 (10.15m×3.8m)	38.5㎡	N－4°00′－W	桁行1.80～2.30m 梁行1.3 m前後
539－ＯＢ		不明	2間以上×1間以上 (2.82m×1.60m)	4.50㎡	N－7°00′－E	南北1.30～1.55m 東西1.60m前後
66－ＯＢ	総	不明	2間×2間 (3.30m×3.15m)	9.80㎡	N－35°30′－W	南北1.35～1.60m 東西1.55～1.60m
577－ＯＢ		不明	2間以上×1間以上 (1.65m×2.05m)	不明	N－17°00′－E	南北1.00～2.05m 東西1.30～1.35m
385－ＯＢ	総	不明	2間×2間 (3.40m×3.40m)	11.05㎡	N－26°00′－E	南北1.50～1.85m 東西1.40～2.00m

第３節　大庭寺遺跡に関連する史料について

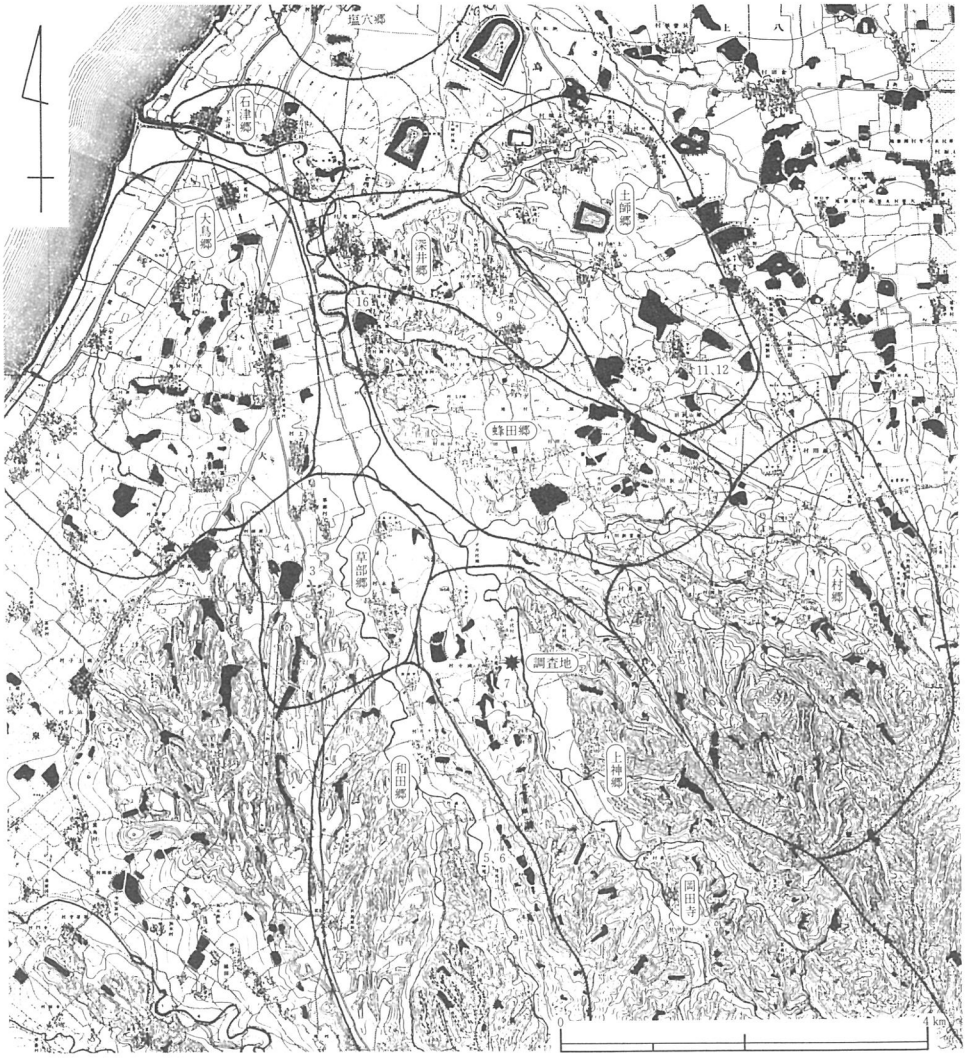
大庭寺遺跡周辺には、奈良時代に行基関連の寺院として大庭院が建立されたと『行基年譜』には記されている。それによると、

大庭院　在和泉國大鳥郡上神大庭村、孝謙天皇二年・天平勝寶二年庚寅、三月十五日追為報恩起立云々、如今昔號行基院、

とある。『行基年譜』によれば行基自身はこの前年の天平廿一（749)年二月二日に亡くなっている。この為大庭院自体は直接行基によって建てられたのではないと考えられるが、行基の結縁者によってこの時期に建てられた可能性がある。また、当郷の古代氏族と伝えられる大庭造氏の氏寺としての性格も兼ねていたかもしれない。大庭造氏に関する史料としては光明池38号窯出土の平瓦に「□大庭造国（？）□」と文字が刻まれており、いずれかの寺院の建立、修理に関係していたことが知られる。

ところで行基は、和泉國大鳥郡蜂田郷の出身と伝えられ、その布教活動の足跡が特にこの郡付近で目立っている。大鳥郡内でいわゆる行基建立四十九ヵ寺に含まれている寺、尼寺などは『行基年譜』の記載によれば９箇所に及ぶ。これらの寺または院は大鳥郡内10郷の各郷にほぼ一箇寺設けている。ただ上神郷と石津郷にはそれに類する記載がなく、上神郷においては先述の様に行基没後すぐに大庭院が建立されている。このことからすると、行基の建立した寺院は郷単位を意識して設けられたのではないかと考えられる。このことは、行基の布教活動の中に池や用水溝、橋などの土木事業を伴う地域開発が見られることから、その拠点的性格の施設が各郷単位に寺あるいは院として設けられていた可能性を示すと考えられないだろうか。

大庭院は、行基年譜ができた安元元（1175）年には行基院と號していたようである。その後の大庭寺の存在を知ることができる他の史料では、堺市岡田寺跡から出土した軒平瓦がある。岡田寺は同じ上神谷内で大庭寺遺跡からは石津川の上流約2.8㎞の泉田中に所在した白鳳時代から室町時代の遺物を出土した寺院である。この軒平瓦には、「大庭寺瓦也仁安四年□月廿五日修理タウライコウ」と書かれており、1169年に大庭寺が「タウライコウ（当来講）」という弥勒菩薩を信仰する講の人たちによって修理されたことを示している。さらに応永三十一年（1424）九月十二日には大庭寺で曼荼羅供が行われた記録があり、15世紀に至っても信仰の場として存続していたことがわかる。その後、いつかの頃からか現在の観音堂の様な形になったようである。



大鳥郡内の行基関係施設他

1	大鳥神宮寺神鳳寺	大鳥郷	6	檜尾池	和田郷	11	大野寺	土師郷	16	家原寺	蜂田郷
2	大鳥布施屋	大鳥郷	7	大庭院	上神郷	12	大野尼院	土師郷	17	茨城池	蜂田郷
3	鶴田池院	草部郷	8	大[illegible]忠院(大修恵院)	大村郷	13	野中布施屋	土師郷	18	清浄土院	塩穴郷(大鳥郷内か？)
4	鶴田池	草部郷	9	深井尼院	深井郷	14	土室池	土師郷	19	清浄土尼院	大鳥郷？
5	檜尾院	和田郷	10	蔦江池	深井郷	15	長土池	土師郷			

第320図　和泉國大鳥郡内郷域推定図（1/80000）

註釈及び参考文献
註１　『堺市史　続編』堺市教育委員会
註２　泉森晧「行基建立49院の考古学検討」『環境文化　第58号』
註３　『岡田寺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会　1983
註４　続々群書類従』国書刊行会編　1970
註５　『大阪府教育委員会月報　第19巻第２号』大阪府教育委員会　1967
註６　『角川日本地名大辞典27大阪府』　1983
註７　『日本歴史地名体系28大阪府の地名Ⅱ』　1986
註８　太田亮『日本国誌資料叢書　和泉』

第Ⅵ章　分析

大庭寺遺跡出土硬質土器の蛍光Ｘ線分析

奈良教育大学　三辻　利一

新羅・百済地域の窯跡出土陶質土器は大阪陶邑群の須恵器に比べてＣａ、Ｓｒ量が多いという特質をもつ。そのため、完全とは言えないまでも、陶質土器と大阪陶邑群の須恵器の相互識別は可能である。このような基礎データをもって、日本各地の遺跡から出土する形式的な陶質土器の化学特性を点検してみる作業を始めた。この結果はこれらの陶質土器が果して本当に朝鮮半島から搬入されたものなのか、それとも、形式的には陶質土器であっても、大阪陶邑の粘土を使って製作した日本製の陶質土器なのかについての知見を与えることになるからである。この結果も５～６世紀代の日本を再現する上に極めて重要である。本項では大庭寺遺跡出土の硬質土器の蛍光Ｘ線分析の結果について報告する。

試料は表面を研磨して灰釉等を除去したのち、タングステンカーバイド製乳鉢で100～200メッシュ程度に粉砕した。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして約15トンの圧力を加えてプレスし、内径20㎜、厚さ３～５㎜のコイン状の測定試料を調整した。蛍光Ｘ線スペクトルの測定には２次ターゲット方式のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置を使用した。Ｔｉを２次ターゲットにして、真空中でＫ、Ｃａを、また、Ｍｏを２次ターゲットにして、空気中でＦｅ、Ｒｂ，Ｓｒを測定した。分析値は同時に測定した岩石標準試料ＪＧ－１による標準化値で表示した。

第30表には分析値を示す。これらの生データをプロットしてＲｂ－Ｓｒ分布図を作成したのが第29表である。この図には大阪陶邑群の須恵器の分析値を全部包含するようにして定性的な大阪陶邑領域を示してある。そうすると、№22を除いて、他はすべて大阪陶邑領域に分布しており、殆んどの試料が大阪陶邑産であることを示唆している。

ここで、これらの試料の産地を定量的に推定するため、判別分析を試みた。母集団としては地元、大阪陶邑群、新羅地域の内谷里群、洛東江流域の望星里群の３群を選択し、これら３母集団の重心からのマハラノビスの汎距離を計算した。マハラノビスの汎距離とは母集団の重心から何（標準偏差）分、離れているかを示す統計学上の距離のことである。

第28表　胎土分析試料対照図